三重県埋蔵文化財調査報告１２５－３

北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告

1995・3

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、三重県多気郡明和町蓑村・明星・本郷に所在する、北野遺跡の第２次～４次調査の発掘調査報告書である。

2　本書は、平成６年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第３分冊である。

3　調査にあたる費用は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が、他は三重県農林水産部と三重県多気郡明和町が負担した。

4　調査は、平成４・５・６年度に実施した。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

［平成４年度］　調査第一課　主事　上村安生、筒井正明

研修員　東　良樹

［平成５年度］　調査第一課　主事　上村安生、浜口　元、竹田憲治

研修員　吉田利弘

［平成６年度］　調査第一課　主事　竹田憲治、越賀弘幸

技師　野口美幸

5　調査にあたっては、地元明和町蓑村・明星・本郷の方々、三重県農業開発公社、明星土地改良区、明和町教育委員会、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所からの協力を得た。

6　本書の執筆は上村と竹田が行った。遺構の実測・写真撮影は、調査担当者の他、三重県埋蔵文化財センター調査第一課が行った。

7　本書の作成業務にあたっては、三重県埋蔵文化財センター調査第一課・管理指導課の業務補助員が補佐した。

8　挿図の方位は、第１図、第２図、第３図に関しては真北を、それ以外の図に関しては国土調査法による座標北（第Ⅵ系）を用いた。なお座標北の方位は真北に対し東偏０°21′、磁北の方位は真北に対し西偏６°10′（平成６年）である。

9　本書で用いた遺構表示記号は下記による。また遺構番号は、第２次調査を 2001 から、第３次調査を 3001 から、第４次調査を 4001 から付与した。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＦ：土師器焼成坑

ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑　ＳＸ：墓

10　写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

11　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前言・・（竹田）・・1
Ⅱ　位置と環境・・（筒井・上村）・・4
Ⅲ　第２次調査・・・（上村）・・6
Ⅳ　第３次調査・・・（上村）・・62
Ⅴ　第４次調査・・・（竹田）・・92
Ⅵ　まとめ・・・（上村）・・121

挿図目次

第１図 遺跡地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２図 北野遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３図 遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第４図 遺構配置略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５図 SH2056・2160・2001・2002 実測図・・・・・・・・・・・8
第６図 SH2176・2234 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第７図 ＳＢ2193･2198･2352･2353 実測図・・・・・・・・・・・18
第８図 SB2194･2347～2349 実測図・・・・・・・・・・・・・・19
第９図 SB2195・2196・2354・2355、SA2356・2357 実測図・・20
第10図 SB2197・2199・2346・2350・2351 実測図・・・・・・21
第11図 SF2090 実測図 SF2161・2165・2166 実測図・・・・・23
第12図 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第13図 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第14図 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第15図 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第16図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第17図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第18図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第19図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第20図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第21図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第22図　出土遺物実測図 305～308、309～316・・・・・・・・41
第23図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第24図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第25図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第26図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第27図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第28図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第29図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第30図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第31図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第32図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第33図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第34図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第35図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第36図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第37図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第38図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第39図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第40図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第41図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第42図　出土遺物実測図 778～801・・・・・・・・・・・・・・61
第43図　遺構配置略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第44図　SK3170 上層遺物出土状況図・・・・・・・・・・・・・64
第45図 SK3170 中層・下層遺物出土状況図・・・・・・・・・・65
第46図 SF3092 遺物出土状況図・・・・・・・・・・・・・・・・66
第47図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第48図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第49図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第50図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第51図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第52図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第53図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第54図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第55図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第56図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第57図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第58図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第59図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第60図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第61図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第62図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
第63図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第64図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

第65図　第4次調査主要遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・93
第66図　SH4079出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・96
第67図　SH4032・4087・4100・4107、暗渠排水実測図・・・・97
第68図　SH4116・4125・4126・4130・4170・4174実測図・・98
第69図　SF4025・4035・4036・4053実測図・・・・・・・・100
第70図　SF4033・4044・4080・4062・4063・4064実測図・・101
第71図　SF4073・4074・4077・4102実測図・・・・・・・・103
第72図　SF4108・4128・4115実測図・・・・・・・・・・・・104
第73図　SF4105・4106・4110・4127実測図・・・・・・・・105
第74図　SF4109・3373、SF4141実測図・・・・・・・・・・106
第75図　SF4137・4150実測図・・・・・・・・・・・・・・・107
第76図　SF4136・4143・4134・4144実測図・・・・・・・・108
第77図　SF4144遺物出土状況図・・・・・・・・・・・・・・109
第78図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第79図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第80図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第81図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第82図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
第83図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第84図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第85図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第86図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・120

表目次

第1表　第2次調査竪穴住居一覧表・・・・・・・・・・・・・・10
第2表　第2次調査土師器焼成坑一覧表・・・・・・・・・・・・16
第3表　第2次調査掘立柱建物一覧表・・・・・・・・・・・・・22
第4表　第2次調査竪穴住居出土土器器種細分一覧表・・・・・・29
第5表　第2次調査出土遺物対照表・・・・・・・・・・・・・・30
第6表　第3次調査竪穴住居一覧表（1）・・・・・・・・・・・67
第7表　第3次調査竪穴住居一覧表（2）・・・・・・・・・・・68
第8表　第3次調査土師器焼成坑一覧表・・・・・・・・・・・・69
第9表　第3次調査掘立柱建物一覧表・・・・・・・・・・・・・71
第10表　第3次調査出土遺物対照表・・・・・・・・・・・・・73
第11表　弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居一覧表・・・・・94
第12表　古墳時代後期～奈良時代竪穴住居一覧表・・・・・・・94
第13表　土師器焼成坑一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・95

写真図版目次

写真図版1　調査区全景
写真図版2　SH2176、SH2131
写真図版3　SH2001・2002・2003、SH2133
写真図版4　SX2222、SF2161・2166
写真図版5　調査区全景
写真図版6　東調査区全景、SK3170遺物出土状況
写真図版7　SF3092遺物出土状況

Ⅰ 前　　言

1．調査に至る経緯

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中で、昭和63年度に三重県農林水産部農村整備課(当時)から、多気郡明和町大字蓑村・明星での県営ほ場整備事業の回答を受けた。

事業地内には、旧石器時代から中世の遺跡である北野遺跡(明和町遺跡番号228)が含まれていた。そこで遺跡の概要を知るために同年度に試掘調査を行い、4,620 ㎡に遺構が存在することを確認した。

その結果をもとに、三重県埋蔵文化財センターは、県農林水産部農村整備課と遺跡保存についての協議を行い、現状保存が困難な部分について平成2年度に第1次調査(3,500 ㎡)を行い、弥生時代後期から奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物のほか、飛鳥時代から奈良時代の土師器焼成坑46基を検出した。

その後、ほ場整備事業の拡大に伴い、遺跡の範囲を確認する必要が生じたため、平成2年11月から12月に再度試掘調査を行い、遺構が濃密に存在することを確認した。この結果をもとに再度協議を重ね、現状保存が困難な部分について複数年度で発掘調査を行うことになった。

2．調査の経過

平成4年度に行った第2次調査(8,300 ㎡)では、弥生時代後期および飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物などの集落跡のほか、古墳時代初めの方形周溝墓や古墳時代後期の古墳を検出した。また、土師器焼成坑を76基検出した。

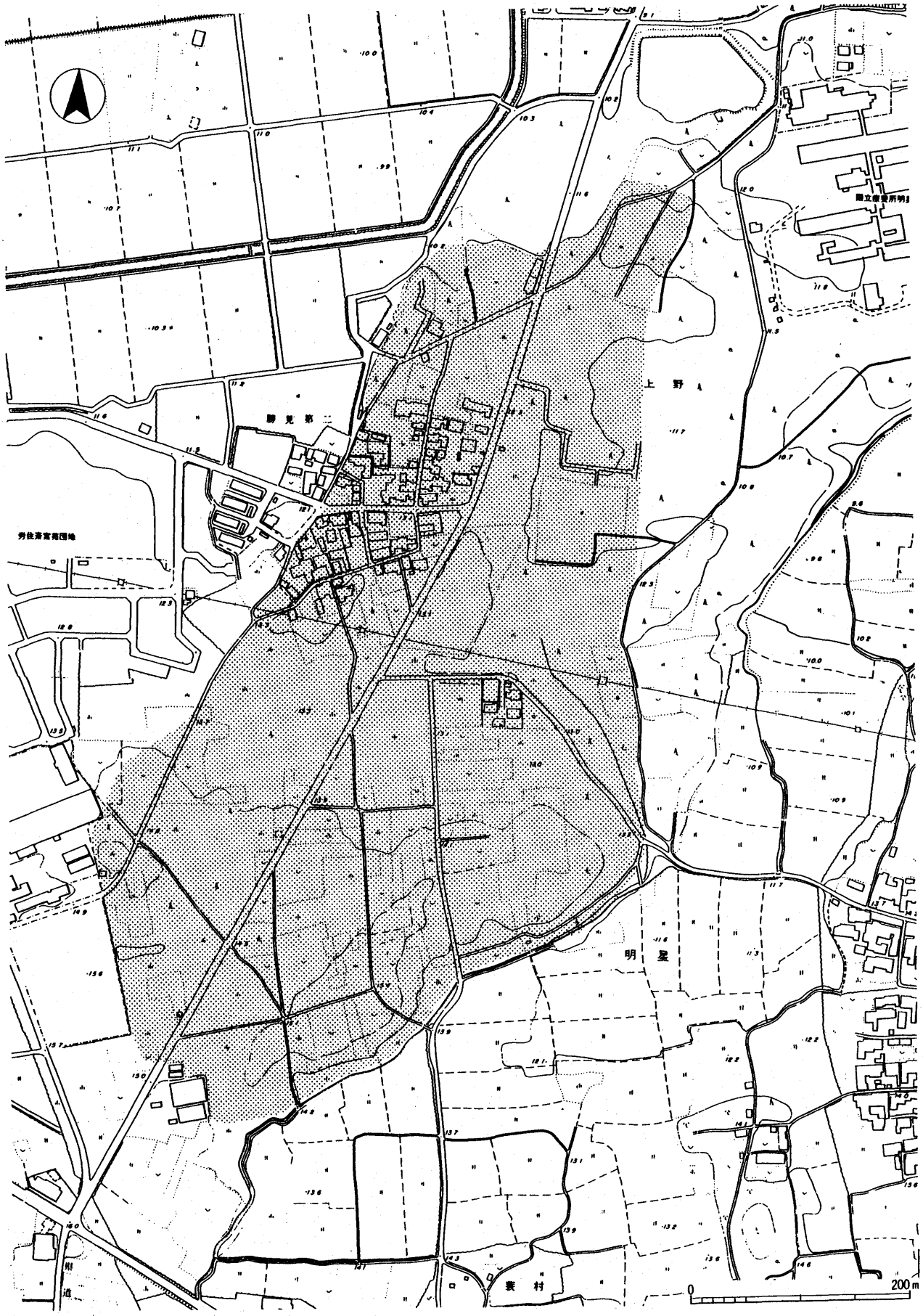
平成5年度に行った第3次調査(8,500 ㎡)では、弥生時代後期から奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が最も濃厚に分布する部分を調査した。土師器焼成坑を64基検出し、有孔広口筒型土器を多量に含む土師器焼成坑もみつかった。また、遺跡の南西部分では、これまで調査した北東側にはみられなかった弥生時代後期末から古墳時代初めの集落跡や平安時代末の掘立柱建物や墓も検出した。

第3次調査の結果、遺構が濃密に分布する範囲が当初の想定よりさらに南西側にひろがる可能性が高いこと、当初基盤層と判断していた黄褐色粘質土層に、旧石器時代の遺物が包含されていることが明らかになってきた。そこで、平成6年1月に上層遺構の南西側へのひろがりと下層の状況を把握するために試掘調査を行った。この結果、上層についてはこれまでの想定よりも南西側にも遺構がみられること、第3次調査区内の下層1,200 ㎡について、旧石器時代の遺物が包含されていることが判明した。

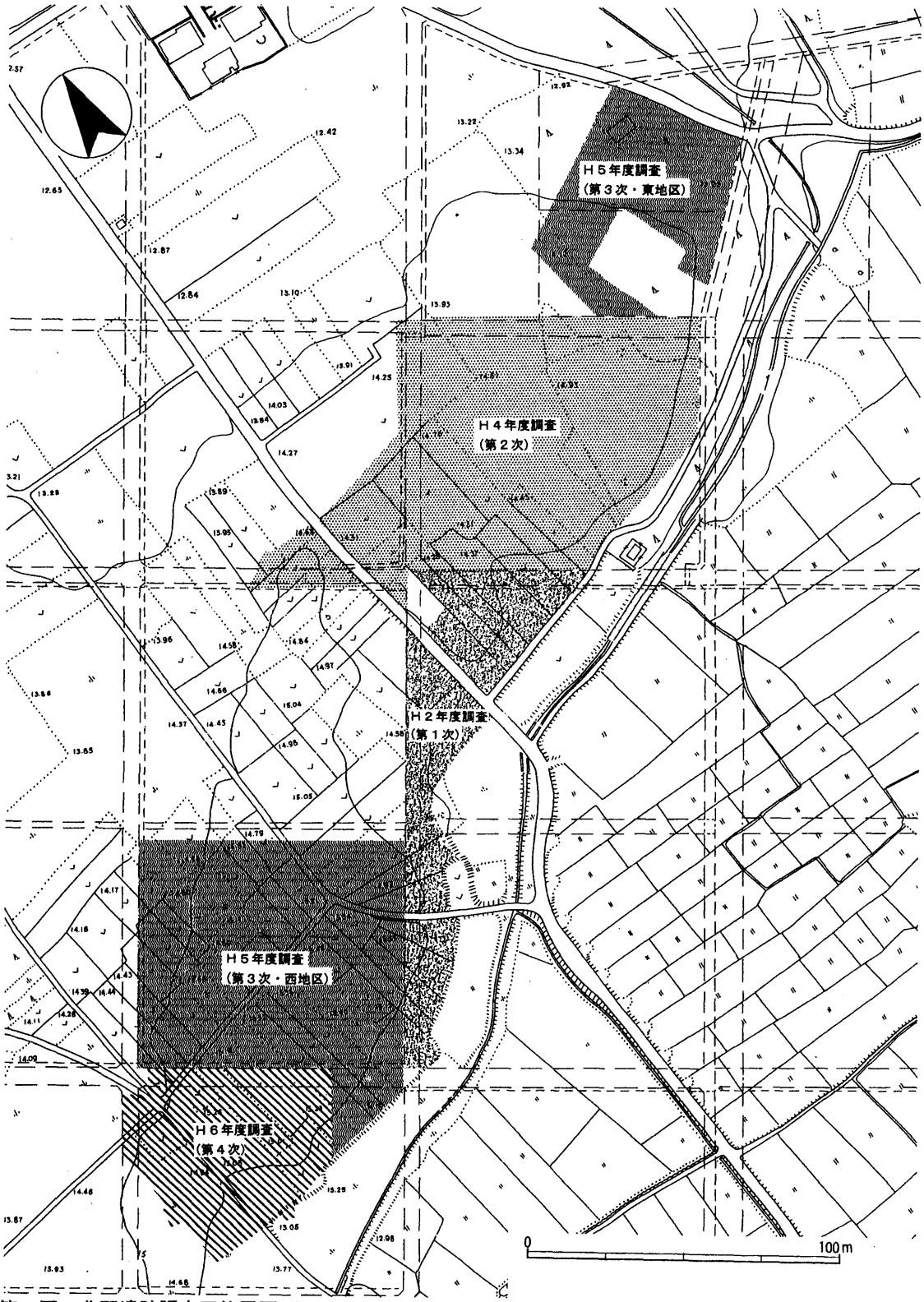
平成6年度に行った第4次調査(2,540 ㎡)では、弥生時代後期から奈良時代の集落跡、土師器焼成坑群の南西橋を調査した。土師器焼成坑は28基検出され、この時点で本遺跡で検出された土師器焼成坑の数は214基となった。

これと並行して、前年度の試掘で明らかになった第3次調査区の下層、第4次調査区の下層を調査し、ナイフ形石器や剥片などが出土した。

調査区は標高14.5mから15mの低丘陵に立地し、小地区1～o列あたりを境にして、それ以東は東に、以西は西に傾斜している。その標高差は東で約0.4m、西で約0.8mである。行政的には三重県多気郡明和町蓑村・明星・本郷地内に位置し、調査前の地目は畑地である。



第１図　遺跡地形図（１：5,000）



第２図　北野遺跡調査区位置図（１：2,000）

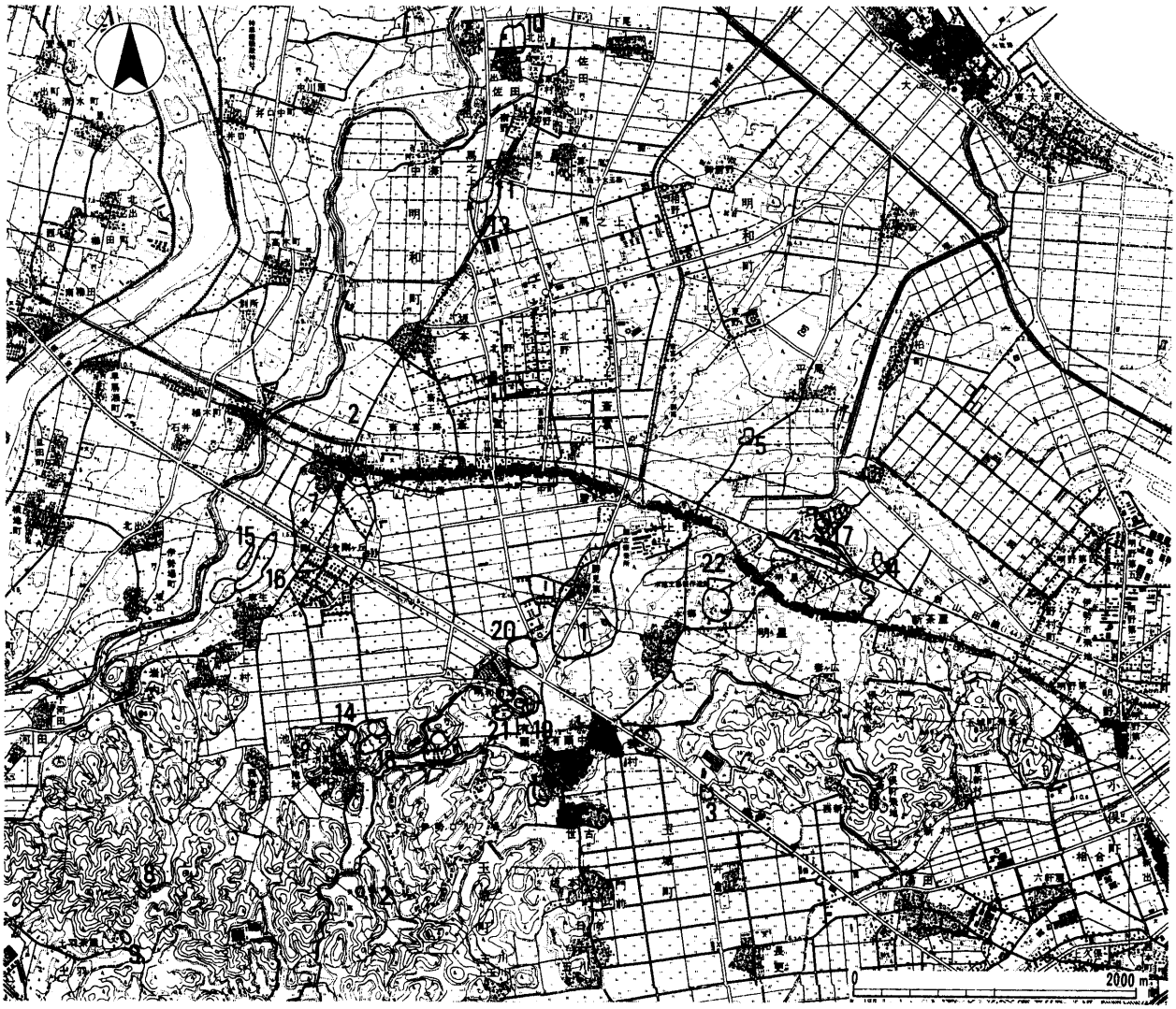
Ⅱ　位置と環境

北野遺跡（1）は、明野原面と呼ばれる中位段丘面上の笹笛川とへべら川に挟まれた地域に位置しており、遺跡の北に旧参宮街道が、南に県道鳥羽松阪線が走る、南北約 925 m・東西約 540 mの広範囲の遺跡である。このため当遺跡は便宜上小字から8地区に細分化されており①、今回の調査はその内の行政上多気郡明和町蓑村字西へべら・東へべら・明星字西ノ野に属する部分で、標高 14 m～ 15 m、現況は畑地および山林である。

当遺跡の所在する明和町は旧石器時代から歴史時代に及ぶ遺跡が多数密集する、県内でも有数の地域である。当遺跡北西約2kmにある国史跡斎宮跡（2）をはじめ、その詳細は既に多くの機会に紹介されているが、あらためて周辺の主要な遺跡を簡単に概観する。

櫛田川と宮川に挟まれた地域には県内の旧石器時代の遺跡の約半数が分布しており、特に当遺跡南東約1kmにあるカリコ遺跡（3）は県内有数の旧石器時代の遺跡である。このカリコ遺跡を本拠地とする大仏山丘陵とその周辺は、当遺跡や明星牛場A遺跡（4）のような人々が一定期間滞在したと思われる遺跡や、ごく一時的な狩猟活動の跡と思われる多くの遺跡、たとえば志田遺跡（5）、シンゲ池遺跡（6）などがあり、旧石器時代の遺跡の密度が濃い地域である②。

縄文時代の遺跡としては中・後・晩期の遺物の出



第3図　遺跡位置図(1:50,000)(国土地理院「松阪」「明野」1:25,000から)

土が見られる金剛坂遺跡（7）、早・後期の縄文土器が出土する上村池Ａ遺跡（8）、中・後期の縄文土器が見られる上村池Ｂ遺跡（9）や、晩期の人面土版が出土した西出遺跡（10）、その他に粟垣内遺跡（11）、斎宮池遺跡（12）等がある。

弥生時代の遺跡では、弥生時代前期の溝、後期の竪穴住居が検出された粟垣外遺跡（13）、弥生時代前期の土坑が検出された大道Ａ遺跡（14）がある。また、斎宮跡の西端部の古里地区で中・後期の方形周溝墓が合計８基検出され、同様に金剛坂遺跡では中・後期の方形周溝墓が合計 14 基、さらに寺垣内遺跡（15）でも中・後期の方形周溝墓が合計 25 基確認されるなど、祓川右岸では多くの方形周溝墓が確認されている。③ このほか、神殿遺跡（16）などの弥生時代の遺跡がある。当遺跡も平成２年度調査時に弥生時代後期の竪穴住居が 14 棟確認されており、その中には排水溝を有するものもあった。

また、明和町は多数の古墳が密集する地域であり、『明和町遺跡地図』によれば、町内だけでも 400 余りの古墳が確認されている。当遺跡周辺も明星古墳群（17）をはじめ、戸峯古墳群（18）や発シ古墳群（19）など多数の古墳が密集している。当然これらの古墳を築造した集団の集落形成が考えられ、堀田遺跡（20）や発シＢ遺跡（21）では古墳時代の竪穴住居が検出されており、当遺跡でも平成２年度の調査時に、古墳時代の竪穴住居が５棟検出されている。

ところで当遺跡は 10 世紀前半に成立した『倭名類聚抄』にある「有貳（宇爾）」④ 郷に属している。この有貳郷では、古代・中世・近世を通じ伊勢神宮（以下神宮と略記）奉納の土器製造で著名⑤であり、現在も神宮土器調整所が当遺跡南方にある。近年三重県内では 1993 年３月現在で、合計 19 にのぼる遺跡から飛鳥・奈良時代の土器焼成坑が発見されているが、そのうち当遺跡や国史跡水池土器製作所跡（22）など合計 16 の遺跡が有貳郷内、あるいはその近辺の地域にあたり、検出された県内の土器焼成坑の数のほとんどがそこに集中する。このことから、有貳郷が古代より一大土器生産地であったことは、文献上⑥⑦のみならず、考古学上からも明確になりつつある。

（註）

① 明和町 『明和町遺跡地図』 1998 「便宜上、小字から北野、東へべら、西へべら順禮野、西ノ野、通玄山、大頭の８地区に細分化している。」

② 森田幸伸 「大仏山丘陵とその周辺のナイフ形石器について」（『研究紀要』第１号 三重県埋蔵文化財センター 1992）

③ 各遺跡の方形周溝墓の数は、第９回三重県シンポジウム史料『東日本の弥生墓制』所収「三重県」によった。

④ 「ウニ」の表記は京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成 和妙類聚抄』の高山寺本（史料編纂所古簡集影）によった。

⑤ 『止由気宮儀式帳』に「天平賀宮諸木本。別置員貳仟餘口造。多気郡宇尓郷人夫等」とある。

⑥ 『神宮雑例集』仁安４（1196）年に「第八天平賀事。造進事。御器長兼下有爾村刀敢貞元解由進陳状事。…」とある。

⑦ 『伊勢参宮名所図絵』に「有爾神社 …中略… 上有爾村にあり。古例にて両宮へ毎年三千八百八十の土器を作りて貢ず。すべて此邉を有爾郷と云ふ。」とある。

Ⅲ　第２次調査

第２次調査は第１次調査の東側において実施した。その面積は 8,300 ㎡である。調査区の基本的な層位は、第１層：灰色土（耕作土）、第２層：橙褐色土（基盤層）である。耕作土上面から遺構検出面までの深さはおおむね 20 ㎝前後である。

１．遺構

（１）弥生時代後期の遺構

①竪穴住居

SH2001　周溝は幅 31 ～ 25cm、深さ３～４ cm と浅く四周を巡っていたと考えられる。床面は平坦で、直径 28 ～ 38cm の主柱穴が４つあり、柱間は 1.9 ～ 2.2 ｍとやや歪む。炉は竪穴の中央よりやや北よりにあり、南壁側中央には貯蔵穴をもつ。

SH2002　東壁側で周溝の一部が確認できた。４つの主柱穴は直径 17 ～ 50cm で、柱間は東西 3.5 ～ 3.7m、南北 3.2 ｍと東西に長い。炉は中心と南東主柱穴との間にあり、貯蔵穴・排水溝はない。床面は張り床が施されていた。

SH2003　四周を 18 ～ 25cm の周溝が巡る。主柱穴は直径 20 ～ 40cm で４つあり、柱間は 1.8 ～ 2.3m である。炉は竪穴の中央よりやや北よりにあり、貯蔵穴は南壁側中央に位置する。排水溝はともなわない。

SH2004　周溝は幅 15 ～ 33cm、深さ５ cm で、北側・西側では検出できなかった。主柱穴は４つあり、直径 18 ～ 30cm、柱間 1.7 ～ 1.8m である。

ＳＨ 2005　主柱穴は直径 18 ～ 28cm、柱間 1.9m で西側の２つのみ確認できた。炉は西側の柱穴の間にある。排水溝については不明である。

SH2034　２つの主柱穴と貯蔵穴が確認できた。主柱穴は直径 20 ～ 35cm、柱間 2.1m である。

SH2036　周溝は幅 15 ～ 35cm、深さ 18 ～ 31cm で西側を除いて確認できた。主柱穴は直径 30 ～ 35cm で、1.9m 離れて２つある。貯蔵穴は南壁側中央より西側に位置すると考えられる。南西隅より暗渠を通りＳＤ 81 が伸び排水溝として機能していたと思われる。

SH2037　周溝は深さ 13 ～ 25cm で四周を巡る。主柱穴は直径 32 ～ 43cm で、南西を除いて３ツ検出した。柱間は南北 1.9m、東西 2.5m である。炉は北側の主柱間の中央にあり、南壁側中央には貯蔵穴がある。

SH2041　北側はＳＤ 2159 に、中央をＳＤ７に切られているため、主柱穴・貯蔵穴・炉は不明で、周溝も確認できなかった。

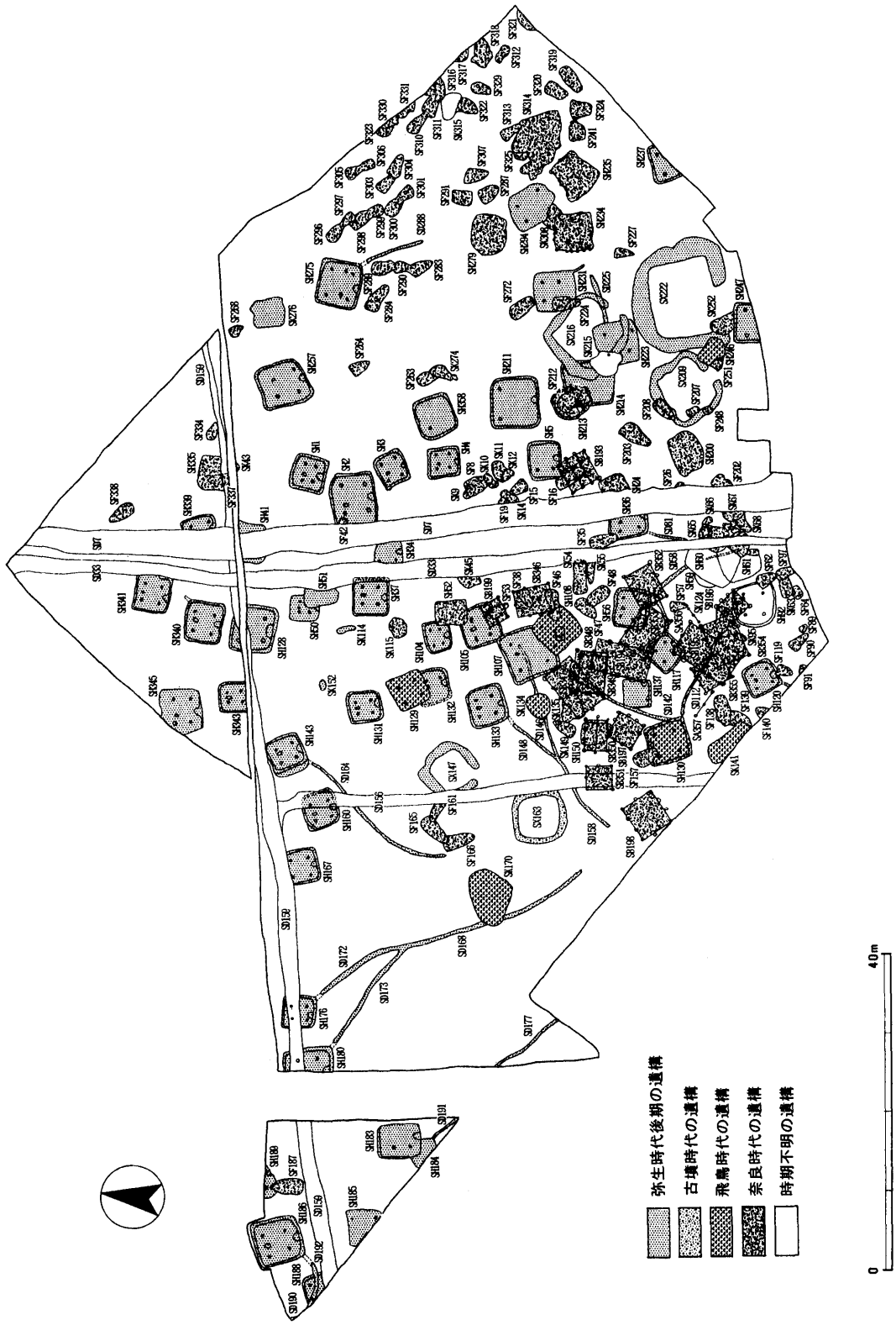
SH2050　ＳＨ 2051 に切られているが、主柱穴・貯蔵穴・炉は確認できる。主柱穴は、直径 22 ～ 35cm、柱間 1.1 ～ 1.2m である。炉は北側柱穴の間、貯蔵穴は南壁側中央に位置する。

SH2051　直径 18cm の主柱穴と思われる穴が１つのみで他は不明である。

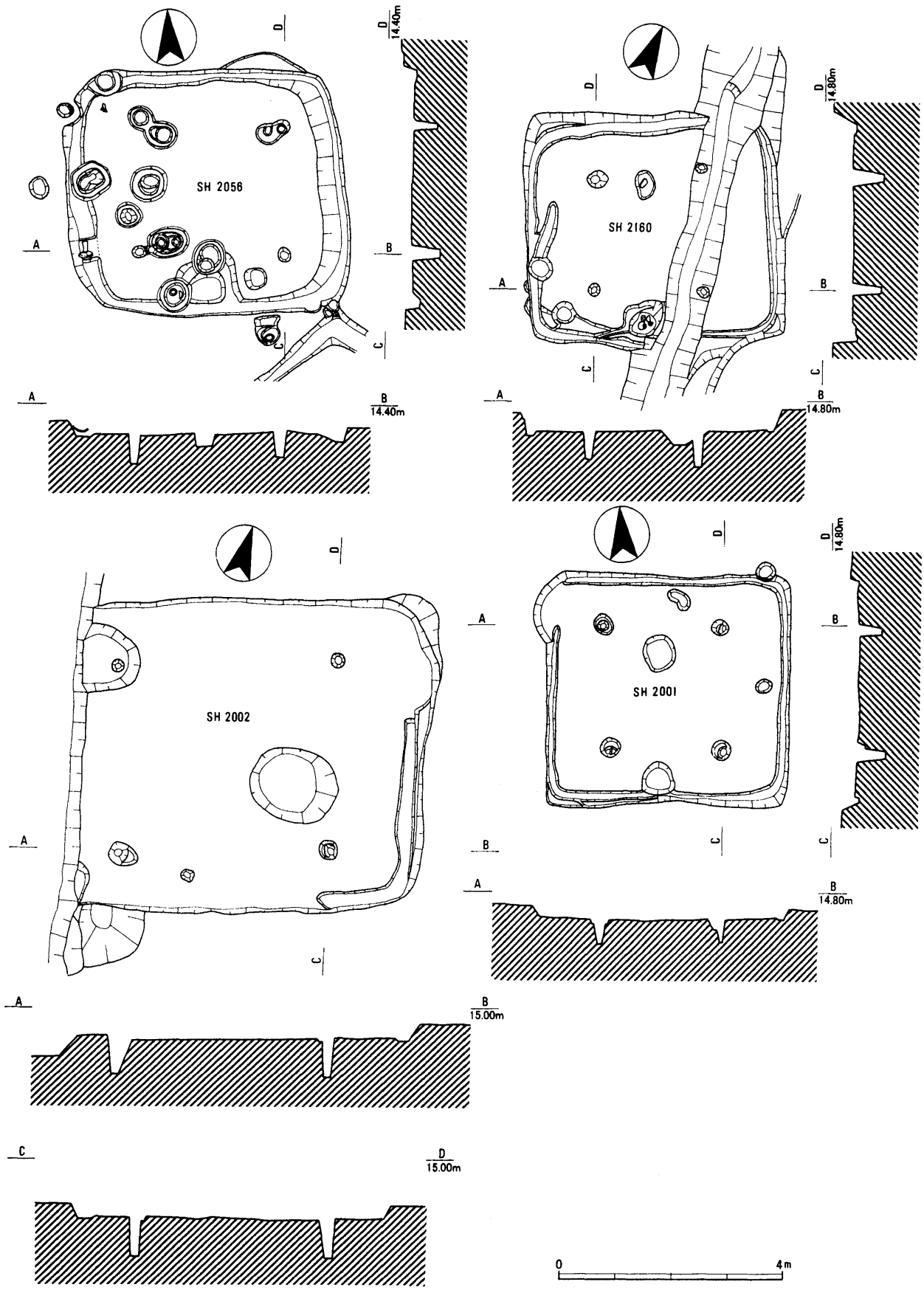
SH2056　周溝は幅 25 ～ 50cm で四周を巡っている。主柱穴は直径 23 ～ 25cm で、柱穴間は 2.0 ～ 2.3m である。北側主柱穴間の中央には炉跡と思われる焼土があり、南壁側中央には貯蔵穴がある。周溝の南西隅から暗渠を通りＳＨ 2117 と共有するＳＤ 2058 が伸び、排水溝として機能していたと思われる。

SH2104　ＳＨ 2052 に切られるが床面が深いため四方の壁は残存していた。四周を幅 10 ～ 35cm の周溝が巡っている。主柱穴は直径 20 ～ 25cm、柱間 1.5 ～ 1.7m で４つ検出できた。貯蔵穴は南壁側中央から西よりに位置する。炉と排水溝は確認できなかった。

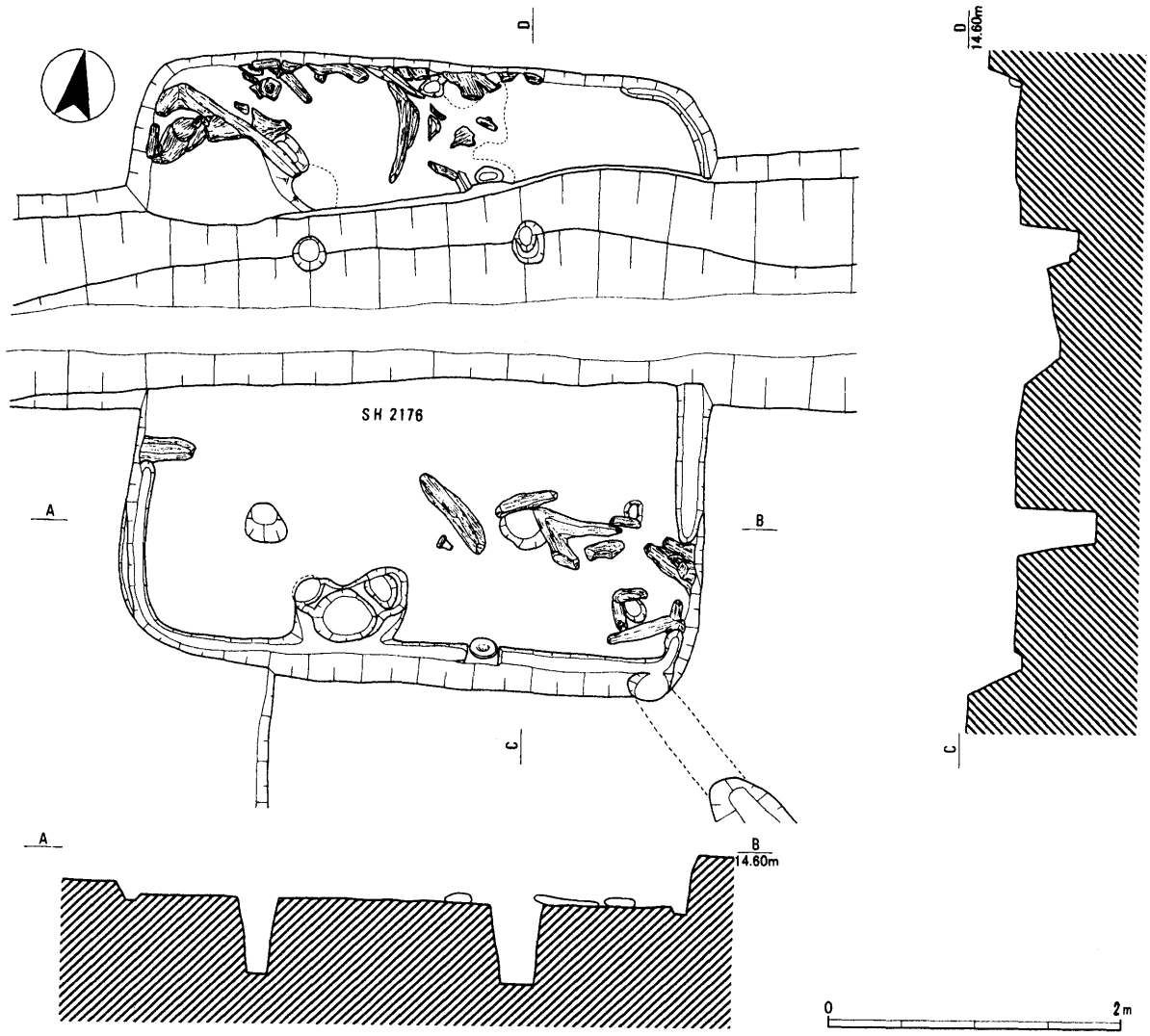
SH2105　ＳＨ 2052・ＳＦ 2053 に切られるが大部分が残存していた。周溝は幅 15 ～ 33cm で四周を巡っていたと思われる。床面には直径 18 ～ 23cm のピットが８つあるが、主柱穴と考えられるのは柱間 1.8 ～ 2.1m の４つである。北側の主柱穴間中央には炉、南壁側中央には東側をＳＦ 2053 に切られているが

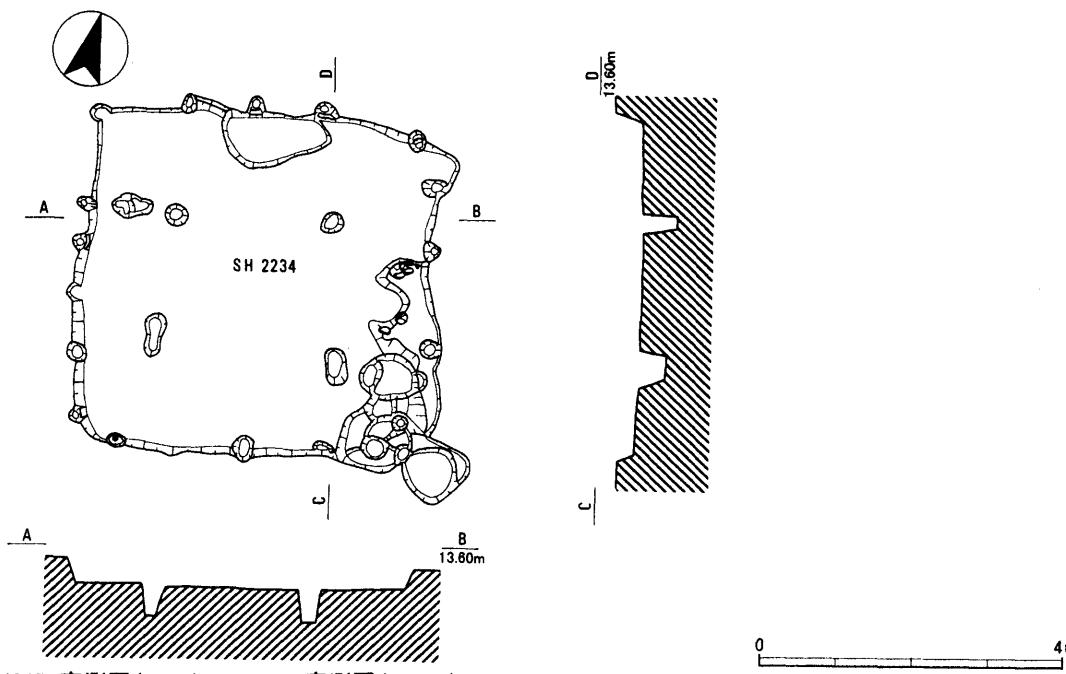


第4図　遺構配置略図(1:800)



第5図　SH2056・2160・2001・2002実測図(1:100)





第6図　SH2176実測図(1:50)、SH2234実測図(1:100)

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	貯蔵穴	炉	竈	排水溝	暗渠	時代	出土遺物	備考
		南北	東西	深さ											
2001	DE31. 32	4.0	4.4	0.16～0.26	N8° E	○	○	○	○				弥生	(y) 高杯・蓋・甕・壺、チャート	
2002	EF30～32	5.5	6.2	0.18～0.24	N17° W	○	○						弥生	(y) 広口壺・ミニチュア甕	
2003	FG31. 32	3.9	4.3	0.17～0.29	N39° W	○	○	○	○				弥生	(y) 高杯	
2004	HI32	4.0	3.9	0.14～0.24	N14° W	○	○	○	○				弥生	(y) 朱壺、サヌカイト	
2005	KL31～33	4.2	5.0	0.05～0.07	N16° W	○	○	○	○				弥生		
2034	FG29. 30	4.0	3.0	0.05～0.10	N12° W	○		○					弥生	(y) 甕・壺・高杯・台付甕	
2036	NO30	5.1	(2.5)	0.12～0.24	N17° W	○	○	○	○		2081	○	弥生	(y) 甕・壺・高杯・台付甕	
2037	EFG27. 28	4.5	4.9	0.29～0.35	N8° W	○	○	○	○				弥生	(y) 甕・高杯・台付甕	
2041	BC29. 30	3.5	5.0	0.16～0.24	N5° W								弥生	(y) 高杯	
2050	D27. 28	4.1	3.8	0.12～0.19	N8° W	○		○	○				弥生	(y) 甕・高杯・鉢・台付甕・壺	
2051	DE28	4.0	2.8	0.10～0.19	N25° W								弥生	(y) ミニチュア土器	
2056	MNO27. 28	4.5	5.0	0.13～0.20	N2° W	○	○	○	○		2058	○	弥生	(y) 高杯・台付甕、石包丁	排水溝をSH117と共有
2104	H26. 27	3.3	3.8	0.19～0.22	N25° W	○	○	○					弥生	(y) 高杯・台付甕・ミニチュア 高杯・ミニチュア甕	
2105	IJ26～28	4.8	4.8	0.15～0.17	N29° W	○	○	○	○		2146	○	弥生	(y) 台付甕・壺・高杯	
2107	JKL25～27	6.3	6.7	0.07～0.12	N29° W	○	○		○		2142	○	弥生	(y) 台付甕・高杯・壺	
2117	NOP25～27	4.1	4.8	0.08～0.28	W37° N	○	○	○	○		2058		弥生	(y) 台付甕・高杯	排水溝とSH56と共有
2120	RS24～26	4.1	4.0	0.12～0.17	N34° W	○	○	○	○		○		弥生		
2128	リC26. 27	4.8	5.1	0.11～0.27	N4° E	○							弥生	(y) 甕・台付甕・壺・高杯	
2131	EF24. 25	4.1	3.9	0.11～0.16	N16° W	○	○	○	○				弥生	(y) 高杯・甕・壺、石包丁	
2132	H25. 26	3.4	3.9	0.15～0.16	N37° W	○	○	○					弥生	(y) 高杯・甕	
2133	IJ24. 25	4.6	4.8	0.20～0.25	N27° W	○	○	○	○		2148	○	弥生	(y) 壺・台付甕・高杯 手焙土器	排水溝がSH105の排水溝と合流
2137	NO24. 25	3.2	3.5	0.22～0.36	N15° W		○		○				弥生	(y) 高杯・甕	
2143	CD22～24	4.5	4.5	0.10～0.23	N30° W	○	○	○	○		2164	○	弥生	(y) 甕・台付甕・高杯 ミニチュア土器	拡張の跡有り。拡張後の規模は5.1m
2150	M23. 24	3.8	2.6	0.07～0.09	N15° W				○				弥生		
2160	DE21. 22	4.2	4.5	0.35～0.40	N26° W	○	○	○	○				弥生	(y) 甕・高杯・壺・台付甕	
2167	CD19. 20	4.4	4.4	0.19	N20° W	○	○	○					弥生	(y) 甕・高杯・器台	
2176	CD14. 15	4.3	4.0	0.34	N2° W	○	○	○			2172	○	弥生	(y) 甕・台付甕・壺・高杯	焼失家屋
2180	CDE13. 14	6.2	6.0	0.27	N7° W		○				2173	○	弥生	(y) 壺・甕・高杯	排水溝がSH176の排水溝と合流
2183	FG10. 11	5.3	5.0	0.05～0.10	N11° W	○	○	○					弥生	(y) 甕・高杯、石包丁	
2184	GH10.11	3.4	3.0	0.19～0.35	N26° W						2191		弥生	(y) 台付甕・高杯	
2185	EF7～9	4.5	4.4	0.21～0.25	N16° W	○			○				弥生	(y) 甕・不明土製品石製紡錘車	
2186	BCD7.8	6.1	5.8	0.10～0.18	N22° W	○	○	○	○		2192	○	弥生	(y) 甕・台付甕・高杯	
2188	D6. 7	2.7	3.0	0.18～0.24	N34° W	○	○		○				弥生	(y) 壺・高杯・ミニチュア壺	
2189	C9. 10	1.5	4.5	0.09～0.14	N30° W			○					弥生	(y) 甕・高杯	
2211	JK33～35	5.3	6.0			○	○	○	○				弥生	(y) 甕・高杯	
2214	LMN34. 35	6.0	6.0	0.08～0.14	N14° W		○						弥生	(y) 甕	
2223	MNO35. 36	5.0	5.8	0.14～0.36	N25° W	○	○	○	○				弥生	(y) 甕	
2231	KL37. 38	4.5	4.9	0.05～0.14	N12° W	○	○	○			2233		弥生	(y) 甕	
2237	OP41. 42	3.0	4.5	0.04～0.16	N34° W	○	○						弥生		
2247	OQR36	3.0	5.0	0.13～0.29	N11° W	○	○						弥生	(y) 甕・高杯	
2257	BCD34. 35	5.8	5.5	0.16～0.26	N28° W	○	○	○					弥生	(y) 甕・壺・高杯 ミニチュア土器	
2275	DEF37. 38	5.5	6.0	0.09～0.26	N3° E	○	○	○	○		2288	○	弥生	(y) 甕・台付甕・高杯	
2294	KL39～41	5.8	4.8	0.05～0.18	N38° W	○							弥生	(y) 甕・高杯・台付甕 ミニチュア土器	
2339	トチ30. 31	4.2	2.1	0.11～0.22	N16° E	○	○	○					弥生	(y) 甕	
2340	トチリ27. 28	5.0	5.2	0.12～0.24	N2° E	○	○	○	○				弥生	(y) 甕・台付甕・高杯・鉢	暗渠排水溝築造途中の跡有り
2341	ハト28. 29	4.5	4.4	0.12	N20° E	○	○	○	○				弥生	(y) 甕・高杯・台付甕	
2343	チリ24. 25	3.2	4.0	0.11～0.20	N19° W	○	○		○				弥生	(y) 甕・高杯	
2345	トチ24. 25	5.0	5.0	0.13～0.18	N11° W	○							弥生		
2129	GH24～26	4.4	4.3	0.14～0.28	N37° W	○							古墳	(h) 甕・甑・高杯、(S)甕・横瓶	
2108	KL26～27	5.0	5.0	0.05～0.19	N38° E	○				○			飛鳥	(h) 甕・甑	
2130	NOP22～24	5.8	5.3	0.16～0.28	N25° W	○	○	○		○	2112		飛鳥	(h) 甕・高杯・甑・竈、(S)杯蓋	
2235	LM40～42	4.0	4.0	0.08～0.21	N40° E								飛鳥	(h) 甕・椀・高杯	壁柱穴有り
2246	PQ35. 36	3.0	3.4	0.09～0.18	N19° E								飛鳥	(h) 甕・高杯、(S)杯身	
2024	MN31. 32	3.5	3.4	0.19	N34° W								奈良	(h) 甕・椀・杯・筒形土器 (S)杯身・蓋	
2052	HI27. 28	3.8	3.0	0.08～0.12	N14° W								奈良	(h) 甕・椀	
2200	OP31～33	4.0	4.0	—	—		○						奈良	(h) 甕・椀	
2213	LM33. 34	4.8	4.5	0.03～0.25	N52° W	○	○						奈良	(h) 甕	
2234	LM39. 40	4.6	4.8	0.17～0.24	N13° W	○				○			奈良	(h) 甕・高杯・甑・竈、(S)杯	壁柱穴有り
2279	IJ38～40	5.2	4.3	0.13						○			奈良	(h) 甕・椀、(S)杯蓋	
2335	チリ31. 32	3.4	4.3	0.13～0.17	N1° W								奈良	(h) 甕	
2059	PQ28	-	-	0.09	—		○						不明	(h) 甕	
2060	PQ28. B3629	6.3	2.5	0.09	N25° E		○						不明		
2061	QR28. Q29	4.7	4.0	0.01～0.04	N32° W		○						不明		
2092	QR27. 28	5.1	5.3	0.06～0.17	N20° W	○	○		○				不明	(h) 甕	

・排水溝欄の番号は排水溝の遺構番号。 ・遺物出土欄の(y)は弥生土器、(h)は土師器、(S)は須恵器

第1表　第2次調査竪穴住居一覧表

貯蔵穴がある。南西隅より西へＳＤ 2146 が伸び排水溝として機能していたと思われる。

SH2107　ＳＨ 2105 を切っているが、南東隅から南壁の大部分をＳＨ 2108　に切られいてるため主柱穴は３つのみの確認である。大きさは直径 20 ～ 28cm、柱間 3.4m である。周溝の幅は 20 ～ 50cm でＳＨ 2108 に切られいてる部分以外は残存している。南西隅より南西方向にＳＤ 2014 が延び、排水溝として機能していたと思われる。

SH2117　四周を幅 10 ～ 30cm の周溝が巡っている。主軸が大きく西へ傾いており、西隅より排水溝ＳＤ 2058 が延びている。主柱穴は４つで、直径 18 ～ 30cm、柱間 2.1　～ 2.4m で歪みが激しい。北側の主柱穴間中央には炉、南壁側中央よりやや西よりに貯蔵穴がある。

SH2120　四周を幅 15 ～ 30cm の周溝が巡り、南隅より南へ排水溝が延びていたと思われる。主柱穴は、直径 15 ～ 30cm、柱間 1.8　～ 2.1m で４つ検出した。炉は竪穴中心部よりやや北寄りにあり、貯蔵穴は南壁側中央から西よりにある。

SH2128　四周には、一部消失しているが、幅 15 ～ 25cm が周溝が残っている。主柱穴は、直径 20 ～ 30cm、柱間 2.9m で北東の１つを除く３つを検出した。貯蔵穴は南壁側中央にある。炉は不明である。

SH2131　周溝は東壁側中央部から西壁側中央までの南側半分だけ確認できた。主柱穴は、直径 15 ～ 23cm、柱間 1.5　～ 1.8m で、北側の主柱穴間中央には炉がある。南壁側中央には貯蔵穴がある。

SH2132　ＳＨ 2129 に切られており、西側は削平を受けている。幅 15 ～ 25cm の周溝の一部を確認した。主柱穴は直径 15 ～ 30cm、柱間は東西・南北とも 1.7m である。

SH2133　周溝は幅 23 ～ 35cm で四周を巡っている。主柱穴は、直径 15 ～ 28cm、柱間 2.1m である。北側の主柱穴間中央には炉があり、南壁側中央に貯蔵穴がある。周溝の南西角より暗渠を通りＳＤ 2148 が延びており、ＳＤ 2146 と合流し、ＳＨ 2105 と共有する排水溝となる。

SH2137　周溝は幅 10 ～ 25cm で四周を巡る。貯蔵穴は南壁側中央より西寄りにある。主柱穴は確認できなかった。炉は、中央より北寄りにある。

SH2143　西側に拡張された痕跡がある。周溝は幅 20 ～ 53cm、拡張前の四周を巡っている。主柱穴は、直径 20 ～ 25cm、柱間 1.9 ～ 2.1m で４つある。炉は北側の主柱穴間の中央に、貯蔵穴は南壁側中央にある。

SH2150　周溝は、幅 13 ～ 25cm で四周を巡っている。主柱穴は、直径 20 ～ 35cm、柱間 1.8 ～ 2.1m でやや歪む。炉は、北側の主柱穴を結ぶ線上中央よりやや内側に位置し、貯蔵穴は南壁側中央にある。

SH2167　周溝は幅 15 ～ 20cm で、ＳＤ 2159 に切られている以外で確認した。主柱穴は直径 25 ～ 40cm、柱間 1.9　～ 2.1m で４つある。炉は確認できなかったが、貯蔵穴は南壁側中央にある。

SH2176　炭化した建築部材などが残存し、東側の壁を中心として壁も焼けているため消失家屋と考えられる。周溝は幅 14 ～ 23cm で北壁側を除く３つの壁で検出できた。主柱穴は直径 22 ～ 30cm、柱間 1.5 ～ 2.0m と歪んでいる。貯蔵穴は南壁側中央よりやや西にある。南東隅から暗渠を通り排水溝ＳＤ 2172 が延びる。

SH2180　中央から北壁の手前まで東西にＳＤ 2159 に切られている。西側は道により消失しており、東側半分の検出である。周溝は幅 20 ～ 35cm で南・北壁側のみ確認でき、主柱穴は直径 30cm、深さ 15cm の穴が該当すると思われる。南壁側中央に相当するところには貯蔵穴がある。周溝の南西隅より暗渠を通りＳＤ 2173 が延び、ＳＤ 2172 と合流しＳＤ 2168 となる。

SH2183　東側は道路によって消失している。周溝は幅 12 ～ 20cm で北西隅から北壁にかけてしか残存しない。直径 20cm の穴２つが主柱穴と思われる。南壁側中央には貯蔵穴がある。

SH2184　南西角は調査区外のため確認できなかった。南東隅より南東方向へ排水溝ＳＤ 2191 が延びＳＤ 2177 と結びつくと思われる。

SH2185　主柱穴は、直径 25 ～ 30cm で３つ検出できたが、南西隅は調査区外のため未検出である。炉跡と思われる焼土は、北側主柱穴間中央より竪穴中心よりと北西柱穴間中央よりの２ケ所にある。

SH2186　周溝は幅 10 ～ 50cm で四周を巡っている。主柱穴は直径 20 ～ 40cm、柱間 2.5 ～ 2.9m とやや歪

む。北側の主柱穴間の中央に炉があり、南壁側中央には貯蔵穴がある。南西隅より西へ暗渠を通り排水溝ＳＤ 190 が延びＳＨ 188 を切っている。

SH2188　主柱穴は直径 20 ～ 30cm、柱間 1.5m で北側の２つのみ確認できた。炉は北側の主柱穴間の中央から竪穴中心部よりにある。

SH2189　主柱穴と思われる直径 20cm の穴と南壁中央部の貯蔵穴のみ確認できたが、大部分が調査区外のため他は不明である。

SH2211　周溝は幅 15 ～ 25cm で南西隅は攪乱により確認できなかった。炉は、北側の主柱穴を結ぶ線上中央よりやや内側に位置し、貯蔵穴は南壁側中央にある。

SH2214　周溝は幅 20 ～ 30cm であるが、他は不明である。

SH2223　周溝は幅 20 ～ 35cm である。主柱穴は直径 30 ～ 40cm でＳＸ 216 に切られている南東角の穴を除く３つで、柱間は東西 2.2m、南北 2.65m である。貯蔵穴は南壁側中央に位置している。

SH2231　周溝は幅 12.5 ～ 30cm で東西の壁と北壁で残っている。主柱穴は直径 20 ～ 35cm で、柱間は東西 2.3m、南北 2.1m で３つ確認できた。貯蔵穴は南壁側中央部にある。排水溝については、痕跡と思われるものがある。

SH2237　幅 12.5 ～ 25cm の周溝があり、主柱穴は直径 30 ～ 40cm、柱間 2.5m で２つある。炉は２つの柱穴間中央よりやや西寄りにある。

SH2247　周溝は残存部を幅 12.5 ～ 30cm で巡る主柱穴と思われる直径 40cm の３つの穴がある。

SH2257　周溝は西壁と南壁側でしか残存していない。主柱穴は直径 25 ～ 35cm、柱間は東西 2.9m、南北 2.3m で南東を除く３つがある。貯蔵穴は南壁側中央に位置する。

SH2275　周溝は幅 25 ～ 40cm で四周を巡っている。主柱穴は直径 17.5 ～ 35cm、柱間は 2.9 ～ 3.2m で４つある。炉は竪穴中心部と西側柱穴間中央にあり、貯蔵穴は南壁側中央にある。南東隅より南東へ暗渠を通り排水溝ＳＤ 288 が延びる。

SH2279　形態は隅丸方形でなく今回の調査では特異な形をしている。

SH2294　中心となる主柱穴は直径 25 ～ 35cm、柱間 2.2 ～ 2.8m の３つあるが、北側には同じ規模の穴が他に２つあるため建て替えの可能性が考えられる。

SH2339　周溝は東壁中央より南壁にかけて幅 20 ～ 30cm のみ確認できた。主柱穴は直径 24 ～ 28cm、柱間 2.1m で２つあり、貯蔵穴は南壁側中央部に痕跡がある。

SH2340　周溝は幅 20 ～ 30cm で四周を巡る。主柱穴は４つで直径 20 ～ 30cm、柱間 2.3 ～ 2.5m である。炉は北側の主柱穴を結ぶ線上中央よりやや内側に位置し、他に２か所焼土が確認できた。貯蔵穴は南壁側中央にあるが、周溝から離れている。北東隅から暗渠が掘られているが、途中で止まっている。

SH2341　周溝は、北西隅を欠くが幅 20 ～ 30cm で四周を巡っていたと思われる。主柱穴は直径 24 ～ 28cm、柱間 2.0 ～ 2.2m で４つある。炉は北側の主柱穴間中央に、貯蔵穴は南壁側中央よりやや西寄りにある。

SH2343　周溝は西壁側で一部欠いているが幅 15 ～ 25cm で３つの壁を巡っている。主柱穴は、直径 30 ～ 50cm、柱間東西 1.2m，南北 1.6m で４つあり、炉は、北側の柱間中央よりやや内側に位置する。

SH2345　主柱穴は４つあり、直径 28 ～ 44cm、柱間 2.3 ～ 2.8m と南北にやや長い。炉は北側の主柱穴間中央に、貯蔵穴は南壁側中央に位置する。

SH2358　北東から南壁中央にかけて西壁から南西隅が攪乱により消失している。北壁・東壁・南壁東側の一部で幅 15 ～ 20cm の周溝が残っており、主柱穴は直径 27.5 ～ 30cm で２つ確認できた。

②土坑

SK2114　規模は長軸方向で 2.5m、短軸方向で 55 ～ 65cm、深さ 19 ～ 23cm である。

SK2152　規模は長軸方向で 1.4m、短軸方向で 77.5cm、深さ 42cm の楕円形を呈する。

SK2276　規模は 3.5 × 4.05m 、深さ８～ 15cm である。南壁中央から西よりには直径 25cm のピットがある。

③溝

SD2058　ＳＨ 56・117 の共有排水溝で、幅 25 ～ 55cm、深さ 15 ～ 17cm、長さ 16.4cm、ＳＨ 2060 に切られ途中で消失する。

SD2081 ＳＨ 2036 の排水溝で、幅 15 ～ 35cm、深さ 10 ～ 22cm、長さ 5.75m でＳＤ 2033 に切られて終わっている。

SD2142 ＳＨ 2107 の排水溝である。規模は幅 22.5 ～ 42.5cm、深さ 13 ～ 36cm、長さ 18.2m、途中ＳＨ 2130 に切られている。

SD2146 ＳＨ 2105 の排水溝でＳＨ 2133 の排水溝であるＳＤ 148 と合流し、ＳＤ 2158 となる。規模は幅 25 ～ 42.5cm、深さ 17 ～ 26cm、長さ 16.3m で、ＳＨ 2107 ・ＳＫ 2134 に切られている。

SD2148 ＳＨ 2133 の排水溝で、幅 30 ～ 42.5cm、深さ 20 ～ 40cm、長さ 7.35m である。ＳＨ 2105 の排水溝ＳＤ 2146 と合流しＳＤ 2158 となる。

SD2158 ＳＨ 2105 ・2133 の共有配水溝で、幅 22.5 ～ 70cm、深さ５～ 17cm、長さ 11.6 ｍである。途中ＳＤ 2156 に切られている。

SD2164 ＳＨ 2143 の排水溝で、幅 15 ～ 45cm、深さ８～ 28cm、途中ＳＤ 2156 に切られ、一部削平のため消滅しているが 20m の長さがある。

SD2168 ＳＨ 2176 の排水溝ＳＤ 2172 とＳＨ 2180 の排水溝ＳＤ 2173 が合流しＳＤ 2168 となる。幅 25 ～ 110cm 、深さ６～ 34cm、途中ＳＫ 2170 に切られるが長さ 25.2 ｍである。

SD2172 ＳＨ 2176 の排水溝で、幅 50 ～ 80cm、深さ 41 ～ 52cm、長さ 12.5 ｍあり、ＳＤ 2173 と合流し、ＳＤ 2168 となる。

SD2173 ＳＨ 2180 の排水溝で、幅 40 ～ 75cm、深さ 30 ～ 44cm、長さ 14.9 ｍで、ＳＤ 2172 と合流し、ＳＤ 2168 となる。

SD2177 現道に切られているが、ＳＨ 2184 の排水溝ＳＤ 2191 と同一遺構であろう。幅 15 ～ 35cm、深さ５～９ cm、長さ 14.9 ｍである。

SD2191 ＳＨ 2184 の排水溝で現道に切られているが、ＳＤ 2177 と同一遺構であろう。幅 25 ～ 45cm、深さ 31 ～ 10cm、長さ 4.15 ｍである。

SD2192 ＳＨ 2186 の排水溝で、ＳＨ 2188 を切って調査区外へ続いている。幅 20 ～ 70cm、深さ 16 ～ 56cm、長さ６ｍである。

SD2225 幅 42.5 ～ 50cm、深さ 10 ～ 29cm、長さ 6.9m で他は不明である。

SD2288 ＳＨ 2275 の排水溝で、幅 30 ～ 35cm、深さ 18 ～ 25cm、長さ 16.7 ｍである。

（２）古墳時代の遺構

①方形周溝墓

SX2147 西隅と南隅に２つの陸橋部があるタイプの方形周溝墓である。北西溝は幅 0.9 ～ 1.55m、深さ８～ 24cm。北東溝は幅 0.75 ～ 1.45m 、深さ９～ 22cm。南東溝は幅 1.05m 、深さ 11 ～ 13cm。南西溝は幅 0.78 ～ 0.95m 、深さ 10 ～ 11cm。北西溝、南西溝はＳＤ 156 に切られる。台状部の長さは 4.45 × 4.3m である。

SX2209 南東溝の中央に陸橋部があるタイプの方形周溝墓である。南東溝は幅 0.85 ～ 0.98、深さ 17 ～ 29cm で、ＳＨ 2246 に切られている。南西溝は幅 0.65 ～ 0.7m、深さ 13 ～ 38cm、ＳＦ 2207・2248 に切られている。北東溝は幅 1.15 ～ 1.25m 、深さ 16 ～ 21cm である。北西溝は幅 0.7 ～ 1.25m 、深さ 16 ～ 22cm で、ＳＦ 2208 に切られている。台状部の径は 6.6 × 5.75m である。

SX2216 南東溝の中央に陸橋部を有するタイプの方形周溝墓である。北東溝はＳＦ 2224 、ＳＨ 2231 に切られ、更に溝の外壁は攪乱を受けているが、残存部では幅 1.3m、深さ 26 ～ 42cm で、ＳＨ 2214 に切られている。南西溝は幅 1.1m、深さ 17cm で、ＳＫ 2215・ＳＨ 2223 に切られている。台状部の径は 7.4 × 7.5m である。

SX2222 東角は攪乱を受けており、南角はＳＨ 2246 ・2247 、ＳＫ 2252 に切られている。北東溝は外側の壁が攪乱を受け幅の確定はできないが、深さは 27 ～ 34cm である。北西溝は最大幅 2.5m、深さは 47 ～ 93cm で、両サイドにいくほど狭く、浅くなっている。南東溝は中央に陸橋部を有し、幅 2.05m 、深さ 16cm である。南西溝は幅 1.68 ～ 2.1m、深さ 26 ～ 75cm である。台状部の径は 10 × 10.65m である。

②方墳

SX2163 周溝は四周を巡っており、幅 0.5 ～ 1.1m、深さ 22 ～ 40cm である。規模は東西南北とも周溝の心々で 5.7m である。埋土から須恵器短頸壺が出土していることから、方墳と判断した。埋葬施設については墳丘部が削平されているため、その痕跡も残らず不明である。

（３）飛鳥時代の遺構

①竪穴住居

SH2108　南北 5.0m、東西 5.0m の隅丸方形を呈す。深さ 8 ～ 28 ㎝、主軸 N53 ° W である。主柱穴は北側の２本は確認できたが、南側は確認できなかった。北壁中央に竈跡と考えられる焼土が遺存する。弥生時代の SH2107 を切り、SF2046 に切られる。

SH2130　南北 5.8m、東西 5.3m の隅丸方形を呈す。深さ 16 ～ 28 ㎝、主軸は N25 ° W である。４本の主柱穴が確認され、直径は 30 ～ 50 ㎝、深さは 22 ～ 37 ㎝である。深さ 10 ㎝前後の周溝がほぼ四周をめぐり、南東隅に排水溝（SD2122）を有す。排水溝は、遺存状況は悪いが、暗渠排水溝であったと思われる。北壁中央に竈を有す。竈の西側約 1/2 は SF2157 に切られるものの残りの部分の遺存状況は良好である。南西隅には筒形土製品や、須恵器杯等の遺物が集中して出土した。弥生時代の SH2107 の排水溝（SD2142）を切り、SF2157 に切られる。

SH2235　南北の現存径が 4.0m、東西の現存径が 4.0m で、西側および南側に攪乱を受けるため、西壁と南壁は残っていないが、隅丸方形を呈したと思われる。深さは 8 ～ 21 ㎝、主軸は N50 ° W を示す。直径 35 ～ 45 ㎝、遺構検出面からの深さが 25 ～ 36 ㎝の壁柱穴が北壁に 3 箇所、西壁に 1 箇所確認された。また、攪乱を受けた部分から西壁の壁柱穴の痕跡と思われるピットが 3 箇所確認されている。これらの壁柱穴も SH2234 のものと同様に地面に対して垂直に掘られている。

SH2246　南北の現存径 2.3m、東西の径が 3.5m の隅丸方形を呈したと思われる。深さ 9 ～ 18 ㎝、主軸は N19 ° E を示す。木根等の攪乱を受けるため、遺存状況が悪い。SX2209 、SX2222 を切り、SF2251 に切られる。

②土師器焼成坑

SF2008　長径 3.4m、底径 2.0m、深さ 10 ～ 14 ㎝の隅丸二等辺三角形を呈し、主軸方向は N145 ° E である。頂頭部にあるＳＫ 2010 は灰原と思われる。

SF2015　長径 2.8m、底径 1.7m、深さ 6 ～ 9 ㎝、主軸Ｎ 44 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＫ 14 は灰原と思われる。

SF2016　長径 3.9m、底径 1.4m、深さ 3 ～ 21 ㎝、主軸 N140 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＢ 2193 はＳＦ 2016 に対応関係にある可能性もある。

SF2019　1.5m × 0.8m の範囲で残存し、深さは 10 ～ 15 ㎝である。大部分をＳＤ 2007 に切られるため、平面形、主軸とも不明。

SF2026　0.6m × 0.6m の範囲で、深さ 15 ㎝が残存する。ＳＤ７に大部分を切られるため、平面形、主軸とも不明。

SF2035　長径 3.5m、底径 1.8m、深さ 12 ～ 41 ㎝、主軸 N145 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。弥生時代のＳＨ 2036 を切る。

SF2038　長径 2.6m、底径 1.4m、深さ 12 ～ 19 ㎝の隅丸二等辺三角形を呈す。主軸は N138 ° W 。

SF2046　長径 2.7m、底径 1.5m、深さ 21 ～ 30 ㎝、主軸は N118 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＫ 2121 は灰原と思われる。飛鳥時代のＳＨ 2108 をきる。

SF2047・2048　２基が重複して検出された。ＳＦ 2047 は長径の現存が 3.2m、底径 1.7m、深さ 10 ㎝、主軸 N136 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＦ 2048 は長径 2.8m、底径 1.7m、深さ 10 ～ 21 ㎝、主軸が N46 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。２基の関係は、ＳＦ 2047 の左辺中央部を、ＳＦ 2048 の頂頭部が切る。

SF2057　長径 2.3m、底径 1.1m、深さ 17 ～ 19 ㎝、主軸 N170 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。

SF2062　2.0m × 1.8m の範囲で、深さ 6 ～ 14 ㎝で残存する。平面形、主軸は不明だが、隅丸二等辺三角形を呈していたと思われる。ＳＨ 2092 を切る。

SF2091　1.5m × 0.8m の範囲で残存、深さは 14 ㎝。平面形、主軸とも不明。

SF2119　長径 2.3m、底径 1.4m、深さ 2 ～ 11 ㎝で、主軸は N114 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。弥生時代のＳＨ 2120 の南壁中央部を切る。

SF2138・2139　２基が重複して検出された。ＳＦ 2138 は長径 3.8m、底径 2.3m、深さ 19 ～ 34 ㎝、主軸 N112 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＦ 2139 は長径 3.1m、底径の現存が 2.4m、深さ 19 ～ 29 ㎝、主軸 N177 ° W の隅丸二等辺三角形を呈したと思われる。頭部をＳＫ 2141 に切られる。２基の関係

は、ＳＦ 2139 の底部から約 1/3 をＳＦ 2138 が頭部から切る。

SF2140　調査区の南端部で 2.0m × 1.3m の範囲が検出され、深さ 30 ～ 36 ㎝、平面形と主軸は不明。平成２年度調査時に検出されたＳＦ 2118 の一部と思われる。

SF2161 ・2165 ・2166　３基が連続して重複する。ＳＦ 2161 は長径残存 2.6m、横幅現存径の最大が 1.3m で、深さ 32 ～ 48 ㎝、主軸 N67 ° W で、隅丸二等辺三角形を呈したと思われ、底部から約 1/3 をＳＤ 2007 に切られる。ＳＦ 2165 は長径 4.0m、底径 1.8m、深さ 19 ～ 42 ㎝、主軸は N143 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＦ 2166 は長径 4.0m、底径 1.8m、深さ 12 ～ 49 ㎝、主軸 N157 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。３基の関係は、ＳＦ 2166 の左頂点部分をＳＦ 2165 の頂頭部が切り、ＳＦ 2165 の左頂点部分をＳＦ 2161 の頂頭部が切る。新旧関係は古い順より、ＳＦ 2166 、ＳＦ 2165 、ＳＦ 2161 である。

SF2207　2.0m × 1.5m の範囲で、深さ 9 ～ 17 ㎝で残存する。大部分が攪乱されているため、平面形、主軸とも不明。

SF2208　長径 2.8m、底径 1.7m、深さ 6 ～ 14 ㎝、主軸が N139 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＸ 2222 の北辺中央部を切る。

SF2212　長径 3.5m、底径 2.0m、深さ 6 ～ 14 ㎝、主軸 N123 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。底部の左部分がＳＫ 2219 に切られる。ＳＨ 2213 は関連施設の可能性があり。

SF2224　長径 3.5m、底径 1.9m、深さ 13 ㎝、主軸 N174 ° E で隅丸二等辺三角形を呈す。弥生時代のＳＨ 2231 、ＳＸ 2216 を切る。

SF2241　2.5m × 2.0m の範囲、深さ 20 ㎝で残存する。平面形、主軸とも不明。

SF2263　長径の現存は 4.5m、底径は 2.0m、深さ 25 ～ 30 ㎝、主軸はＮ 41 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。頂頭部をＳＫ 2274 に、底部をＳＫ 2255 に攪乱を受ける。

SF2272　長径 3.5m、底径 2.1m、深さ 24 ～ 32 ㎝、主軸 N125 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。

SF2283・2289・2290　３基が重複して検出された。ＳＦ 2283 は長径 3.1m、底径 1.5m、深さ 14 ～ 26 ㎝、主軸は N153 ° E 、隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＦ 2289 は長径の現存は 1.8m、底径 1.4m、深さ 20 ～ 24 ㎝、主軸は N173 ° W で、隅丸二等辺三角形を呈する。ＳＦ 2290 は長径の現存が 1.8m、底径 1.4m、深さ 15 ～ 22 ㎝、主軸 N179 ° W で、隅丸二等辺三角形を呈したと思われる。ＳＦ 2289 の全体及び、ＳＦ 2290 の底部はＳＫ 2280 の下層より検出した。３基は北側よりＳＦ 2289 、ＳＦ 2290 、ＳＦ 2283 の順に重複し、それぞれＳＦ 2289 の頂頭部とＳＦ 2290 の底部が、ＳＦ 2290 の頂頭部とＳＦ 2283 の底部が重複する。それぞれの切り合い関係は不明。

SF2284　3.3m × 2.5m の楕円形の範囲で残存する。深さは 7 ～ 17 ㎝、主軸は N123 ° E 、中心部が攪乱を受ける。

SF2287　長径の現存 2.6m、底径の現存 2.2m、深さは 21 ～ 24 ㎝、主軸 N151 ° E で、平面は隅丸二等辺三角形であったと思われる。

SF2296 ・2297 ・2298 ・2299　４基が北からＳＦ 2296 、ＳＦ 2297 、ＳＦ 2298 、ＳＦ 2299 の順で連続して重複する。ＳＦ 2296 は長径 2.7m、底径 1.4m、深さ 26 ～ 33 ㎝、主軸は N131 ° E で隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＦ 2298 は長径の現存が 2.5m、底径 1.7m、深さ 24 ～ 40 ㎝、主軸は N145 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。ＳＦ 2299 は長径の現存が 2.0m、底径 1.5m、深さ 19 ～ 20 ㎝、主軸は N32 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。４基の関係は以下のようになっている。ＳＦ 2296 の頂頭部とＳＦ 2297 の頂頭部が互いに重複するが、切り合い関係は不明。ＳＦ 2297 の底部左部分を、ＳＦ 2298 の底部左部分が切る。ＳＦ 2297 はＳＦ 2298 より古い。ＳＦ 2298 の頂頭部とＳＦ 2299 の頂頭部が互いに重複するが、切り合いは不明。

SF2305　長径の現存が 1.8m、底径 1.7m、深さ 16 ～ 25 ㎝、主軸 N143 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。

SF2307　長径 2.8m、底径 1.8m、深さ 11 ～ 18 ㎝、主軸は N172 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。

SF2310・2316　調査区東端部から重複して検出された。ＳＦ 2310 は長径 3.3m、底径 1.5m、深さ 20 ～ 29 ㎝、主軸は N119 ° E の水滴形を呈す。ＳＦ 2316

焼成坑番号	地区	規模(m)			主軸方向	出土遺物										時期
						須恵器	土師器									
SF		長さ	幅	深さ			椀	杯	皿	高杯	甕	長胴甕	鍋	甑	その他	
2008	I. J, 31.32	3.4	2.0	0.10 ～0.14	S35° E	杯	○				○	○				飛鳥
2015	J. K, 31	2.8	1.7	0.06～0.09	N44° W						○	○				飛鳥
2016	L. M, 31. 32	3.9	1.4	0.03～0.21	S40° E						○	○				飛鳥
2019	J31	*1.5	*0.8	0.10～0.15	—						○					飛鳥
2026	P31	*1.0	*0.6	0.40	—						○					飛鳥
2035	M. N, 29. 30	3.5	1.8	0.12～0.41	S22° E		○				○	○	○			飛鳥
2038	K27, 28	2.6	1.4	0.12～0.19	S42° W								○			飛鳥
2046	L27. 28	*2.7	1.5	0.21～0.30	W28° N		○	○		○	○	○	○	○		飛鳥
2047	L. M, 27. 28	*3.2	1.7	0.01～0.10	S44° W		○				○	○				飛鳥
2048	M27. 28	*2.8	1.7	0.10～0.21	W44° N	杯身	○				○	○				飛鳥
2057	O. P, 27. 28	2.3	1.1	0.17～0.19	S10° E		○				○	○				飛鳥
2062	R. S28	*2.0	*1.8	0.06～0.14	—	杯	○				○			○		飛鳥
2091	R24	*1.5	*0.8	0.14	—						○					飛鳥
2119	R25	2.3	1.4	0.02～0.11	S60° W		○				○	○	○			飛鳥
2138	Q24. 25	3.8	2.3	0.19～0.34	W22° S	甕	○	○			○	○	○		竈	飛鳥
2139	Q. R24	*3.1	*2.4	0.19～0.29	S3° W	甕	○				○					飛鳥
2140	R28	*2.0	*1.3	0.30～0.36	—	高杯	○				○	○	○	○		飛鳥
2161	H21	*2.6	*1.3	0.32～0.48	W23° N		○				○	○	○			飛鳥
2165	H20. 21	4.0	1.8	0.19～0.42	S37° W		○				○	○		○	竈	飛鳥
2166	H. I120	4.0	1.8	0.12～0.49	S23° E		○				○	○	○	○		飛鳥
2207	P33. 34	*2.0	*1.5	0.09～0.17	—		○	○		○	○		○			飛鳥
2208	O. P, 33. 34	2.8	1.7	0.25～0.42	S41° W		○				○	○			土馬	飛鳥
2212	L. M, 32. 33	3.5	2.0	0.06～0.14	E33° S		○				○					飛鳥
2224	L. M37	3.5	1.9	0.13	S6° E		○			○	○					飛鳥
2241	L. M, 42. 43	*2.5	*2.0	0.20	—		○				○			○	薬壺	飛鳥
2263	H34. 35	*4.5	2.0	0.22～0.30	N41° W		○				○	○				飛鳥
2272	K. L, 36. 37	3.5	2.1	0.24～0.32	E35° S		○	○								飛鳥
2283	G. H38	3.1	1.5	0.14～0.26	S27° E		○		○		○				筒型土器	飛鳥
2284	F. G, 37. 38	*3.3	*2.5	0.07～0.17	E33° S					○	○	○				飛鳥
2287	J40. 41	*2.6	*2.2	0.02～0.10	S29° E						○					飛鳥
2296	E39	2.7	1.4	0.26～0.33	E41° S		○	○	○		○	○			土馬・杯蓋	飛鳥
2298	F39. 40	*2.5	1.7	0.24～0.29	S35° E		○	○	○	○	○	○	○			飛鳥
2299	F. G40	*2.0	1.5	0.19～0.20	N32° W		○	○	○		○	○	○			飛鳥
2305	E. F41	*1.8	1.7	0.16～0.25	S37° E		○	○	○		○	○				飛鳥
2307	I. J41	2.8	1.8	0.06～0.21	S8° E		○				○					飛鳥
2310	G. H, 42. 43	3.3	1.5	0.09～0.17	E29° S						○		○	○		飛鳥
2311	H43	*2.5	*1.5	0.04～0.19	—		○									飛鳥
2316	H. I, 43. 44	*2.0	*1.5	0.12～0.35	—						○	○				飛鳥
2318	I. J, 44. 45	*3.0	*2.5	—	—						○	○				飛鳥
2319	L. M44	3.8	1.8	0.31～0.39	S38° E	杯身	○				○	○				飛鳥
2321	K45. 46	*2.0	0.6	0.23～0.32	—						○					飛鳥
2322	I. J43	*2.0	*1.5	0.13	—						○					飛鳥
2324	L. M43	*2.8	*2.5	0.21～0.24	—		○				○			○		飛鳥
2325	K41. 42	*2.5	*2.0	0.21～0.24	—		○				○					飛鳥
2329	I. J43	*2.5	1.6	—	—						○					飛鳥
2337	チ. リ, 31. 32	*2.8	1.5	0.16～0.18	N4° W		○				○					飛鳥
2338	ホ. ヘ, 30. 31	3.4	1.6	0.37～0.41	N40° W	甕					○					飛鳥
2053	J27. 28	2.8	1.4	0.12～0.25	S45° E		○				○	○		○		奈良
2064	S24	*1.8	*1.3	0.04～0.09	—						○					奈良
2090	S. T26	2.8	1.5	0.10～0.30	S45° E		○				○	○				奈良
2097	S28. 29	*2.0	*2.0	0.17～0.24	—						○					奈良
2157	N. O, 22. 23	3.3	2.1	0.39～0.44	S44° E	高杯・杯身					○		○	○		奈良
2187	C. D9	4.1	2.1	0.16～0.32	N8° W						○	○				奈良
2203	N. O, 32. 33	4.1	1.9	0.05～0.29	S20° W						○					奈良
2227	N38. 39	2.7	1.5	0.18～0.25	S2° W		○	○			○					奈良
2248	Q33. 34	*0.5	*0.5	0.10	—			○			○					奈良
2251	Q35	*2.5	1.4	0.06～0.14	E21° S			○						○		奈良
2264	E. F35	2.8	1.4	0.09～0.30	S45° E		○	○	○		○	○		○		奈良
2268	B36	*1.8	*1.0	0.30～0.40	S36° W						○					奈良
2289	F. G38	*1.8	1.4	0.20～0.24	S7° W		○		○		○					奈良
2290	G38	*1.8	1.4	0.15～0.22	S1° W				○		○	○				奈良
2291	I40	*1.5	*1.2	0.23～0.30	—						○	○				奈良
2297	E39. E. F40	*2.0	*1.1	0.16～0.20	W39° N		○	○	○		○	○			竈	奈良
2300	G40	*2.3	1.8	0.27～0.32	E35° S		○	○	○	○	○	○			竈	奈良
2301	G40. 41. H40	*2.5	1.5	0.04～0.17	W38° N		○		○		○	○				奈良
2303	F41, G40. 41	*2.5	1.4	0.08～0.18	E34° S		○				○	○			竈	奈良
2304	G41. 42	3.1	1.5	0.11～0.28	E13° S		○	○	○		○	○		○	土馬2	奈良
2306	F41	*1.8	1.1	0.12～0.15	N31° W			○	○	○	○					奈良
2313	J. K42	*2.8	1.9	0.08～0.17	S30° E		○		○		○	○		○		奈良
2323	G42. 43	*2.2	*1.0	0.06～0.16	—				○		○					奈良
2330	G43	*2.0	*0.8	0.18～0.23	—		○		○	○	○					奈良
2042	E30	*1.3	*1.0	0.23	—											不明
2089	S. T, 27	*1.0	*0.8	—	—											不明
2202	Q31	*2.3	*1.7	—	—						○					不明
2312	J44, J. K45	*2.4	*1.3	0.05～0.06	—						○					不明
2317	I45	*1.5	*0.8	—	—						○					不明
2320	L43. 44	*2.7	*0.9	0.10	—						○			○		不明
2331	G. H43	*2.5	*0.5	0.18～0.27	—						○					不明
2334	チ33	2.2	1.2	0.19～0.29	E6° N						○					不明

・平面形態欄の記号は　参照　・規模欄の数字の前の*印は現存径を表わす。・主軸方向、時代の—印は不明を意味する。

第2表　第2次調査土師器焼成坑一覧表

は 2.0m × 1.5m の範囲で、深さ 12 ～ 35 ㎝で残存する。平面形、主軸は不明。

SF2311 2.5m × 1.5m の範囲で深さは 19 ～ 24 ㎝で残存する。平面形、主軸は不明。

SF2318 調査区東端部で 3.0m × 2.5m の範囲で床面のみが残存する。

SF2319 長径 3.8m、底径 1.8m、深さ 31 ～ 39 ㎝、主軸 N142 ° W の隅丸二等辺三角形を呈す。頂頭部にＳＫ 2327 の攪乱を受ける。

SF2321 調査区東端より 2.0m × 0.6m の部分が検出され、深さは 23 ～ 32 ㎝。平面形、主軸とも不明。

SF2322 2.0m × 1.5m の範囲、深さ 13 ㎝で残存する。平面形、主軸は不明。

SF2324 2.8m × 2.5m の範囲、深さ 21 ～ 24 ㎝で残存する。大部分に攪乱を受けるため、平面形、主軸は不明。

SF2325 2.5m × 2.0m の範囲で、深さ 21 ～ 24 ㎝で残存する。大部分をＳＫ 2314 に切られるため、平面形と主軸は不明。

SF2329 2.5m × 1.6m の範囲で床面のみ残存する。

SF2337 奈良時代のＳＨ 2335 の下層より検出された。長径の遺存 2.8m、幅 1.4m、深さ 16 ～ 18 ㎝の楕円形を呈す。仮に北の頂点部を頭とするなら主軸はＮ４° Ｗ。ＳＤ 2159 に切られる。

SF2338 長径 3.4m、底径 1.6m、深さ 37 ～ 41 ㎝、主軸は N40 ° W で、水滴形に近い隅丸二等辺三角形を呈す。

（４）奈良時代の遺構

①竪穴住居

SH2024 南北 3.5m、東西の現存径が 3.4m の比較的規模が小さいもので、深さ 19 ㎝、主軸 N34 ° W の隅丸長方形を呈したものと思われる。柱穴、竈等は確認できなかった。西側約 1/2 を SD2007 に切られる。筒形土製品が出土した。

SH2052 南北約 3.8m、東西約 3.0m の南北に長い隅丸長方形を呈す。深さは 8 ～ 12 ㎝と後世の削平のためか依存状態は悪い。主軸は N14 ° W で、柱穴等は確認できなかった。

SH2129 南北 4.4m、東西 4.3m の隅丸方形を呈す。深さ 14 ～ 28 ㎝、主軸 N37 ° W を示す。４本の主柱穴が確認されており、直径が 25 ～ 30 ㎝、深さは 30 ～ 48 ㎝である。弥生時代の SH2132 を切る。

SH2200 南北 4.5m、東西 4.0m で依存する。全体を木根の攪乱を受けるため、形態等不明。

SH2213 SF2212 を取り囲むように、南北 4.8m、東西 4.5m で、南東隅は未検出だが隅丸方形を呈したと思われる。深さ 3 ～ 25 ㎝、主軸は N52 ° W を示す。幅 25 ㎝前後の周溝が四周の約 3/4 程度をめぐる。直径 30 ㎝、深さ 16 ～ 32 ㎝の南側２本の柱穴が確認された。SF2212 に関係する可能性もある。弥生時代の SH2214 を切る。

SH2234 南北 4.6m、東西 4.8m の隅丸方形を呈す。深さは 17 ～ 24 ㎝、主軸は N13 ° W を示す。直径 30 ㎝前後、竪穴床面からの深さ 39 ～ 45 ㎝の主柱穴が４本確認された。また、直径 20 ㎝前後、遺構検出面からの深さ 11 ～ 68 ㎝の壁柱穴が北壁に４箇所、北西隅に１箇所、東壁に３箇所、西壁に５箇所、南壁に３箇所の合計 16 箇所が確認されている。壁柱穴はいずれも地面に垂直に掘られている。東壁ほぼ中央に竈跡が良好に遺存する。

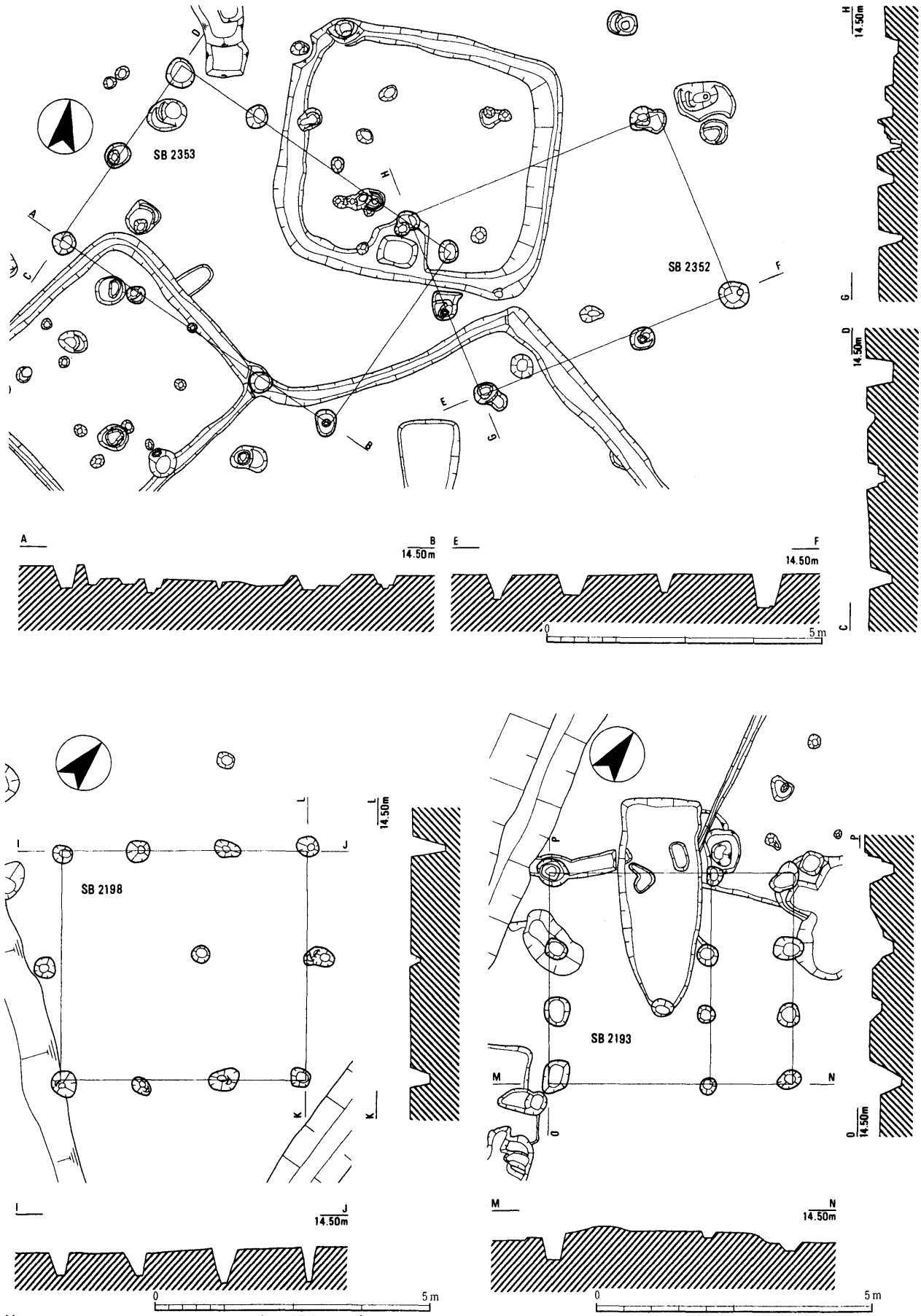
SH2335 南北の現存径 3.4m、東西 4.3m で、深さ 13 ～ 17 ㎝、主軸は N1 ° E を示す。南側約 1/3 を SD2159 に切られるが、平面形は隅丸方形を呈したと思われる。北壁ほぼ中央付近に焼土が遺存していた。SF2337 を切る。

②掘立柱建物

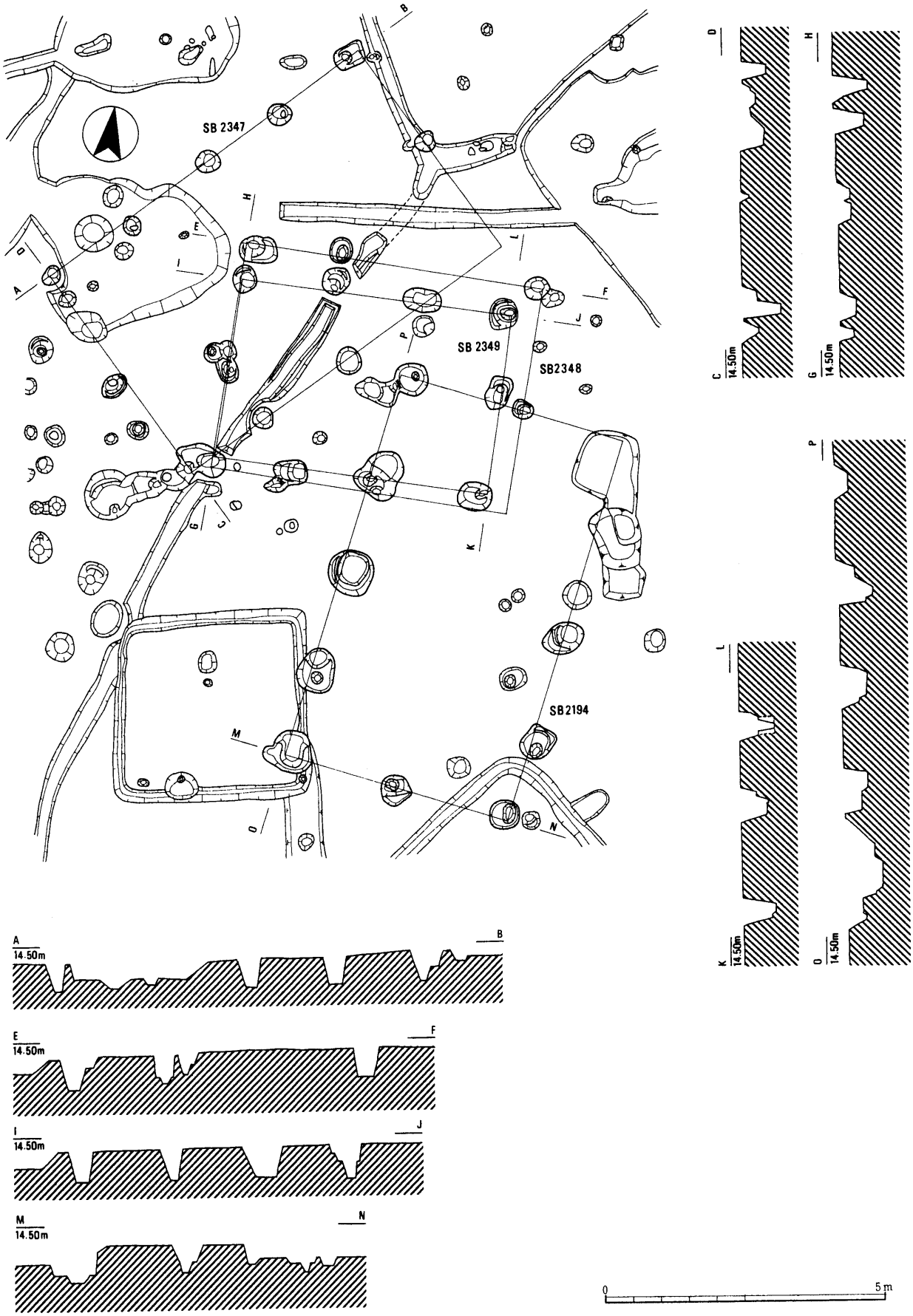
SB2193 ３間×２間の南北棟建物である。桁行き 3.84m、梁行 2.96m。棟方向はＮ 38 ° W。東面に庇があり、庇出は 1.48m である。柱掘形は 30 ㎝前後の楕円形。

SB2194・2347・2348・2349・2353・2352

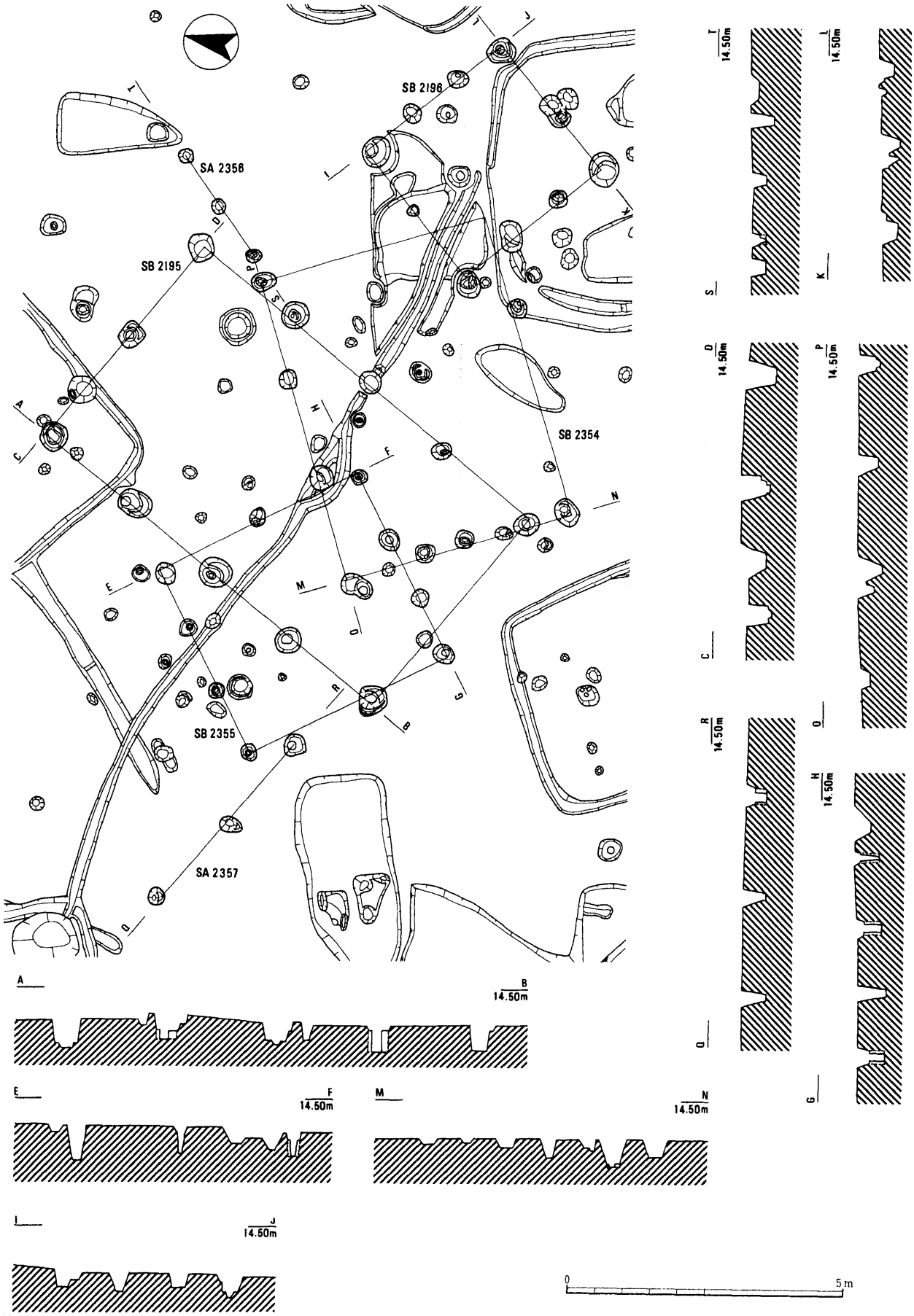
ＳＢ 2194 は４間×２間の南北棟建物である。桁行 7.10m、梁行 4.14m。棟方向はＮ７° Ｅ。柱掘形は 50 ㎝前後の円形。ＳＢ 2347 も４間×２間の南北棟建物。桁行 6.84m、梁行 4.36m。棟方向はＮ 47 ° Ｅ。柱掘形は 30 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2348・2349 はほぼ同じ位置にある３間×２間の東西棟建物。ＳＢ 2348 は桁行 5.34m、梁行 4.14m に対し、2349 は桁行 4.89m、梁行 3.26m とやや小さい。棟方向はＳＢ 2348 がＥ２° S、ＳＢ 2349 がＥ２° Ｎである。柱掘形はともに 30 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2352 はおそ



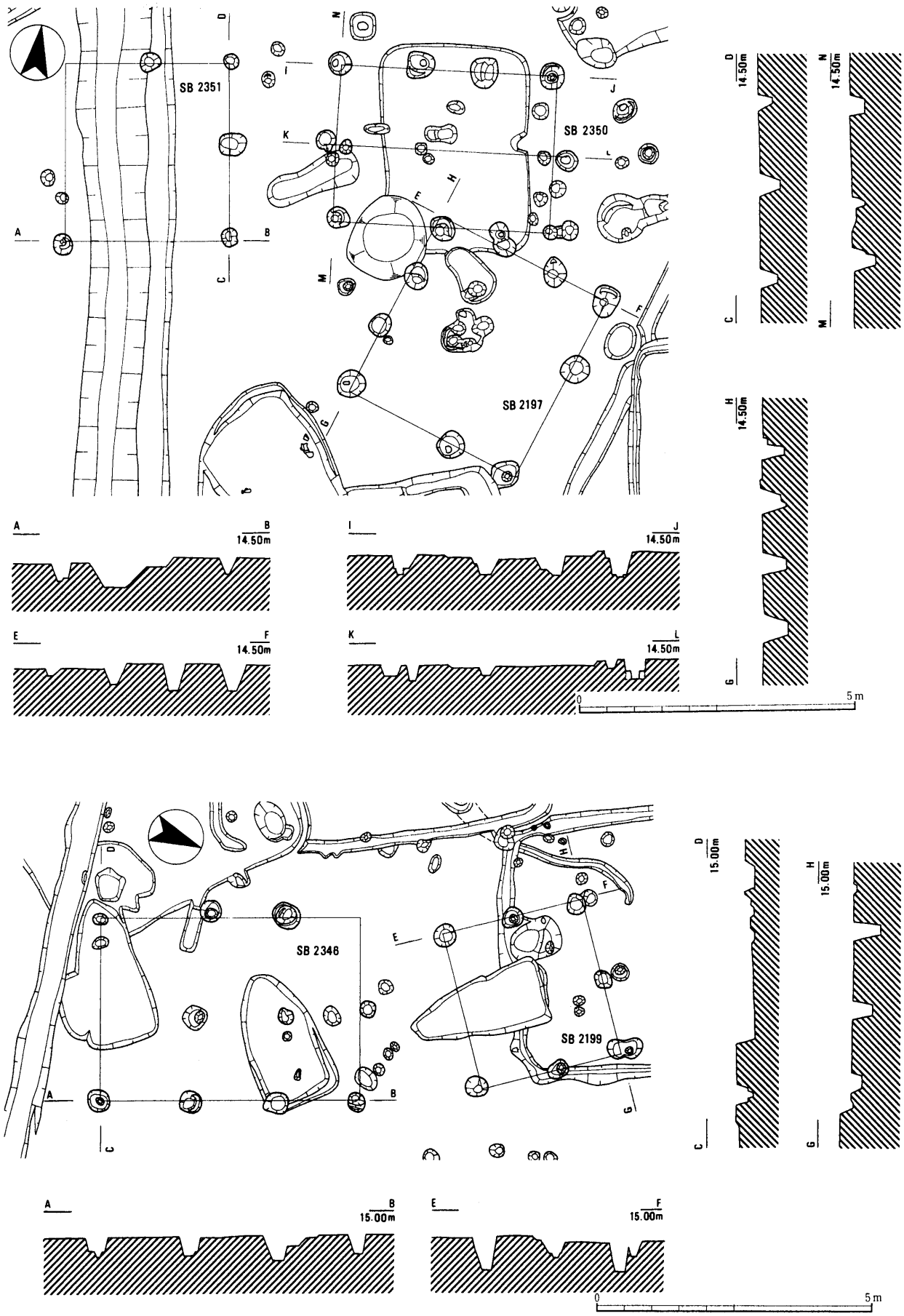
第7図 SB2193・2198・2352・2353実測図(1:100)



第8図　SB2194・2347～2349実測図(1:100)



第9図　SB2195・2196・2354・2355、SA2356・2357実測図(1:100)



第10図 SB2197・2199・2346・2350・2351実測図(1:100)

らく３間×２間の東西棟建物と思われる。桁行の柱穴を２間分しか検出できなかった。桁行 4.89m、梁行 3.56m。棟方向はＥ 33 ° Ｎ。柱掘形は 40 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2353 は４間×３間の東西棟。棟方向はＥ 35 ° Ｓ。柱掘形は 40 ㎝前後の楕円形。これら６棟の建物のうちＳＢ 2352 は他の建物との新旧関係は不明であるが、ＳＢ 2348 はＳＢ 2349 の建て替えであり、さらにＳＢ 2347 は両者より新しい。また、ＳＢ 2194 よりＳＢ 2353 の方が新しいことが確認されている。

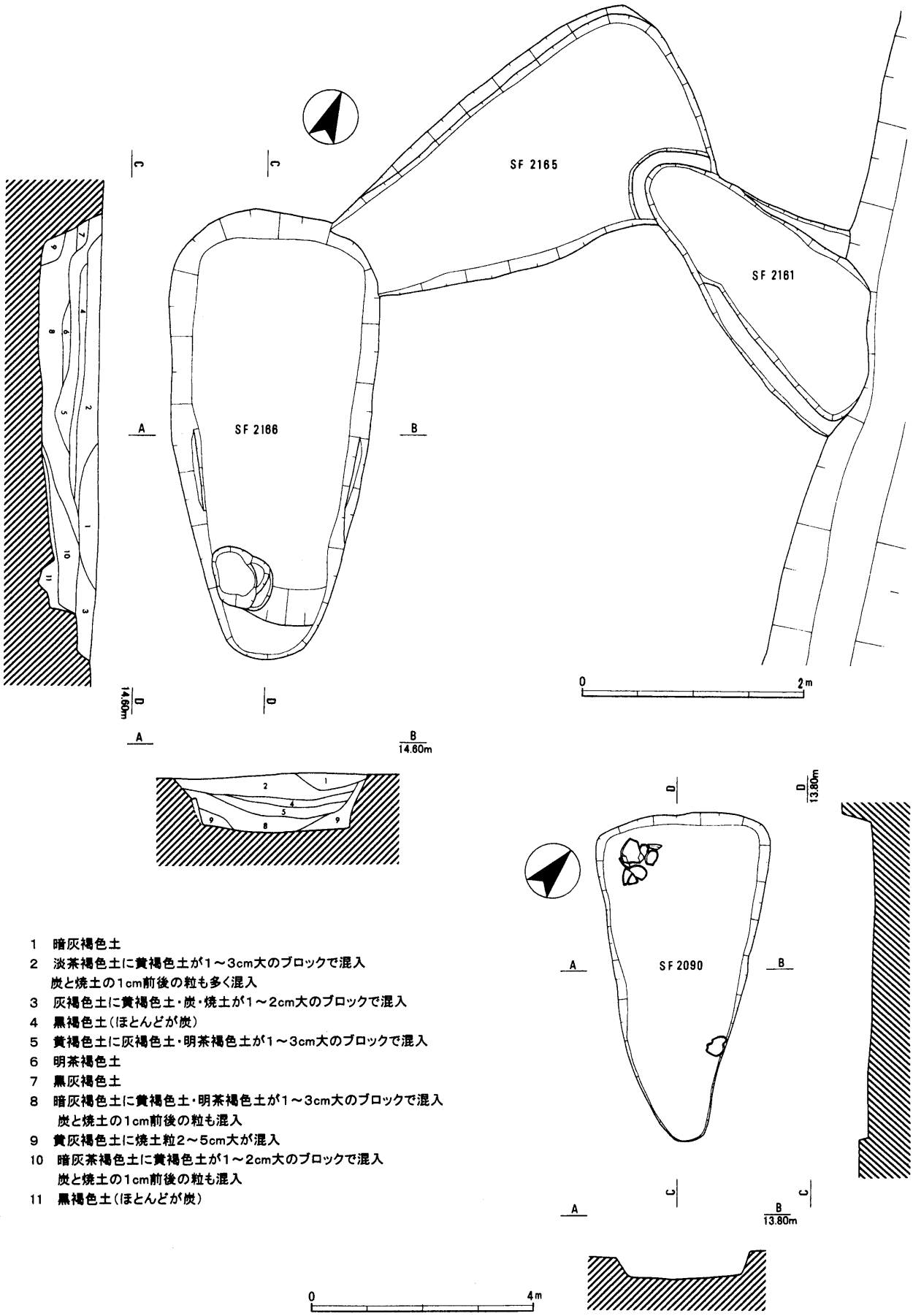
SB2195・2196・2354・2355

ＳＢ 2195 は４間×２間の南北棟建物。桁行 7.70m、梁行 4.40m。棟方向はＮ 27 ° Ｅ。柱掘形は 40 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2196 は３間×２間の東西棟建物。桁行 3.11m、梁行 2.90m。棟方向はＥ 38 ° Ｓ。柱掘形は 30 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2354 は３間×２間の東西棟建物。桁行 5.64m、梁行 4.20m。棟方向はＥ 30 ° Ｎ。柱掘形は 30 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2355 は３間×２間の南北棟建物。桁行 3.96m、梁行 3.69m。棟方向はＮ 40 ° Ｗ。柱掘形は 30 前後の楕円形。４棟が重複した位置関係にあるがその新旧は不明である。

SB2197・2350　ＳＢ 2197 は３間×３間の南北棟建物。桁行 3.60 ｍ、梁行 3.40m。棟方向はＮ 18 ° Ｅ。柱掘形は 40 ㎝前後の楕円形。ＳＢ 2350 は３間×２間の東西棟建物。桁行 4.44m、梁行 2.82m。柱掘形は 30 ㎝前後の楕円形。両側の梁行の柱から神明造の建物の可能性もある。ＳＢ 2350 の方が新しい。

遺構番号	規模			棟方向	柱間寸法		備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)		桁行(m)	梁行(m)	
2193	3×3	3.848	2.96	N38° E	1.28	1.48	
2194	4×2	7.10	4.14	N7° E	1.78	2.07	
2195	4×2	7.68	4.44	N27° E	1.92	2.22	
2196	3×2	3.11	2.90	E38° S	1.04	1.45	
2197	3×3	3.60	3.40	N18° E	1.20	1.13	
2198	3×2	4.44	4.14	E45° N	1.48	2.07	
2199	2×2	2.90	2.60	E35° N	1.45	1.30	
2346	3×*2	4.71	3.36	N24° W	1.580	1.68	
2347	4×2	6.84	4.36	N47° E	1.71	2.18	
2348	3×2	5.34	4.14	E2° S	1.78	2.07	
2349	3×2	4.89	3.26	E2° N	1.63	1.63	
2350	3×2	3.99	2.82	E6° N	1.33	1.41	
2351	2×2	3.26	2.96	N9° W	1.63	1.48	
2352	*3×2	4.89	3.56	E33° N	*1.63	1.78	
2353	4×2	5.92	3.84	E35° S	1.48	1.92	
2354	3×2	5.64	4.20	E30° N	1.88	2.10	
2355	2×3	3.96	3.69	N40° W	1.98	1.23	
2356	2×—	2.22	—	N42° E	1.11	—	
2357	2×—	3.70	—	E28° S	1.85	—	

第3表　第2次調査掘立柱建物一覧表



1　暗灰褐色土
2　淡茶褐色土に黄褐色土が1～3cm大のブロックで混入
　炭と焼土の1cm前後の粒も多く混入
3　灰褐色土に黄褐色土・炭・焼土が1～2cm大のブロックで混入
4　黒褐色土（ほとんどが炭）
5　黄褐色土に灰褐色土・明茶褐色土が1～3cm大のブロックで混入
6　明茶褐色土
7　黒灰褐色土
8　暗灰褐色土に黄褐色土・明茶褐色土が1～3cm大のブロックで混入
　炭と焼土の1cm前後の粒も混入
9　黄灰褐色土に焼土粒2～5cm大が混入
10　暗灰茶褐色土に黄褐色土が1～2cm大のブロックで混入
　炭と焼土の1cm前後の粒も混入
11　黒褐色土（ほとんどが炭）

第11図　SF2090実測図（1:100）SF2161・2165・2166実測図（1:50）

SB2198　3間×2間の東西棟建物。桁行 4.44m、梁行 4.14m。棟方向はE 10°N。柱掘形は 30 cm前後の楕円形。

SB2199　2間×2間の東西棟建物。桁行 2.90m、梁行 2.60m。棟方向はE 35°N。柱掘形は 30 cm前後の楕円形。土師器焼成坑SF 2053 と重複し、何らかの関連施設の可能性もある。

SB2346　3間×2間の南北棟建物。桁行 4.71 m、梁行 3.36m。棟方向はN 24°W。柱掘形は 30 cm前後の楕円形。

SB2351　桁行・梁行とも2間の南北棟建物。桁行 3.26m、梁行 2.96m。棟方向はN 9°W。柱掘形は 30 cm前後の楕円形。

SA2356・2357　それぞれ2間分を確認したが用途などは不明。

③土師器焼成坑

SF2053 長径 2.8m、底径 1.4m、深さ 12 ～ 25 cmの隅丸二等辺三角形を呈し、主軸はN135°Eである。弥生時代のSH 2105 の南端部ほぼ中央を切る。

SF2064　1.8m × 1.3m の範囲、深さ 4 ～ 9 cmで残存するのみ。

SF2090 長径 2.8m、底径 1.5m、深さ 10 ～ 30 cmの隅丸二等辺三角形を呈す。主軸はN135°Eを示す。

SF2097　2.0m × 2.0m の範囲で、深さ 17 ～ 24 cmで残存する。後世の削平を受け、平面形、主軸は不明。

SF2157 長径 3.3m、底径 2.1m、深さ 39 ～ 44 cm、主軸がN136°E の隅丸二等辺三角形を呈す。しかし他の焼成坑と比べると、長径と底径の長さの比率が、長径がやや短い。頂頭部が飛鳥時代のSH 2130 の北壁西部を切る。

SF2187　長径 4.1m、底径 2.1m、深さ 16 ～ 32 cm、主軸N 8°W の隅丸二等辺三角形を呈す。弥生時代のSH 2189 を切る。

SF2203　長径 4.1m、底径 1.9m、深さは 5 ～ 29 cm、主軸がN160°W の隅丸二等辺三角形を呈す。底部の一部がSK 2206 の攪乱を受ける。

SF2227　長径 2.7m、底径 1.5m、深さ 18 ～ 25 cm、主軸がN178°W の隅丸二等辺三角形を呈す。

SF2248　0.5m × 0.5m の範囲、深さ 10 cmで残存する。大部分に攪乱を受けるため平面形、主軸とも不明。

SF2251　長径の現存が 2.5m、底径 1.4m、深さ 6 ～ 24 cm、主軸N111°E の隅丸二等辺三角形を呈す。飛鳥時代のSH 2246 を切る。

SF2264　長径 2.8m、底径 1.4m、深さ 9 ～ 30 cmの隅丸二等辺三角形を呈す。主軸はN135°Eである。右辺中央部をSK 2265 に攪乱を受ける。

SF2268　長径 1.8m、底径 1.0m、深さ 30 ～ 40 cm、主軸はN144°W の隅丸二等辺三角形を呈す。

SF2291　1.5m × 1.2m の範囲、深さ 23 cmで残存する。全体に攪乱を受けるため、平面形と主軸は不明。

SF2297 は長径の現存 2.0m、底径の現存 1.1m、深さ 8 ～ 16 cm、主軸N 51°W で隅丸二等辺三角形を呈し、他の焼成坑と比較するとややこぶりである。

SF2300・2301 2基が重複して検出された。SF 2300 は長径の現存が 2.3m、底径 1.8m、深さ 16 ～ 24 cm、主軸はN125°Eで、隅丸二等辺三角形を呈す。2301 は長径の現存が 2.5m、底径 1.5m、深さ 4 ～ 9 cm、主軸N 52°W の隅丸二等辺三角形を呈し、SK 2302 に右辺中央部を切られる。2基は互いに頂頭部が重複するが、切り合いは不明。

SF2303・2304 2基が重複して検出された。SF 303 は現存長径が 2.5m、底径 1.4m、深さ 8 ～ 16 cm、主軸は N124°E の隅丸二等辺三角形を呈す。SF 2304 は長径 3.1m、底径 1.5m、深さ 11 ～ 28 cm、主軸N 103°E の隅丸二等辺三角形を呈す。2基の関係は、SF 2304 の底部がSF 2303 の頂頭部を切る。

SF2306　現存長径は 1.8m、底径 1.1m、深さ 12 ～ 30 cm、主軸がN 31°W の隅丸二等辺三角形を呈す。2基は互いの頂頭部が重複する。切り合いは

SF2313　長径の現存 2.8m、底径 1.9m、深さ 8 ～ 17 cm、主軸N150°E の隅丸二等辺三角形を呈す。頂頭部から右辺の約 1/2 をSK 2314 に切られる。

SF2323・2330　調査区東端部から2基が重複して検出された。SF 2323 は 2.2m × 1.0m の範囲が検出され、深さ 6 ～ 16 cm。SF 2330 は 2.0m × 0.8m の範囲が検出され、深さは 18 ～ 23 cm。2基とも平面形、主軸は不明。SF 2330 がSF 2323 を切る。

（5）時期不明の遺構

①竪穴住居

SH2059　ＳＨ 2060 に大部分を切られているため不明である。

SH2060　幅 17.5 ～ 30cm、深さ４～ 20cm の周溝以外は不明である。

SH2061　幅 10 ～ 45cm、深さ５～９ cm の周溝のみ確認できた。ＳＨ 2060 との切り合い、その他は不明である。

SH2092　周溝は北東隅と西壁側で検出できた。規模は、幅 12.5 ～ 30cm、深さ４～ 12cm である。主柱穴は、直径 25 ～ 40cm、深さ 33 ～ 50cm で４基あり、柱穴間は 2.5 ～ 2.8cm でやや歪む。炉は竪穴中心部よりやや北よりに位置する。

②土師器焼成坑

SF2042　ＳＨ２の西端、中央やや北よりで検出された。1.3m × 1.0m の範囲で、深さ 23 ㎝、大部分がＳＤ 2007 に切られるため平面形、主軸とも不明。

SF2089　ＳＦ 2090 の 50 ㎝西方に、1.0m × 0.8m の範囲で床面の一部が残存する。

SF2312　2.4m × 1.3m の範囲、深さ 5 ～ 6 ㎝で残存する。平面形、主軸とも不明。

SF2317　調査区の東端部に、1.5m × 0.8m の範囲で床面のみ残存する。

SF2320　2.7m × 0.9m の範囲、深さ 10 ㎝で残存する。大部分に攪乱を受けるため、平面形、主軸とも不明。

SF2331　調査区東端部で、2.5m × 0.5m の範囲で検出され、深さは 18 ～ 27 ㎝。平明形、主軸は不明。

SF2334　長径 2.2m、底径 1.2m、深さ 19 ～ 29 ㎝、主軸 N 96 ° E の隅丸二等辺三角形を呈す。

③溝

SD2007　発掘調査区中央を全ての遺構を切って南北に延びている。長さ 90.9m 、幅 2.6 ～ 6.8m、深さ 36 ～ 119cm で、その他は不明である。

SD2033　ＳＤ 2007 の西側に沿って全ての遺構を切って延びている。長さ 94m 、幅 0.9 ～ 2.5m、深さ 16 ～ 52cm て、その他は不明である。

SD2156　ＳＤ 2159 には切られているが、他の時期の全ての遺構を切っている。長さ 51.3m 、幅 1.6 ～ 3.6m、深さ 36 ～ 56cm で、その他は不明である。

SD2159　調査区の北側を東西に延びＳＤ 2007・2033 には切られるが、他の時期の全ての遺構を切って延びている。長さ 97.2m 、幅 0.8 ～ 3.7m、深さ 12 ～ 69cm で、その他は不明である。

2．遺物

遺物は整理箱で約 1,000 箱出土し、大半は竪穴住居から出土した弥生時代後期の土器と土師器焼成坑から出土した飛鳥・奈良時代の土師器である。

（１）旧石器・縄文時代の遺物

旧石器・縄文時代の遺物には石器と土器がある。石器はナイフ形石器３点、石鏃１点、剥片 56 点、石核 19 点の計 79 点が出土している。ナイフ形石器のうち(305) はＳＫ 2256 埋土に混入していたが、他は遺構検出の際に橙褐色土の検出面直上で出土した。石質は剥片２点、石核３点がサヌカイトであったが、その他はすべてチャートである。大部分が旧石器時代に帰属する可能性が高い。

ナイフ形石器(305 ～ 307)　(305)は全体的にやや厚手の縦長剥片を素材とする。ブランティングは左側縁下半部に行う。先端を欠き、現存値で長さ 4.9 ㎝、幅 2.4 ㎝、厚さ 1.1 ㎝である。(306) は縦長剥片の打点側を基部とするもので、ブランティングは左側縁下半部と右側縁上半部に行う。刃部は鋭利で器軸に対して斜めになる。長さ 3.5 ㎝、幅 1.65 ㎝、厚さ 0.85 ㎝である。(307) は先端部のみ残存する。ブランティングは左側縁に行う。現存値で長さ 1.5 ㎝、幅 1.45 ㎝、厚さ 0.55 ㎝である。

石鏃(308)　凹基無茎鏃で先端部と片方の脚部を欠く。側縁が直線的で脚部は先細りせず丸みをもつ。調整は表裏面とも丁寧に行われている。現存値で長さ 2.2 ㎝、幅 1.2 ㎝、厚さ 0.35 ㎝である。縄文時代のものであろう。

縄文土器(784)　波状口縁深鉢の口縁部の破片である。垂下する沈線で区画され、その間には櫛状工具による条線文が施文されているが、羽状になるのかもしれない。中期末のものであろうか。

（２）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は後期のもので竪穴住居から出土したものが中心である。壺形土器・甕形土器・高杯形土器・器台形土器・蓋形土器（以下、形土器を省略し壺・甕・高杯・器台・蓋と記述する）が出土しており、Ⅲ期に分類される。以下にその細分と特徴を示し、更に、各竪穴住居ごとに出土した器種細分を第４表にまとめた。

壺A　広口壺

A1　口頸部は広く大きく外反して開く。口縁端部は垂下し、端面は加飾されるものとされないものがある(17・107)。

A2　口頸部は大きく外反して開く。口縁端部は下方にやや肥厚し、平面をなす。端面に円形浮文を貼り付けたり、内面に櫛歯による羽状文を施すなど加飾性が強い(69)。

A3　口頸部の外反は弱く、口縁端部は下方に肥厚し、外傾する面をなす。加飾性が強いものとみられないものがある(95・155)。

A4　Ａ３に類似するが、口縁端部は内傾する面をなす(297)。

A5　口頸部の外反は弱く、口縁部内面にやや平坦な面を持ち加飾される。口縁端部は上・下方に肥厚する。加飾性が強い(39・132)。

A6　長頸の外反する口頸部を持ち、口縁端部は外傾する明瞭な面をなす。櫛歯による刺突で加飾される(91・156)。

A7　口頸部の外反は弱く、口縁端部はまっすぐそのまま終わる。加飾性は弱い(59・154)。

A8　Ａ７に類似するが、外反が弱く直口壺に近いもの(118・255)。

壺B　直口壺

B1　口頸部が直立して伸びるもので、端部でやや外反する。口頸部の長いものと短いものとがある(131)。

B2　口頸部が直線的にやや外傾して立ち上がり、端部は内傾する面を持つ(129・130)。

壺C　受口壺

C1　口頸部が内彎して立ち上がり、端部は受け口状になる。口縁部端面に加飾されるものがある(16・38)。

壺D　小型壺・短頸壺

D1　口頸部が短く、直線的にやや外傾して立ち上がる。体部の最大径は下方１／３位で、やや下膨れとなる。・底部はやや突出し、平らである(11)。

壺E　小型壺・脚台付壺

E1　Ｄ１に類似した体部に脚台が付くもの(8)。

壺・体部

A1　体部の最大径は下方１／３位で、やや下膨れとなるもの(119・245)。

B1　体部の最大径は１／２位で偏平な楕円形の体部となるもの(26・237)。

C1　体部の最大径は１／２位で縦長な楕円形の体部となるもの。（壺・体部Ａ・Ｂは小型の短頸壺あるいは長頸壺の体部と思われる。）(25)。

壺・底部

A1　突出のない平底(108)。

B1　底部が突出し、底が平らなもの(23・27)。

B2　Ｂ１に類似するが、中央に凹みを有するもの(196・293)。

B3　明瞭に突出し、底が丸いもの(64)。

C1　壺Ｅの脚台部で外反しながらハの字に開く。高杯同様に３穴ないしは４穴の穿孔が施されるものとされないものがある。また、壺底部との接合部に数状の櫛描直線文を施すものもある。一部には高杯の脚部との区別がつきにくいものもある(43・122)。

甕A　く字口縁甕

A1　口径と体部最大径がほぼ同じで体部に張りのない広口のもの。外傾する口縁部をもつ(12・247)。

A2　体部最大径が上位にあり、口径を超え、肩に張りのあるもので、「く」字状に外傾する口縁部をもつもの(45・46)。

A3　Ａ２に類似するが口縁端部を下方にひきだすもの(144・276)。

A4　体部最大径が上位にあり、口径を超え、肩に張りのあるもの。口縁部は「く」字状に緩やかに外反する(168)。

A5　体部最大径が中位にあり、球形の体部となるもの。「く」字状に外傾する口縁部をもつ(165)。

A6　Ａ５に類似するが、口縁部の屈曲が短いもの(274)。

A7　小型の甕で口縁部が「く」字状に外傾し、口径が体部最大径を大きく凌駕するもの。体部の内外面ともにヘラケズリで調整されるものがある(277)。

甕B　受口状口縁甕

B1　口縁部が中位で屈曲して受口となるもの(188)。

甕・底部

A1　台付甕底部。外反気味に開くもの(126)と、直線的に開くもの(170)がある。

高杯

A1　杯部上段が短く、直立あるいは弱く外反するもので、杯部下段は直線的である。脚部は中空で、柱状に伸び下方1／3くらいから一気に開く。透穴は4穴が一般的で1／3以下に穿孔される。縦方向のヘラミガキで調整される(1・14)。

A2　杯部上段がA1より長くなり、外反も強まる。外面に波状文を施すものがみられ加飾性が強くなる。波状文の下位に疑凹線文を施すもの(89)もある。杯部下段は丸みをおびだす。脚部は中空と柱状と両方があり、杯部との接合部からやや斜めに開きだし、下方1／3くらいからさらに開く。透穴は3穴と4穴の両方がみられ、穿孔される位置が1／2くらいのところになる。外面調整は縦方向のヘラミガキで、櫛描横線文がおおむね3ヶ所に施される(51・52)。

A3　A2よりもさらに杯部上段が長くなり外反も強まる。杯部下段は深くなり、丸みも強まる。脚部は中空と柱状と両方があり、透穴は3穴が基本である。外面調整は縦方向のヘラミガキで、櫛描直線文も規則性がなくなり、雑である(282・283)。

B1　杯部は、脚部との接合部から外方にむけて内彎気味に大きく延び、口縁部で水平に折れ曲がる。内外面とも縦方向のハケメ調整をおこなっている。脚部は、一部しか残存しないが、接合部からハの字に開くものと思われる(149)。

C1　半球形状のやや深めの杯部をもち、脚部は柱状で、直線的に延び、裾でハの字に開くものである(13)。

C2　C1に類似するが、全体に薄手で、球形に近い杯部ををもち、脚部は一気にハの字状に開くものである(239)。

高杯脚部

A1　高杯A・Bに対応する脚部をA1とした。中空のもの柱実のもの、穿孔のあるものないものなど多種多様ではあるが細分を行わなかった(76・150)。

B1　高杯Cあるいは杯部が椀状になる高杯の脚部で、脚が短いものをB1とした。脚部A1に比べ、櫛描直線文の間に櫛による刺突文を施すものが目立つ(182・209)。

器台

A1　柱状の中空脚から大きく開く裾部をもつものである(37)。

鉢

A1　有段口縁鉢で口径と体部径がほぼ同じもの(186)。

A2　有段口縁鉢で口径が体部径を大きく凌駕するもので、体部中央付近に鍔が張り付けられるもの(258)。

B1　口縁部と体部の境に明瞭な稜がつく椀形をした鉢で、体部は外反する。高杯Aの杯部に類似する(85)。

C1　口縁部から体部の一部しか出土していないが、おそらくは半球状の体部から口縁部が外反するものである(105)。

D1　口径が大きく、口縁部は折り返しにより、凸帯となるもので、体部には櫛描直線文と刺突文が施される(240)。

蓋

A1　編笠形を呈し、直線的なつまみ部から外反しながら開くものである。つまみ部の中央は半球状に丸く深く窪む(19)。

A2　編笠形を呈し、直線的なつまみ部から屈曲し直線的に開くものである。つまみ部の中央の窪みは浅い(227)。

B1　編笠形を呈し、外上方に開くつまみ部から屈曲しやや直線的に開くものである。つまみ部中央の窪みは深く半球状であるが、やや平坦な面をもつ(185)。

B2　B1に類似するが、器高が低く、やや外反しながら開くものである(77)。

C1　B1に類似するが、つまみ部中央の窪みが直線的で浅いものである(268)。

ミニチュア土器

壺をＡとする(87・138)。
甕をＢとする(72・281)。
鉢をＣとする(194)。
（３）古墳時代初めの遺物

方形周溝墓ＳＸ 2222 から出土している遺物である。

壺Ａ9　口頸部は広く、一旦、直立してから大きく外に開き、内面に稜を持つ。口縁端部には刺突文が施され、頸部には一条の粘土紐が貼り付けられ、刺突文が施される(290・292)。

甕Ｃ　Ｓ字状口縁台付甕

Ｃ1　いわゆるＳ字状口縁をもつ甕である。押引刺突文をもち、口縁第２段はほぼ垂直に立ち上がる(302)。

手焙り形土器

Ａ1　鉢部の口縁が受け口状を呈するもので、口縁端部付近から覆部が始まり、鉢部と覆部の境界には擬似口縁端部が付加される。突帯は、突出が小さく、鉢部の最大径より下に貼り付けられる。底部は僅かに上げ底で体部への移行が緩やかである(301)。

（４）飛鳥時代以降の遺物

ほとんどが土師器焼成坑を廃棄土坑に転用し、捨てられた遺物である。甕を中心とした土師器と少量の須恵器がある。各土師器焼成坑からの出土土器の一覧は第３表を参照されたい。

土師器には椀・杯・皿・高杯・甕（小型で丸底のものと長胴のものがある）・鍋・鉢・甑・筒型土器があり、有孔広口筒型土器や土馬、紡錘車などの特殊なものもある。これらは、古墳時代以来の系譜を引く粘土紐巻き上げ痕跡を残す椀や甕と精製された粘土を使い丁寧にヘラミガキや暗文を施し、赤褐色に焼き上げた杯・皿に区分される。生産の始まった当初は前者のみであったが、７世紀末頃から後者の土師器の生産も始まったようである。７世紀から８世紀までの土師器の変遷がたどれる貴重な資料である。

椀　７世紀代のものはやや深めで口縁部が内彎気味に立ち上がり、口縁端部が内傾し丸くおさまるものである(320・364・376)が、７世紀後半から口縁端部の内彎傾向は減少し、底部の平らなものがみられるようになる(401・433・447)。８世紀に入ると偏平化はますます進む(493・495・585)。

杯　口径が小さく深い(554・556・494)と口径が大きく浅い(561・603)がある。

皿　器高の深い(479・480)と器高の浅い(511・513)がある。

高杯　脚部全面をハケ調整する(517・647)とヘラ状工具でケズリ面を持つ(566・567)がある。

甕　７世紀前半のものは、体部に比べ口縁部が肥厚し、上方に立ち上がる傾向が強い。端部は面をもつ(341・344)。７世紀後半のものは、口縁部の肥厚が顕著でなくなり、上方に立ち上がるが、角度が弱くなり、口縁端部が上方につまみ上げられる傾向にある。小型の甕は口径に対する器高の比が小さくなってきて、これまでの寸胴気味のものから球形に近いものが現れる(390・391)。８世紀に入ると口縁部の肥厚がみられなくなり、立ち上がりも弱く、上方と言うよりは外方へ屈曲する傾向にある(464・469)。

鍋　小型のもの(322)と大型のもの(384)がある。

鉢　器高の浅い(346)と深い(450)がある。

甑　口径と底部経の差があまりない寸胴な(470)と口径の方が大きい(681・743)がある。

筒型土器　(682)は底部が付かないものと思われる。

有孔広口筒型土器　北野遺跡以外での出土例が少ないもので(617・619)がある。

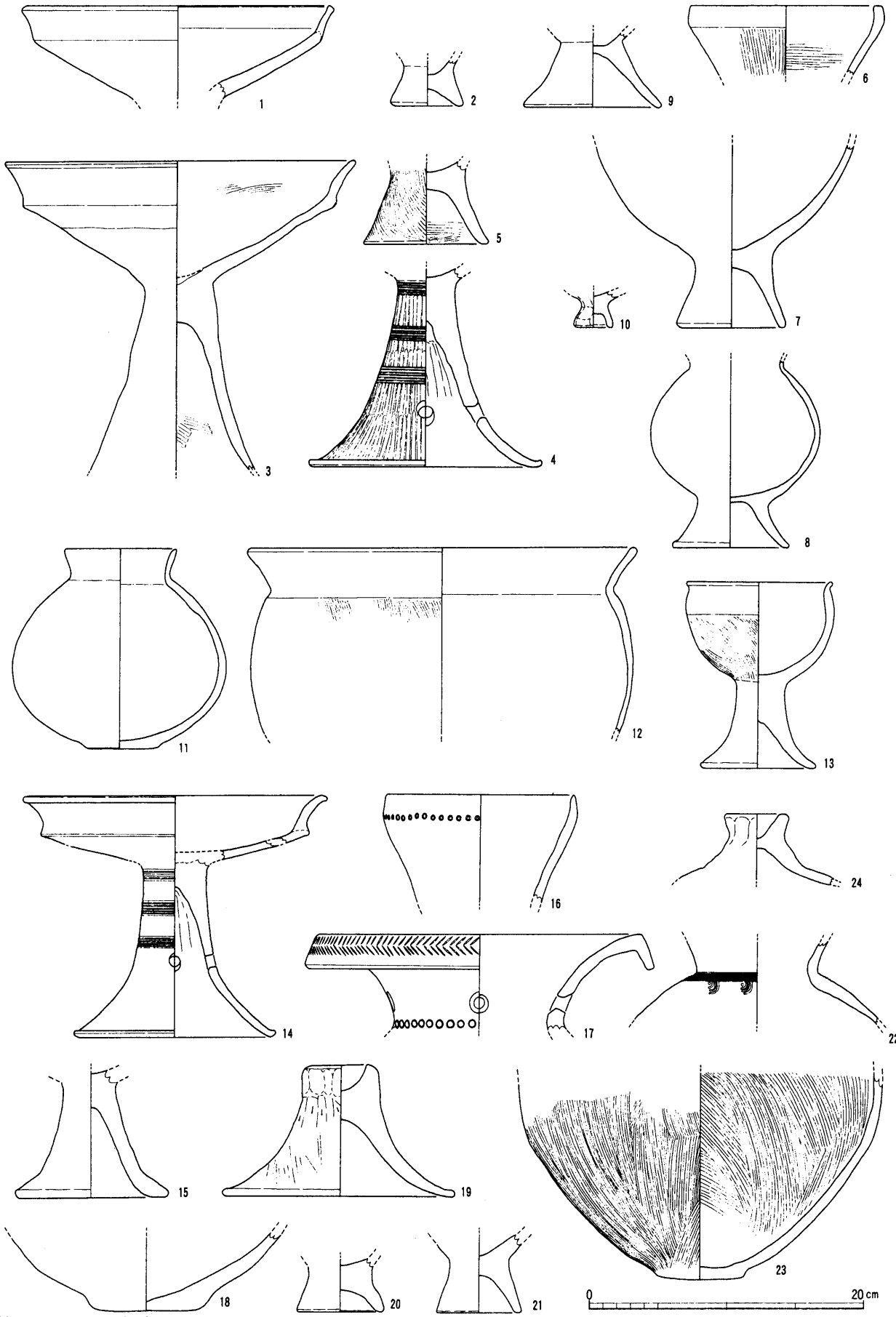
移動式竈　出土点数は少ないが(667)がある。

その他の遺物では土馬(778 ～ 784)、土製紡錘車(786 ～ 787)、不明土製品(788)がある。石製品では砥石(798 ～ 801)がある。

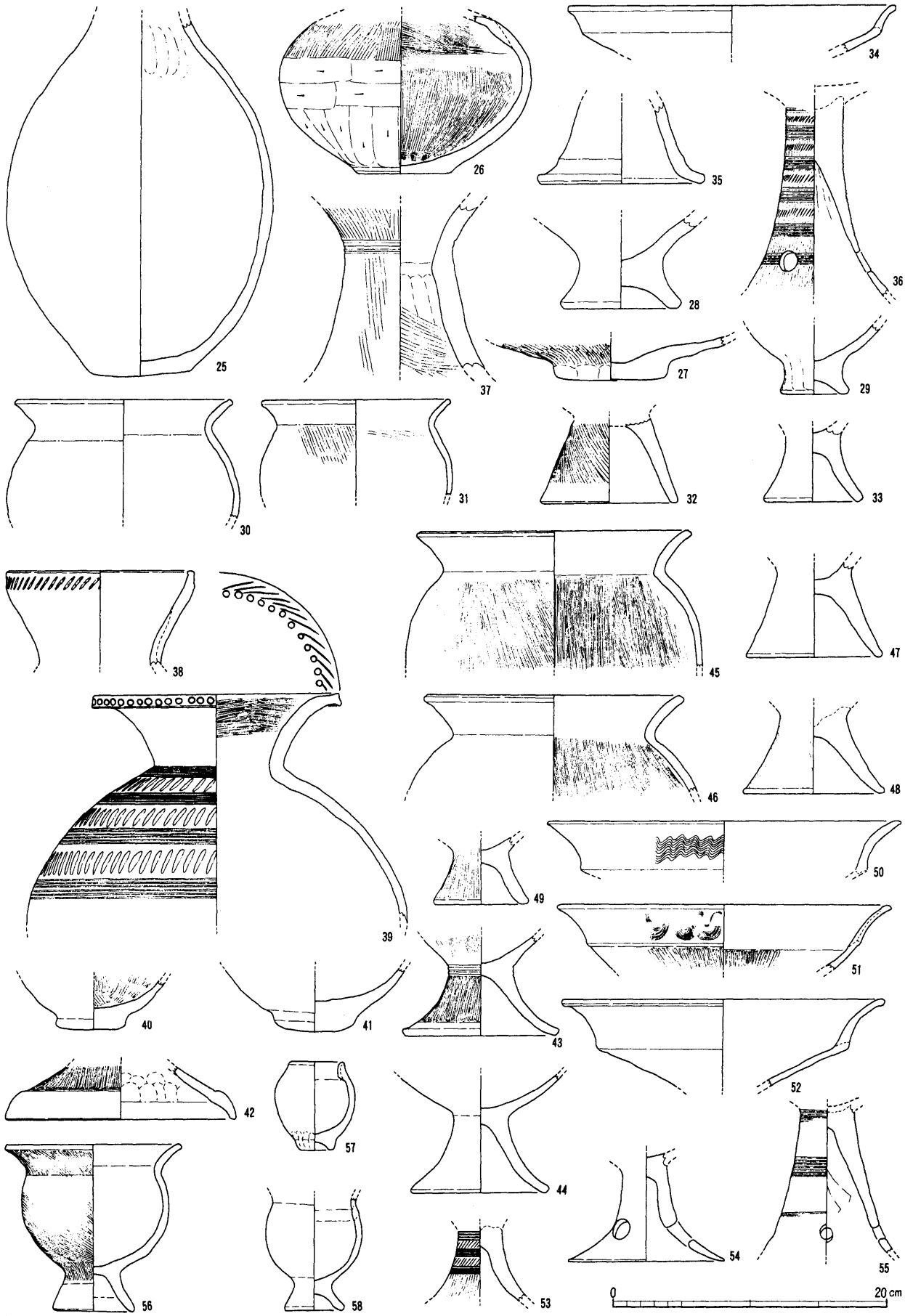
遺構の時期	遺構の番号	器種	壺														壺体部			壺底部					甕									底	高杯					高杯脚		器台	鉢				蓋					手焙り	ミニチュア			他
		器形	A									B		C	D	E	A	B	C	A	B			C	A							B	C	A	A			B	C	A	B	A	A			D	A			C	A	A	B	C	A
		細分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	1	1	2	3	4	5	6	7	1	1	1	1	2	3	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1
Ⅰ期	2041																																	○	○																							
	2056																																	○	○					○																		
	2117																																																					○				
	2143													○		○																		○																					○		
	2160														○										○													○																			
	2176	○												○							○													○	○					○								○									
	2180																																																								
	2294				○							○	○				○		○	○							○				○			○				○		○	○														○			
Ⅱ期	2001																																																				○				
	2002		○			○		○																												○				○												○				
	2003																																			○				○											○					
	2034																																	○									○													
	2037	○	○		○															○																			○	○																	
	2104																				○							○						○						○															○		
	2120																																	○																							
	2128																																	○																							
	2131							○									○				○			○					○					○						○																		
	2137						○													○															○					○																	
	2185																																																						○		
	2188																																							○											○				○		
	2189																						○																		○																
	2257				○									○						○			○	○		○								○		○				○	○														○		○
	2275																			○														○						○																	
	2340																				○													○		○				○					○								○			
	2343											○		○							○													○	○					○		○																
	2345					○																												○																								
Ⅲ期	2004			○																○	○		○	○										○		○										○											
	2036			○			○	○						○							○			○		○		○	○							○	○			○	○																	
	2050								○										○		○			○													○		○	○	○						○											
	2051																																																				○			○		
	2105																				○							○						○						○									○							○		
	2107																																	○																							
	2132																																	○																							
	2133								○								○				○				○			○						○						○	○			○												○		
	2167							○										○			○			○		○	○		○	○	○			○			○			○	○	○										○			○		
	2186																○				○	○		○								○		○																						○	
	2211																																	○						○	○															○	
	2341							○																												○																						

	遺構名	報告書No.		遺構名	報告書No.
第12図	SH2041	1・2	第25図	SF2319	376～380
	SH2056	3～5		SF2035	381～385
	SH2143	6・10		SF2048	386・387
	SD2164(SH2143の排水溝)	7・8		SF2026	388
	SH2037	9	第26図	SF2166	389～394
	SH2160	11～13		SF2324	395・396
	SH2176	14～21・24		SF2272	397・398
	SD2172	22		SF2208	399～410
	SD2168	23	第27図	SF2046	411～418
第13図	SH2343	25～37		SF2325	419・420
	SH2257	38～58		SF2287	421・422
第14図	SH2137	59～63		SF2057	423～425
	SH2189	64～66		SF2263	426～429
	SH2002	67～76		SF2338	430・431
	SH2003	77～79	第28図	SF2140	432～436
	SH2188	80～82		SF2337	437・438
	SH2340	83～90		SF2329	439
	SH2345	91～94		SF2207	440・441
第15図	SH2004	95～105		SF2224	442・443
	SH2037	106～117		SF2284	444・445
	SH2131	118～128・310		SF2062	446
第16図	SH2294	129～153		SF2119	447～452
第17図	SH2036	154～184	第29図	SF2015	453・454
	SH2001	185		SF2301	455
	SH2034	186・187		SF2303	456・457
第18図	SH2186	188～193		SF2203	458・459
	SD2190	194・195		SF2248	460
	SD2192	196～198		SF2291	461
	SH2185	199		SF2053	462～470
	SH2107	200～201	第30図	SF2296	471～489
	SH2120	202・203		SF2297	490～500
	SH2128	204	第31図	SF2298	501～524
	SH2211	205～209		SF2299	525～532
	SH2104	210～221	第32図	SF2330	533～536
	SH2105	222～228		SF2304	537～545
	SD2146(SH2105排水溝)	229		SF2313	546～550
	SH2051	230～232		SF2301	551～553
	SH2341	233・234		SF2306	554～571
第19図	SH2050	235～244	第33図	SF2305	572～583
	SD2148(SH2133排水溝)	245～247		SF2090	584～590
	SH2275	248～253		SF2290	591
	SD2288(SH2275排水溝)	254		SF2264	592～597
	SH2133	255～263・267	第34図	SF2300	598～614
	SH2132	264～266		SF2187	615・616
第20図	SH2167	268～287		SF2157	617～619
第21図	SX2222	288～304	第35図	SH2234	620～656
第22図	SK2256	305	第36図	SH2234	657～667
	地山直上	306・307	第37図	SH2130	668～686
	表土	308～309・315	第38図	SH2108	687・688
	SH2056	311		SH2129	689～692
	SH2185	312・316		SH2279	693～698
	SH2186	313	第38図	SH2246	699～702
	SK2328	314		SH2235	703～706
第23図	SF2047	317・318	第39図	SH2024	707～714
	SF2038	319		SK2141	715～730
	SF2241	320～322	第40図	SK2141	731～752
	SF2322	323～325	第41図	SK2134	753～759
	SF2139	326～328		SK2314	760～775
	SF2008	329～332		SK2067	776・777
	SF2307	333～340	第42図	SF2304	778・783
第24図	SF2310	341～347		SF2296	779
	SF2283	348・349		SF2208	788
	SF2321	350		SF2300	789
	SF2316	351・352		SK2256	801
	SF2138	353～360		SD2159	780
第25図	SF2016	361～363		SB2195柱穴	785
	SF2161	364～367		SH2188	799
	SF2165	368～373		表土	781・782・784・786
	SF2212	374・375			787・790～798・800

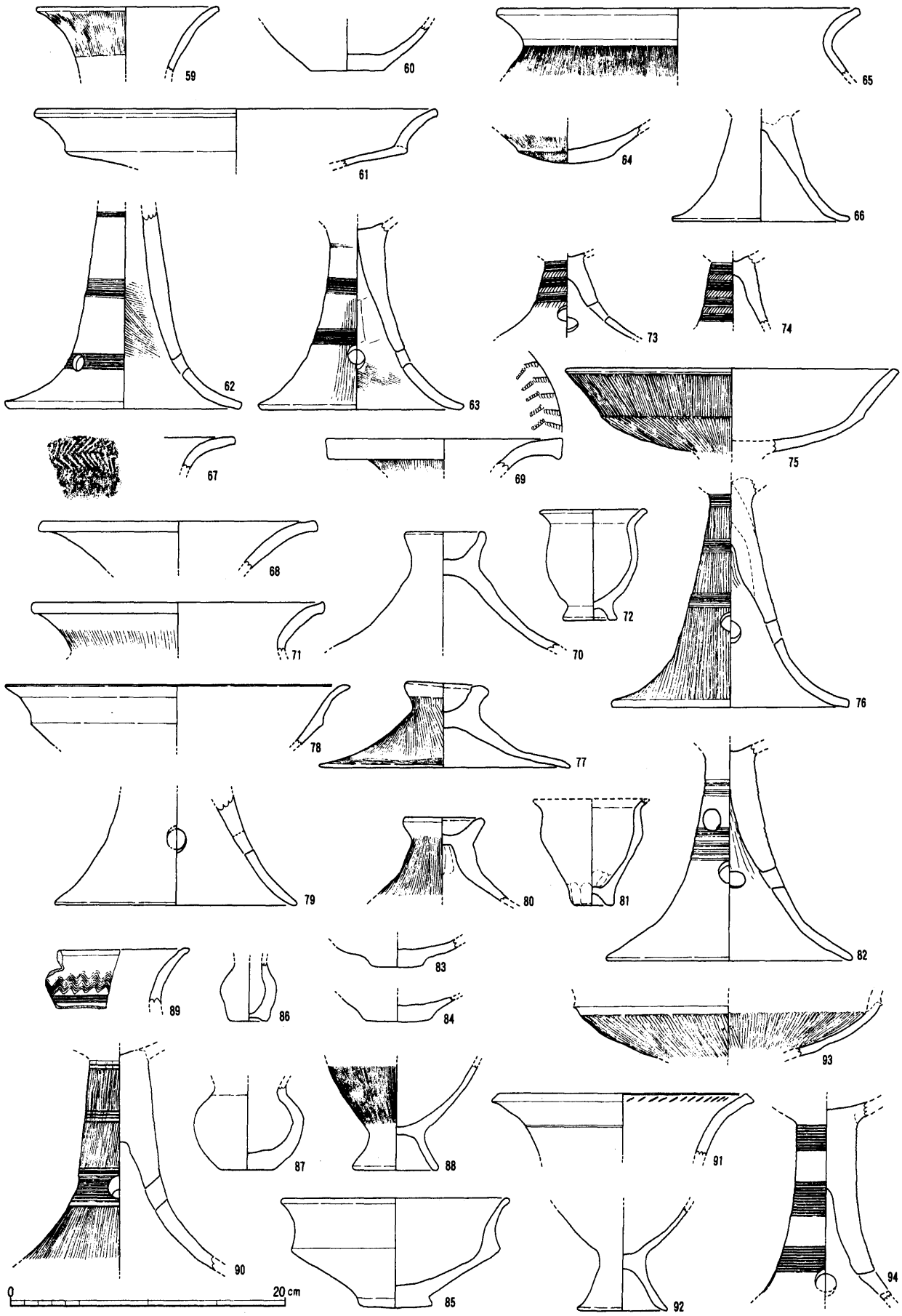
第5表　第2次調査出土遺物対照表



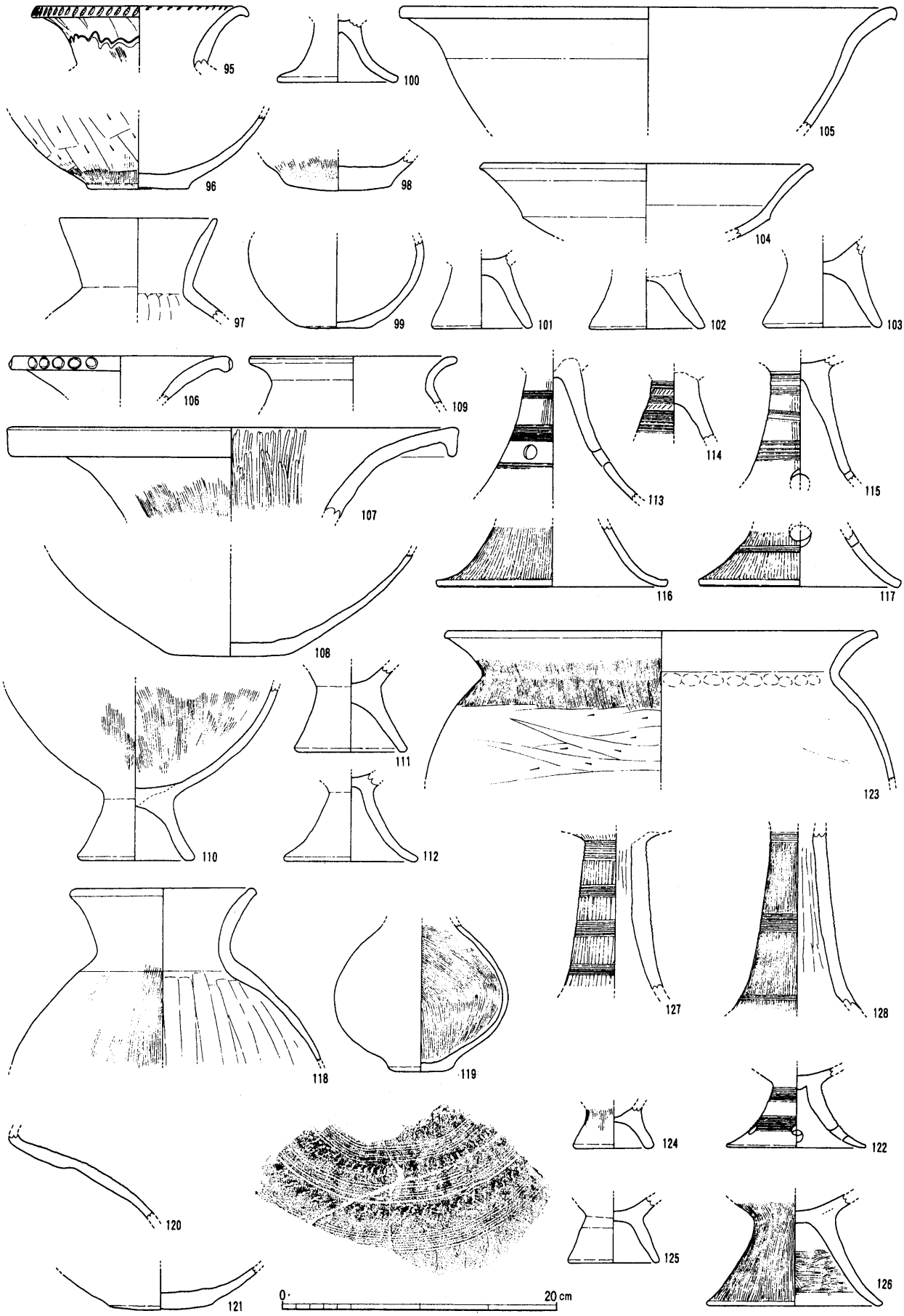
第12図　出土遺物実測図(1:4)



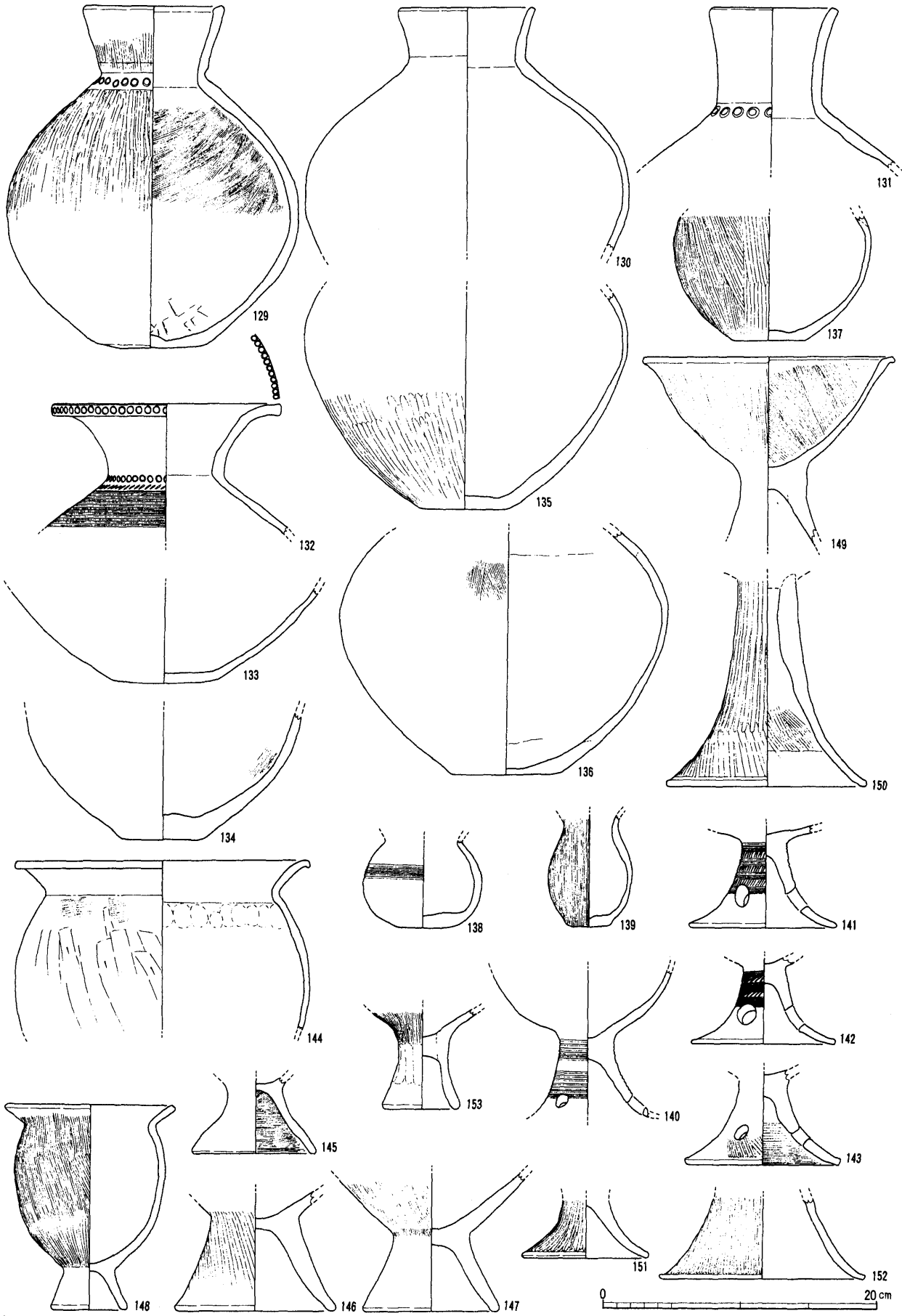
第13図　出土遺物実測図(1:4)



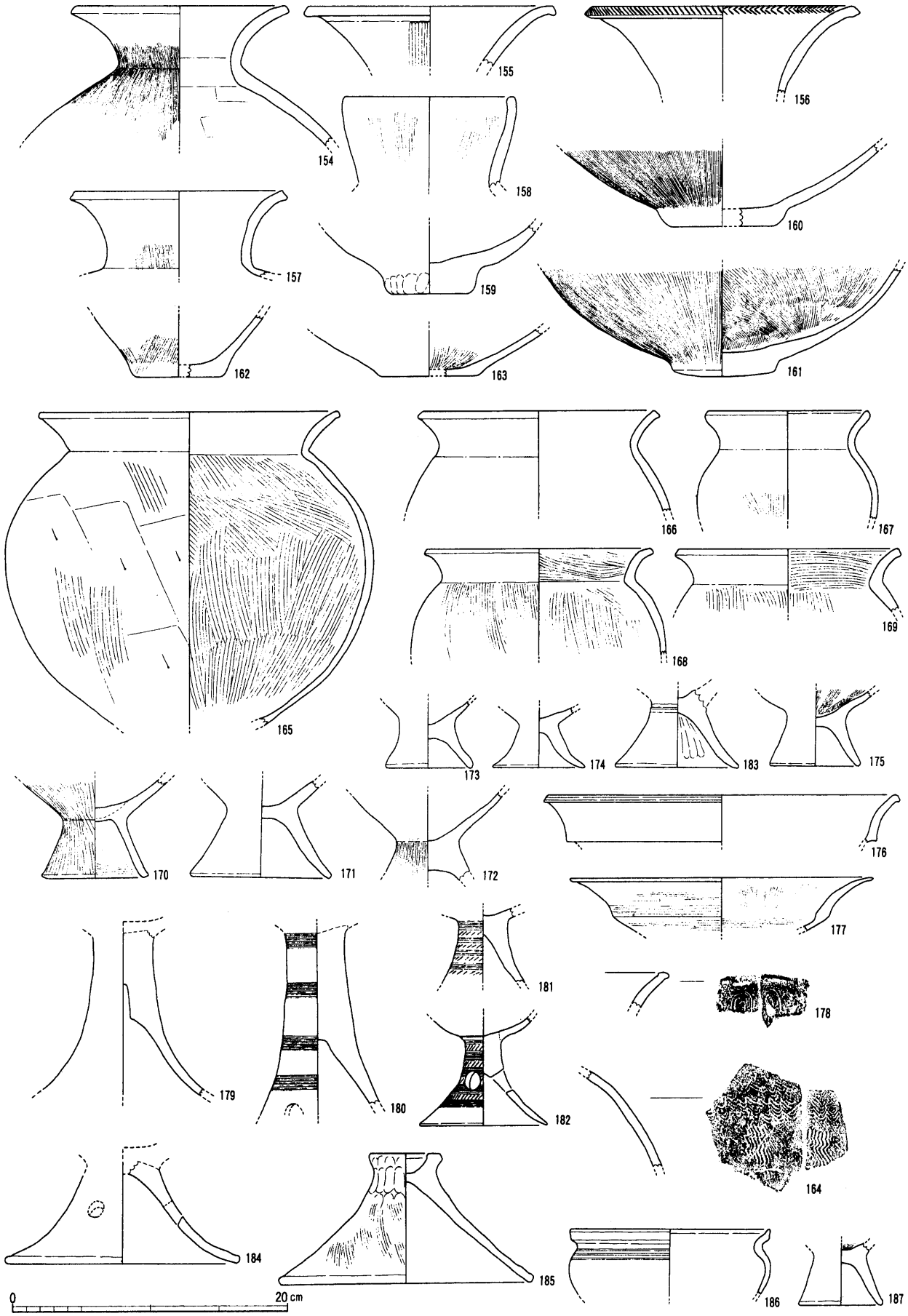
第14図　出土遺物実測図(1:4)



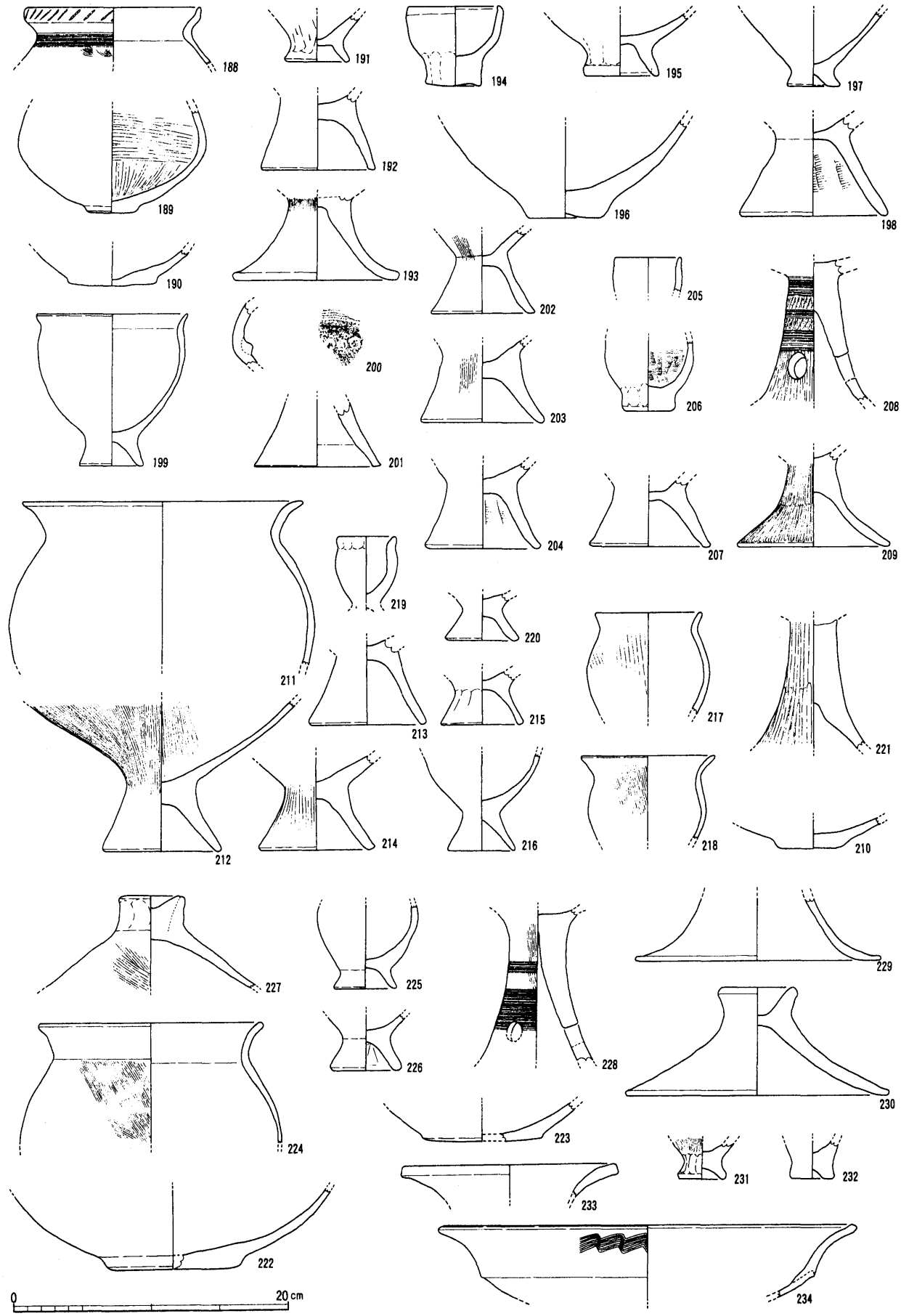
第15図　出土遺物実測図(1:4)



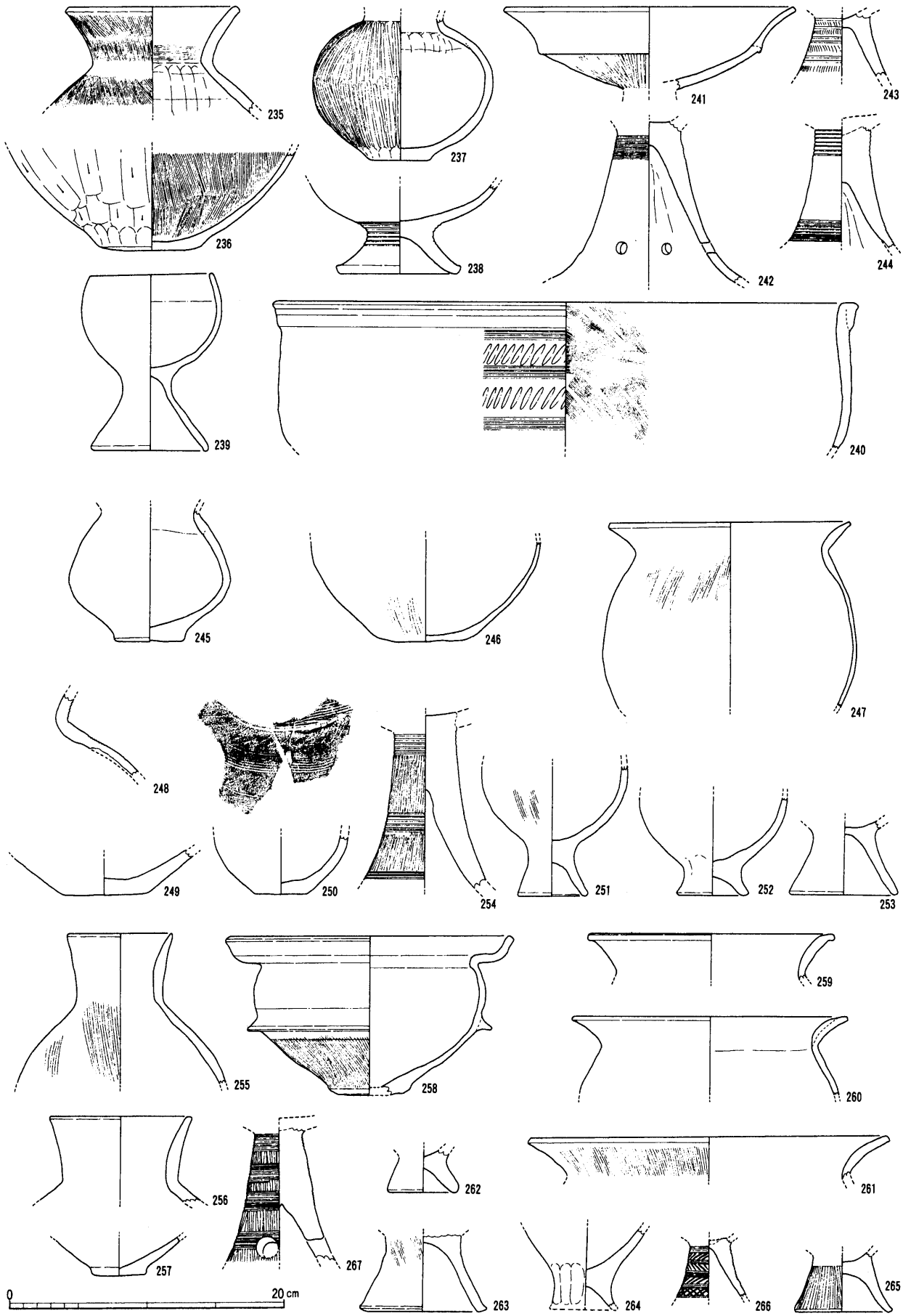
第16図 出土遺物実測図(1:4)



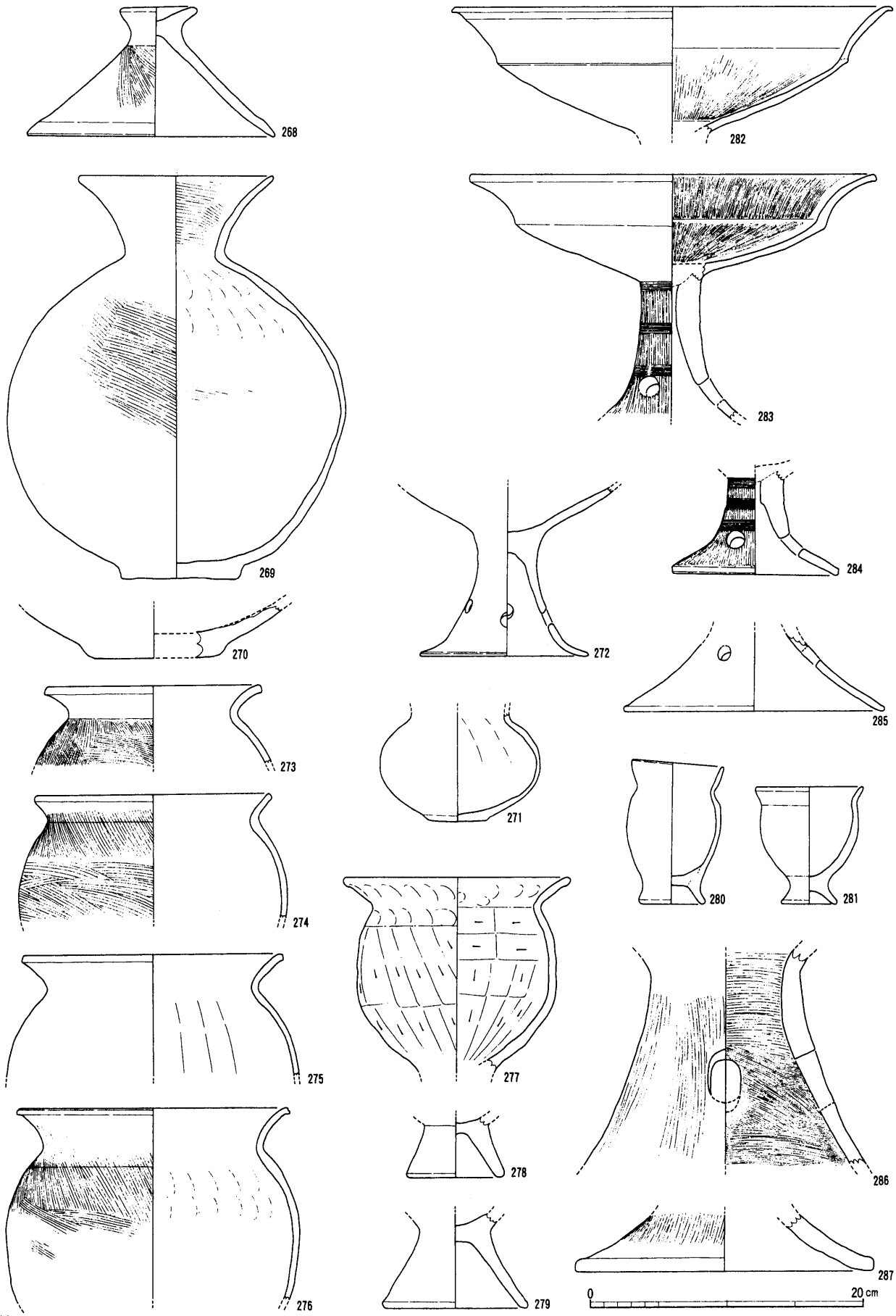
第17図　出土遺物実測図(1:4)



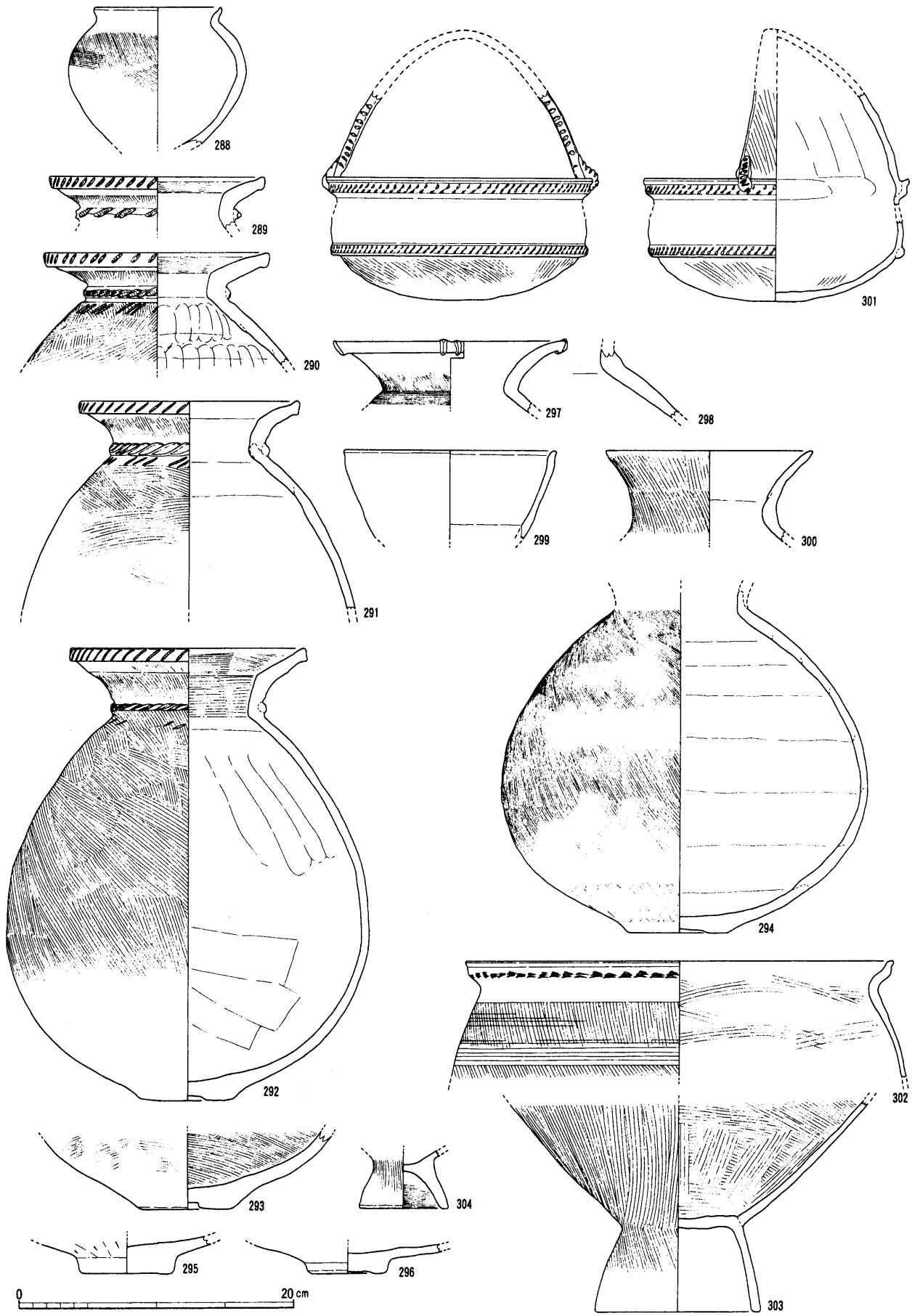
第18図　出土遺物実測図(1:4)



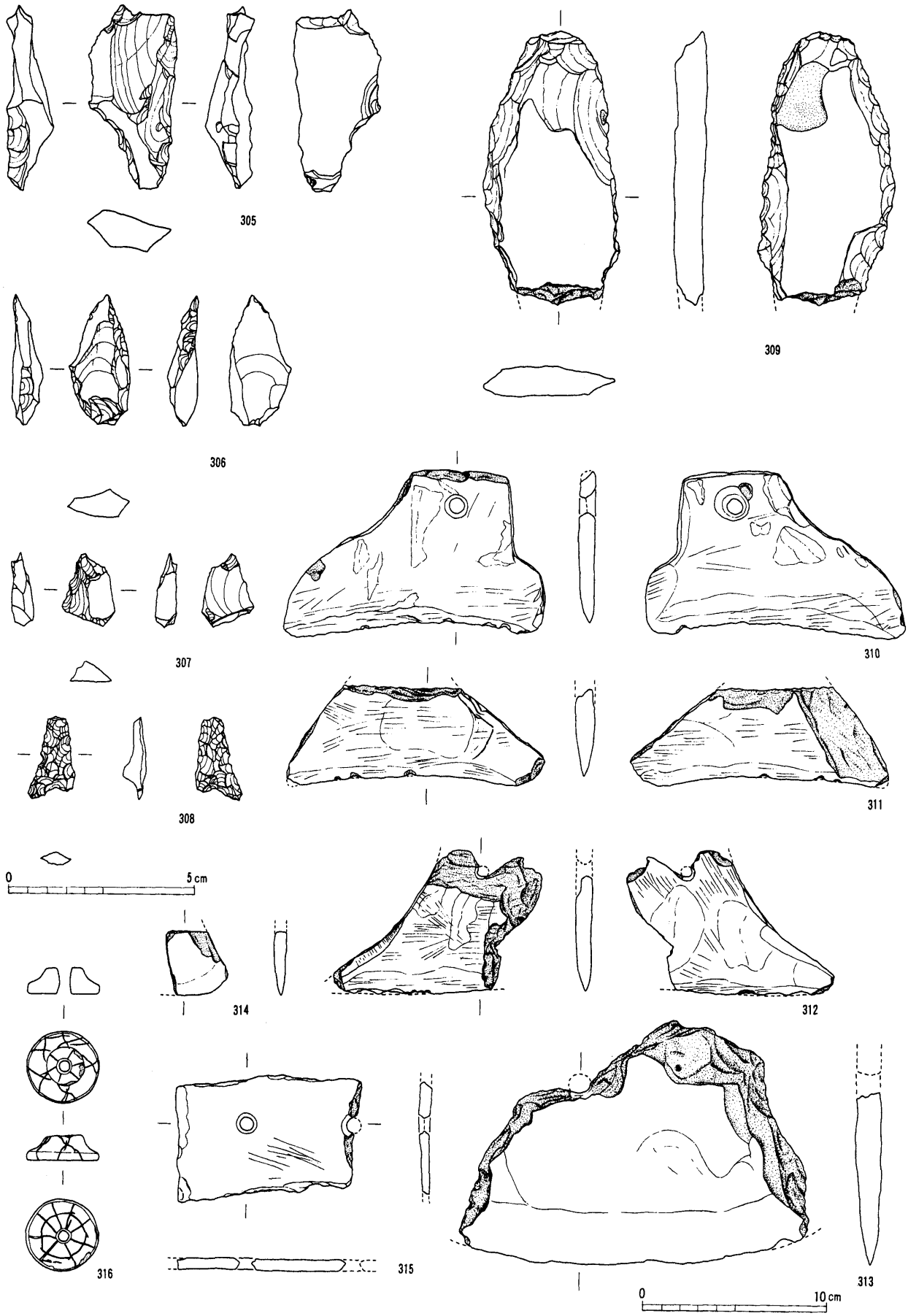
第19図　出土遺物実測図(1:4)



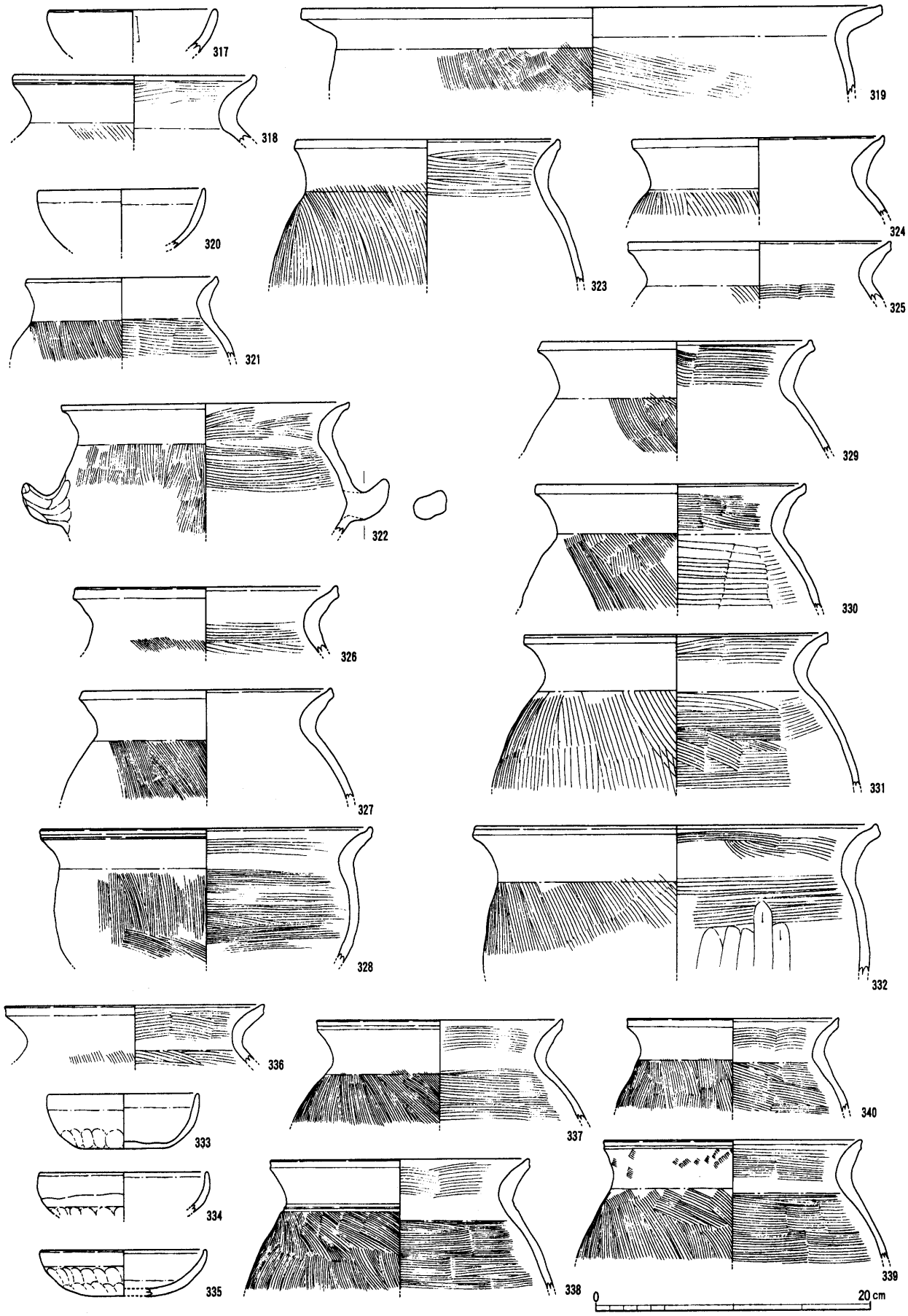
第20図　出土遺物実測図(1:4)



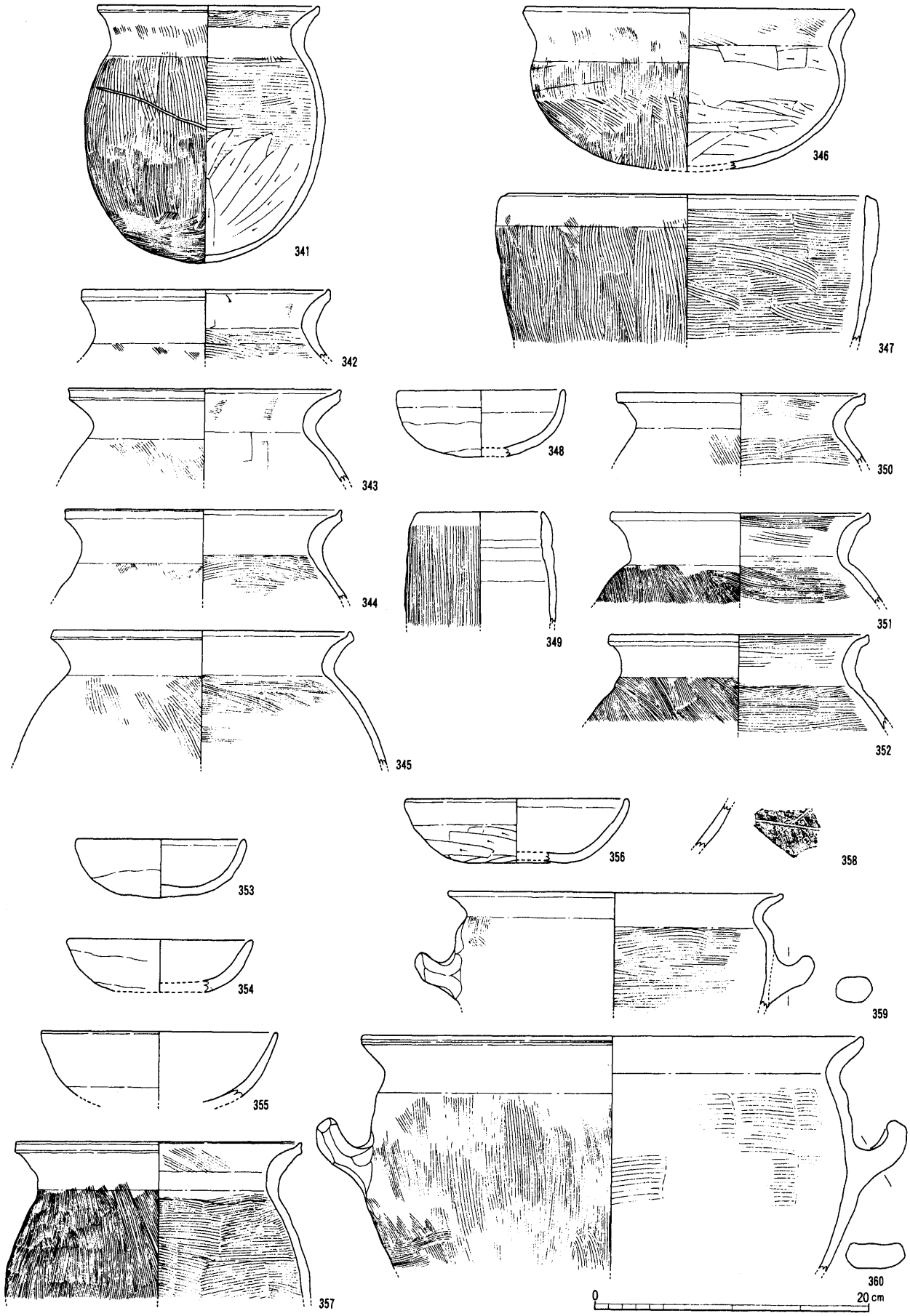
第21図　出土遺物実測図(1:4)



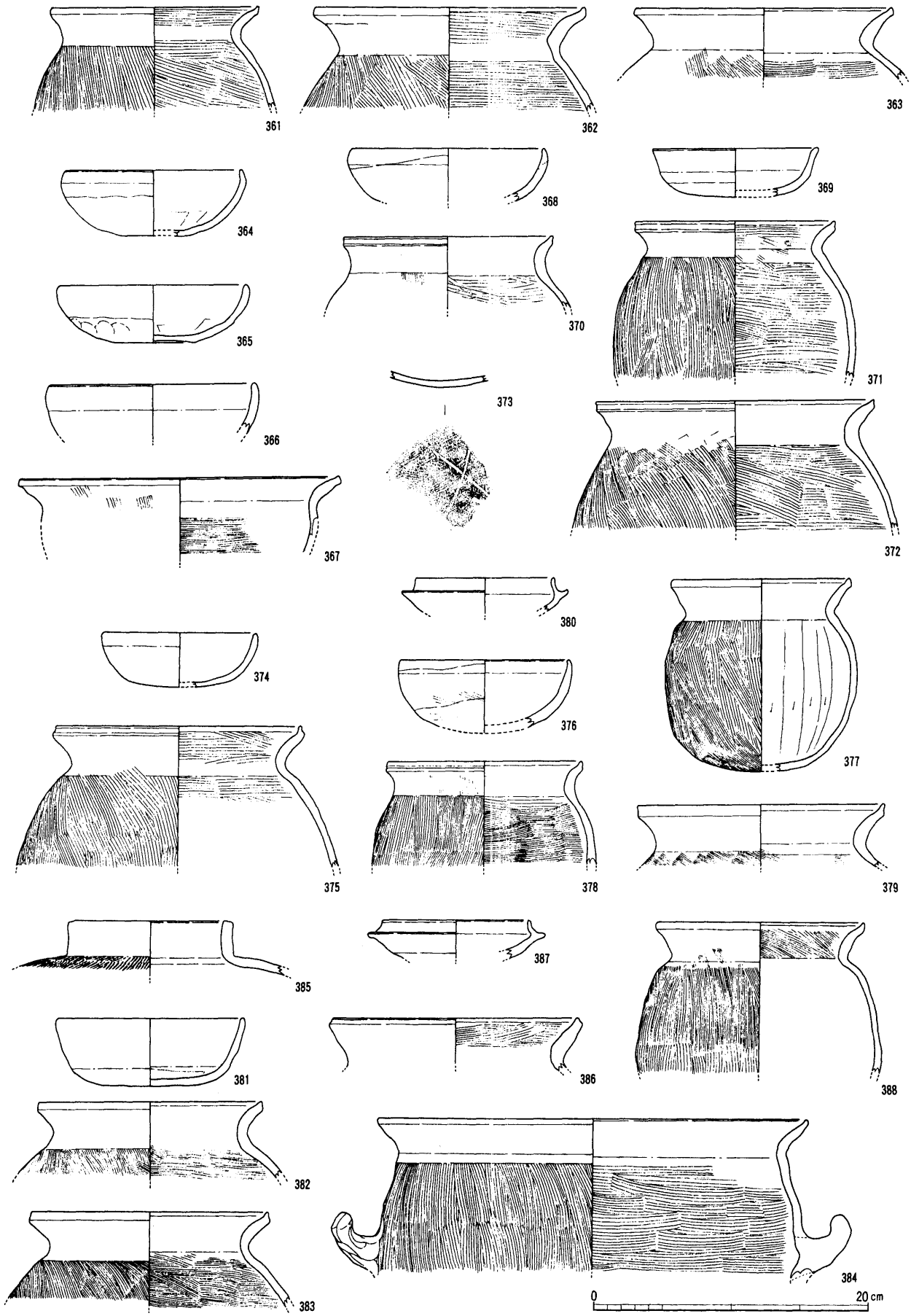
第22図 出土遺物実測図 305～308(2:3)、309～316(1:3)



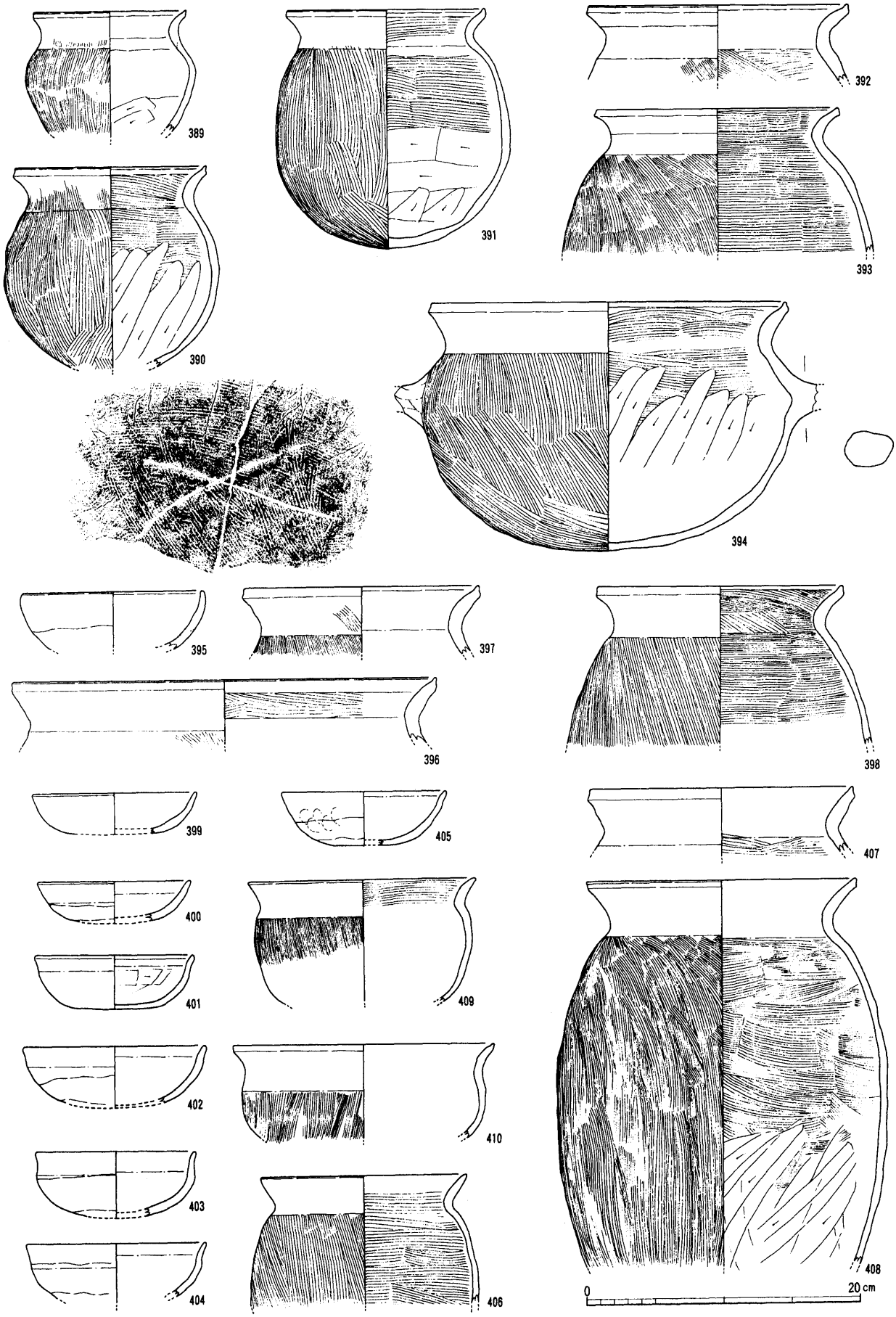
第23図 出土遺物実測図(1:4)



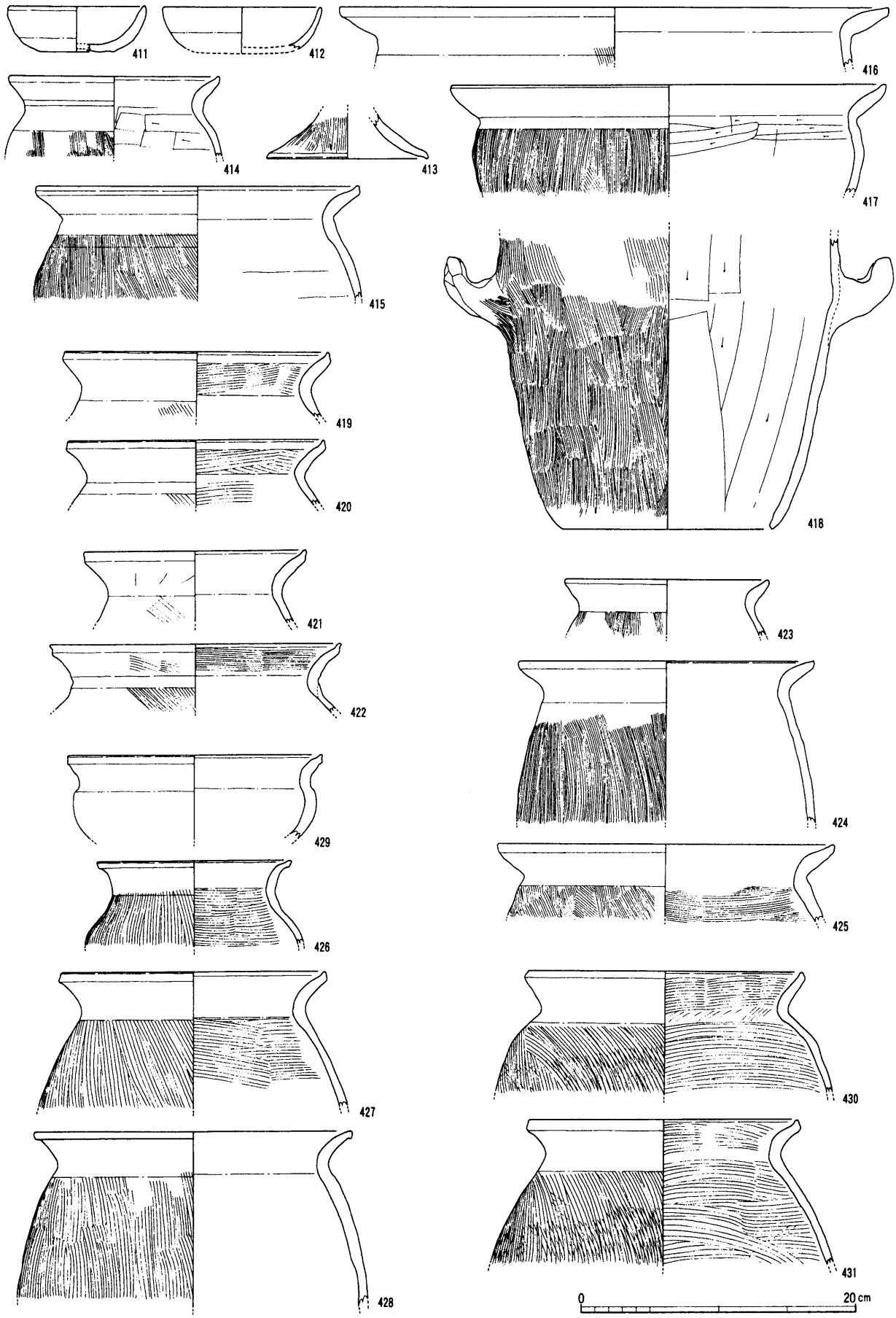
第24図　出土遺物実測図(1:4)



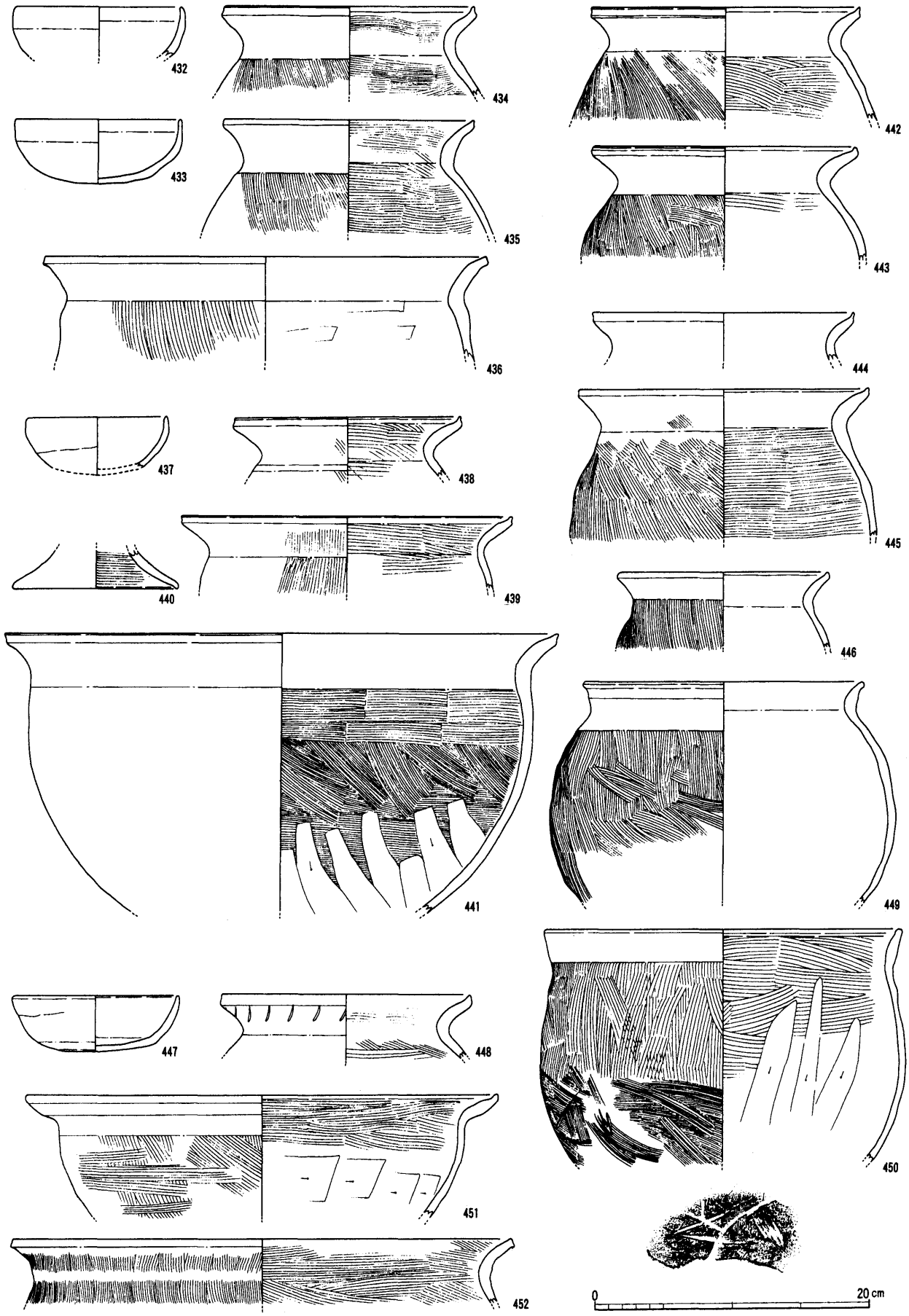
第25図　出土遺物実測図(1:4)



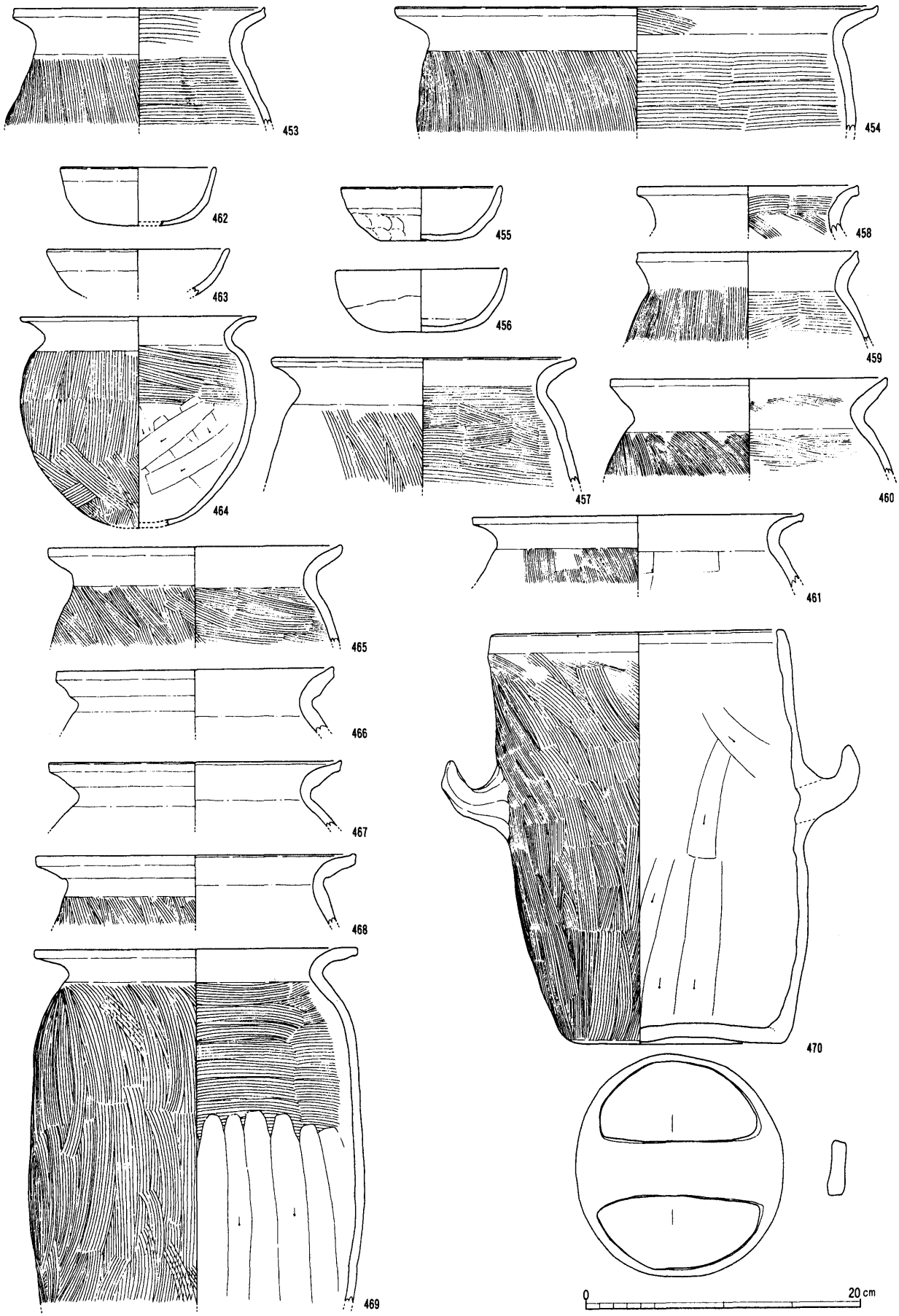
第26図　出土遺物実測図(1:4)



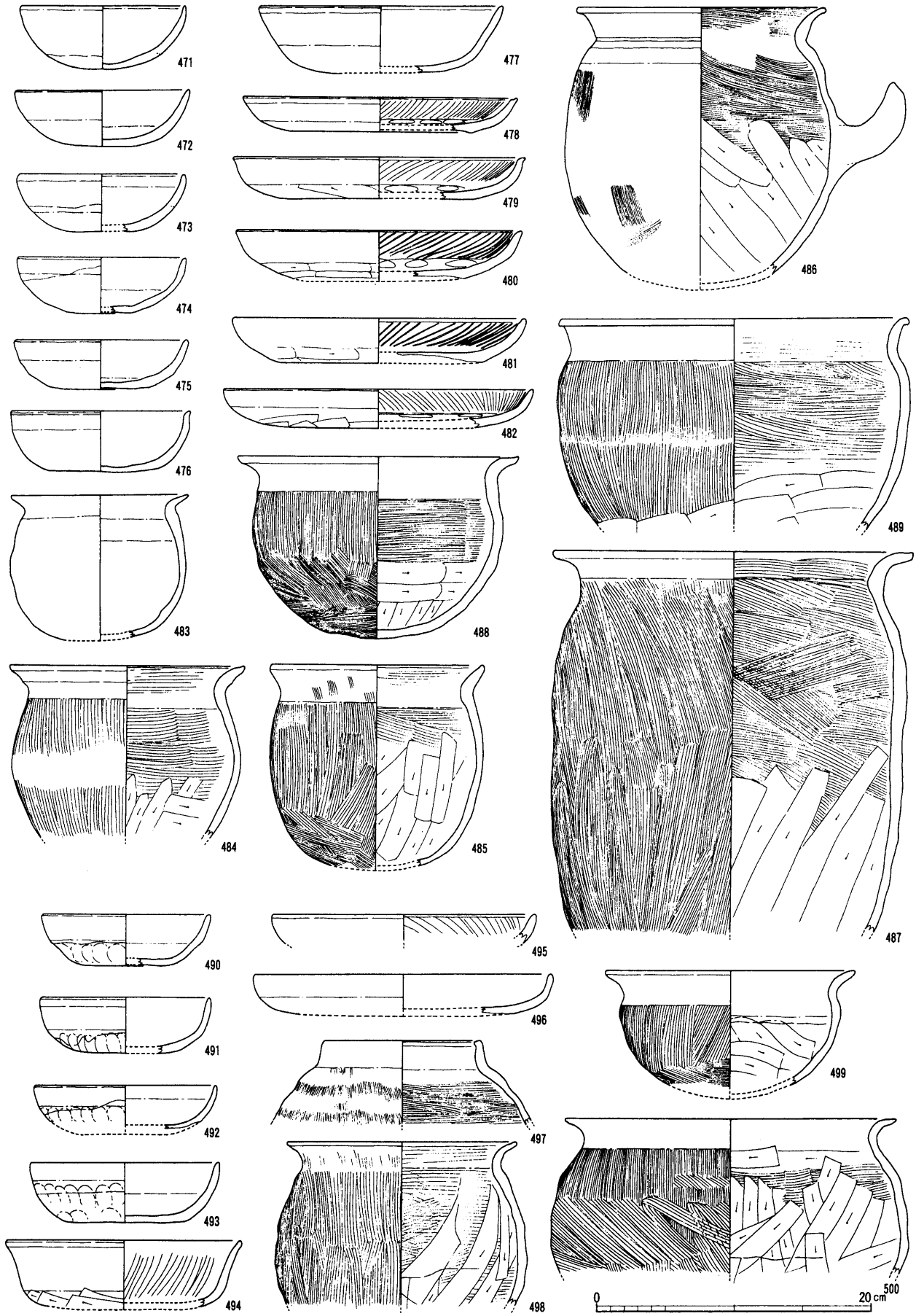
第27図 出土遺物実測図(1:4)



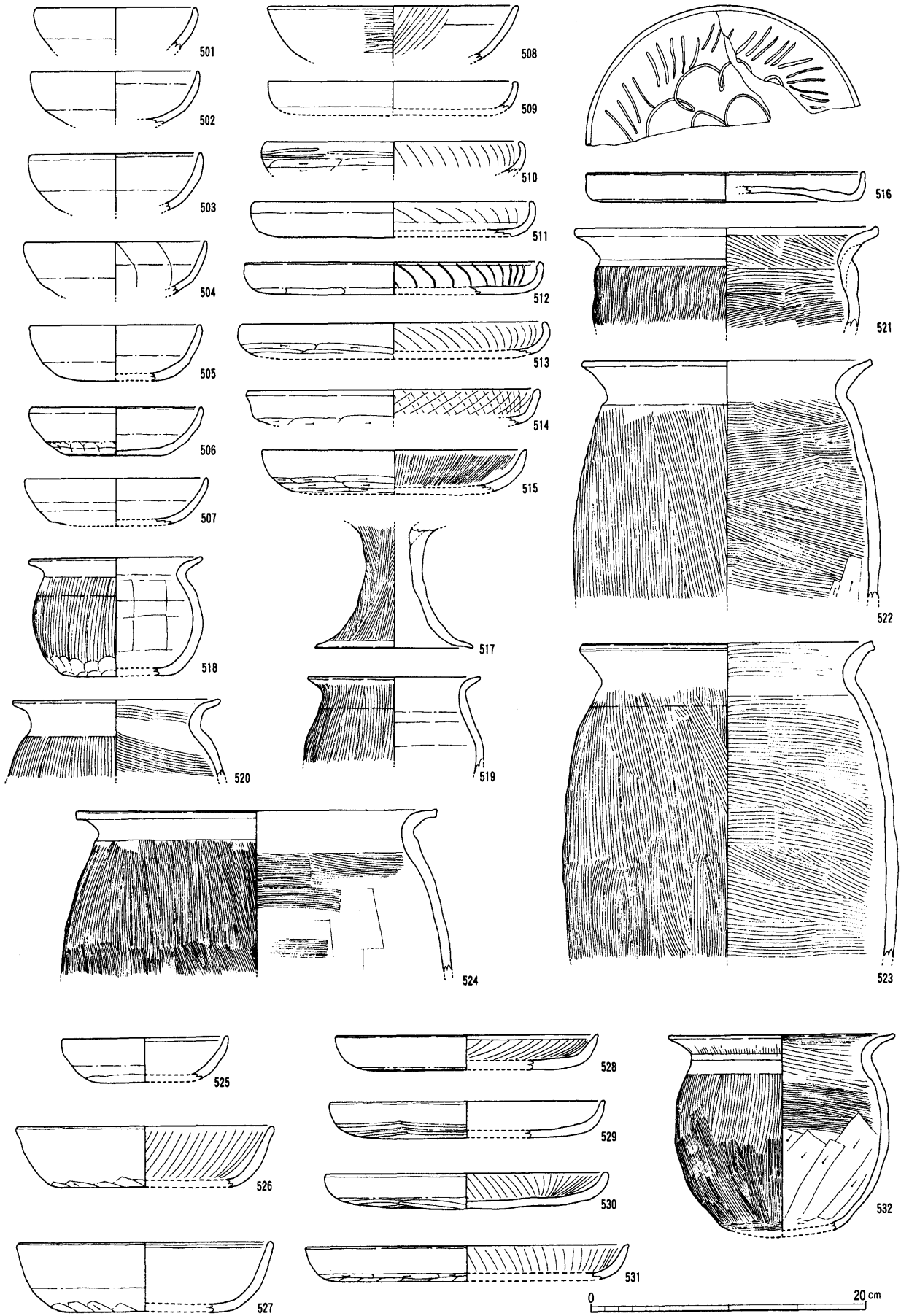
第28図　出土遺物実測図(1:4)



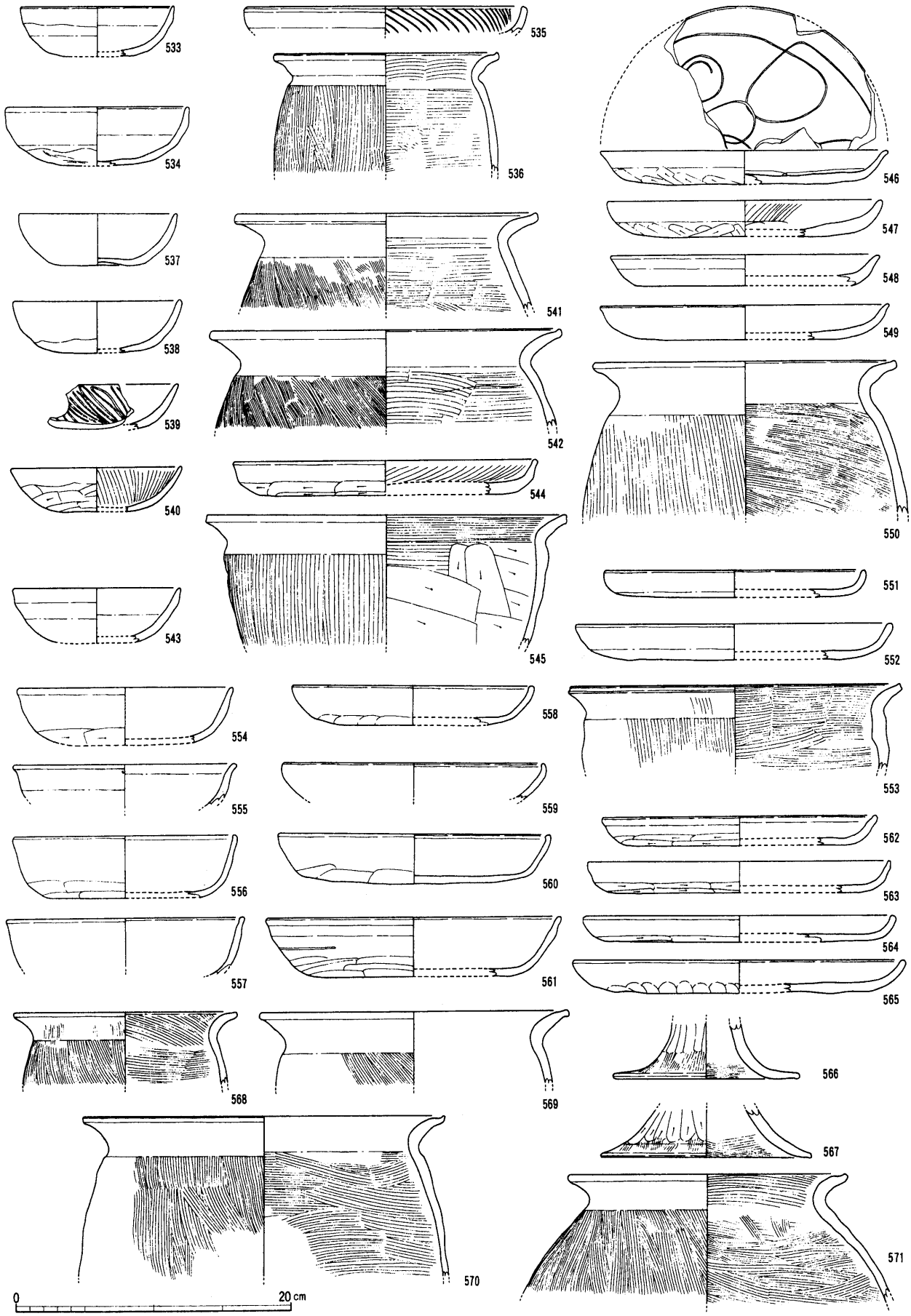
第29図　出土遺物実測図(1:4)



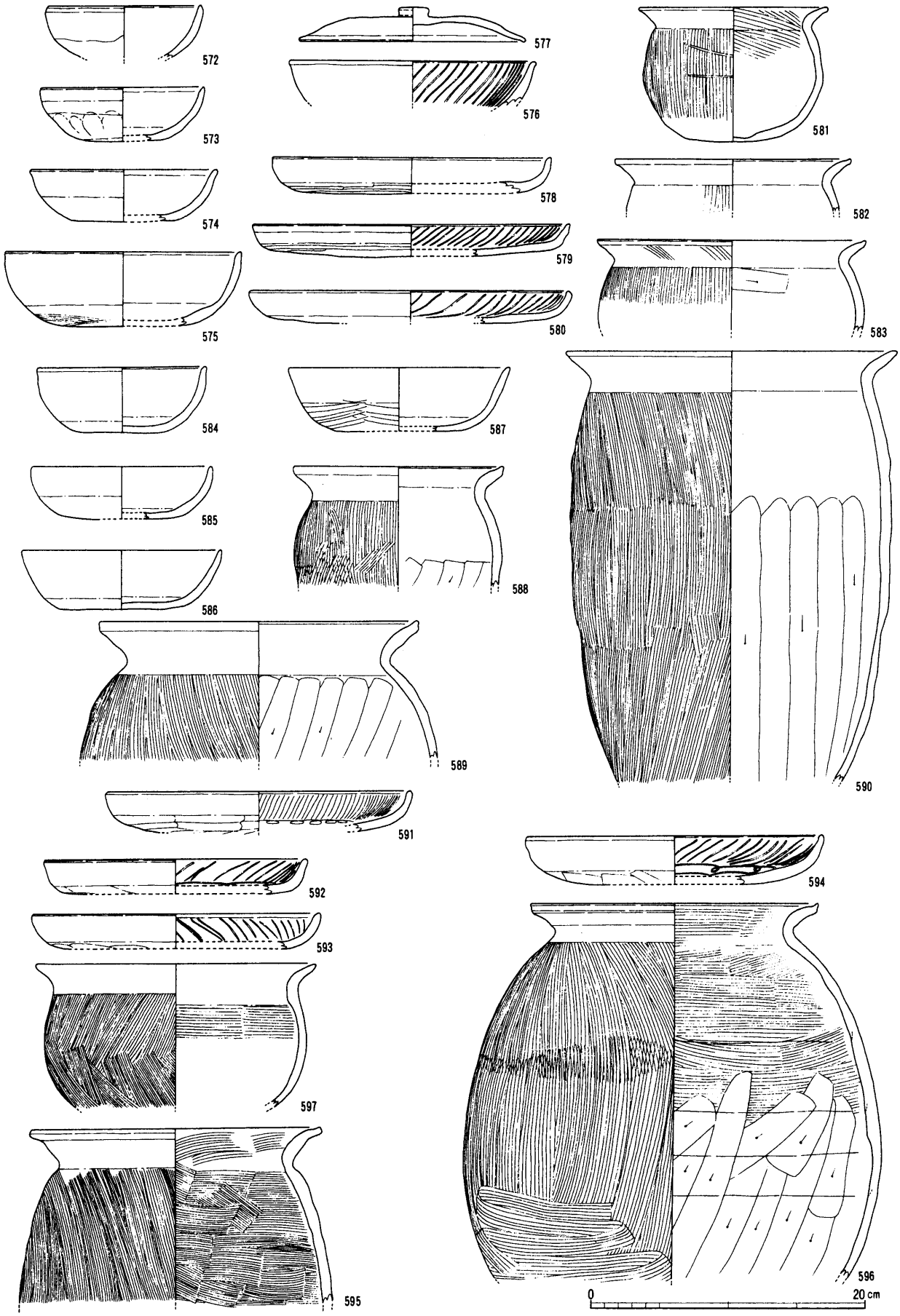
第30図 出土遺物実測図(1:4)



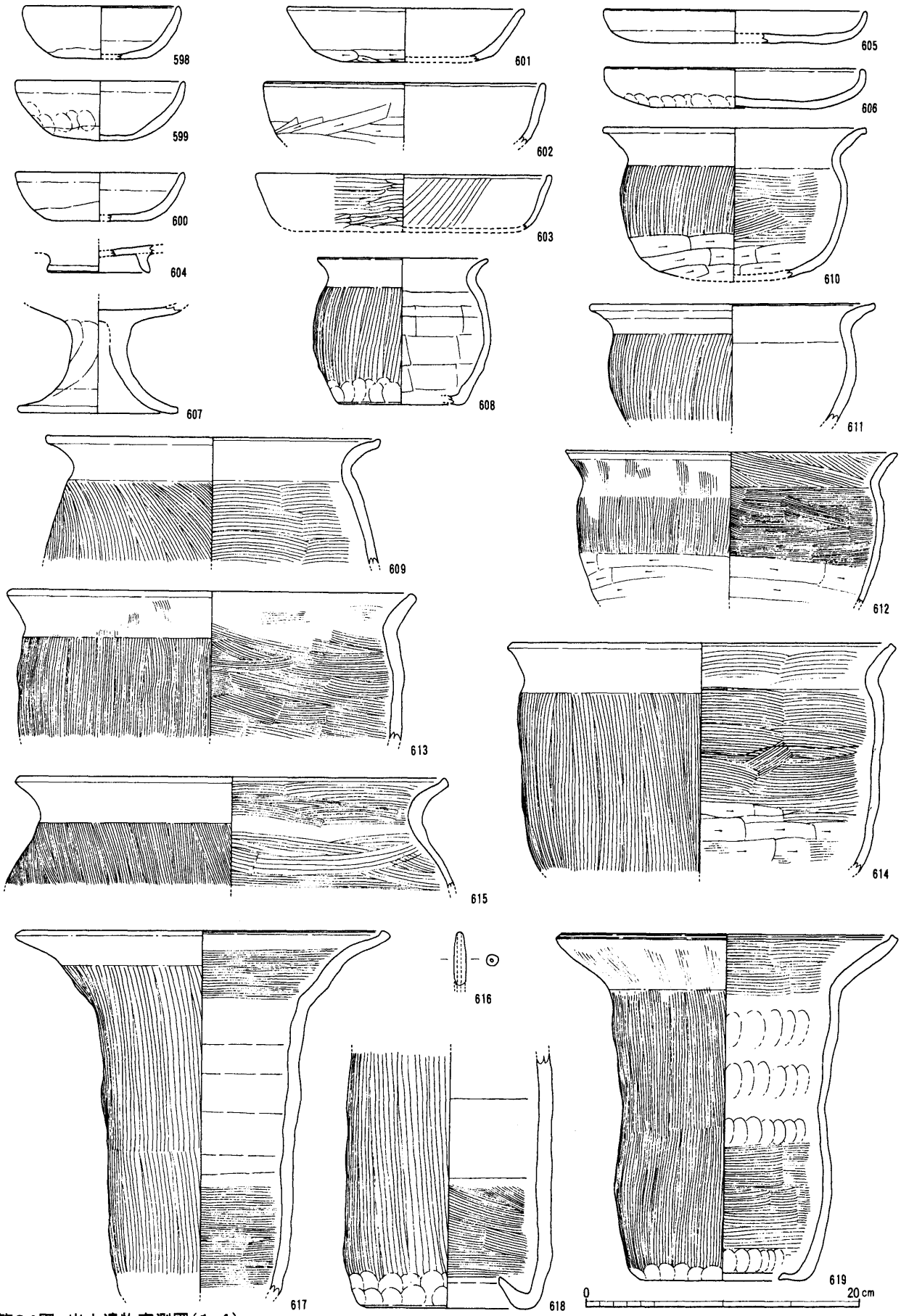
第31図　出土遺物実測図(1:4)



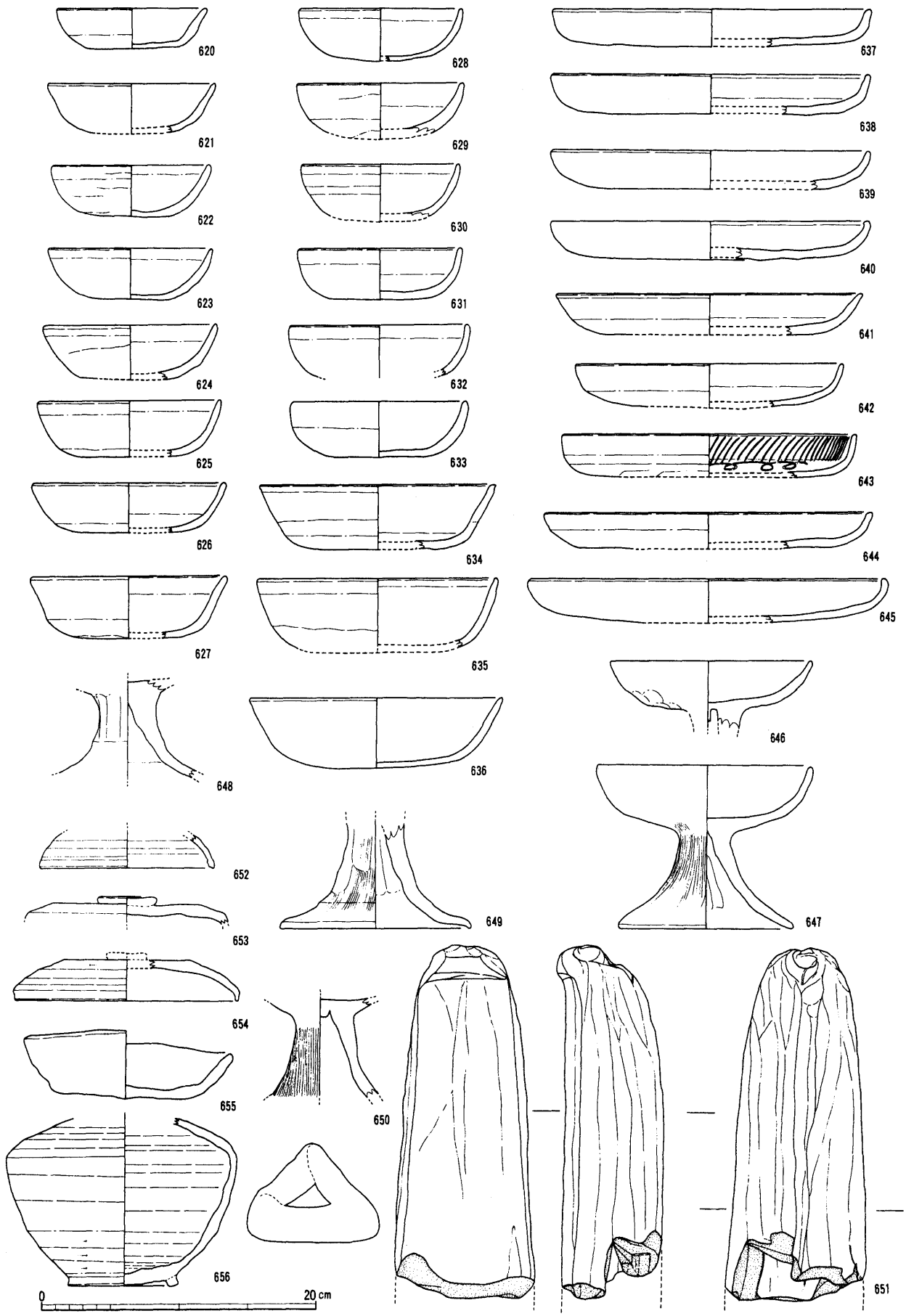
第32図　出土遺物実測図(1:4)



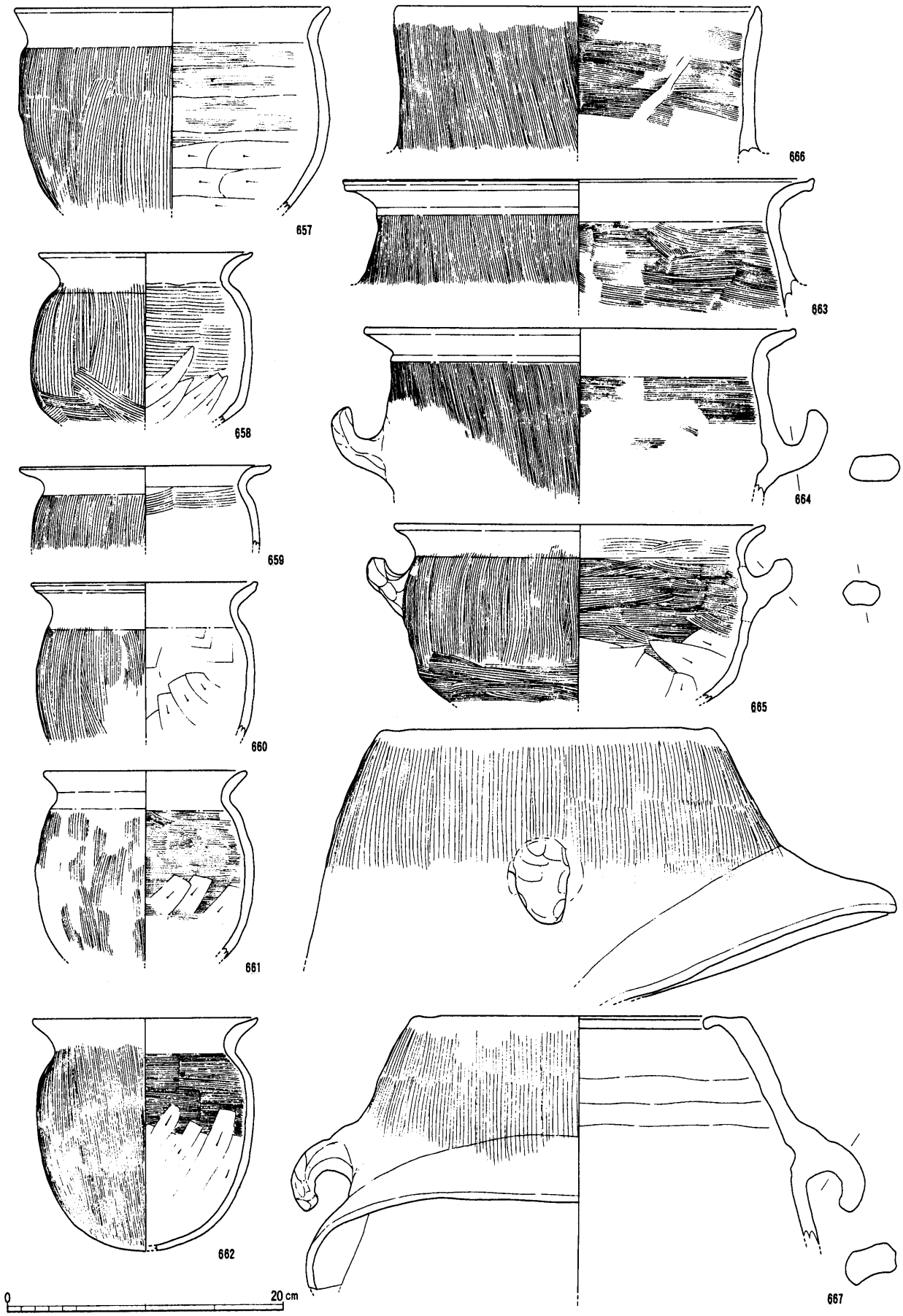
第33図　出土遺物実測図(1:4)



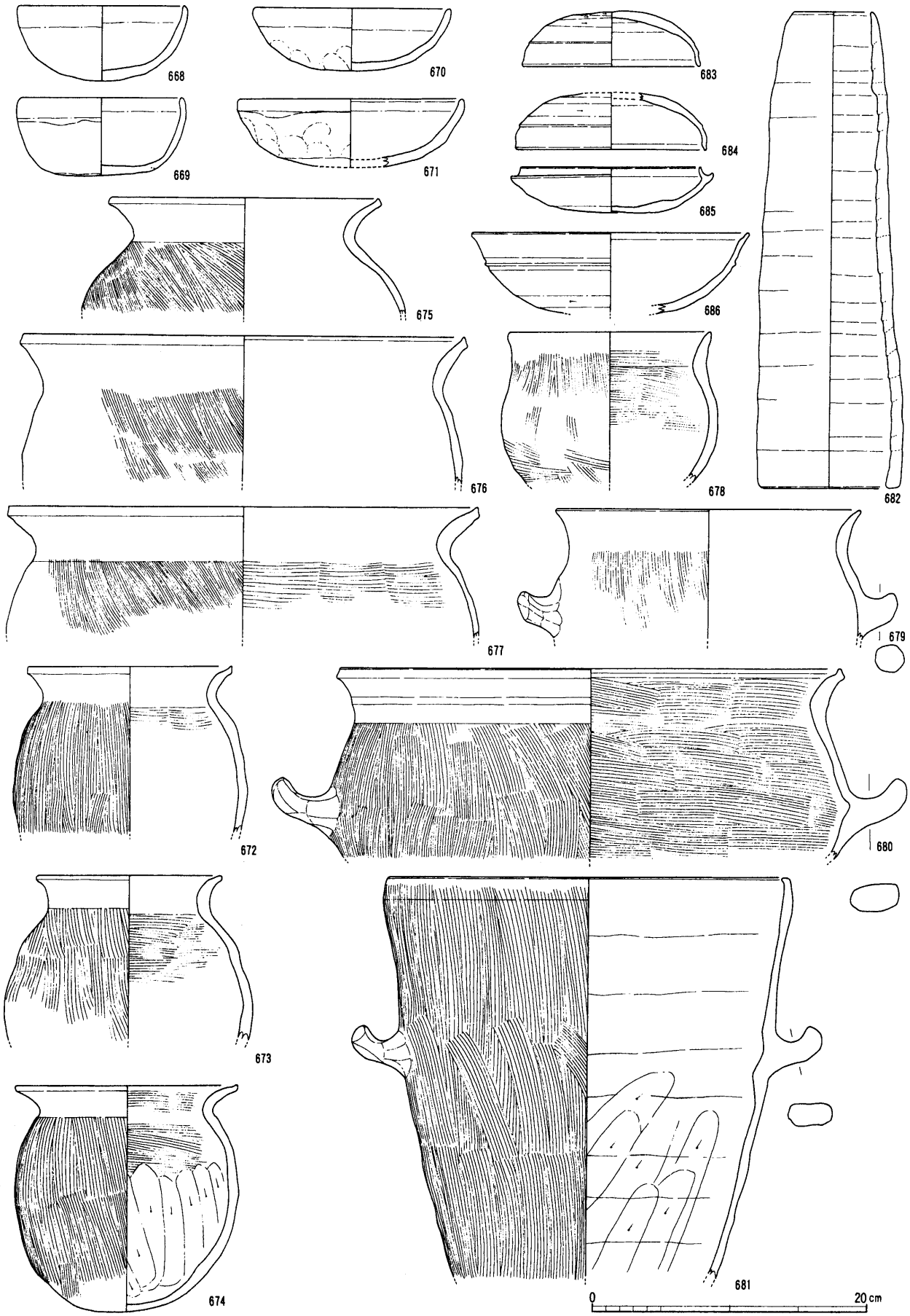
第34図　出土遺物実測図(1:4)



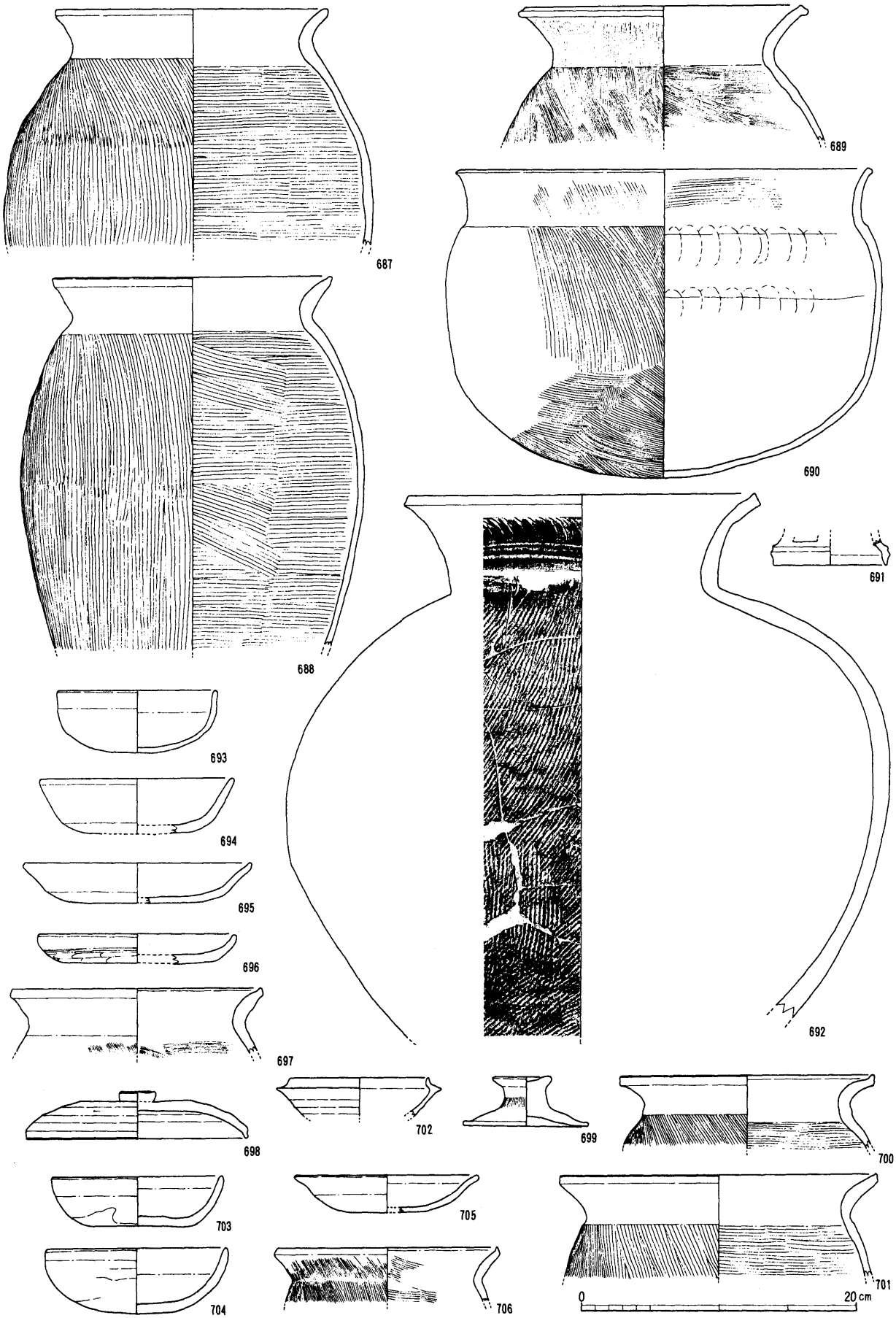
第35図 出土遺物実測図(1:4)



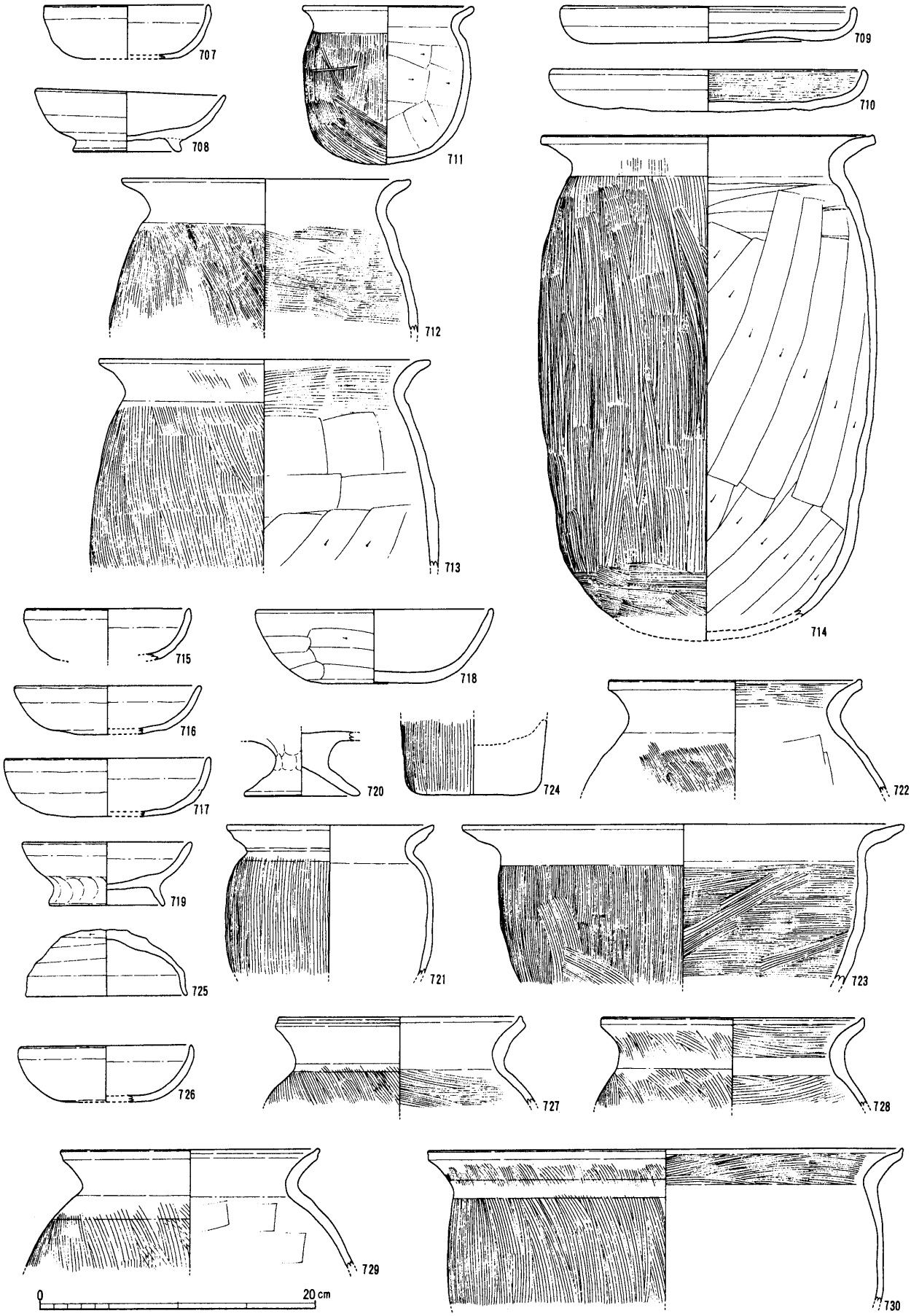
第36図　出土遺物実測図(1:4)



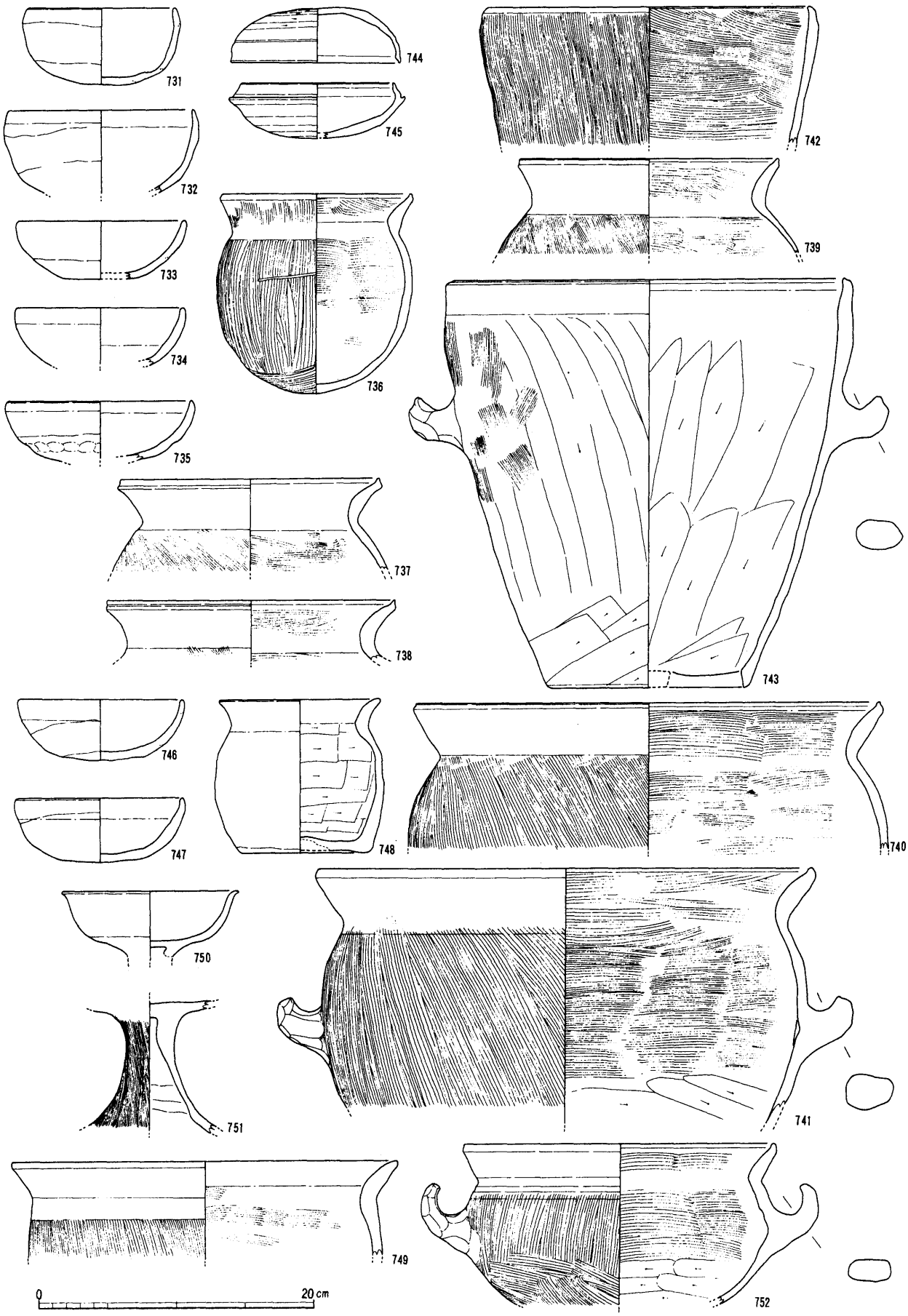
第37図　出土遺物実測図(1:4)



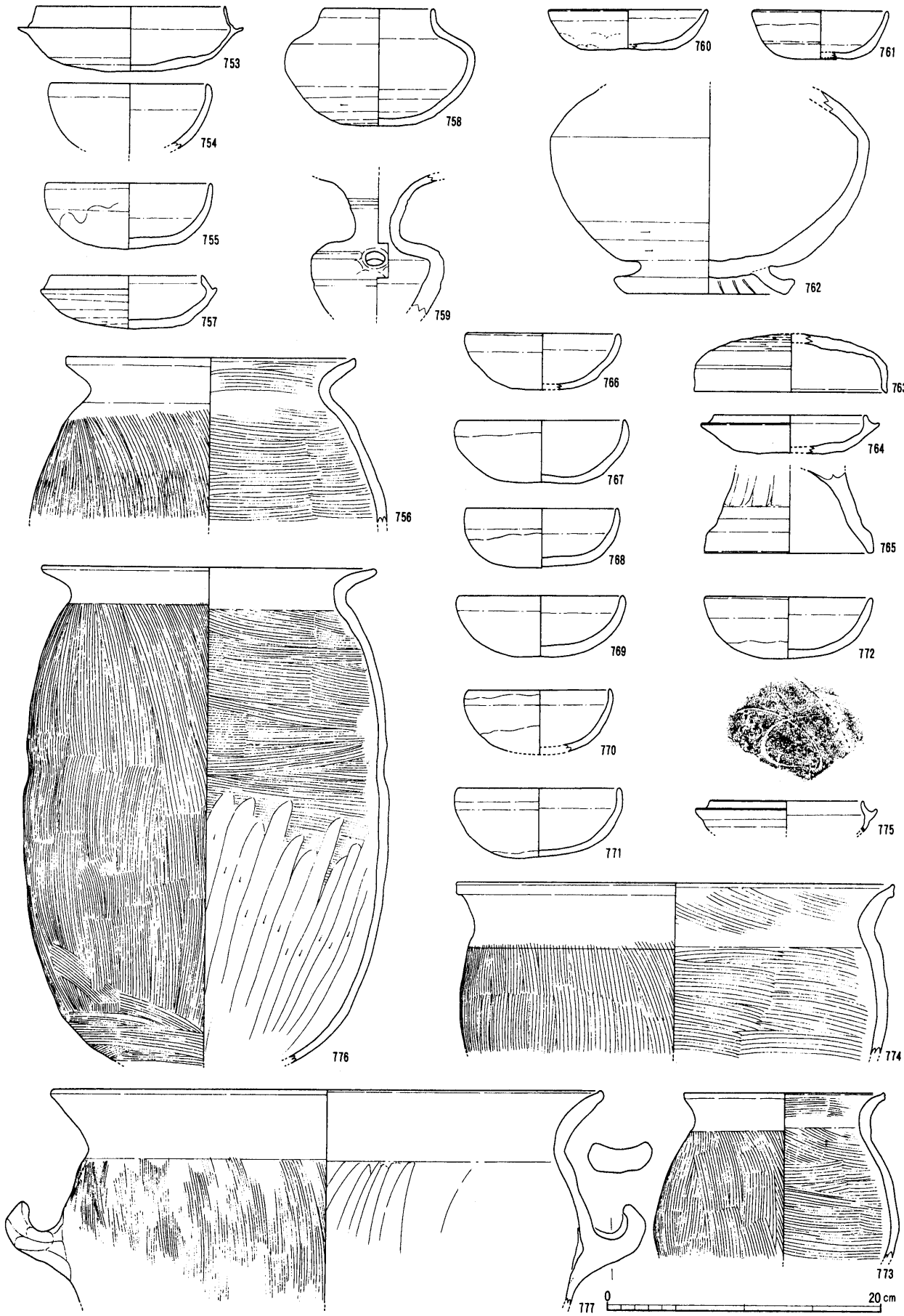
第38図 出土遺物実測図(1:4)



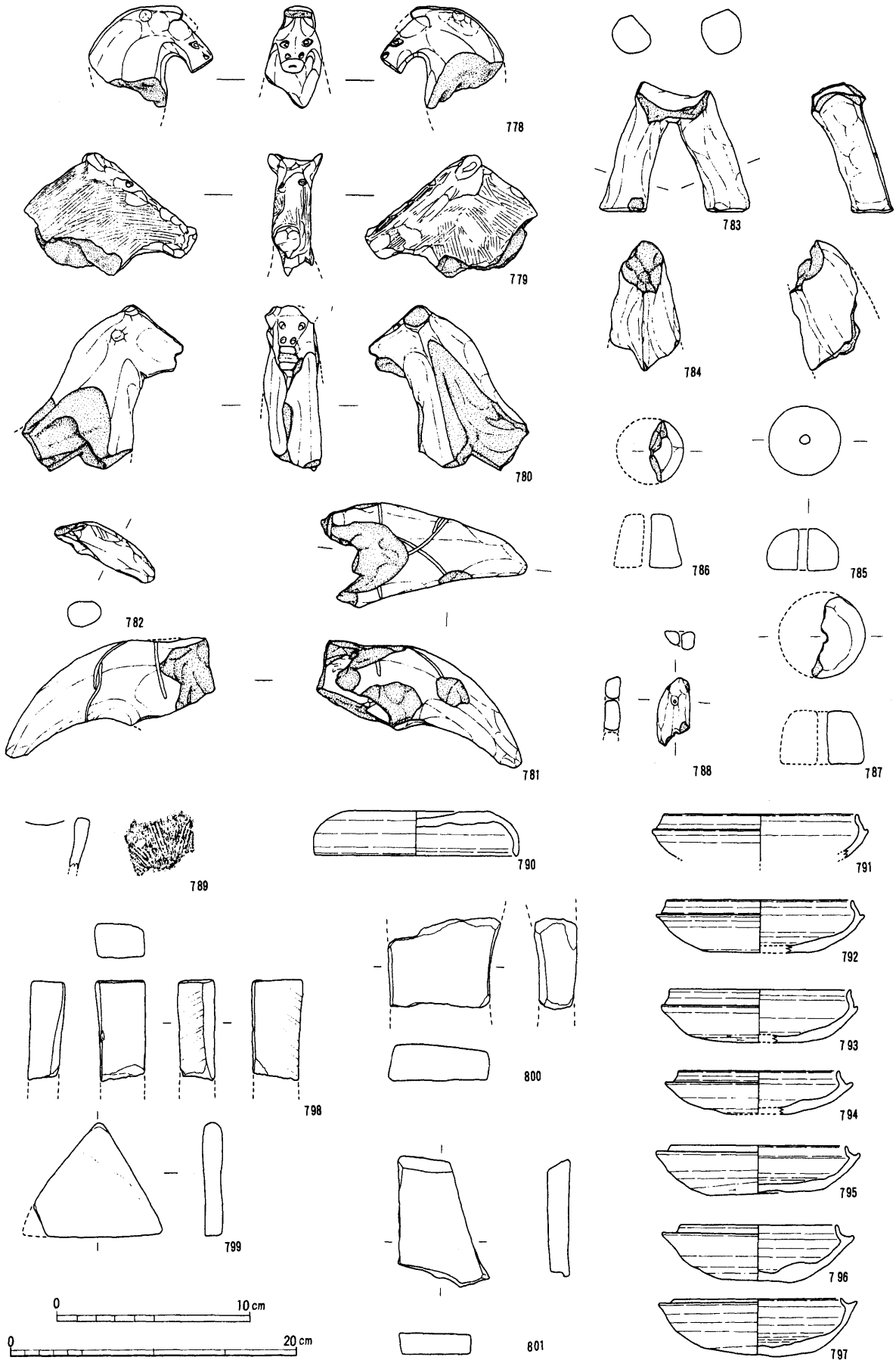
第39図　出土遺物実測図(1:4)



第40図　出土遺物実測図(1:4)



第41図　出土遺物実測図(1:4)



第42図 出土遺物実測図 778～797(1:4)、798～801(1:3)

Ⅳ　第３次調査

第３次調査は第２次調査の東側の東地区 2,150 ㎡と第１次調査の西側 6,350 ㎡併せて 8,500 ㎡の範囲で実施した。基本的な層位は第２次調査と同じであるが 、基盤層において旧石器時代の遺物を確認したため、調査終了後、下層の確認調査を行い、第４次調査で再度下層の調査を行うこととなった。

１．遺構

（１）弥生時代後期の遺構

①竪穴住居

弥生時代後期の竪穴住居は17棟検出した。その規模・住居構造・出土遺物は第６表にまとめた。今回の調査で注目すべき住居は、東地区で検出したＳＨ3017である。第２次調査で検出された竪穴住居よりも先行するもので後期初頭の住居である。

SH3017　東西3.7m、南北4.0m、４つの主柱穴は直径30cmの楕円形。柱間は東西1.6m、南北2.2 mと南北に長い。炉は北側の柱間中央のやや内側に位置する。貯蔵穴は南壁中央に位置している。この住居構造は、第２次調査で確認された典型的な住居構造であり、後期初頭までさかのぼることが確認された。なお、第47図に示した壺・高杯・台付甕などが床面直上から出土している。がこの段階からすでにとなるべき・排水溝はない。床面は張り床が施されていた。

（２）古墳時代初頭の遺構

①竪穴住居

この時期の竪穴住居は西地区の調査で35棟検出した。西地区では第１次調査の成果とも併せてこの時期の竪穴住居が集落の中心をなしている。第２次調査ではこの時期の竪穴住居は検出されず、ＳＸ2222などの方形周溝墓が検出されている。このことから、古墳時代初頭には西地区が集落域、東地区が墓域となっていたと想定される。

この時期の竪穴住居は一辺が７m前後の大型の住居と５～６m前後の住居とに分かれる。詳細は第６・７表にまとめた。

SH3090　長辺7.5m、短辺7.2m。削平がすすみ、深さは８cmほどが残存するのみ。主柱穴は30cm前後の円形で柱間は東西南北とも 4.2m である。周溝は確認できたが、貯蔵穴・炉はなかった。

（３）古墳時代前期の遺構

①竪穴住居

西地区で６棟検出した。これまでの調査では北野遺跡の竪穴住居の存続時期が古墳時代初頭までと想定されていたが、古墳時代前期まで存続することが確認された。前代同様、竪穴住居は一辺が７m前後の大型の住居と５～６m前後の住居とに分かれる。詳細は第７表にまとめた。

SH3138　長辺7.2m、短辺7.1m。主柱穴は30cm前後の円形。柱間は東西4.3m、南北3.8m。やはり貯蔵穴・炉は検出されなかった。北壁を除いた３方向の壁で、壁柱穴の可能性のある円形で20cm前後の柱穴が1.9m間隔で並ぶのを確認した。

（４）古墳時代後期の遺構

①竪穴住居

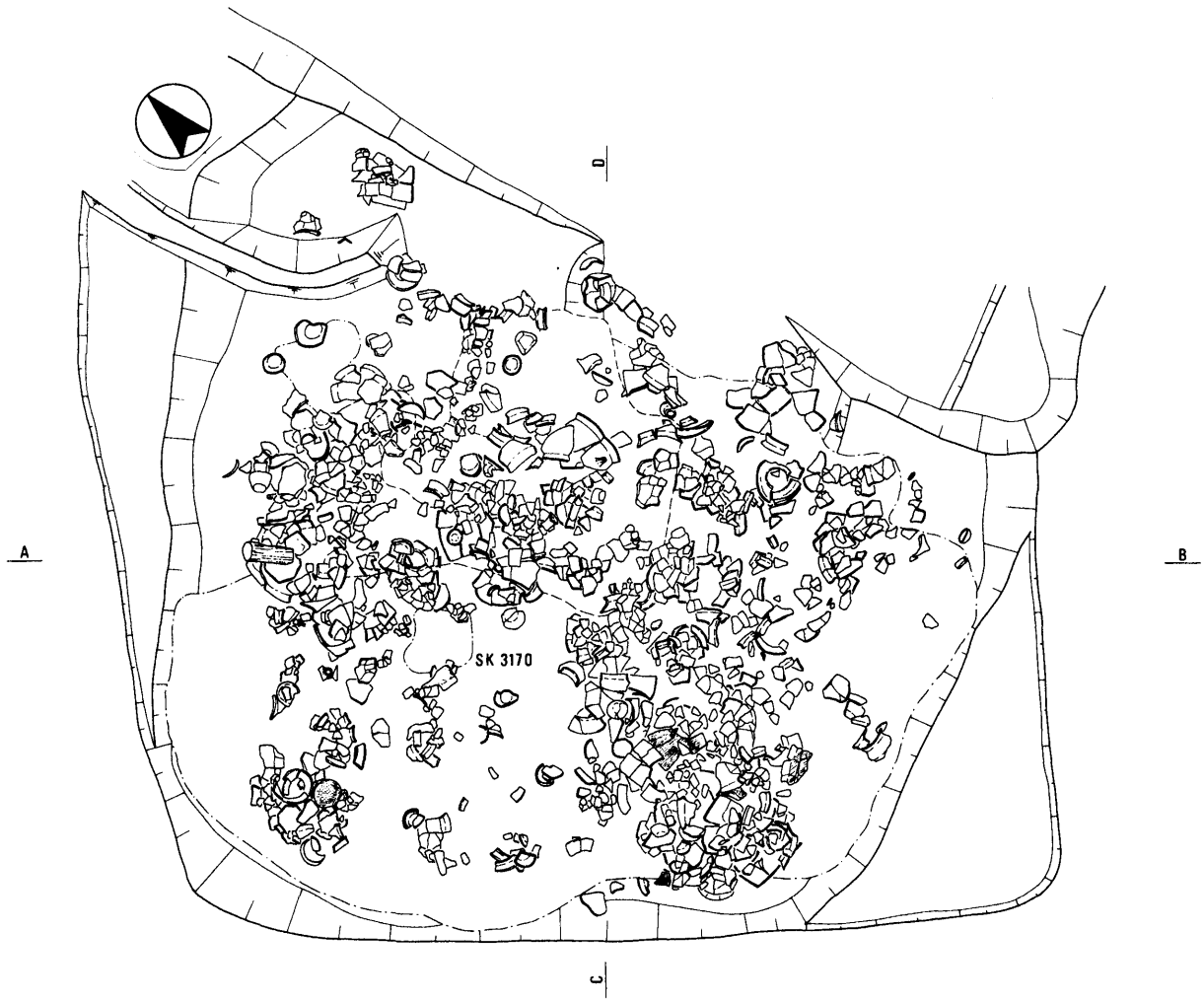
古墳時代後期の６世紀代になると北野遺跡で土師器生産が始まり、再び集落が形成される。竪穴住居は13棟検出した。住居の規模は一辺４～５mのものが大半で７mを超える大型のものはない。ＳＨ3209・3411あるいはＳＨ3272・3284のように重複がみられるので少なくとも２時期には分かれる。

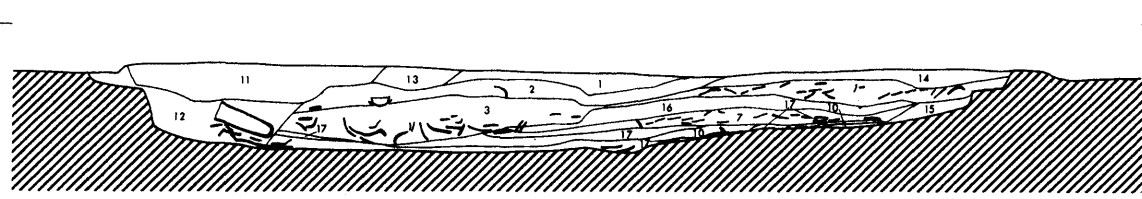
②土師器焼成坑

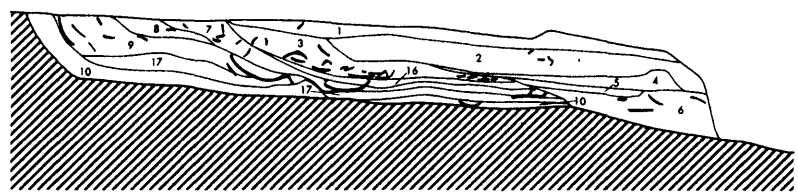
焼成坑は全体で69基検出したが、第１次調査・第２次調査ですでに検出しているものもあるため、新たに検出したのは64基である。古墳時代後期の焼成坑は16基検出した。

この時期の焼成坑は規模が大きい傾向にあり、最

第43図　遺構配置略図(1:700)



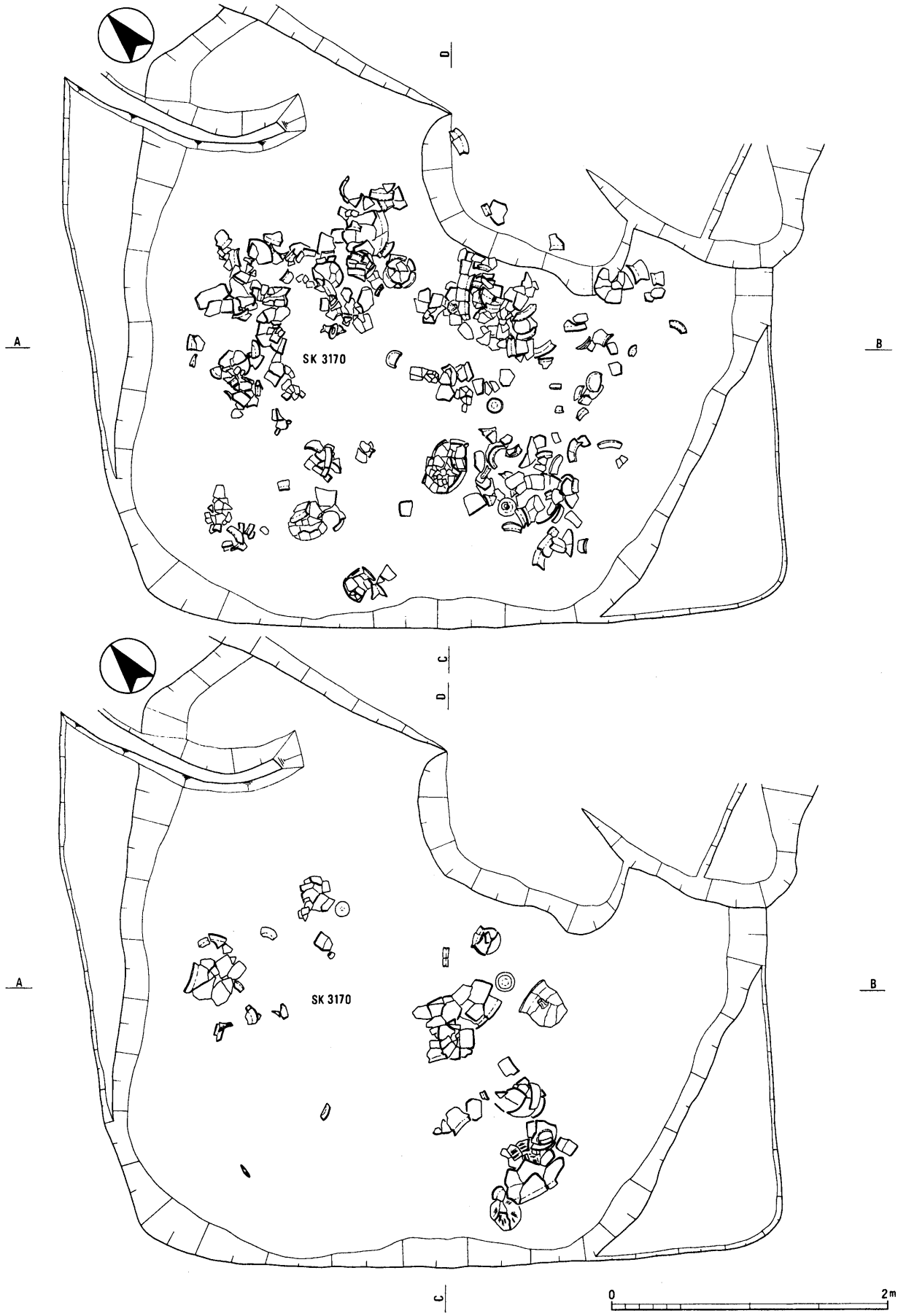




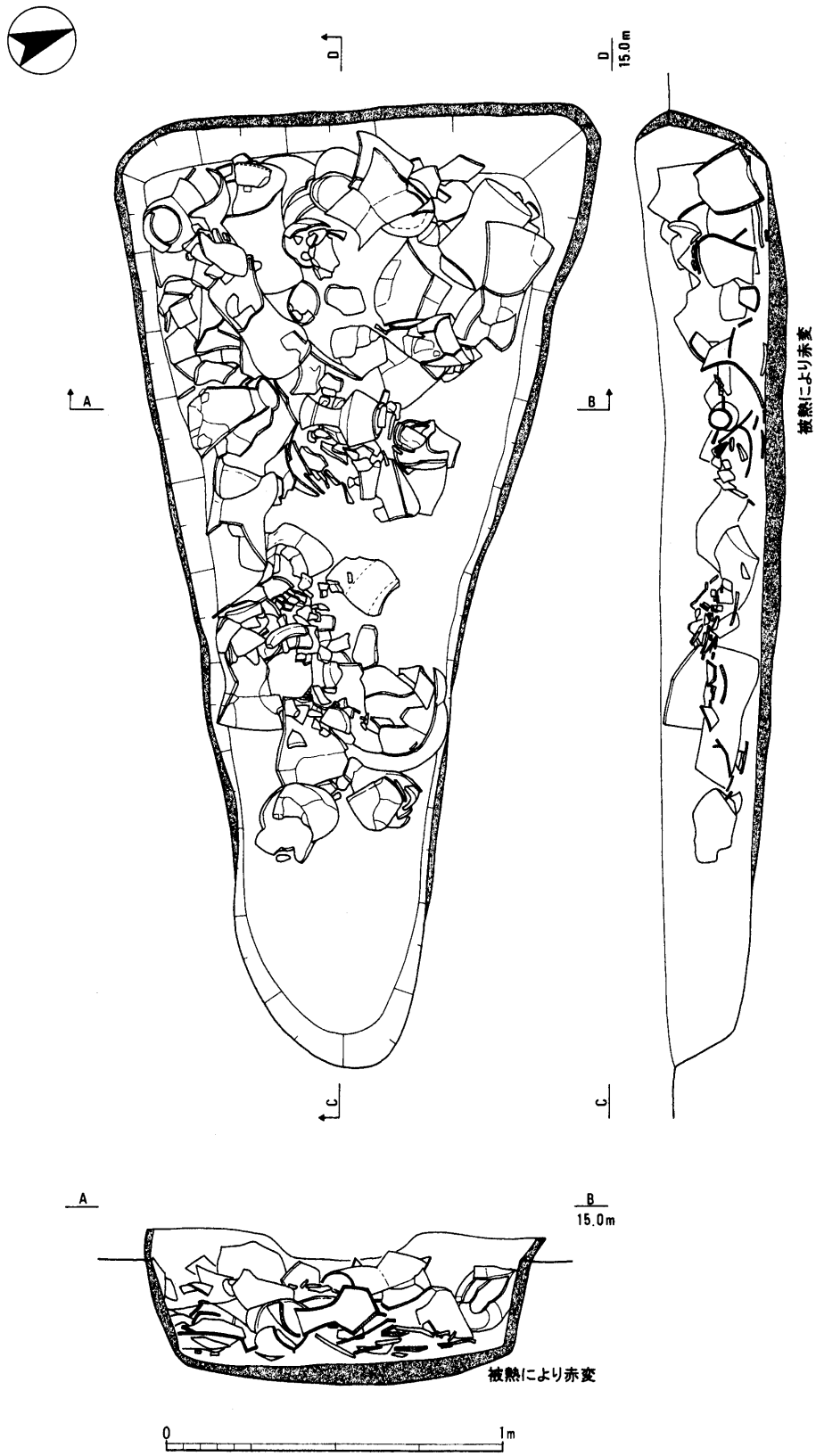
1　淡灰茶褐色土
2　淡灰白色粘土
3　暗灰茶褐色土
4　炭と焼土混入土
5　淡黄白色粘土
6　暗灰褐色土
7　暗茶褐色土
8　淡茶褐色土
9　暗褐色土と淡白色粘土混入土
10　灰茶褐色土
11　淡茶灰褐色土
12　淡灰褐色土
13　淡灰茶色土
14　灰茶色土
15　濁黄色土
16　白灰色粘土
17　淡黄灰色粘土

0　2m

第44図　SK3170上層遺物出土状況図(1:40)



第45図 SK3170中層・下層遺物出土状況図(1:40)



第46図　SF3092遺物出土状況図(1:20)

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	貯蔵穴	炉	排水溝	竈	時代	出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ										
3017	fg7～8	4.0	3.7	0.20	N44° W	○		○	○			弥生後期	壺・無頸壺・高杯・台付甕	
3067	op8～9.10他	4.7	4.6	0.34	N35° W	○	○	○	○	○		弥生後期	高杯・壺・台付甕・鉢・蓋	拡張の跡？有り
3071	op5～6	4.4	(3.0)	0.34	N10° E							弥生後期	高杯・壺・台付甕	
3087	rs4～5	(4.2)	(3.5)	0.15	N31° W	○						弥生後期	壺・台付甕・短頸壺	
3169	qr11～12	6.1	1.5	0.09	N15° W		○					弥生後期	高杯	
3196	qr13～14	4.5	4.4	0.10	N28° W	○	○	○				弥生後期	壺・台付甕・高杯	
3223	t16～17	3.7	3.3	0.12	N33° W	○	○					弥生後期	壺・甕	
3246	uv18～19	4.7	(3.2)	0.14	N31° W	○	○		○			弥生後期	甕	
3260	hi13～14他	4.2	4.0	0.13	N22° W	○		○				弥生後期	甕・台付甕	SH3266排水溝に切られる
3266	ji15～16	4.5	4.5	0.15	N41° W	○	○	○		○		弥生後期	甕・高杯・鉢	
3274	no15～16	5.6	5.1	0.06	N17° W	○	○	○				弥生後期	高杯・壺・台付甕	
3293	pq14～15	6.3	5.4	0.09	N36° W	○	○					弥生後期	台付甕・甕・把手	
3396	m19	-	-	0.34	N25° W							弥生後期	甕	
3407	uv9.10.11、w10	6.5	4.2	0.05	N22° W	○	○	○				弥生後期	台付甕	
3408	tu14～15	5.8	5.8	0.08	N74° E	○	○					弥生後期		
3429	yw17.18.19	3.9	2.9	0.11	N30° W	○	○					弥生後期		
3433	l17～18	4.3	3.3	0.25	N5° E							弥生後期		
3072	op6～7	4.6	(3.0)	0.16	N13° W	○	○			○		古墳初頭	高杯・壺・小型壺・台付甕	
3077	qp3～4	4.4	4.3	0.19	N18° W	○	○	○				古墳初頭	壺・小型壺・台付甕・受口甕 高杯・椀・鉢・須恵器、蓋	
3090	tu5～7他	7.5	7.2	0.08	N32° W	○	○					古墳初頭	壺・台付甕・S字甕	
3096	uv4～5	5.6	4.7	0.18	N29° W	○		○				古墳初頭	壺・台付甕・ミニチュア壺 紡錘車	
3119	st7～8	(3.9)	(2.0)	0.07	N20° E		○					古墳初頭	高杯・壺・甕	
3137	tu10	5.6	5.2	0.06	N22° W	○	○					古墳初頭	砥石・磨石？	
3150	tu10	4.7	(2.6)	0.10	N33° W	○	○					古墳初頭	壺・高杯・甕・三角形ナイフ	拡張の跡有り
3152	rs9～10	4.7	4.2	0.12	N31° W	○	○	○	○	○		古墳初頭	高杯・壺・台付甕・ミニチュア 土器・石斧	
3171	rs11～13	4.8	4.5	0.05	N15° W	○	○	○				古墳初頭	高杯・壺・台付甕、磨石 石包丁	
3190	uv12～13	4.3	(3.0)	0.08	N10° W	○	○					古墳初頭		
3201	vw15～16	6.0	5.3	0.20	N32° W	○	○		○			古墳初頭	高杯・壺・台付甕・S字甕	1053と同一
3248	qr17～19	6.0	5.6	0.16	N22° W	○	○					古墳初頭	壺・甕・タタキ甕・S字甕 受口甕・軽石・砥石・高杯	遺構に重複有り
3263	kl16～17	3.6	3.1	0.05	N26° W		○					古墳初頭	高杯・壺・甕・台付甕	
3276	lm13～15他	6.5	(4.3)	0.12	N32° W	○		○				古墳初頭	高杯・壺・甕・台付甕	
3277	lm14～15	4.8	4.7	0.05	N16° W		○	○				古墳初頭	高杯・壺・甕・蓋	
3294	op13～14	4.9	4.4	0.10	N27° E	○	○	○				古墳初頭	高杯・壺・甕・鉢	
3295	op12～13	5.1	4.6	0.09	N35° E			○				古墳初頭	甕	
3300	op17～18	6.7	6.5	0.21	N19° W	○	○	○	○	○		古墳初頭	高杯・壺・甕・台付甕 S字甕・擂鉢	
3303	op16～17	5.5	5.0	0.12	N31° E	○	○	○		○		古墳初頭	甕、砥石・高杯	
3328	vw19～20	5.5	5.0	0.18	N19° W	○	○					古墳初頭	高杯・壺・甕・S字甕	
3379	qr21	4.3	-	0.1	N48° W	○	○					古墳初頭	甕	
3380	r24～25	(2.9)	(2.1)	0.10	N12° W			○	○			古墳初頭	甕	
3383	r23～24	2.0	-	0.02	N51° W							古墳初頭	甕・高杯	
3389	lm18～19	(3.9)	(3.2)	0.06	N22° W	○	○					古墳初頭	壺・台付甕甕・土錘	
3391	pq19	7.0	4.0	0.11	N29° W		○					古墳初頭	壺・台付甕・受口甕・高杯	
3400	rst18～19	5.7	5.0	0.08	N38° E	○						古墳初頭	甕	
3402	no11～12	4.0	1.5	0.04	N28° W	○	○					古墳初頭	壺・高杯	
3409	qr9	6.0	5.0	0.03	N52° W		○					古墳初頭		
3412	q17	4.3	4.2	0.08	N50° W	○	○					古墳初頭		
3413	pq17	2.0	1.8	0.1	N50° W		○					古墳初頭		
3417	r19～20	3.0	2.0	0.04	N10° W	○						古墳初頭		

第6表　第3次調査竪穴住居一覧表(1)

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	貯蔵穴	炉	排水溝	竈	時代	出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ										
3418	r23、s22～23	4.6	2.6	0.06	N45° W				○			古墳初頭		
3431	s11～12 t10.11.12	5.0	3.0	0.08	N35° W		○					古墳初頭		
3434	st17～18	5.0	4.4	0.15	N49° E	○	○					古墳初頭		
3444	r23～24	5.0	2.3	0.05	N50° W	○	○					古墳初頭	壺・高杯	
3054	im4～5	4.5	4.5	0.09	N32° E	○		○				古墳前期	台付甕・高杯	
3138	st8～10	7.2	7.1	0.17	N40° W	○	○					古墳前期	壺・甕・S字甕	
3200	tu15～16	5.3	5.0	0.12	N7° W	○	○	○				古墳前期	高杯・壺・二重口縁壺・甕 S字甕	
3330	tuv21～22	5.5	5.3	0.17	N34° W	○	○					古墳前期	壺・二重口縁壺	
3338	w18	(3.0)	(2.5)	0.15	N15° W							古墳前期	壺・小型丸底壺・甕・高杯	
3349	uv22～23	(3.2)	(2.5)	0.15	N27° E							古墳前期	椀・高杯・甕	
3058	m.n,5.6.7	4.4	3.7	0.15	N62° W	○						古墳後期	椀・高杯・甕・甑・把手 壺・杯	
3084	s4,t3.4	5.1	4.6	0.1	N18° W	○	○				○	古墳後期	椀・甕・把手・杯身・杯蓋	
3085	s.t,4	4.7	3.3	0.07	N68° W	○		○			○	古墳後期	甕・高杯	
3156	q11～12	4.5	4.0	0.09	N50° W							古墳後期	椀・甕・長胴甕・甑・高杯	
3183	st13～14	6.0	5.0	0.1	N10° E		○					古墳後期	椀・甕・甑・杯身	
3209	rs15～16	4.6	4.6	0.12	N48° E	○	○					古墳後期	椀・甕・土錘	
3265	jk14～15	3.9	3.4	0.05	N38° E							古墳後期	椀・甕・高杯	
3272	kl17～18	4.7	4.7	0.22	N12° W		○					古墳後期	椀・甕・長胴甕・高杯・蓋 杯身	
3281	lm17～18	4.9	4.7	0.06	N42° W	○	○					古墳後期	椀・甕・甑	
3284	kl17～18	3.8	3.5	0.23	N12° W	○	○	○			○	古墳後期	甕・甑・高杯脚・把手	
3404	vw2	3.0	3.0	0.16	N23° W	○	○					古墳後期		
3411	qrs15～16	4.7	4.7	0.03	N46° E	○	○					古墳後期	高杯	
3088	r.s,2	4.3	3.5	0.17	N32° W		○					飛鳥	椀・甕・把手・高杯・小片	
3089	s5,t5	3.8	2.6	0.11	N35° W	○	○					飛鳥	甕	
3101	uv2～3、w3	4.9	4.7	0.26	N10° W		○					飛鳥	椀・甕・高杯・甑・把手 杯身・杯蓋	
3116	vw2～3	3.8	1.5	0.1	N45° W		○					飛鳥		
3226	qr17～18	4.2	4.1	0.29	N50° E	○	○					飛鳥	甕・甑・把手	
3257	v17～18、w17他	5.4	2.9	0.11	N36° W	○		○				飛鳥	椀・甕	
3024	g.h,7.8	3.6	2.7	0.13	N44° E							奈良	椀・杯・蓋	
3029	j12.13.14,k12他	7.4	7.2	0.2	N37° E	○	○					奈良	椀・甕	
3224	qr16～17	4.2	4.2	0.10	N37° E	○					○	奈良	甕・杯蓋・壺	
3280	l18～19 m17～18他	6.6	6.2	0.07	N46° W	○	○					奈良	椀・甕	
3347	t22～23	4.2	2.1	0.08	N35° W	○	○					奈良	杯・椀・甕・甑・把手・杯蓋	
3350	t22、u21～22	3.9	2.5	0.28	N32° W	○	○				○	奈良	長胴甕・壺	
3353	s23～24 t22～23	3.1	2.6	0.05	N22° W	○					○	奈良	甕・甑？・把手・壺	
3359	st23～24	4.8	2.8	0.21	N32° W	○	○					奈良	杯・皿・椀・甕・甑・杯蓋	
3430	st23	-	-	0.03	N37° W							奈良		
3405	s2～3、t2	4.8	2.0	0.15	N36° W	○	○					不明		
3406	w4	2.5	2.5	0.14	N42° W	○	○					不明		
3410	no9～10	4.5	3.2	0.01	N24° W		○					不明		
3414	n16～17	6.8	-	0.04	N10° E	○	○					不明		
3415	lm16	5.1	4.6	0.04	N8° E		○					不明	椀	
3416	lm16～17	4.1	3.8	0.18	N17° W	○	○					不明		
3419	no18～19	3.0	-	0.08	N30° W	○						不明		
3432	w13～14、v13	5.2	3.2	0.11	N21° W	○						不明		
3445	r25	3.5	1.0	0.05	N7° W		○					不明		
3448	mn17.18.19	4.5	4.0	0.1	N42° W	○	○					不明		

第7表　第3次調査竪穴住居一覧表(2)

焼成抗番号	地区	規模(m)			主軸方向	出土遺物										時期
						須恵器	土師器									
SF		長さ	幅	深さ			椀	杯	皿	高杯	甕	長胴甕	鍋	甑	その他	
3055	k.l,4.5	4.8	2.4	0.44	N107° E	杯身	○				○				粘土塊・炭化土器(不明土製品1)	古墳後期
3056	l5,m4.5	3.6	2.3	0.2	N180° W		○				○	○			粘土塊・炭化土器	古墳後期
3057	k4.5	4.3	2.1	0.18～0.32	N150° W	杯身？蓋？					○	○		○	粘土塊・炭化土器(ヘラ記号「-」)	古墳後期
3059	m6	5.0	2.2	0.3	N170° W	杯身杯蓋	○				○	○			粘土塊・炭化土器	古墳後期
3060	l.m,6	2.8	1.7	0.3	N140° E		○			○	○		○		粘土塊・炭化土器	古墳後期
3061	l.m,4	3.5	1.7	0.22	N150° W	○	○			○	○				粘土塊・炭化土器	古墳後期
3091	t2.3	3.9	1.9	0.26～0.38	N90° W	杯身	○			○	○				炭化土器	古墳後期
3122	u.v,8.9	4.3	2.4	0.16～0.36	N105° E	杯身	○			○	○		○		壺	古墳後期
3161	p.q,12	2.0	1.2	0.16	N47° E		○				○				炭化土器	古墳後期
3227	q18	3.2	1.6	0.24～0.28	N113° W					○	○				粘土塊・炭化土器	古墳後期
3337	r.s,21	3.2	1.8	0.2	N60° E		○				○			○	粘土塊・炭化土器	古墳後期
3339	t22	2.8	2.0	0.18	N141° E	○					○				炭化土器	古墳後期
3340	r.s,19.20	-	1.9	0.16	N143° E		○				○	○			粘土塊・炭化土器	古墳後期
3344	s21.22	2.2	1.6	0.18	N38° E		○				○			○	炭化土器	古墳後期
3356	t22	-	2.6	0.13	N128° E						○					古墳後期
3372	r20.21	-	1.5	0.12～0.3	N150° E		○				○	○		○	粘土塊・炭化土器	古墳後期
3373	r20.21	3.3	1.7	0.28	N150° E		○			○	○				土錘・粘土塊・炭化土器	古墳後期
3005	d15.16	2.8	-	0.18	-		○									飛鳥
3007	e16	-	-	0.06	-											飛鳥
3026	i.j,11.12	4.2	-	0.45	N130° E						○	○				飛鳥
3043	m.n,11.12	2.2	1.8	0.11	N90° E							○				飛鳥
3044	n10	2.5	1.4	0.15	N140° W	杯										飛鳥
3045	p11	2.2	1.9	0.15	-							○				飛鳥
3046	q10	3.1	2.4	0.18	N115° E							○				飛鳥
3117	v.w,2	2.3	1.2	0.11	N99° W		○				○					飛鳥
3162	r.s11	3.8	1.4	0.12～0.24	N32° W		○			○	○	○			粘土塊・炭化土器	飛鳥
3165	p10.11,q11	-	1.9	0.22	-		○				○				粘土塊・炭化土器	飛鳥
3186	s13	2.4	1.0	0.16～0.32	N150° E	杯蓋	○				○			○	粘土塊・炭化土器	飛鳥
3193	r.s14	3.2	1.3	0.12～0.36	N168° E		○			○	○				粘土塊・炭化土器(ヘラ記号「×」)	飛鳥
3210	v.w,16.17	2.0	1.2	0.33	N149° E	杯	○	○			○	○			粘土塊・炭化土器	飛鳥
3222	t.u18	3.3	1.3	0.04～0.11	N96° W					○	○				粘土塊・炭化土器	飛鳥
3298	p17	3.4	1.4	0.36	N19° W	○	○	○			○	○		○	粘土塊・炭化土器	飛鳥
3360	r23.24	3.1	1.3	0.13	N27° W	杯	○		○		○				土錘・粘土塊	飛鳥
3375	s25	2.2	1.6	0.04～0.14	N131° E	○	○	○	○		○	○				飛鳥
3376	q.r,25	-	1.0	0.09	N166° E		○	○	○		○				炭化土器	飛鳥
3378	q.r,21.22	3.0	1.9	0.1	N101° W	杯蓋					○					飛鳥
3381	r.s,25	-	1.9	0.21	N180° W										粘土塊	飛鳥
3446	r.s,25.26	2.1	1.4	0.06～0.27	N141° E											飛鳥
3447	r25	-	0.9	0.04	-											飛鳥
3125	q4	-	-	-	-					○	○				炭化土器・粘土塊	飛鳥
3002	d14.15	-	-	0.17	-		○				○					奈良
3006	e15	2.2	-	0.19	N158° E		○									奈良
3008	d.e,14.15	1.5	-	0.2	N125° W		○		○							奈良
3009	c12.13	1.9	-	0.2	N27° W		○									奈良
3013	c.d,10	-	1.0	0.49	N140° E		○	○	○	○		○			土馬	奈良
3014	c13.14	3.7	-	0.29	-		○	○			○					奈良
3016	e9.10	3.6	2.0	0.45	N128° E							○				奈良
3021	d10	-	1.0	0.46	N50° W		○				○	○				奈良
3042	l.m,11	2.5	1.5	0.07	N161° E							○				奈良
3092	u4	2.8	1.5	0.46	N105° E										粘土塊	奈良
3121	u9	1.6	1.4	0.08	-						○					奈良
3147	q10.11,r10	2.7	1.5	0.08～0.18	N123° W	○				○	○				粘土塊・炭化土器	奈良
3206	w16.17	3.9	1.8	0.2～0.36	N122° W	杯	○			○	○			○	竈・粘土塊・炭化土器(ヘラ記号「-」)	奈良
3331	t.u,19	2.7	2.1	0.08	N131° E	杯蓋	○				○				粘土塊・炭化土器	奈良
3352	s24	2.5	1.4	0.11～0.23	N150° E	杯蓋	○	○	○		○	○		○	粘土塊・炭化土器	奈良
3370	q.r,26	1.6	1.6	0.15	-		○	○			○			○	炭化土器	奈良
3039	l13	1.5	1.1	0.29	N34° E											不明
3040	l13,m13.14	1.7	1.7	0.21	N51° E											不明
3041	m.n,13	2.7	1.9	0.29	N153° E											不明
3047	o10	(0.7)	(0.7)	0.06	-											不明
3049	n.o,8	1.7	1.1	0.08	-											不明
3050	m12	(0.8)	(0.5)	0.11	-											不明
3051	n11	(0.6)	(0.5)	0.1	-											不明
3154	r10	-	-	0.14	-						○				粘土塊・炭化土器	不明
3377	w19	1.5	1.2	0.03	-											不明
3437	s4	-	0.8	0.08～0.1	N143° W											不明
3438	p10	(1.0)	1.0	0.22	-											不明
3439	w11	1.5	1.0	0.11	-											不明
3440	w12	0.9	0.7	0.06	-											不明
3385	o19	-	-	-	-	○					○					不明

第8表　第3次調査土師器焼成坑一覧表

大のものはＳＦ3059、これにつぐのが、ＳＦ3057・3055である。これらは西調査区の北側でまとまって検出したもので、ＳＦ3055・3059、ＳＦ3057・3061、ＳＦ3056・3060の主軸方向がほぼ同じことから２基がセットで生産を行っていたのかもしれない。

SF3059　長径 5.0m、底径 2.2m、深さ 44 ㎝の隅丸二等辺三角形を呈し、主軸方向はN170°Ｗである。

SF3055　長径 4.8m、底径 1.7m、深さ 44 ㎝、主軸方向はＮ 107°Ｅ の隅丸二等辺三角形を呈す。第９表に規模、出土遺物の一覧をまとめた。

③土坑

この時期の土坑には粘土と土師器・須恵器が混ざって捨てられている土坑がＳＫ 3107・3097・3170などいくつかみられる。

SK3170　調査区の中央付近で検出された隅丸方形の土坑で南北4.4m、東はＳＸ3151に切られているが東西の現存は４m。埋土には多量の土師器を含むほか、須恵器・紡錘車・土錘などが出土している。また、土師器焼成に使用したと想定される白灰色・黄灰色・黄白色の粘土が出土している。第44・45図に出土状況を図示した。

（５）飛鳥時代の遺構

①竪穴住居

この時期の竪穴住居は５棟と少ないがそのうち３棟は調査区の東部に集中している。住居の規模は一辺４m前後と５m前後の方形である。

②土師器焼成坑

この時期の焼成坑は 22 基検出した。調査区内の各所にみられるが、ＳＦ 3446・3375・3381・3447という順に重複するものもある。焼成坑の規模では長さ４mを超えるようなものはなくなり、３m前後の規模のものが多い。

（６）奈良時代の遺構

①竪穴住居

この時期の竪穴住居は９棟検出した。東地区では２棟を検出したが、ＳＨ 3029 は長辺 7.4 m、短辺 7.2 mとほぼ方形の大型住居である。同じような大型住居は西地区にも存在する。調査区の西端に位置するＳＨ 3280 が長辺 6.6 m、短辺 6.2 mの規模である。また、北端にはＳＨ 3347・3350・3353・3359・3430の５棟が重複している。

②掘立柱建物

掘立柱建物は西地区で１棟、東地区で４棟検出した。調査区内に点在し、棟方向などの規則性はみられない。

③土師器焼成坑

この時期は北野遺跡で土師器生産が終焉をむかえる時期である。焼成坑は 14 基検出されている。

SF3092　長軸2.85m、短軸1.45m、現状の深さは奥壁部で30㎝、先端部で17㎝の規模で、奥壁・側壁とも直線的である。このような直線的な特徴を示す焼成坑は奈良時代に多い傾向がある。床面は奥壁部に比べて先端部がわずかに高いだけでほぼ平坦である。先端部の50㎝ほどを除き、被熱を受け、床面、壁面とも赤く堅く焼けている。その厚さは最大６㎝ほどである。

遺物の出土状態は奥壁部を中心に遺物が集中する傾向があるものの全面にみられる。下半部が正立した状態で床面に接し、上半部はその上に折れ重なるもの、あるいは横に倒れた状態のものなどがある。ほぼ完形に接合されるものが多い。これらの土器はほぼ焼成状態を保っていたと推定されるが、なかには口縁部、体部とも一部を欠くものもある。このため、廃棄土坑として捨てられた可能性も残される。

出土遺物は有孔広口筒形土器のほかに土師器長胴甕の破片がいくつか出土している。これらのなかには、接合する二つの破片のうち、一方は割れた断面まで二次焼成により黒変しているが、一方は全くその痕跡がないものがある。焼成の際に土器を安定させるかませ材のように使用した可能性も考えられる。

また、有孔広口筒形土器の時期を推定する重要な遺物として、口縁部の一部のみを欠く須恵器長頸瓶(397)が出土している。その出土状況は、土師器焼成坑の上にこの須恵器を伴う土坑が重複していたが、その確認ができずに同時に掘り下げてしまったといった状態ではなく、土師器の上に載せられた状態を示している。北野遺跡全体でも須恵器の出土例は少なく、しかも杯身・杯蓋の破片が多い。有孔広口筒形土器の用途は不明ながら特殊な土器である。

焼成後取り上げられることなく廃棄されたか、あるいは二次的に廃棄されたかはともかく、その特殊な土器を廃棄するという行為に伴い、土師器の上に置かれたと想定しておきたい。

（７）平安時代以降の遺構

①掘立柱建物

西地区の東端でＳＢ3425が検出された。隣接するＳＢ3426は出土遺物がなく時期不明であるが同時期の建物かもしれない。平安時代末期の建物である。

②井戸

ＳＥ 3267 が１基だけ検出されている。経 2.2 m の楕円形の素掘りの井戸で深さは約３m。ＳＢ 3425 に伴うものと想定される。

③墓

方形で四周を溝で囲む遺構である。溝の外側で一辺７m、内側で一辺4.8m。溝は底部で幅40cm、上端で幅 1.2 m前後の逆台形である。溝埋土の遺物から 16 世紀の遺構と考えられる。

（８）時期不明の遺構

竪穴住居 10 棟、土師器焼成坑 12 基、掘立柱建物２棟などがある。削平により床面の焼土しか残らない焼成坑や出土遺物がなく時期決定ができないものである。

遺構番号	規模			時代	棟方向	柱間寸法		備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)			桁行(m)	梁行(m)	
3421	3×1	3.6	2.6	弥生	E34° N	1.2	2.6	
3422	2×1	2.8	2.1	弥生	E55° N	1.4	2.1	
3423	3×2	4.2	3.2	弥生	E44° N	1.4	1.6	
3424	2×1	2.4	2.1	弥生	E61° N	1.2	2.1	
3048	2×2	2.6	2.6	奈良	N53° W	1.3	1.3	
3073	5×4	6.5	4.2	奈良	N42° W	1.3	1.3	
3420	3×3	4.5	3.9	奈良	N9° E	1.5	1.3	
3428	3×2	6.0	5.4	奈良	E29° N	2.0	2.0	
3425	4×3	8.8	6.0	平安末	E13° N	2.2	2.0	
3426	3×2	4.8	4.5	不明	N24° W	1.5	2.4	
3427	3×3	3.0	2.7	不明	E25° N	1.0	0.9	

第9表 第3次調査掘立柱建物一覧表

2. 遺物

遺物は整理箱で約 400 箱出土している。大半は土師器焼成坑や土坑から出土している土師器であるが、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器もある。

（１）弥生時代後期の遺物

第２次調査では後期を３時期に区分したが、今回の調査でそれに先行する時期の土器がＳＨ 3017 から出土している。床面直上で遺物が出土していることから、きわめて一括性の高い遺物といえる。壺（１・２）、無頸壺（３・４）、高杯（５～８）、台付甕（９～ 14）が出土しており、弥生時代後期前葉に位置づけられる。

（２）古墳時代初頭の遺物

竪穴住居の大半が古墳時代初頭であるためこの時期の遺物は多い。高杯はＳＨ 3077 の(90)やＳＨ 3152 の(134・135)のように脚部の内彎化傾向が強いが、ＳＨ 3300 の(144・145)のような短く直線的なものへと変化する。甕はＳ字状口縁台付甕が少なく、く字状口縁台付甕が大半であるという特徴を示す。

（３）古墳時代後期の遺物

この時期の遺構は少なく遺物も少ないが、ＳＨ 3200 から、壺・高杯・甕が出土している。高杯は脚部裾が屈折するもの(166・167)などがある。甕はＳ字状口縁部台付甕(172・173)などがある。

（４）古墳時代前期の遺物

この時期から土師器生産が始まる。土師器椀・甕、須恵器杯蓋・身などが出土している。この時期の土師器甕は口縁部の屈曲が弱く、上方に立ち上がり、端部は上下に肥厚する面を持つものが多い。また、口縁部の器壁の厚さは体部とさほど変化はなく。７世紀以降の甕と比べると薄い特徴を示す。さらに、口縁部も長い。

（５）飛鳥時代の遺物

焼成坑の増加とともにこの時期の遺物も多くなる。７世紀前半の甕は、体部に比べ口縁部が肥厚し、上方に立ち上がる傾向が強い。端部は面をもつ。７世紀後半のものは、口縁部の肥厚が顕著でなくなり、上方に立ち上がるが、角度が弱くなり、口縁端部が上方につまみ上げられる傾向にある。小型の甕は口径に対する器高の比が小さくなってきて、これまでの寸胴気味のものから球形に近いものが現れる。

（６）奈良時代の遺物

この時期には北野遺跡で特徴的な遺物がみらる。ＳＦ3092・3360で出土している有孔広口筒型土器である。SF3092から出土した有孔広口筒形土器は16個体であるが、その法量は一定ではなく、口径は24.2cm～30.6cm、器高は27.0cm～36.5cm、底径は12.6cm～17.0cmの範囲を示す。器高を口径で除し100をかけた径高指数で現すと、104～109の範囲（382～385・393・396)、112～116の範囲（381・386・394・395)、119～125の範囲（387～390)、130（392)、151（391）に分かれる。色調は橙5YR7/6 や浅黄橙10YR8/3などの橙色系である。底部は平底で、体部から口縁部は粘土の帯を内面が重なるように輪積みして作っている。内彎する筒形の体部は（396）を除き、一度上方で絞り込んだ後に広口の口縁部が外反する。絞り込みの位置も器高の下１/３くらいのもの（381～383・385・388など）もあれば、１/２くらいのもの（386）もあり一様ではない。内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整（全面のものと上半のみのものがある）を行うものが多いが、(394・395）はナデあるいは板ナデのみでハケメ調整を行わない。外面は縦方向のハケメ調整の後、縦方向のヘラケズリ調整を行う。また、底部付近には横方向のヘラケズリを行う。一部例外があるが、縦方向のヘラケズリは下から上へ、横方向のヘラケズリは右から左へ削っている。口縁部はヨコナデを施す。底部の孔は焼成前に外方から穿孔され、(393）の9.2cmを除けば、直径７cm前後のものが多い。

伴出した須恵器長頸瓶（397）の産地は不明であるが、その形態から８世紀初め頃のものと想定される。これを根拠にすれば有孔広口筒形土器の年代も８世紀の前半でも古い時期と考えられる。

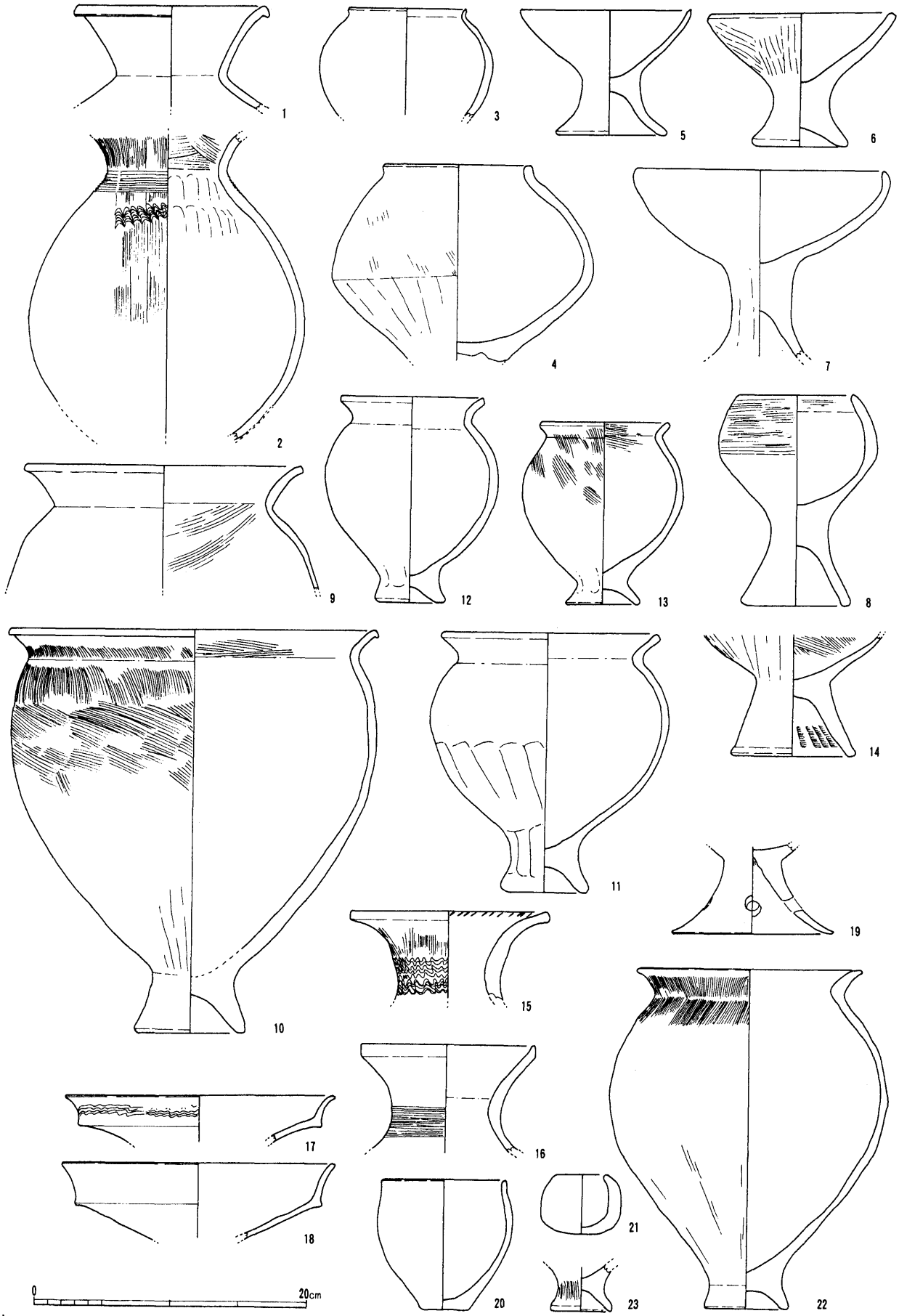
有孔広口筒形土器には第３次調査 SF3360 から出土している器高の低いものがある。体部はやや内彎し、口縁部が短く外反するものである。(401）の口縁部内面にはヘラ描きで「卅」と書かれている。伴出遺物がなく、時期決定が難しいが、SF3092と同じ頃であれば斎宮跡で出土している文字資料より古く位置づけられる。

（７）その他の遺物

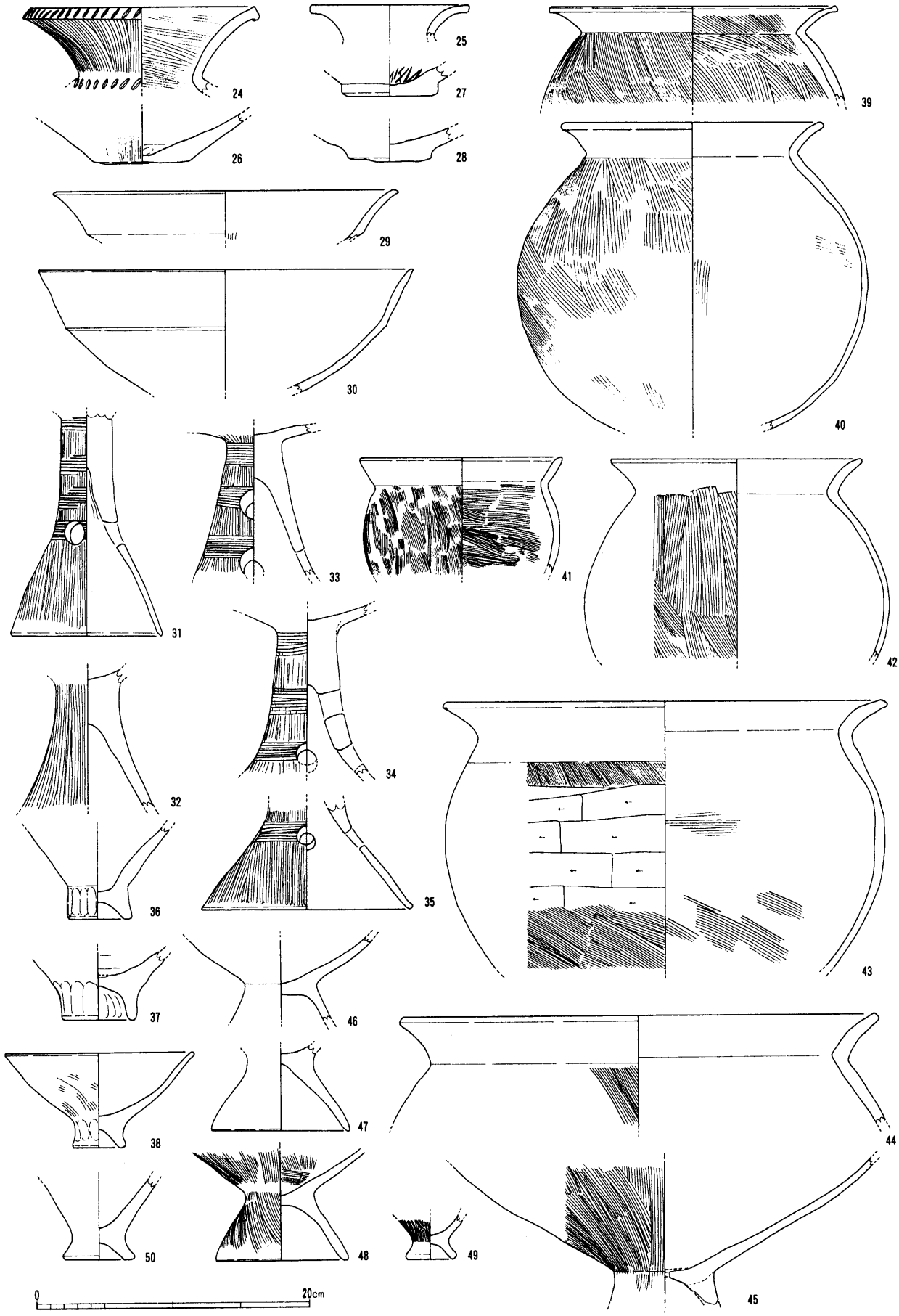
ＳＫ 3388(296)とＳＦ 3298(380)から用途不明の土製品が出土している。どちらも板状の粘土を三角形に折ったようなものでナデ調整のほか、一部ハケ調整が残存する。

	遺構名	報告書No.		遺構名	報告書No.
第47図	SH3017	1～14	第57図	SK3170	271～277
	SK3199	15～23	第58図	SK3097	278～291
第48図	SH3277	24～50	第59図	SK3388	293～297
第49図	SH3067	51～65		SK3160	298
	SH3072	66～83		SK3332	299～309
第50図	SH3077	84～106	第60図	SF3059	310～313
	SH3248	107～114		SF3340	314・315
第51図	SH3201	115～125		SF3378	316
	SH3152	126～137		SF3055	317～319
	SH3300	138～145		SF3056	320
第52図	SH3433	147		SF3373	321
	SH3266	148～150		SF3333	322
	SH3328	151～153		SF3057	323～327
	SH3087	154～161		SF3375	328～333
	SH3054	162・163	第61図	SF3352	334～357
	SH3200	164～175	第62図	SF3013	358～372
第53図	SH3024	176～180		SD3021	373～376
	SH3029	181～185		SF3016	377・378
	SH3058	186～198		SD3012	379
	SH3084	199～206		SF3298	380
	SH3226	207～211	第63図	SF3092	381～392
第54図	SK3170	212～252	第64図	SF3092	393～397
第55図	SK3170	253～263		SF3360	398～401
第56図	SK3170	264～270			

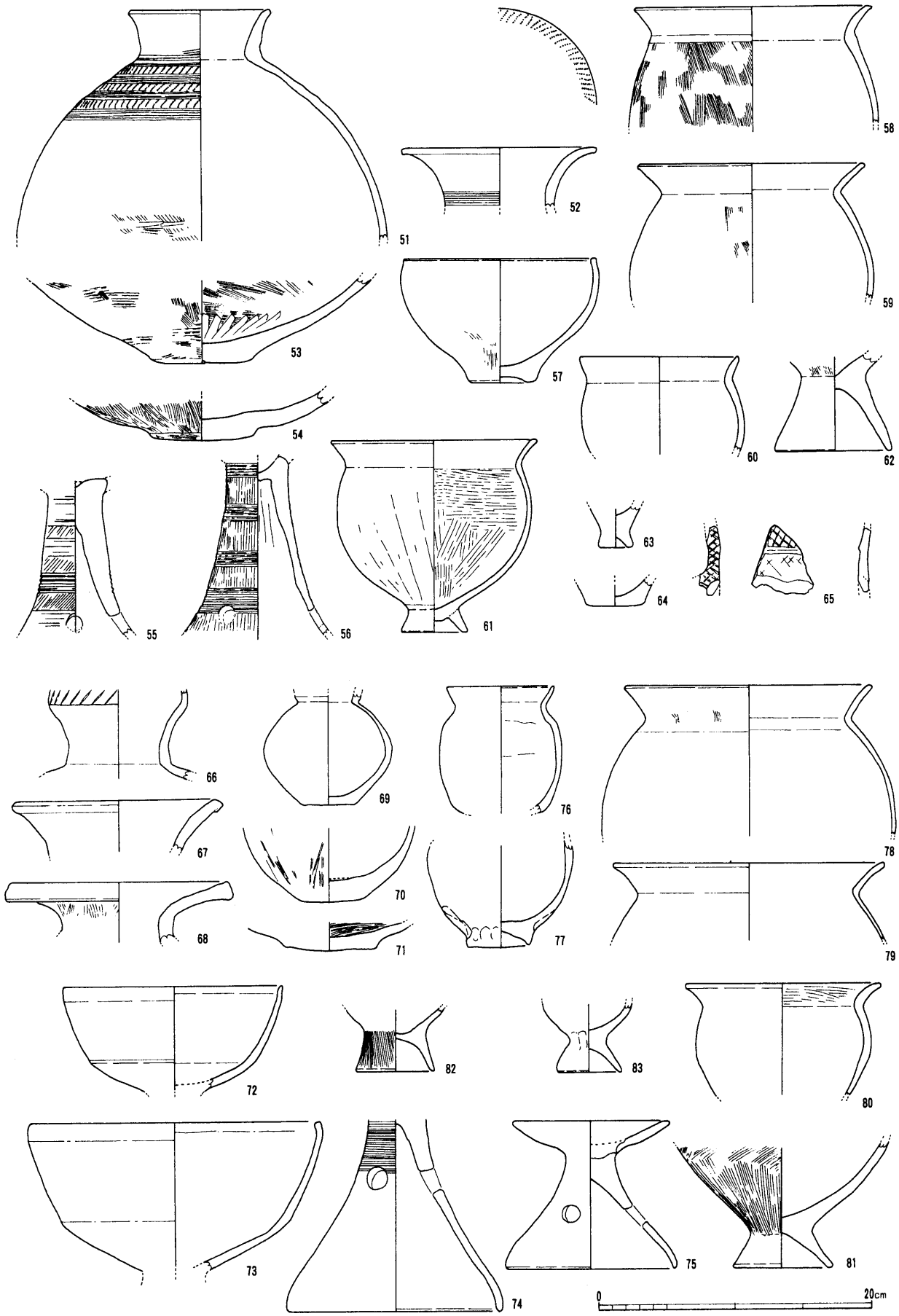
第10表　第3次調査出土遺物対照表



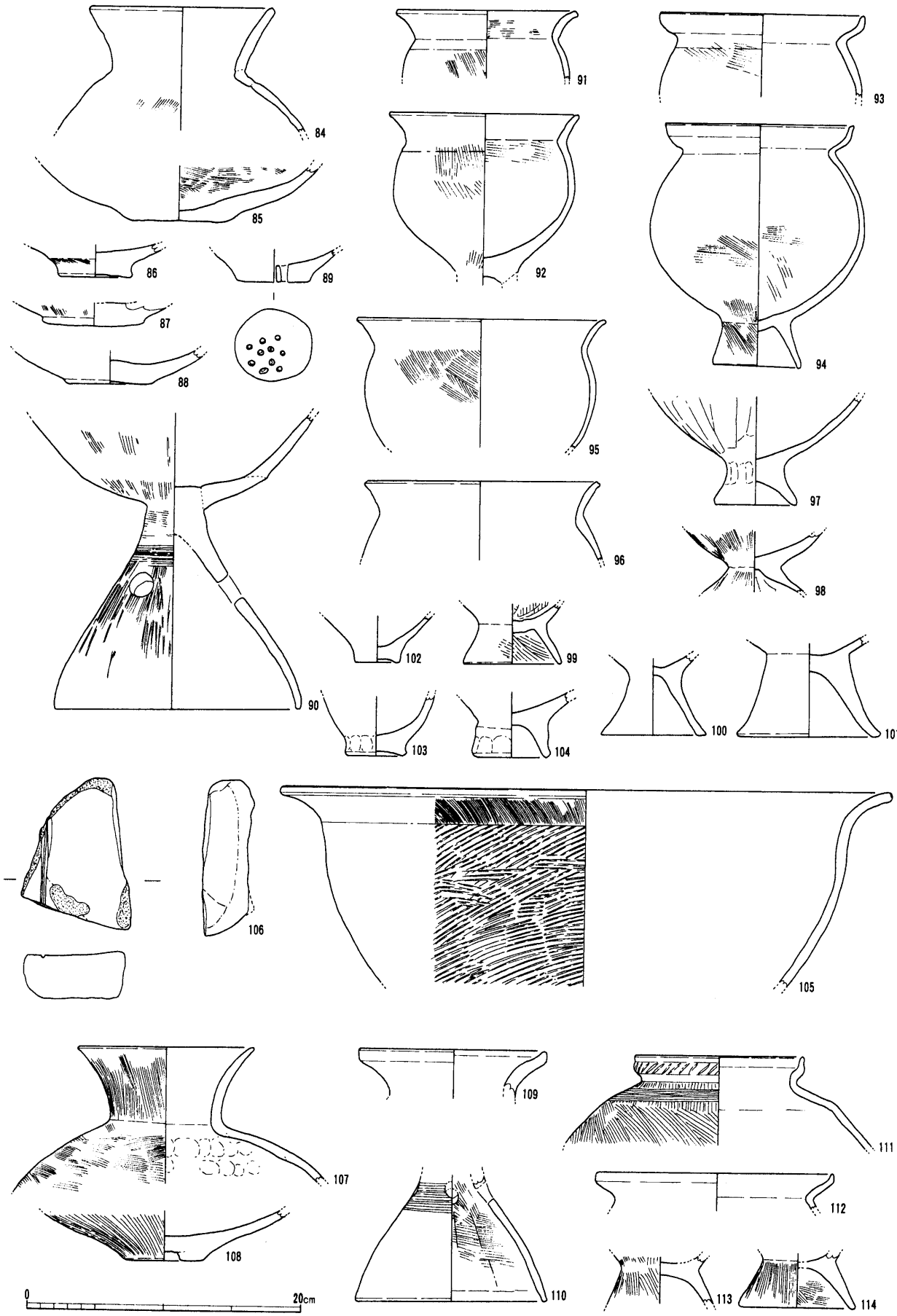
第47図　出土遺物実測図(1:4)



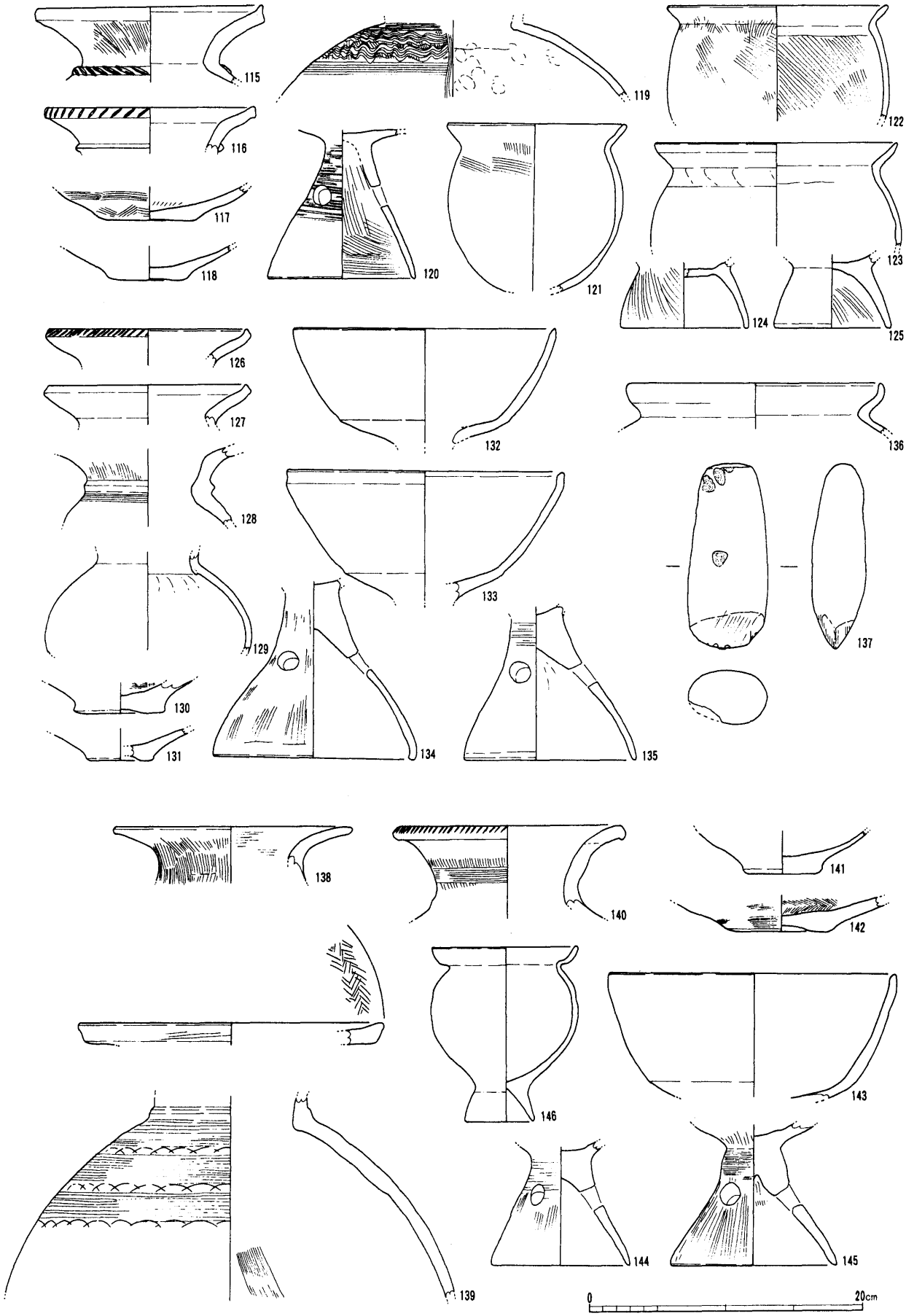
第48図　出土遺物実測図(1:4)



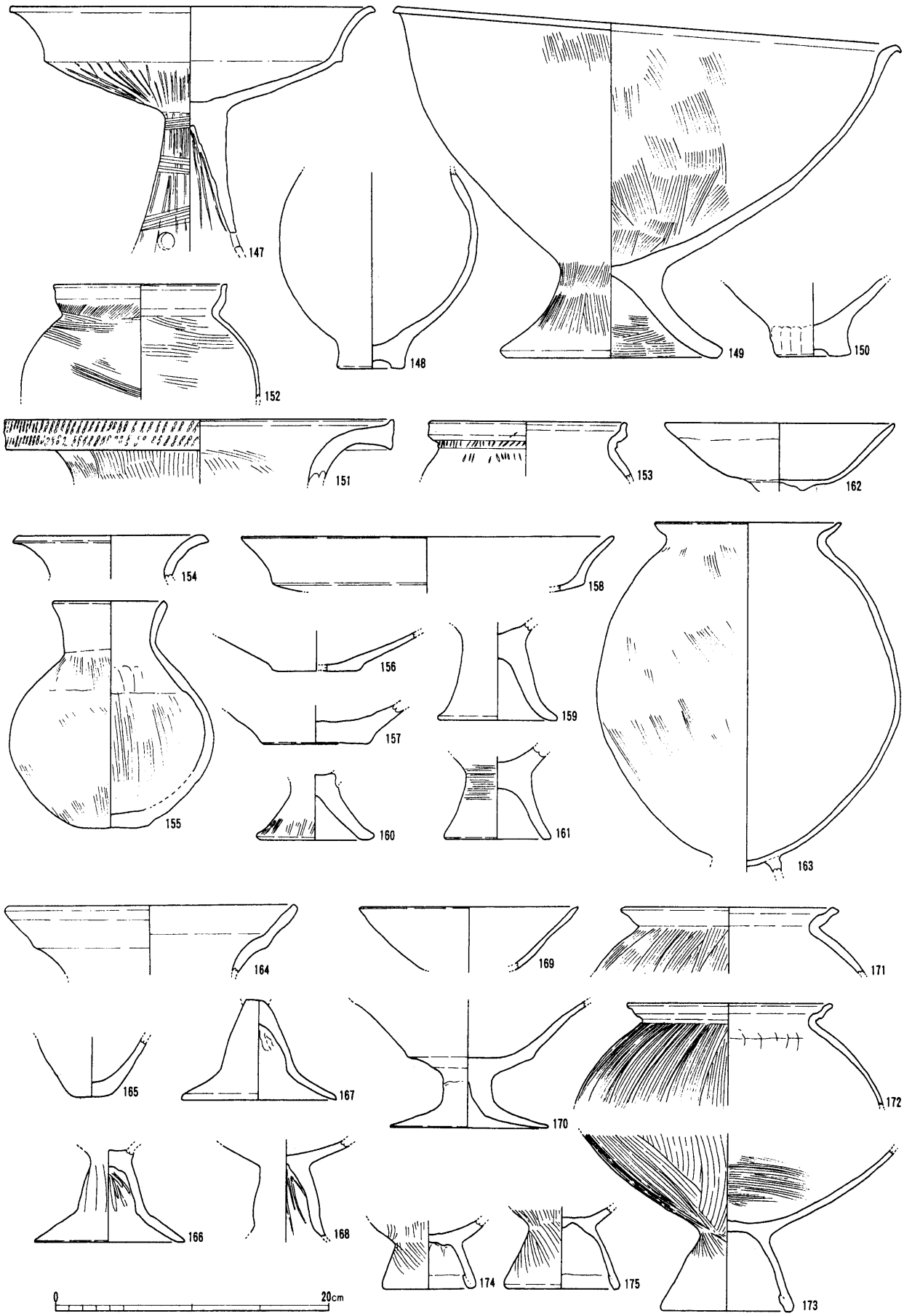
第49図　出土遺物実測図(1:4)



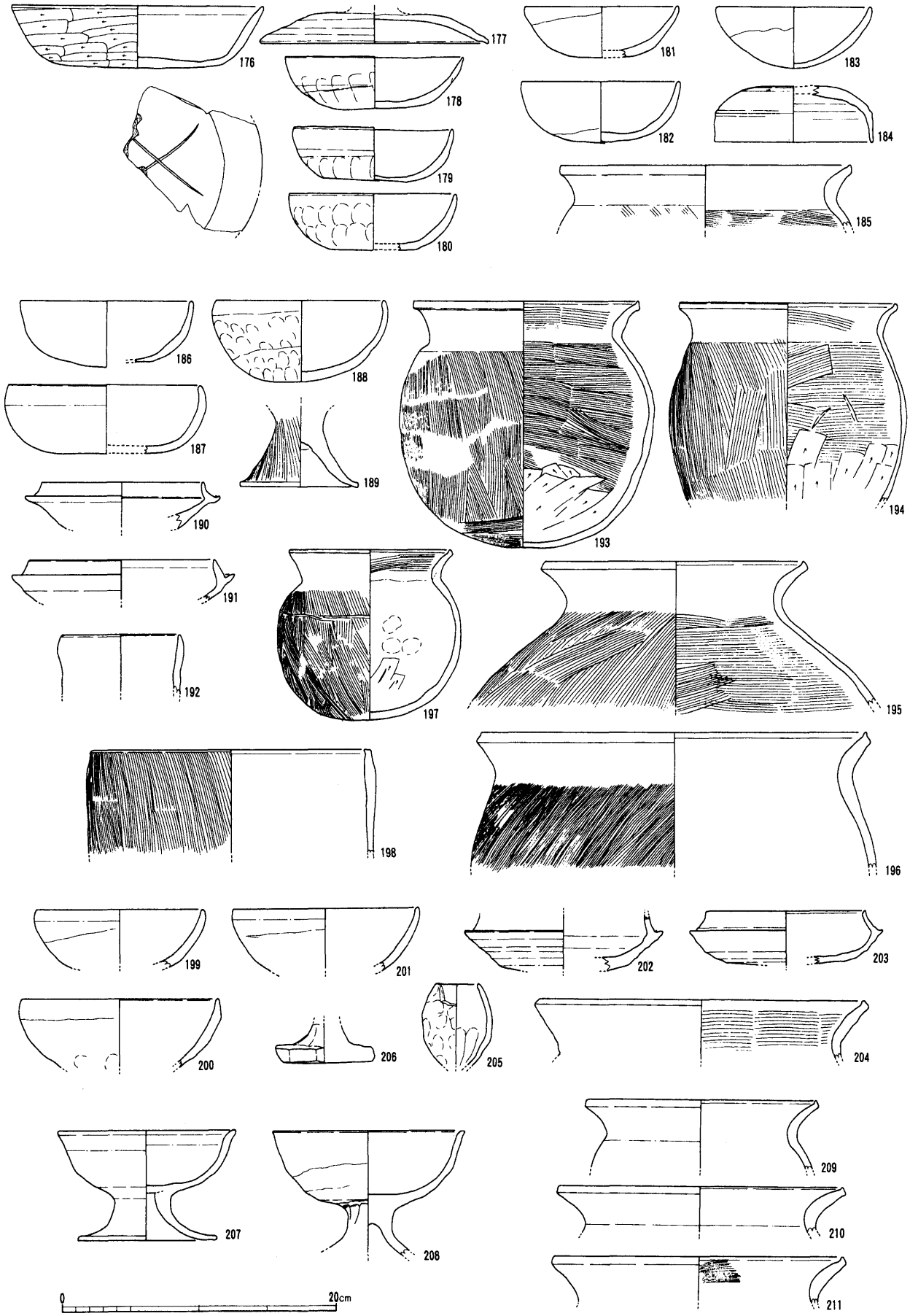
第50図　出土遺物実測図(1:4)



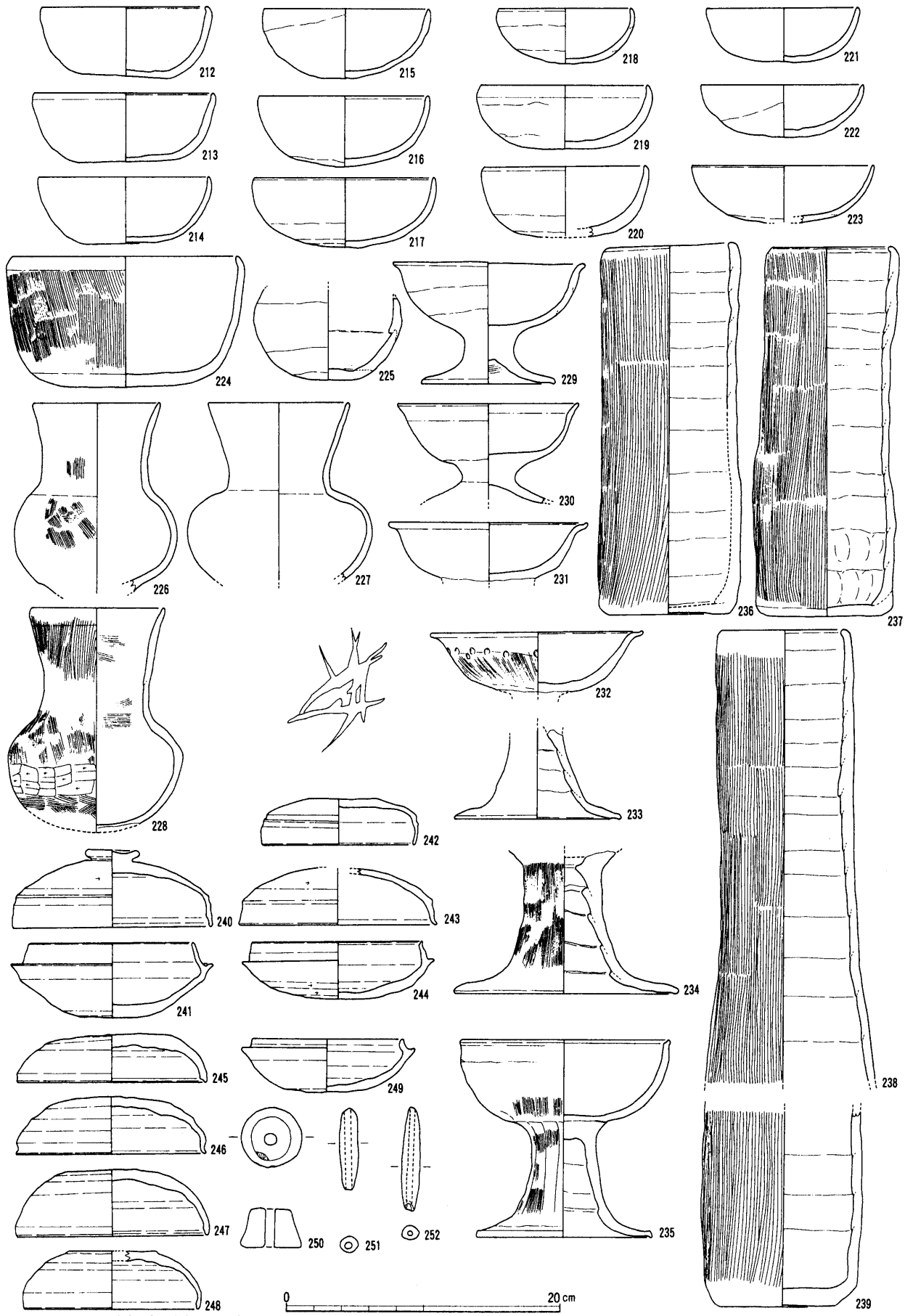
第51図 出土遺物実測図(1:4)



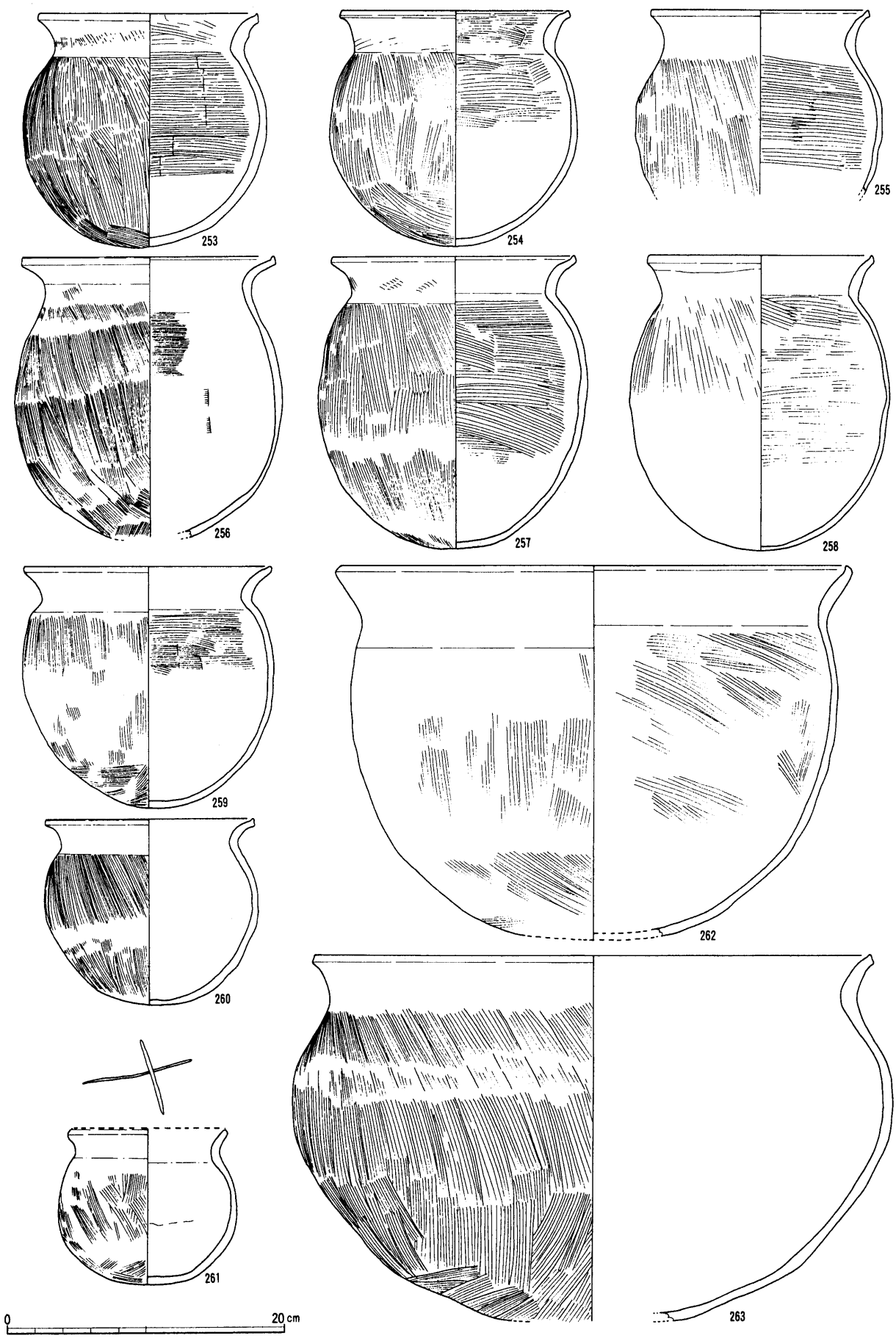
第52図　出土遺物実測図(1:4)



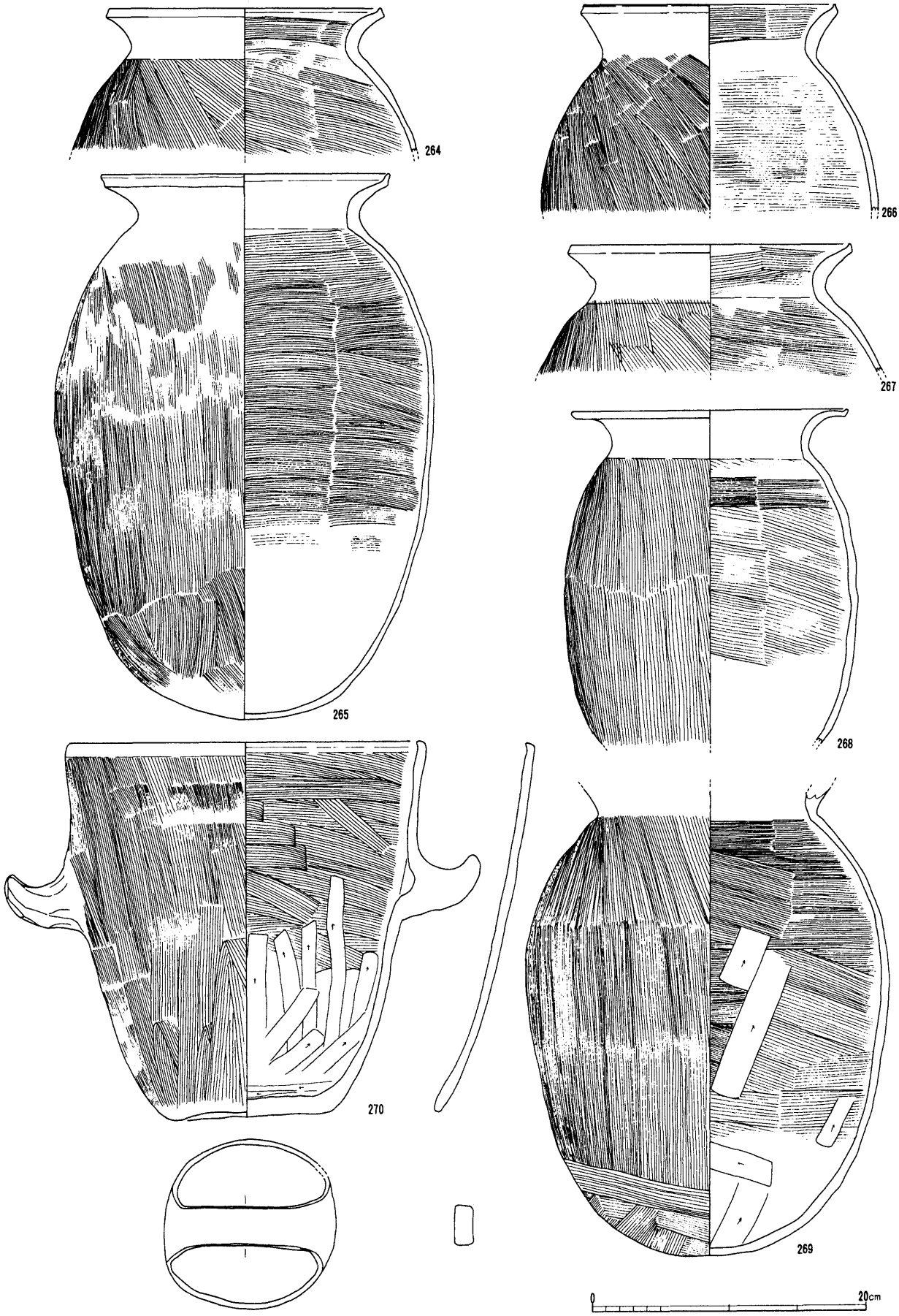
第53図　出土遺物実測図(1:4)



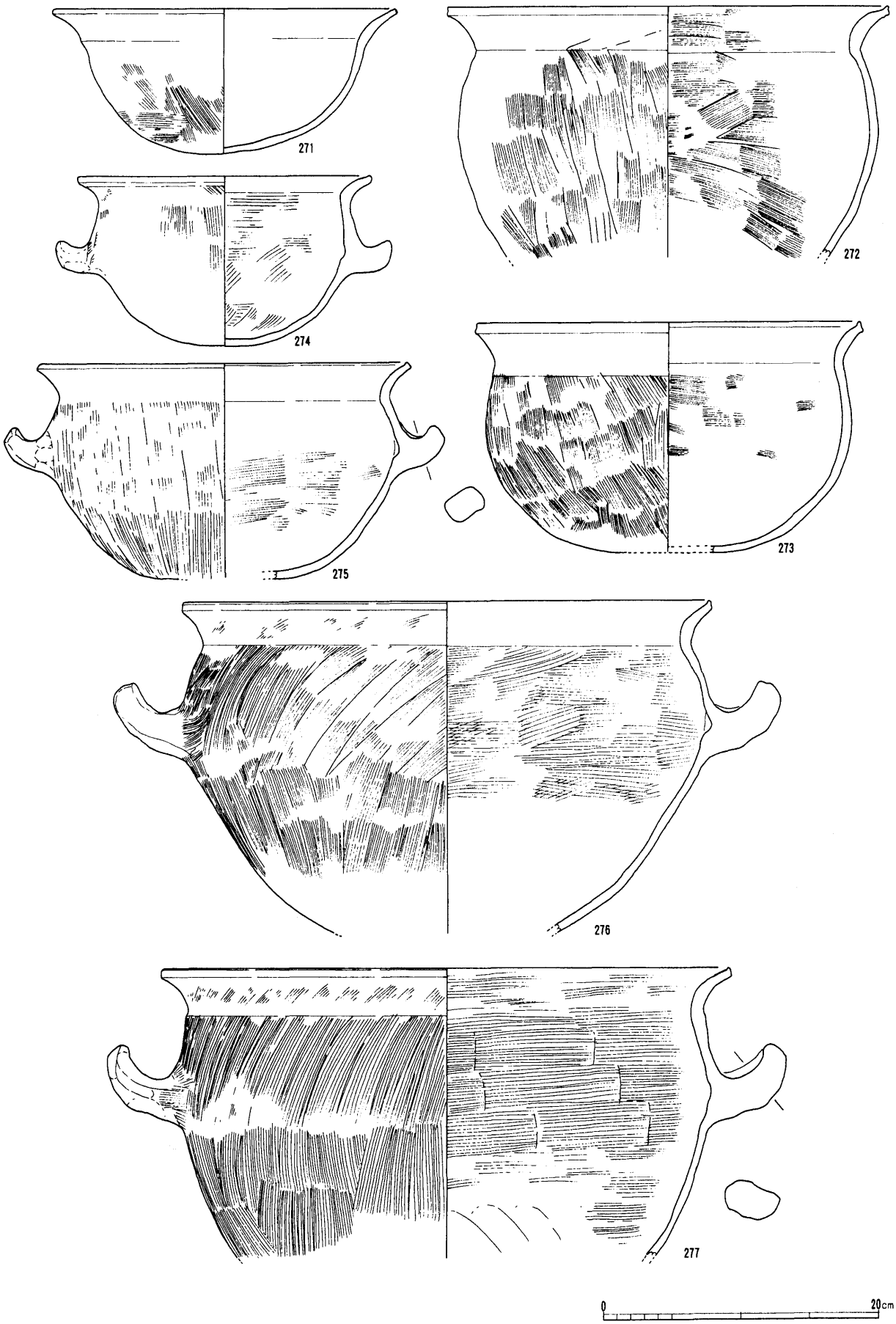
第54図　出土遺物実測図(1:4)



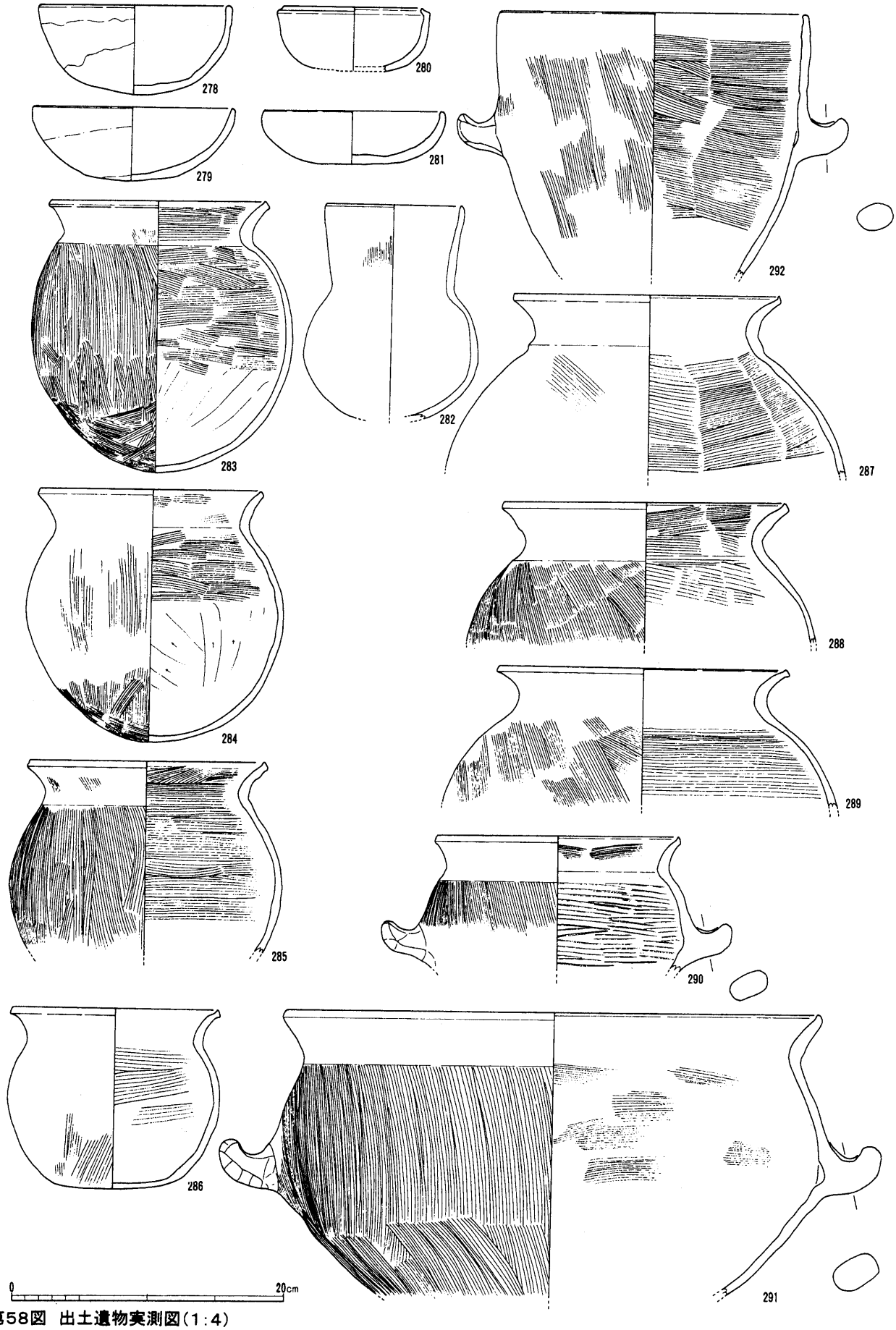
第55図　出土遺物実測図（1：4）



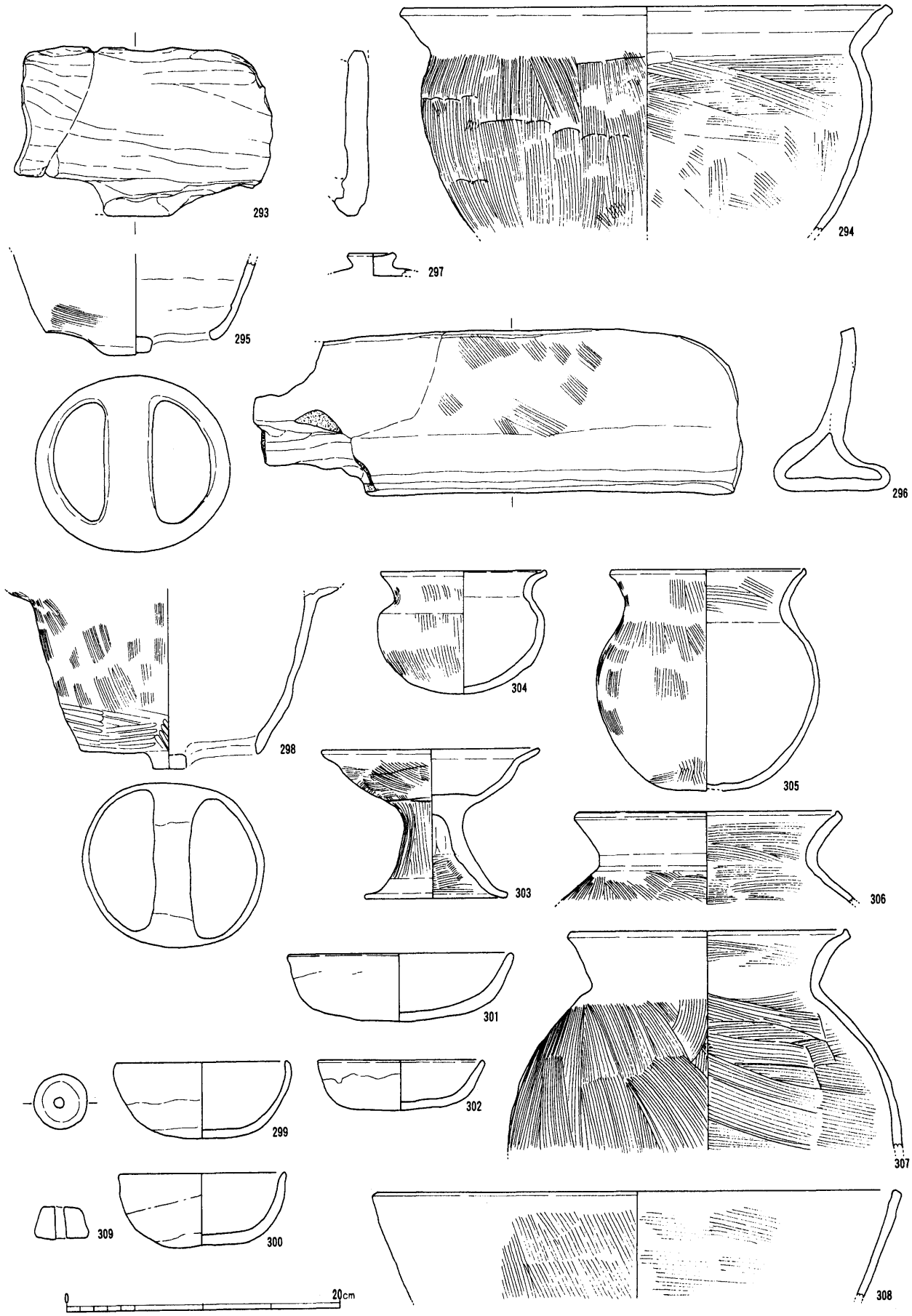
第56図　出土遺物実測図(1:4)



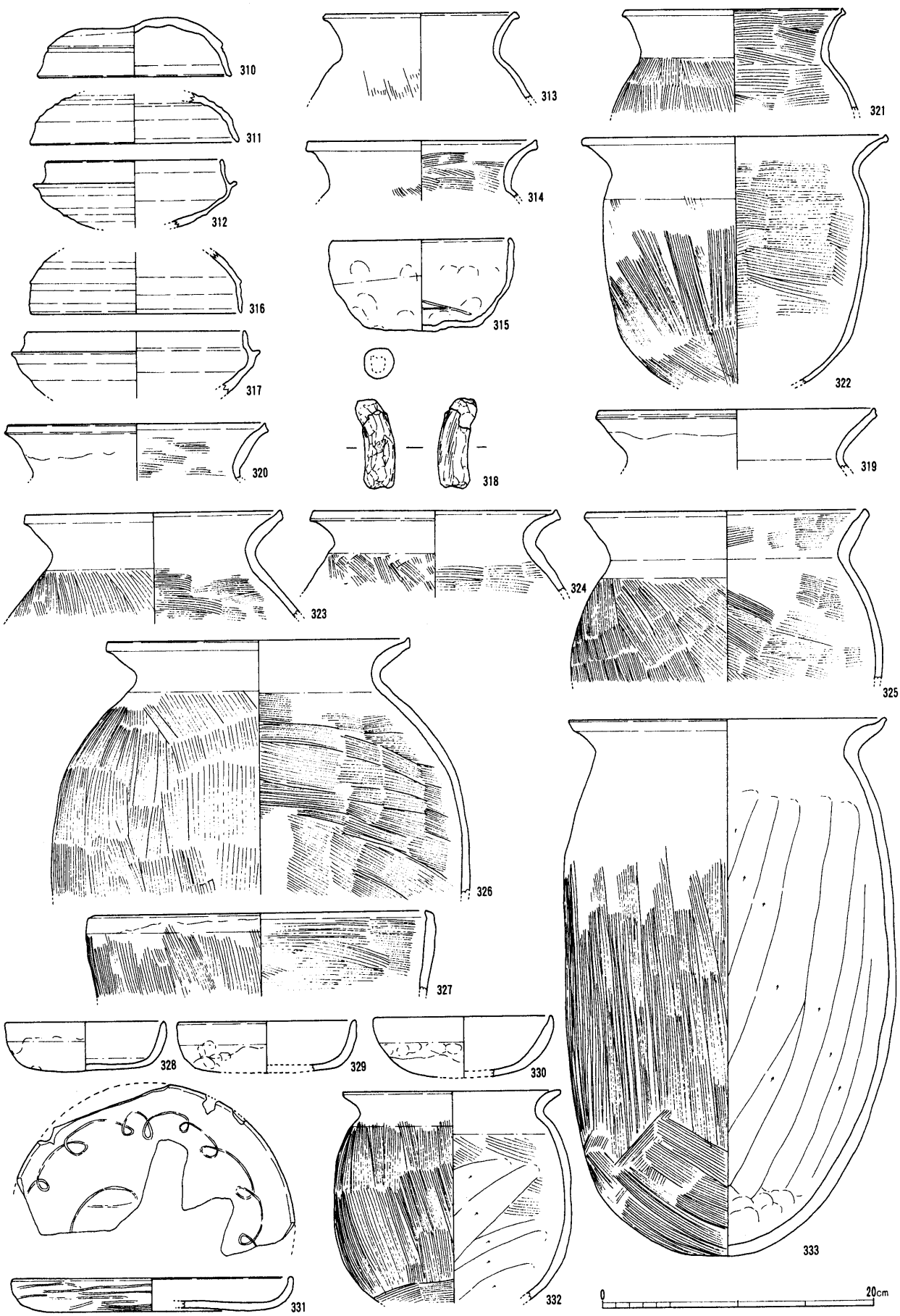
第57図 出土遺物実測図(1:4)



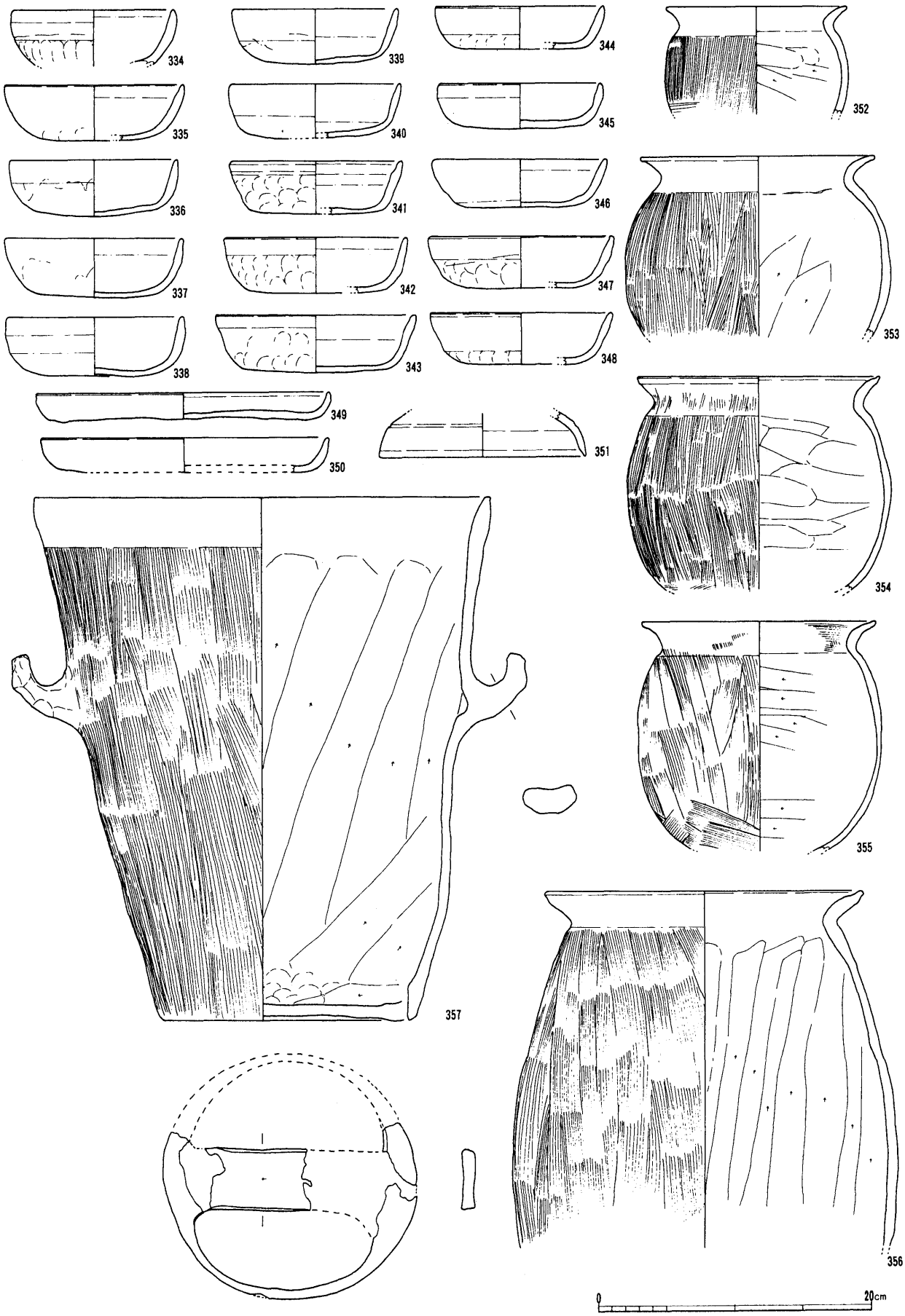
第58図　出土遺物実測図(1:4)



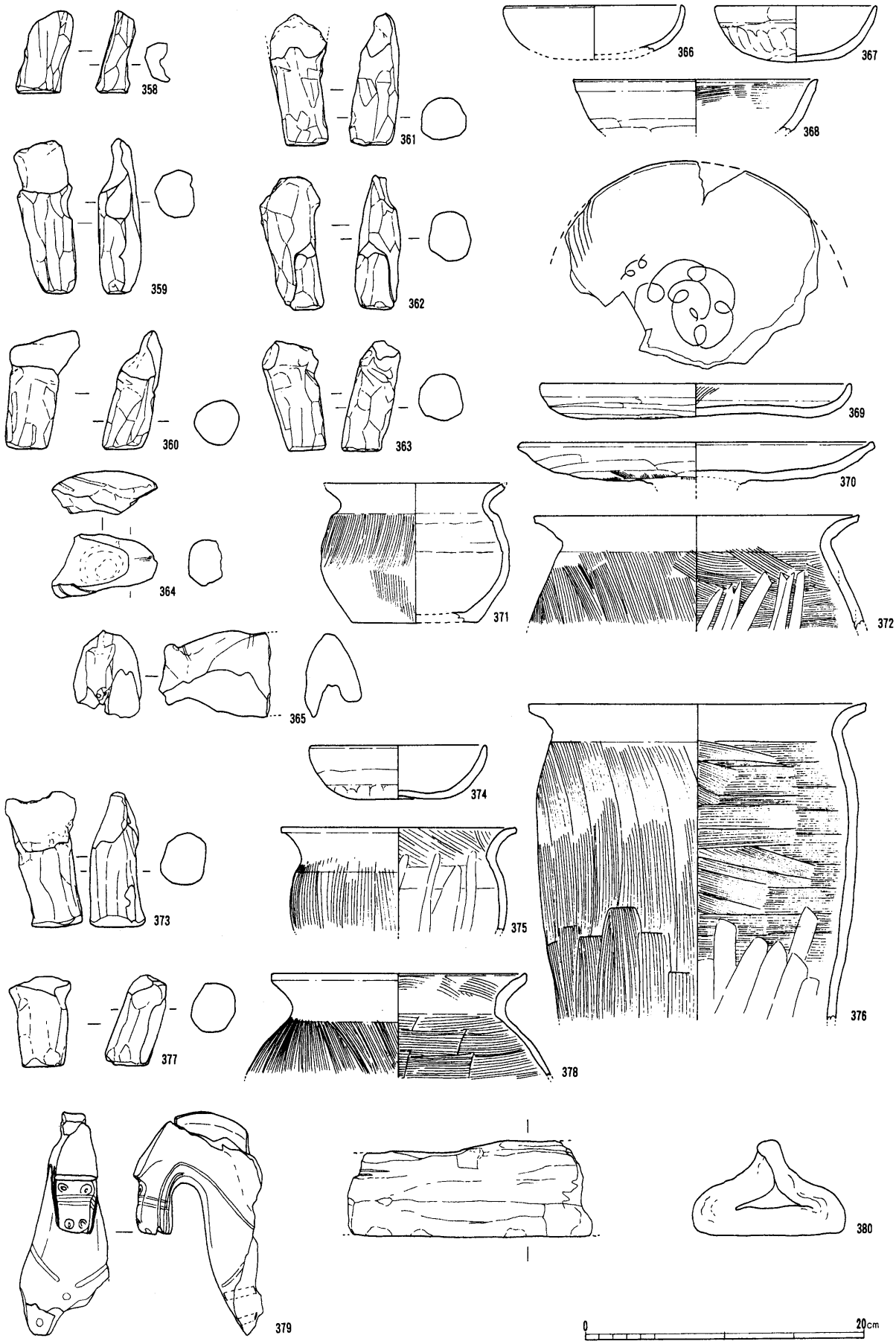
第59図　出土遺物実測図(1:4)



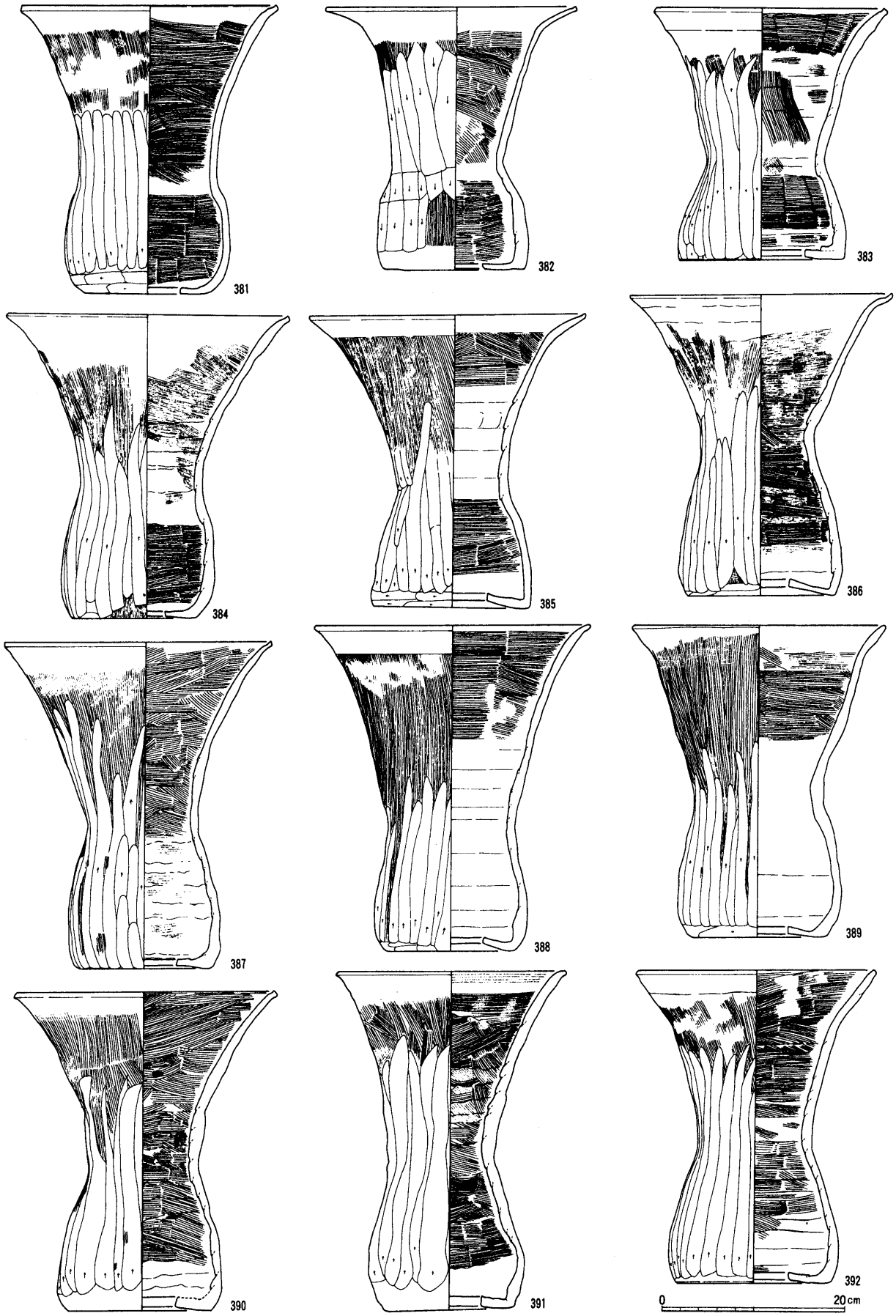
第60図　出土遺物実測図(1:4)



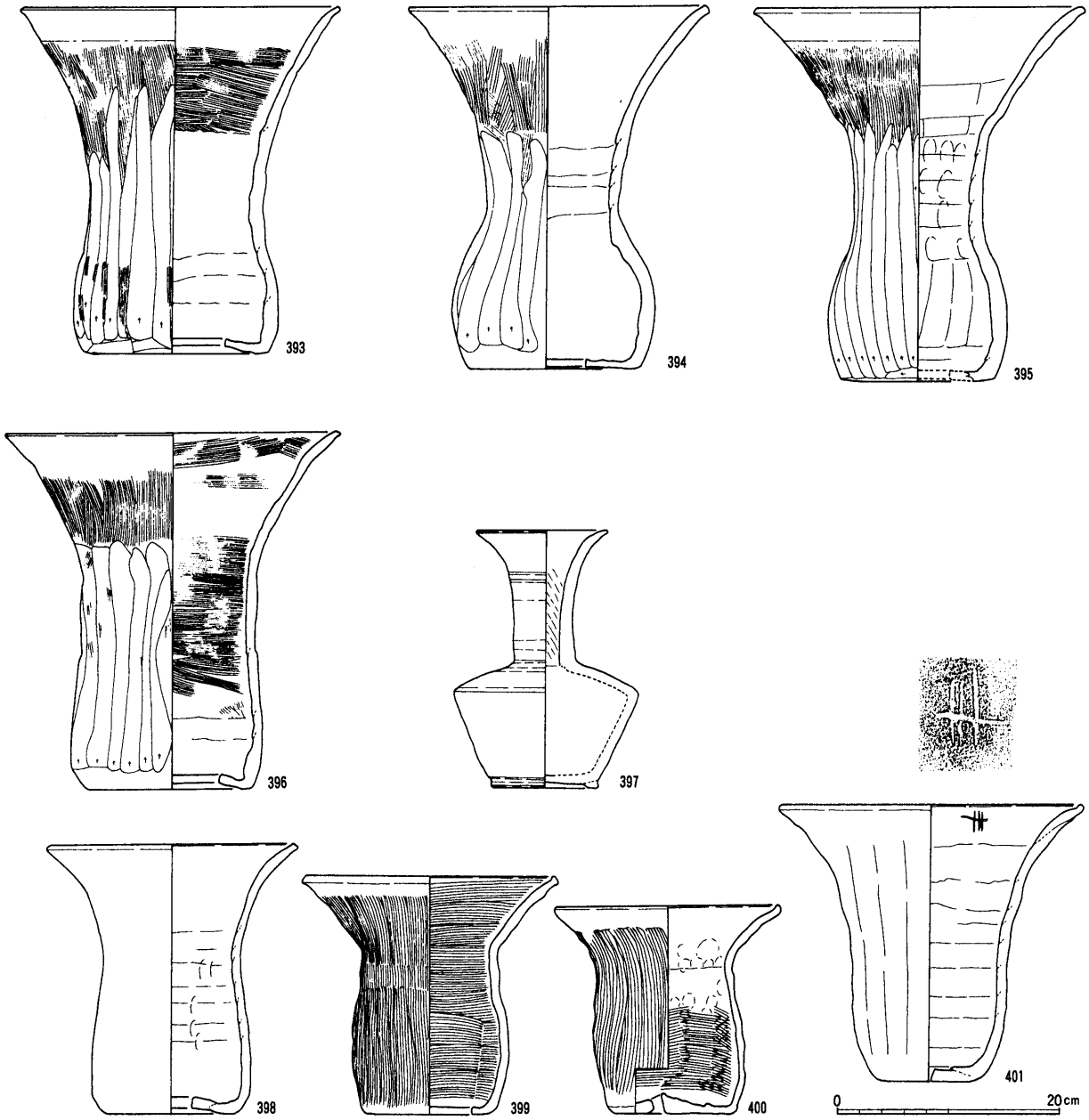
第61図 出土遺物実測図(1:4)



第62図　出土遺物実測図(1:4)



第63図　出土遺物実測図(1:6)



第64図 出土遺物実測図(1:6)

V　第４次調査

第４次調査は、遺跡の南西部にて行った。調査地点の標高は、l・m23グリッドあたりが15.1mと最も高く、東・南・北に行くにしたがって下がっていく。

1．遺構

（1）弥生時代中期の遺構

ＳＨ4079　小規模な竪穴住居である。主柱穴や周溝は検出できなかった。埋土から壷（1～3）、甕が出土した。北野遺跡では唯一の弥生時代中期の遺構である。

（2）弥生時代後期から古墳時代前期の遺構

①竪穴住居

ＳＨ4032　平面形は隅丸の長方形である。南壁の中央付近に貯蔵穴を持つ。
埋土から壷、甕（4～6）、高杯（7）が出土した。

ＳＨ4087　平面形は隅丸の長方形である。隣接するＳＨ4032と較べるとやや小規模である。東壁の中央付近に貯蔵穴を持つ。南隅から排水溝への掘削途中の暗渠がある。埋土から壷、甕（8・9）、高杯（10）が出土した。

ＳＨ4100　第３次調査のＳＨ3396と同一の遺構である。平面形は隅丸の方形で、主柱穴や南側の周溝が重複しているので、2回の建替えが確認できる。南壁の中央付近に貯蔵穴を持つ。東隅から暗渠が掘られ、排水溝（ＳＤ4117）とつながる。この排水溝は３次調査ＳＨ3300の排水溝に接続しする。この排水溝はＳＨ4107に切られている。埋土から壷（11～15）、甕（16・17）、高杯（18）が出土した。

ＳＨ4107　第３次調査のＳＨ3391と同一の遺構である。平面形は隅丸の長方形である。主柱穴の重複から１回の建替えが確認できる。南壁の中央付近に貯蔵穴を持つ。埋土から壷（19）、甕、高杯（20）、砥石が出土した。

ＳＨ4116・4125・4126・4130・4170・4174　重複して検出した竪穴住居群。ＳＨ4116は第３次調査ＳＨ3379、ＳＨ4126は第３次調査ＳＨ3383と同一の遺構である。いずれの竪穴住居も平面形は隅丸の方形に近い。ＳＨ4126は主柱穴から１回の建替えが確認できる。ＳＨ4126は南壁のやや西よりに、ＳＨ4130とＳＨ4170は南壁の中央付近に貯蔵穴を持つ。遺構の切り合いから、ＳＨ4170→ＳＨ4125・ＳＨ4174？→ＳＨ4130→ＳＨ4116・ＳＨ4126という前後関係が想定できる。ＳＨ4125の埋土から壷（21・22）、甕（23）が、ＳＨ4130の主柱穴から甕（24）、排水溝から高杯（25）が出土している。

②掘立柱建物

ＳＢ4171・4172・4176・4177　いずれも２間×２間あるいは２間×１間の小規模な建物である。柱穴からの遺物はない。

（3）古墳時代後期から奈良時代の遺構

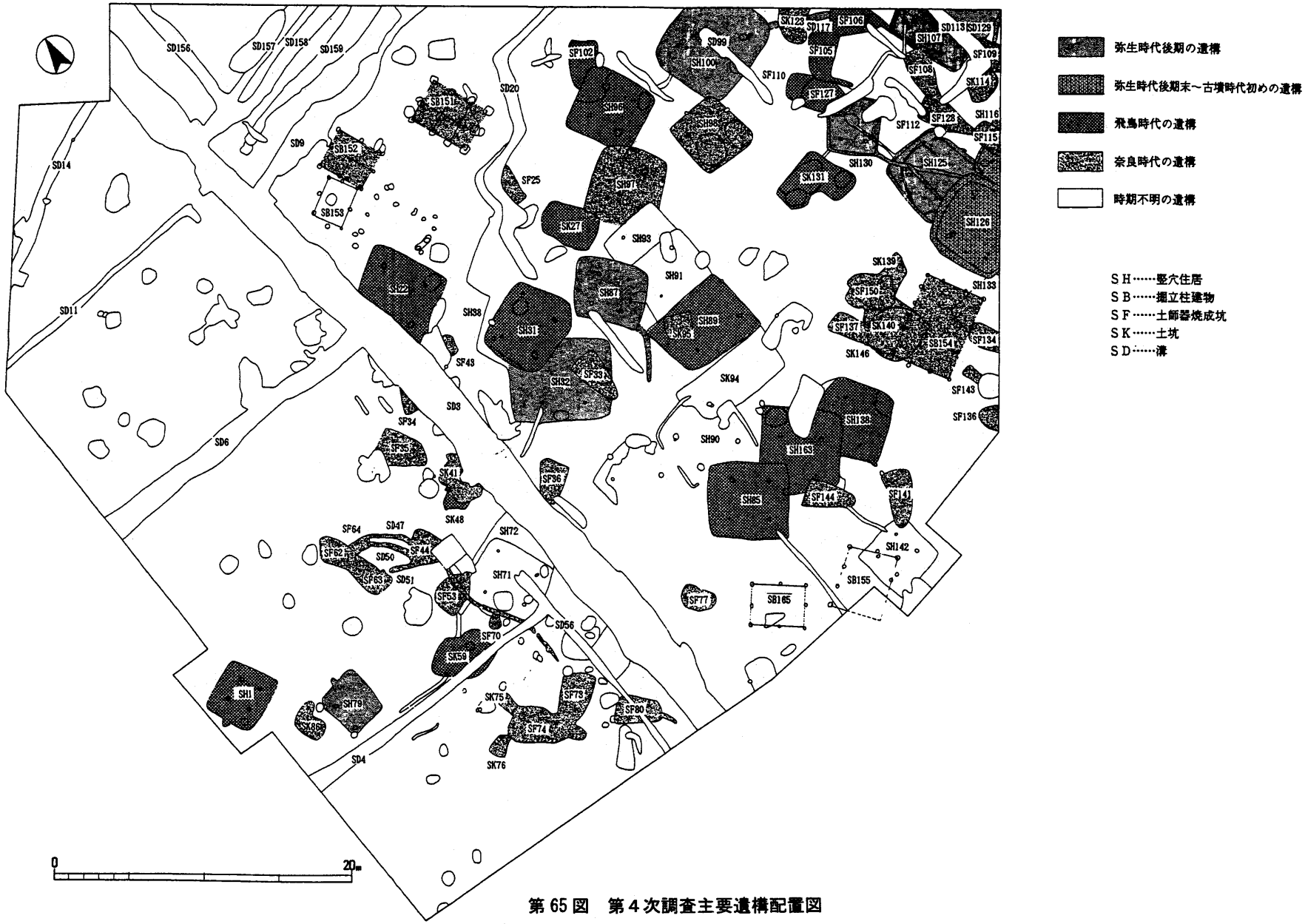
①竪穴住居

ＳＨ4001　平面形は隅丸方形である。西壁の中央付近に竈を、その南に貯蔵穴を持つ。埋土から土師器椀（40）・長胴甕（41・42）・把手・不明土製品（44・45）が、竈埋土から不明土製品（43）が出土した。

ＳＨ4022　平面形は方形である。東壁の中央付近に竈を、その南に貯蔵穴を持つ。貯蔵穴埋土から土師器椀（46）・甕（47～49）・長胴甕（50）が、竈埋土から土師器甕（51～53）・直口壷（54）が出土した。

ＳＨ4031・4038　平面形は隅丸の方形である。竈・貯蔵穴を持たない。２つの建物の主軸方向が同一であるので、建替えによるものと考えられる。ＳＨ4031の主柱穴から土師器椀（55）が、埋土から土師器甕（56）・鍋（57）が、ＳＨ4038の竈埋土から土師器椀（58・59）・甕（60）・長胴甕（61）が出土した。

ＳＨ4071・4072　２棟の竪穴住居のほか、溝（Ｓ



第 65 図　第４次調査主要遺構配置図

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	貯蔵穴	炉	排水溝	暗渠	時代	出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ										
4032	IJK25-26	6.8	5.5	0.15	N30° E	○	○	○	×	×	×	〃	高杯、壷、甕	SH4031・4038、SF4033に切られる
4079	g 31	3.8	3.0	0.26	N16° W	×	×	×	×	×	×	弥生中期	壷、甕	
4087	k 24-25	4.8	4.2	0.19	N40° E	○	○	○	×	○	○	古墳初頭	高杯、壷、甕、台付甕、S字甕、受口	SH4031・4038に切られる
4100	lm19-21	6.7	5.8	0.22	N24° W	○	○	○	○	○	○	〃	高杯、壷、甕、台付甕	SH3300と排水溝を共有。建替え2回有。
4107	pq20	6.0	5.6	0.22	N28° W	○	○	○	○	×	×	〃	高杯、壷、台付甕、受口甕、砥石	SF4109・4108に切られるSH4100・3300の排水溝を切る。建替え1回有。
4116	qr21-22	4.5	(4.3)	0.14	N32° W	○	○	×		×	×	〃	甕	SF4115に切られる
4125	p q 22-23	5.3	(5.0)	0.11	N0°	○	○	×	○	?	×	弥生後期	高杯、壷、甕、台付甕	SH4130の排水溝に切られる
4126	p q 23-24	6.1	5.7	0.16	N30° W	○	○	○	○	?	×	古墳初頭	高杯、壷、甕	SH4170・4125・4130の排水溝を切る。建替え1回有。
4130	OP21-22	4.0	3.5	0.06	N39° E	○	○	○	○	○	×	〃	高杯、甕	排水溝がSH4125を切
4170	pq22-23	4.1	3.8	0.14	N11° E	×	○	○	?	×	×	〃 ?		SH4130の排水溝に切られる
4174	op21-22	5.6	5.4	0	N21° W	○	○	×	?	○	×	古墳初頭		

第 11 表　弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居一覧表

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	貯蔵穴	竈	排水溝	暗渠	時代	出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ										
4001	de31-32	4	3.9	0.17	N43° E	○		○	○			古墳後期	H椀、甕、長胴甕、不明土製	
4022	gh24-25	5.3	(5.0)	0.22	N35° W	○	○	○	○			飛鳥	H椀、甕、長胴甕、直口壷	
4031	ji24-26	5.2	(4.2)	0.10	N38° W		○					飛鳥	H椀、甕、長胴甕、鍋	
4038	t25	5.6	5.0	0.10	N38° W	○	○					飛鳥	H椀、甕、長胴甕	
4071	ij29-30	5	4.7	0.16	N42° W	○	○	○				飛鳥	H甕、S杯身	
4072	ij28-29	(4.0)		0.27	N17° W	○	○					飛鳥？		
4085	m27-28	5.5	5.0	0.22	N30° E	○	○		○			古墳後期	H椀、甕、長胴甕、甑、壷	
4089	lm24-25	7.8	7.6	0.27	N10° W				○			飛鳥	H椀、有孔広口筒形土器、S杯蓋	
4090	lm26-27	5.5	(4.8)	0.05	N8° W	○	○					飛鳥？	H甕	
4091	lm24-25	5.1	(3.7)	0.14	N9° W	○						飛鳥？		
4093	kl23-24	4.6	(2.4)	0.05	N14° W	○						飛鳥？	H甕	
4096	jkl21-22	5.1	4.6	0.10	N32° W	○	○	○	○			古墳後期	H椀、甕、長胴甕、高杯、把手、S杯身、杯	
4097	kl22-23	4.9	(4.4)	0.13	N45° W	○	○					飛鳥	H椀、長胴甕	
4098	lm21-22	4.4	4.2	0.19	N11° W	○						古墳後期	H椀、甕、高杯	
4124	no22-23	4.3	3.9	0.35	N24° W							古墳後期	H椀、甕、甑、S杯蓋	
4133	q24-25	4.4	(2.6)	0.19	N12° W	○						飛鳥？	H甕	
4138	op26-27	5.1	5.0	0.16	N39° W	○	○		○			飛鳥	H椀、甕、長胴甕	
4142	p28-29	4.0	3.7	0.22	N15° W	○	○					奈良？	H甕、S杯蓋	
4148	n25	(3.0)	(2.2)	0.15	N21° W	○	○					飛鳥？		
4163	nop26-27	5.8	(4.4)	0.11	N35° E	○	○					古墳後期	H椀、甕、高杯、S杯蓋	
4169	kl26-27	4.8	(2.2)	0.09	N22° W	○	○					飛鳥？		

第 12 表　古墳時代後期～奈良時代竪穴住居一覧表

焼成抗番号	地区	規模(m)			主軸方向	出土遺物										備考	時期
						須恵器	土師器										
SF		長さ	幅	深さ			椀	杯	皿	高杯	甕	長胴甕	鍋	甑	その他		
4025	i22	3.6	1.5	0.25	N2° W		○				○				炭化物、粘土塊		飛鳥
4033	j26	3.6	1.5	0.15	N11° W	杯蓋	○				○				有孔広口筒形土器		奈良
4034	h26	-	-	-	-						○						
4035	gh27	*3.5	2.1	0.10	N37° W		○				○						飛鳥
4036	j27	*2.8	2.0	0.26	N38° W	杯蓋	○		○	○	○	○		○			奈良
4043	h26	*2.8	2.2	0.06	—												
4044	h28-29	*2.1	2.2	0.37	N50° W		○		○		○						奈良
4053	hi29	*2.8	2.2	0.06	N97° W						○	○					奈良
4062	f29	2.8	1.4	0.40	N23° W		○	○	○	○	○	○	○				奈良
4063	g29	3.2	1.7	0.20	N23° W		○	○	○		○	○					奈良
4064	g28	-	-	0.31	-		○		○		○						奈良
4070	i30	-	-	-	-												
4073	jk31	3.5	1.8	0.22	N47° E						○	○			炭化土器		古墳後期
4074	ijk31-32	5.0	2.5	0.32	N50° W		○				○	○	○				古墳後期
4077	l29	2.5	1.6	0.66	N50° W		○				○			○			飛鳥
4080	kl31	3.0	2.0	0.21	N56° W		○				○				炭化土器、粘土塊		飛鳥
4102	jk20-21	3.0	1.8	0.35	N29° E		○				○						飛鳥
4105	no20-21	3.6	2.2	0.32	N34° E		○			○	○	○	○	○			飛鳥
4106	op20	3.5	2.1	0.24	N59° W	杯身・杯蓋	○			○	○	○		○	竈	=3385	飛鳥
4108	p20-21	3.5	1.9	0.27	N9° E	杯	○			○	○		○	○			飛鳥
4109	q20	3.7	1.6	0.1	N29° W	甕					○			○		=3372	
4110	no20-21	*1.3	1.8	0.21	N41° W	杯身・杯蓋・甕	○				○	○	○	○			飛鳥
4112	pq21	*2.8	1.8	0.20	N34° W	杯蓋	○				○			○			飛鳥
4115	q21-22	3.0	1.9	0.17	N28° W		○				○					=3378	飛鳥
4127	no21	3.5	2.1	0.14	N41° W	小片					○						飛鳥
4128	pq21	3.6	1.8	0.17	N34° W		○				○				壷		飛鳥
4134	q25	3.2	1.7	0.33	N27° W		○	○	○		○					=3376	奈良
4136	q26	*1.2	1.8	0.18	N4° E											=3370	
4137	o25	*1.5	1.6	0.2	N37° W		○				○	○					飛鳥
4141	p27-28	3.5	2.0	0.2	N21° E		○				○		○				奈良？
4143	q25	*1.2	0.9	0.12	N19° W												飛鳥
4144	no27-28	3.5	2.0	0.2	N47° W				○		○				有孔広口筒形土器		奈良
4150	o24	-	-	-	—												

第 13 表　土師器焼成坑一覧表

D4003)、土坑（ＳＫ4052）などと複雑に重複している。ＳＨ4071には貯蔵穴があり、須恵器杯身（62）が出土した。

ＳＨ4085・4138・4163　重複する３棟の竪穴住居。いずれも平面形は隅丸の方形である。ＳＨ4085は西壁の中央付近に、ＳＨ4138は東壁の中央付近に竈を持つ。貯蔵穴は持たない。三者の前後関係はＳＨ4138→4163→4085である。また、ＳＨ4163はＳＦ4144と重複しているが、両者の前後関係はＳＨ4163→ＳＨ4144である。ＳＨ4085の竈埋土から土師器椀（63）・壷（65・66）・甑（68）が、埋土から土師器椀（64）・長胴甕（67）が、ＳＨ4138の埋土から土師器甕（89）が、ＳＨ4163の周溝埋土から土師器椀（90）・甕（92）が埋土から土師器椀（91）が出土した。

ＳＨ4090・4148・4169　いずれも平面形は隅丸の方形である。削平を受けており、主柱穴や周溝のみを検出した。

ＳＨ4089・4091・4093　いずれも平面形は隅丸の方形である。ＳＨ4089は４次調査区内では最大の竪穴住居である。ＳＨ4089のみは竈が確認できる。貯蔵穴は３棟ともみられない。三者の前後関係はＳＨ4093→4091→4089である。ＳＨ4089の埋土から土師器椀（69）、須恵器杯身（70）、土錘（71）、土師器の有孔広口筒形土器（72）が出土した。このうち72は重複するＳＫ4095からの混入の可能性が高い。

ＳＨ4096・4097　いずれも平面形は隅丸の方形である。ＳＨ4096は東壁の中央付近に竈を、その東に貯蔵穴を持つ。両者の前後関係はＳＨ4096→4097である。また、ＳＨ4096はＳＦ4102と重複しているが両者の前後関係はＳＦ4102→ＳＨ4096である。

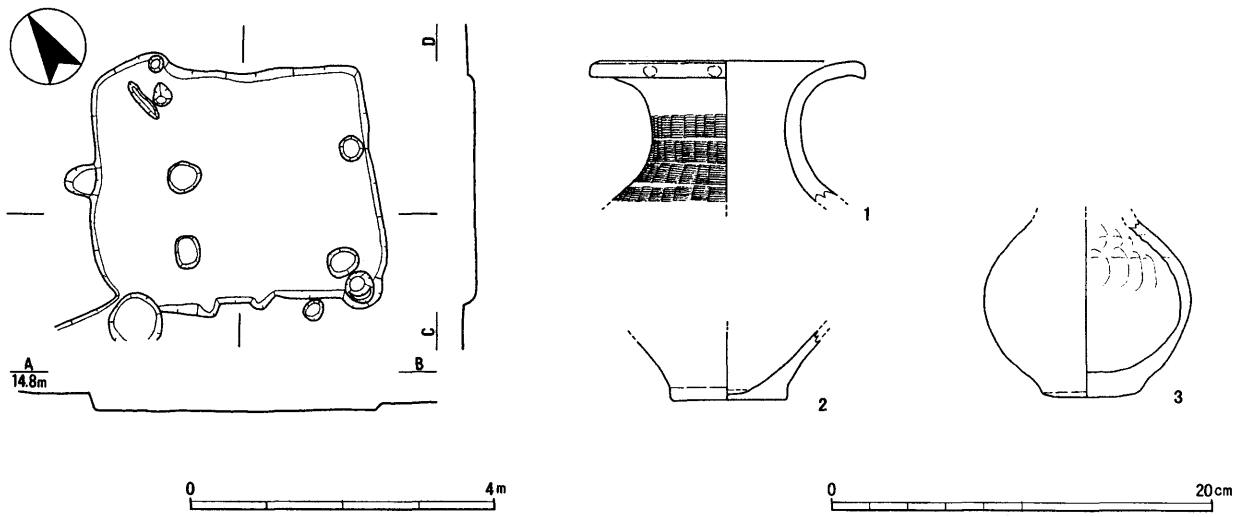
ＳＨ4096の竈埋土からは土師器椀（74）・甕（76）・長胴甕（75）・高杯（79）、須恵器杯身（82）が、貯蔵穴からは土師器長胴甕（77）と須恵器杯蓋（80）が、埋土からは土師器椀（73）・高杯（78）、須恵器杯蓋（81）が、ＳＨ4097の埋土からは土師器椀（83）が出土した。

ＳＨ4098　平面形は隅丸の方形である。重複する土坑のため、構造などは明らかでないが、埋土から土師器椀（84・85）、甕（86）、高杯（87）が出土した。

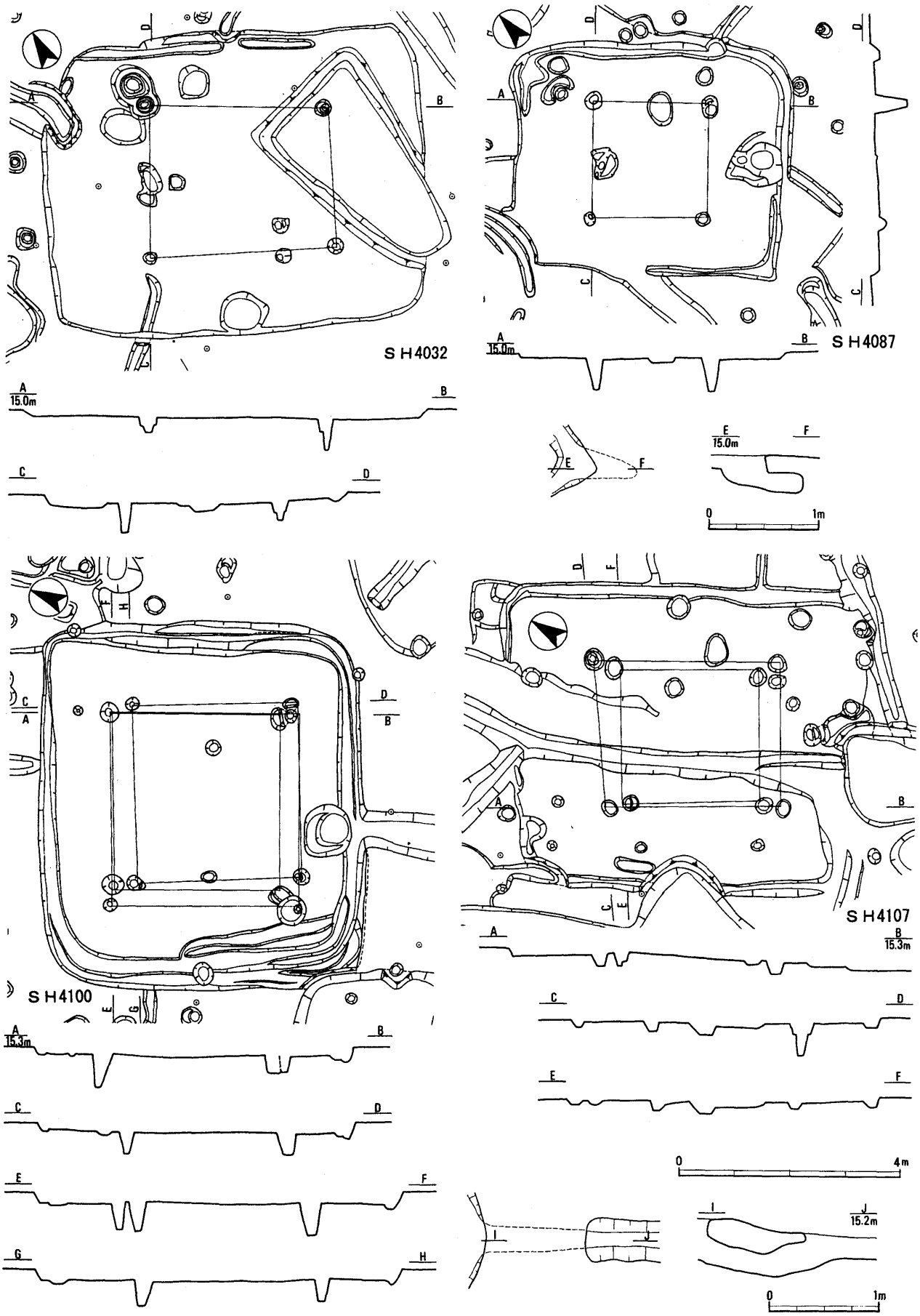
ＳＨ4124　削平と土坑（ＳＫ4131）による攪乱で構造などは明らかでないが、埋土から須恵器杯身（88）が出土した。

ＳＨ4133　平面形は隅丸の方形である。ＳＢ4151、ＳＦ4134と重複するが、両者の前後関係はＳＨ4134→ＳＢ4154→ＳＦ4134である。

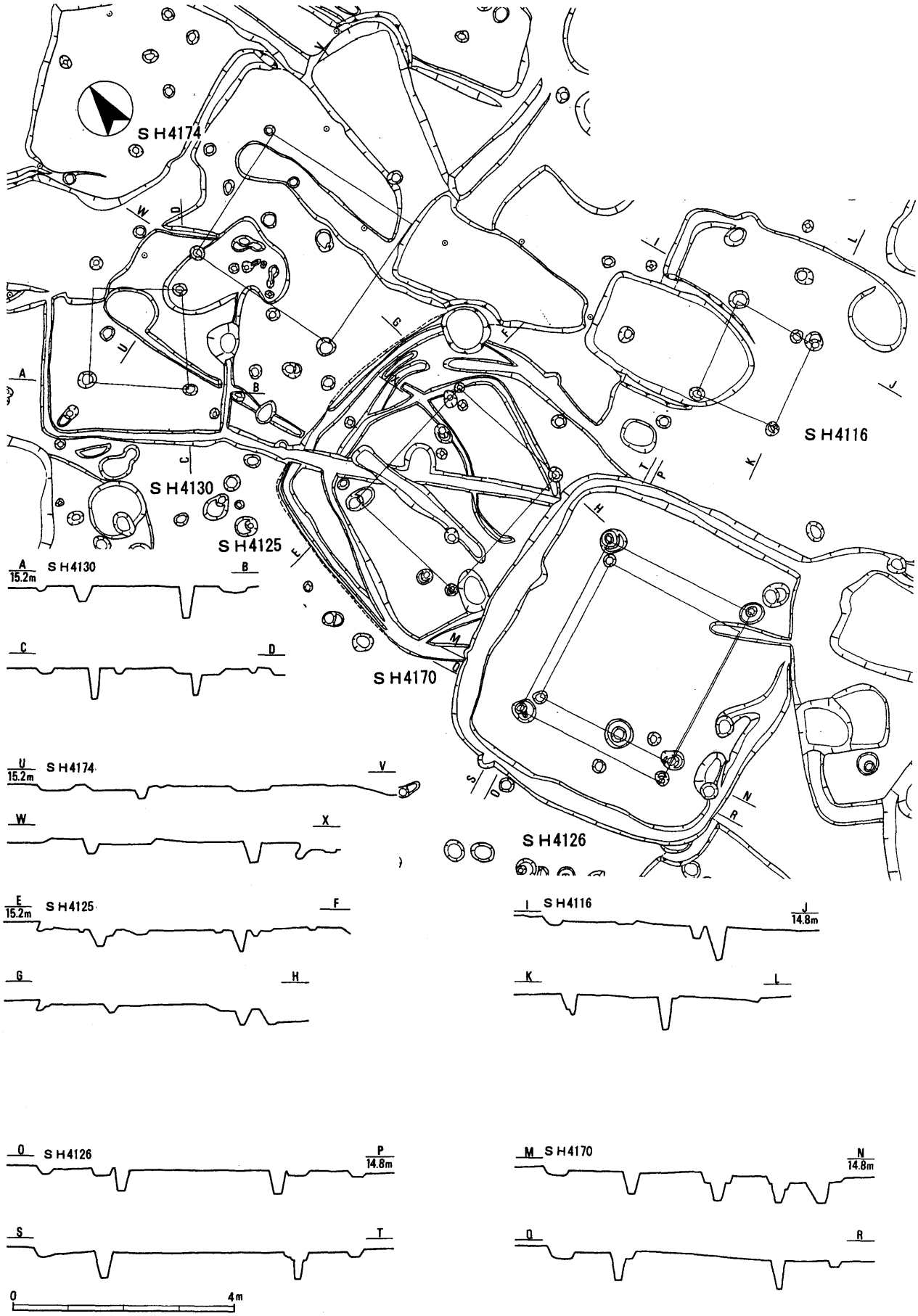
ＳＨ4142　平面形は隅丸の方形である。ＳＢ4151・4180、ＳＦ4141と重複する。掘立柱建物との前後関係は明かでないが、ＳＦ4141との前後関係は、ＳＨ4142→ＳＦ4141である。



第66図　ＳＨ4079（１：100）、出土遺物（１：４）実測図



第67図　S H4032、4087、4100、4107（1：100）、暗渠排水（1：25）実測図



第68図　SH4116、4125、4126、4130、4170、4174実測図（1：100）

②掘立柱建物

ＳＢ4151　３間×２間の総柱建物である。柱穴は他のものと較べると大きい。棟持柱を持つ。

ＳＢ4152　２間×２間の総柱建物である。ＳＢ4151とほぼ建物方向を揃えている。

ＳＢ4153・4178　ＳＢ4153は２間×１間の建物である。弥生時代の掘立柱建物と規模が似るが、ＳＢ4178やＳＨ4032の建物方向と一致するため、古墳時代後期以後の建物とした。

ＳＢ4178は３間×３間の建物梁行の側柱が不揃いである。

ＳＢ4154　柱間が非常に狭い。ＳＫ4140、ＳＨ4133、ＳＦ4134と重複するが、ＳＫ4140・ＳＨ4133→ＳＢ4154→ＳＦ4134である。

ＳＢ4155・4180　ＳＢ4151は３間×２間の建物である。棟持柱を持つ。ＳＢ4180は２間以上×２間の建物である。二つの建物ともＳＨ4142と重複するが、前後関係は明らかでない。

ＳＢ4165・4173　ＳＢ4165は２間×２間の建物である。ＳＢ4173は３間×２間の建物で、ＳＦ4177と重複するが、前後関係は明らかでない。

ＳＢ4179　柱穴はまばらにしかみつかっていないが、３間×２間の建物と思われる。

③土師器焼成坑

ＳＦ4025　他の土師器焼成坑よりも幅が狭い。被熱部分も厚さ最大２cm程で、あまり深くない。埋土から土師器椀・甕（93）が出土している。

ＳＦ4033　平面形はＳＦ4144に似る。被熱部分の厚さは最大で４cm程である。埋土から土師器甕（94）、有孔広口筒形土器（95・96）が出土した。

ＳＦ4034・4043　大部分がＳＤ4003により壊されており、被熱部分しか残っていない。被熱部分の厚さはいずれも最大で２cm程である。ＳＦ4034の埋土から土師器甕が出土した。

ＳＦ4035　削平を受けており、残りが悪い。被熱部分の厚さは側面で最大４cm、底面で最大１cm程である。埋土から土師器椀・甕（97）が出土した。

ＳＦ4036　大部分がＳＤ4003により壊されており、残りが悪い。被熱部分の厚さは側面で最大２cm、底面で最大６cm程である。埋土から土師器椀(98)・甕・長胴甕・甑（100）・高杯、須恵器杯蓋（99）が出土した。

ＳＦ4044　大部分が攪乱により破壊されており、残りが悪い。被熱部分の厚さは最大４cm程である。埋土から土師器椀（101）、皿（103・104）・甕（102）が出土した。

ＳＦ4053　削平を受けており、残りが悪い。被熱部分の厚さは最大４cm程である。埋土から土師器椀・甕（105）・長胴甕が出土した。

ＳＦ4062・4963・4064　重複する３基の土師器焼成坑。ＳＦ4062は小型で、幅が比較的狭い。被熱部分の厚さは最大１cm程である。埋土から土師器椀（114～121）・皿（122～129）・杯（130～132）・甕（133・134）・長胴甕（135～138）・高杯・土錘（139）など多数の遺物が出土している。ＳＦ4063は直線的な形状をしている。被熱部分の厚さは最大１cm程である。埋土から土師器椀（106）・皿（107～109）・杯・甕（111）・長胴甕（110・112・113）・把手が出土している。ＳＦ4064は溝により破壊されており、被熱部分のみを検出した。被熱部分の厚さは最大１cm程である。埋土から土師器椀・皿（140）・長胴甕（141）が出土している。

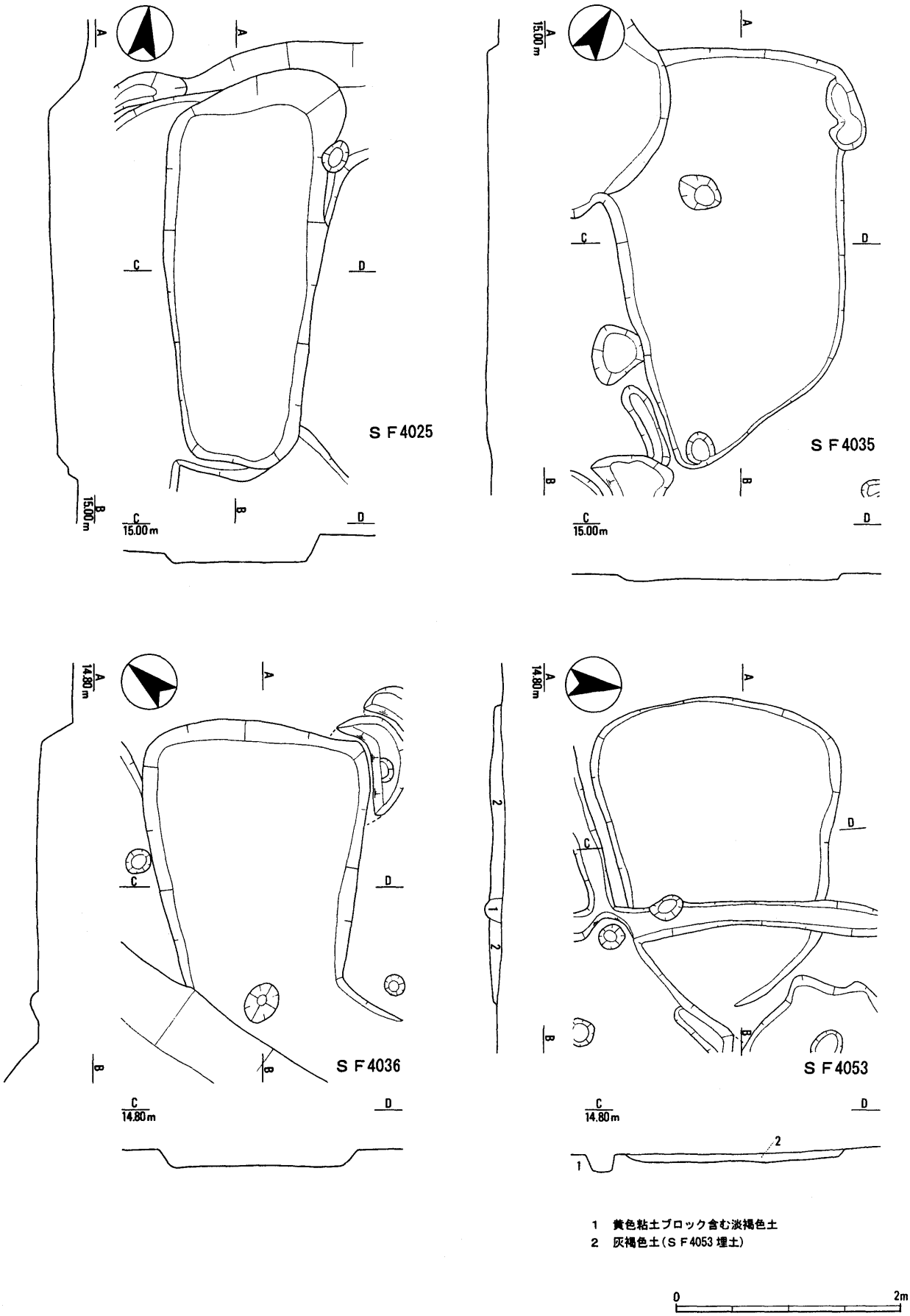
ＳＦ4062と4063の前後関係は、ＳＦ4062→4063となる。

ＳＦ4070　削平と攪乱を受けており、被熱部分のみを検出した。

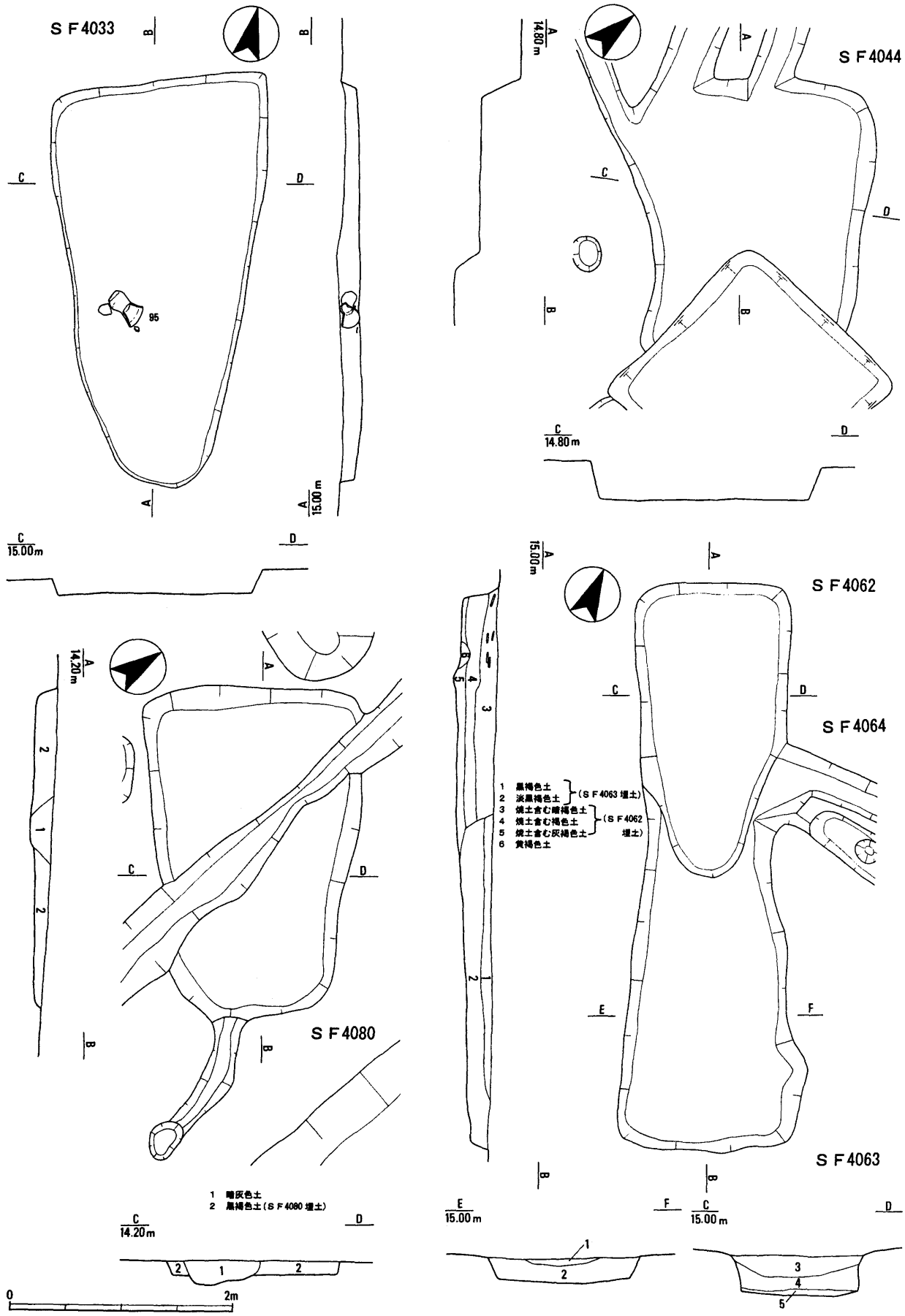
ＳＦ4073・4074　重複する２基の土師器焼成坑。ＳＦ4074は他の土師器焼成坑と比較して大型である。２基とも平面形は隅丸の三角形である。ＳＦ4073の被熱部分の厚さは最大４cm、ＳＦ4074の被熱部分の厚さは最大６cm程である。ＳＦ4073の埋土から土師器甕（142）・長胴甕が、ＳＦ4074の埋土から土師器椀（143）・甕（147）・長胴甕（146・148・149）・鍋（150・151）、須恵器杯蓋（144）・杯身（145）が出土した。ただし145は混入した遺物である可能性が高い。両者の前後関係は、ＳＦ4073→4074である。

ＳＦ4077　小型の土師器焼成坑である。検出面からの深さが66cmもあるが、遺構掘削中の掘りすぎによるものである。埋土から土師器椀（152～154）・甕・甑が出土した。

ＳＦ4080　長さの割りに幅が広く、平面形は隅丸の台形状である。溝がつながっている。被熱部分の厚



第 69 図　S F 4025、4035、4036、4053 実測図（1：50）



第 70 図　S F 4033、4044、4080、4062・4063・4064 実測図（1：50）

さは最大４cm程である。埋土から土師器椀（155）・甕が出土した。

ＳＦ4102　柱穴や竪穴住居で壊されている。被熱部分は側面で４cm程である。埋土から土師器椀・甕・把手が出土した。ＳＨ4096と重複しているが、両者の前後関係はＳＦ4102→ＳＨ4096である。

ＳＦ4105・4106・4110・4127　連続して造られた４基の土師器焼成坑。いずれも平面形は丸みを帯びている。ＳＦ4105の被熱部分の厚さは最大５cm程である。重複する土師器焼成坑で、前後関係が明らかなものは、ＳＦ4127→4110→4105である。ＳＦ4105と4106の前後関係は明らかでない。ＳＦ4105の埋土から土師器椀（156）・甕（161）・鍋（162～164）・長胴甕・甑（160）・高杯（157・158）、須恵器杯身（159）が、ＳＦ4106の埋土から土師器椀（165）・甕（167・168）・甑・高杯（166）・竈が、ＳＦ4110の埋土から椀・甕・長胴甕・鍋（174）、須恵器杯身・杯蓋・甕が、ＳＦ4127の埋土から土師器甕が出土した。

ＳＦ4108・4112・4115・4128　連続して造られた４基の土師器焼成坑。平面形は直線的である。ＳＦ4115の被熱部分の厚さは最大６cm程である。４基の前後関係はＳＦ4115→4128→4112→4108である。ＳＦ4108の埋土から土師器椀（169）・甕・鍋（172）・甑（171）・高杯（170）が、ＳＦ4112の埋土から土師器椀（175）・甕・甑が、ＳＦ4115の埋土から土師器椀（176）・甕が、ＳＦ4128の埋土から土師器椀・甕・壷が出土した。

ＳＦ4109　ＳＦ4115～4108の東に単独で造られている。平面形は長さのわりに幅が狭い。被熱部分の厚さは最大６cm程である。埋土から須恵器壷（173）が出土した。

ＳＦ4134・4136・4143　並んで造られた３基の土師器焼成坑。いずれも削平を受けており、被熱部分のみを検出した。被熱部分の厚さはＳＦ4134が最大２cm、ＳＦ4143が最大２cm、ＳＦ4136が最大４cm程である。ＳＦ4134は先端部分まで被熱している。ＳＦ4134の埋土から土師器椀（177～180）・皿・杯・甕が、ＳＦ4143の埋土からは土師器甕が出土した。

ＳＦ4137・4150　ＳＫ4140・4146、ＳＢ4154などと重複する土師器焼成坑。被熱部分の厚さは２基とも最大４cm程である。これらの前後関係はＳＫ4146→ＳＦ4137・ＳＫ4140→ＳＢ4154である。ＳＦ4150は残りが悪く、被熱部分のみを検出した。ＳＦ4137の埋土から土師器椀（181・182）・甕・長胴甕が出土した。

ＳＦ4141　直線的な平面形をしている。被熱部分の厚さは最大２cm程である。ＳＨ4142と重複するが、両者の前後関係はＳＨ4142→ＳＦ4141である。埋土から土師器甕（183・184）が出土した。

ＳＦ4144　直線的な平面形をしており、ＳＦ4033に似ている。被熱部分の厚さは最大６cm程である。埋土から土師器有孔広口筒形土器が多数（185～198）・皿・甕・土錘（199）が出土した。

２．遺物

（１）弥生時代中期の遺物①　（１～４、30）

弥生時代中期の遺物は少ないが、壷が４点出土している。１はＳＨ4079から出土したもので頸部に簾状文がみられる。30はＳＫ4103から出土したものである。

（２）弥生時代後期から古墳時代前期の遺物

ＳＨ4032出土遺物（４～７）　４～６はいずれも台付甕である。７は高杯の脚部。

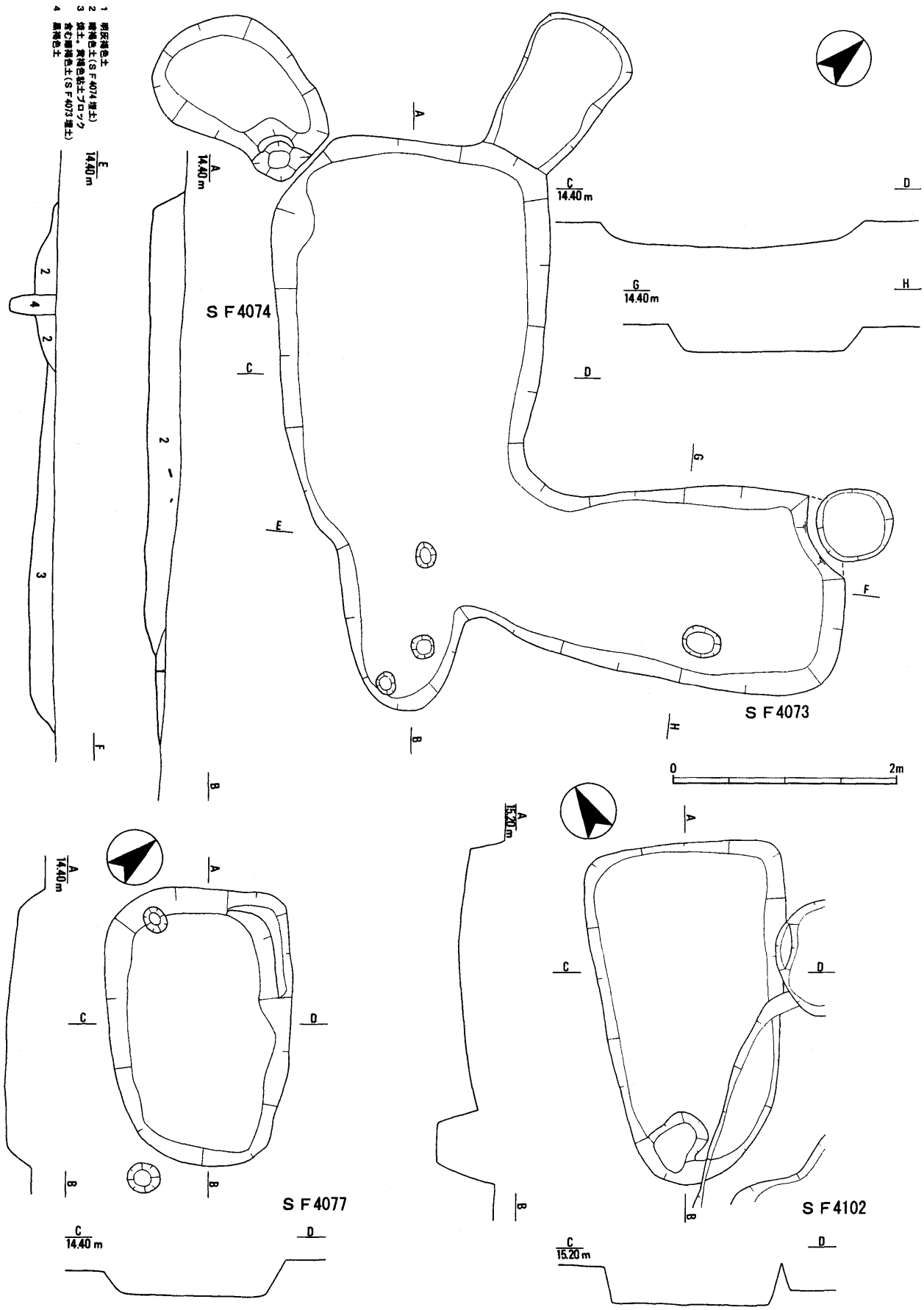
ＳＨ4087出土遺物（８～10・26・27）　26は壷の底部。８・９は台付甕の脚台。いずれも器壁が厚い。10・27は高杯の脚部。10は杯部との接合部に近いところまで中空で、裾は内弯するようにも見える。

ＳＨ4100出土遺物（11～18）　壷（11～15）、台付甕（16・17）、高杯（18）がある。18はかなり下まで中実であり、裾が大きく開くものと思われる。

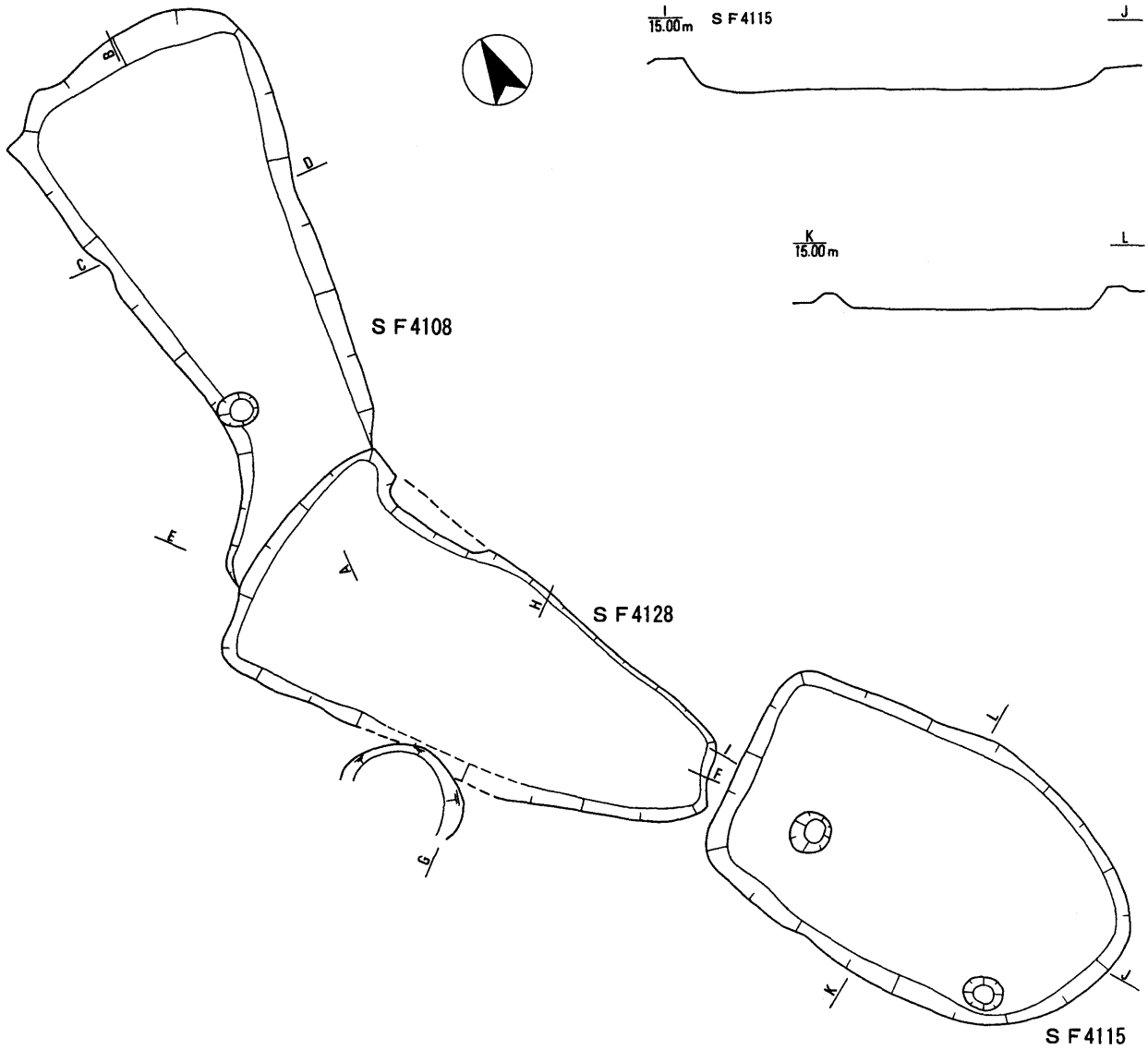
ＳＨ4107出土遺物（19・20）　壷（19）と高杯（20）がある。高杯の裾部は外反する。

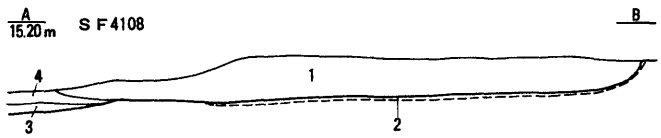
ＳＨ4125出土遺物（21～23）　壷（21・22）と台付甕（23）がある。台付甕の脚部の器壁は厚い。

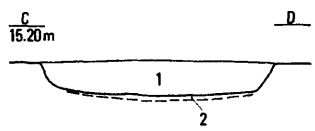
ＳＨ4130出土遺物（24・25）　台付甕（24）と高杯（25）がある。高杯は口縁端部が欠損しているが、端部が外反するかもしれない。



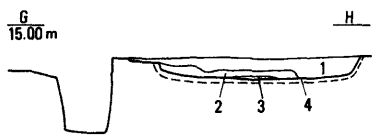
第71図　SF4073・4074、4077、4102実測図（1：50）



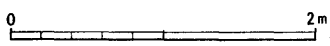




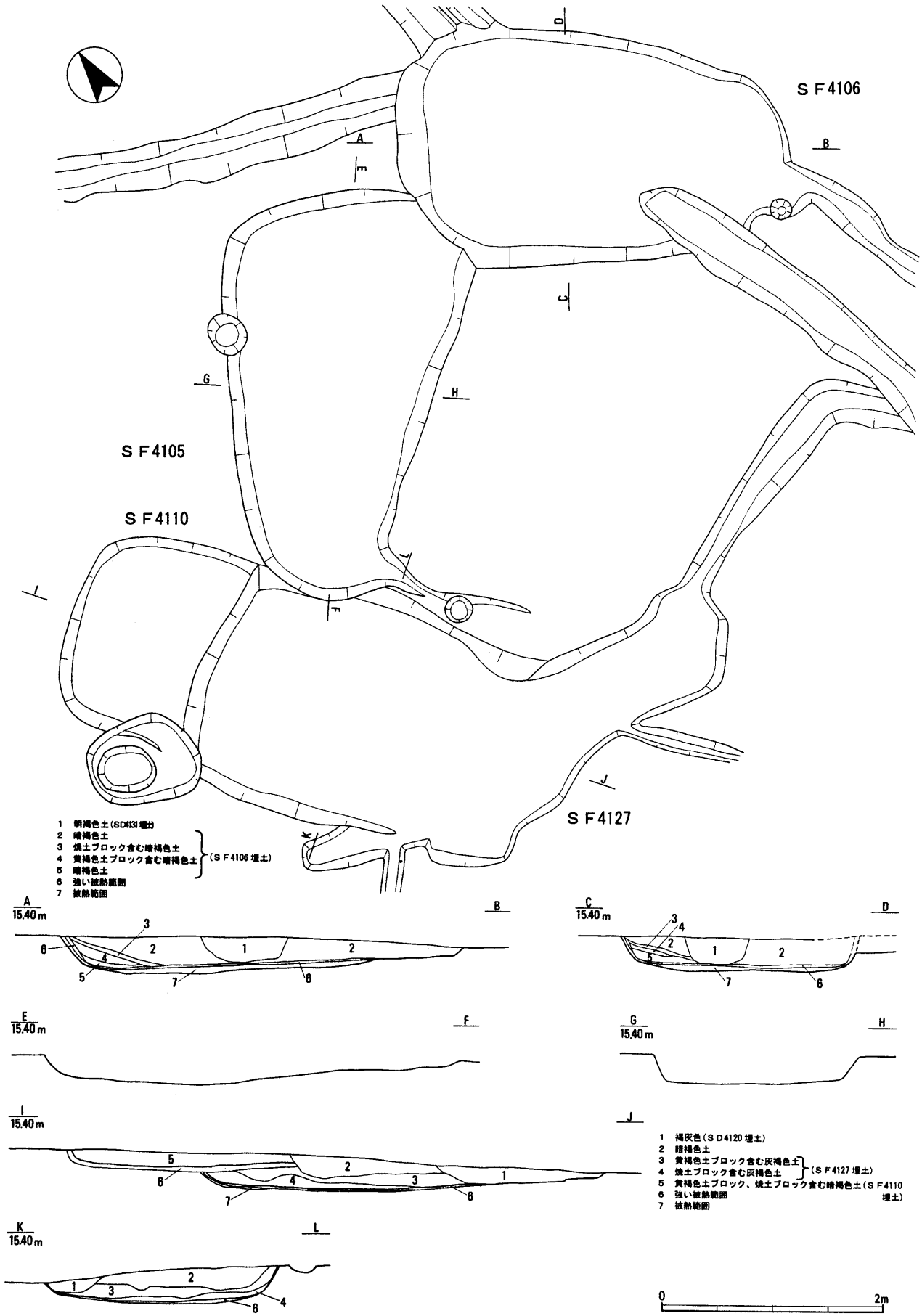
1　焼土含む暗褐色土（S F4108 埋土）
2　強い被熱範囲
3　焼土　　（S F4112 埋土）
4　暗褐色土



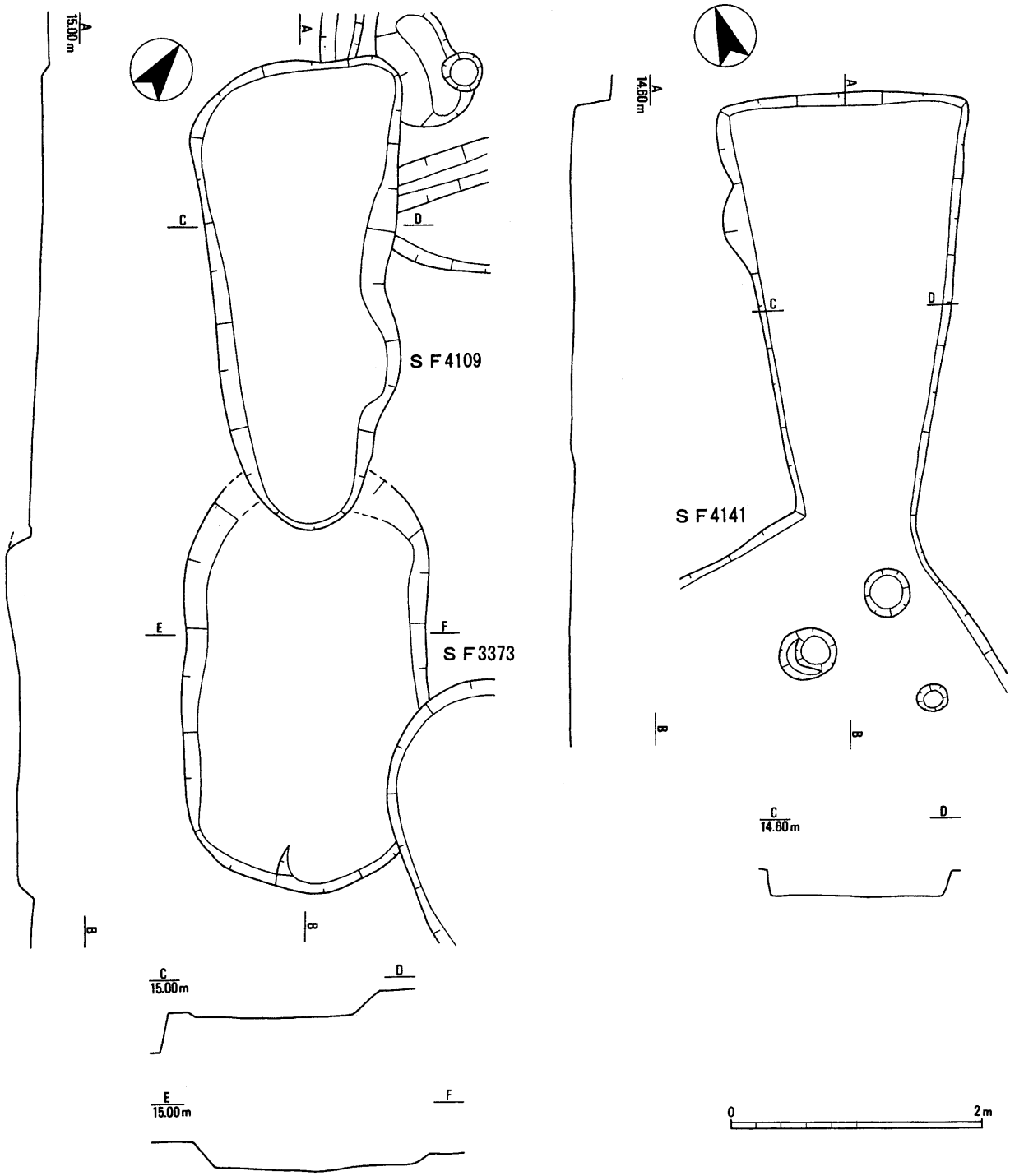
1　暗褐色土（S F4112 埋土）
2　焼土　（S F4112 床面）
3　褐色土　（S F4128 埋土）
4　被熱範囲



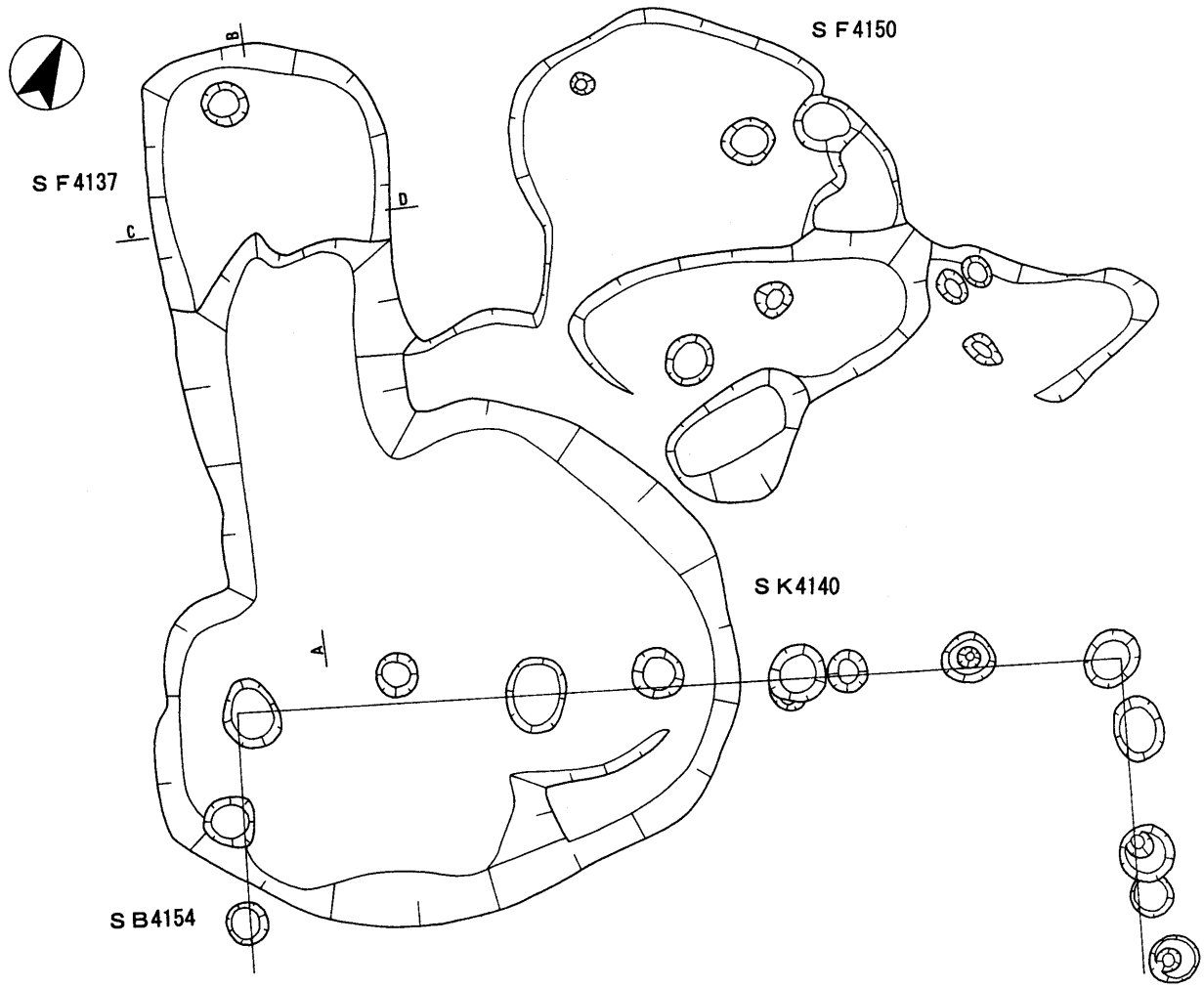
第 72 図　S F4108･4128･4115 実測図（1：50）

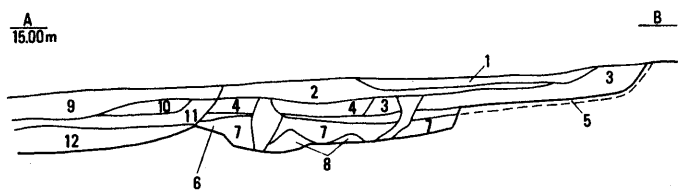


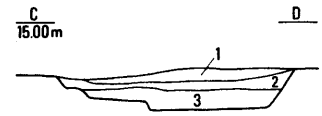
第73図　S F4105・4106・4110・4127 実測図（1：50）



第74図　S F 4109・3373、4141 実測図（1：50）



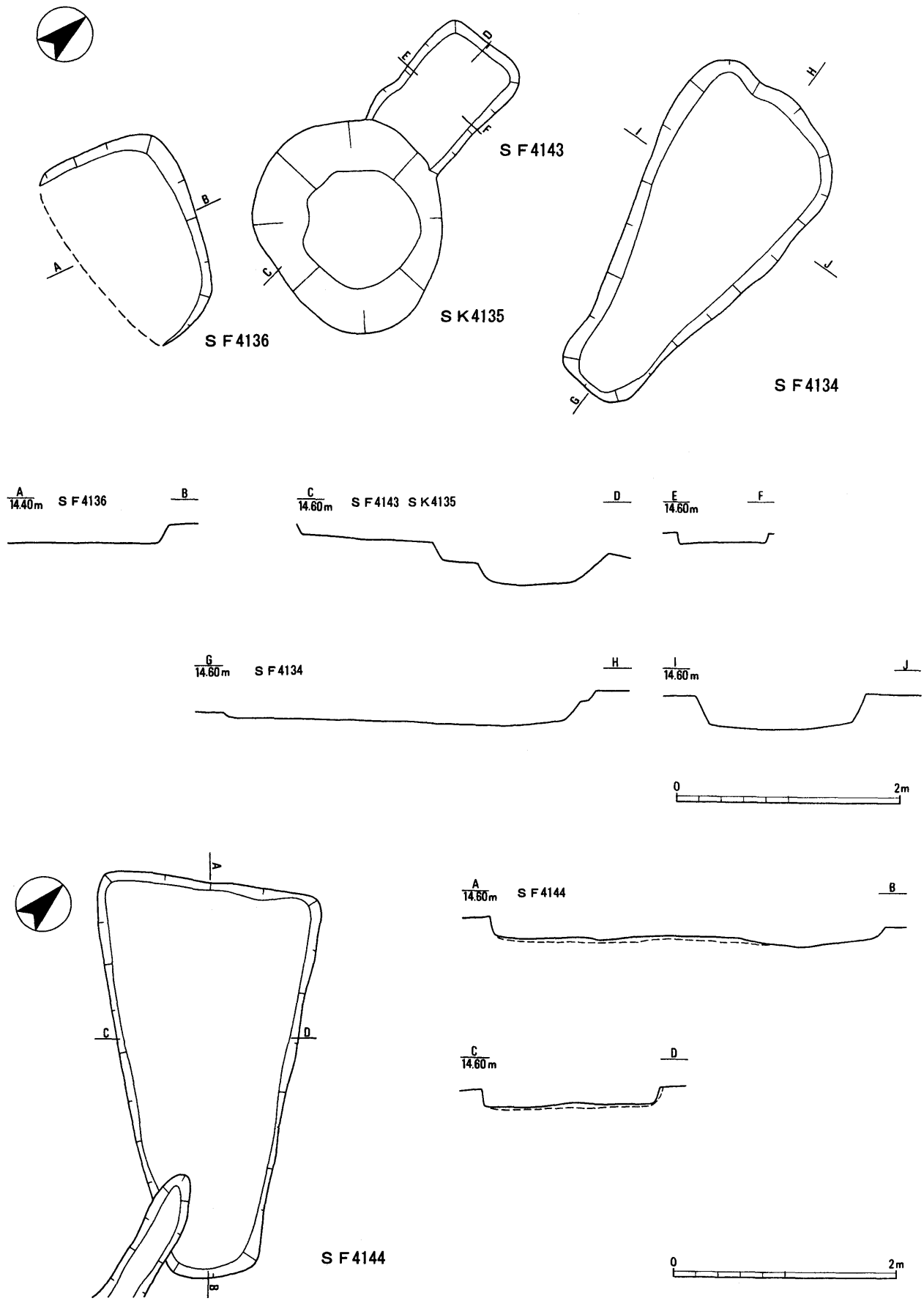




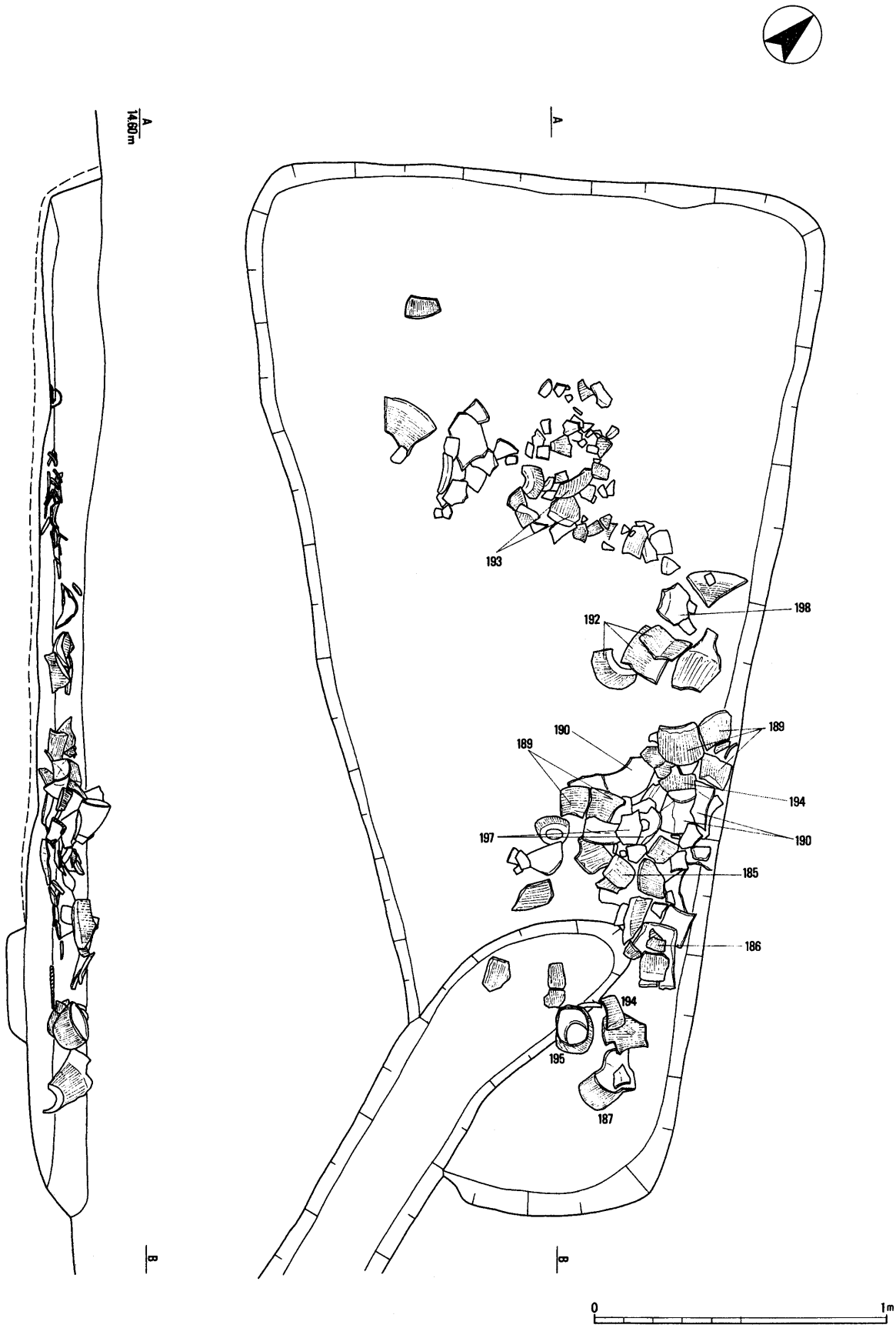
1	黄褐色ブロック、炭含む褐色土	(S F4137 埋土)
2	焼土・炭含む暗褐色土	(〃)
3	赤褐色焼土	(〃)
4	淡褐灰色土	(〃)
5	明褐色焼土	(S F4137 床面)
6	淡黄褐色土	(〃)
7	焼土・炭・黄褐色土ブロック含む淡褐色土	(S K4146 埋土)
8	灰黄色土	(〃)
9	黒褐色土	(S F4140 埋土)
10	黄褐色土	(〃)
11	焼土・炭・黄褐色ブロック含む褐色土	(〃)
12	暗黄褐色土	(〃)

0 2m

第75図　S F4137・4150 実測図（1：50）



第76図　S F4136・4143・4134、4144 実測図（1：50）



第77図　ＳＦ4144遺物出土状況図（１：20）

溝・土坑・ピット・包含層出土遺物（28～39）　28はＳＤ4117から出土した。口縁端部が受口状になる甕である。32・33はＳＫ4162から出土した台付甕の台部である。台は短く器壁が厚い。

（３）古墳時代後期から奈良時代の遺物

①竪穴住居出土遺物

ＳＨ4001出土遺物（40～45）　北野遺跡の古墳時代後期の遺物では古い様相を示す。椀（40）は深く、口縁部が内弯する。甕（42）の頸部から口縁部にかけては器壁が薄く、斜め上方にたちあがる。もう一点の甕（41）はやや新しい要素を持つ。43～45はいずれも用途不明品。

ＳＨ4022出土遺物（46～54）　46～50は貯蔵穴の埋土、52・54は竈埋土から出土している。ＳＨ4001出土遺物と比較すると、新しい様相を示す。椀（46）は深いものの口縁部の内弯はなく、土師器甕は頸部から口縁部への屈曲が強くなり、内面が肥厚する。

ＳＨ4031出土遺物（55～57）　土師器椀（55）は主柱穴出土。概ねＳＨ4022出土遺物と同時期のものと思われる。57は口径が大きい煮沸具。

ＳＨ4038出土遺物（58～61）　概ねＳＨ4022出土遺物と同時期のものと思われる。甕（60）は竈埋土出土。長胴甕（61）は頸部から口縁部にかけてまっすぐにたちあがり口縁端部が丸い。

ＳＨ4071出土遺物（62）　須恵器杯身は、器高が低くなり口径が小さくなる。概ね６世紀末から７世紀初めごろのものか。

ＳＨ4085出土遺物（63～68）　やや古い様相を示す。椀（63・64）は深く丸みを帯び、長胴甕（67）の頸部から口縁部は器壁が薄く、斜め上方にたちあがる。65・66は壷、68は甑か。

ＳＨ4089出土遺物（69～72）　有孔広口筒形土器（72）は、重複するＳＫ4095からの混入の可能性が高い。それ以外の遺物は概ねＳＨ4022出土遺物と同時期のものと思われる。須恵器杯身（70）は、６世紀末から７世紀はじめのものか。

ＳＨ4096出土遺物（73～82）　出土遺物は古い様相を示す。椀（73・74）は深く口縁部が内弯する。73の内面には横方向のハケメが残る。甕類（75～77）の頸部から口縁部にかけては器壁が薄く、斜め上方にたちあがる。須恵器杯（80～82）は、概ね６世紀後半のものか。

ＳＨ4097出土遺物（83）　椀（83）は深さがあるが、まっすぐにたちあがる。概ねＳＨ4002出土遺物と同じ時期のものか。

ＳＨ4098出土遺物（84～87）　椀のうち、84はまっすくにたちあがるが、85は丸みを帯び、口縁端部が内弯する。土師器甕（86）は頸部が屈曲するものの器壁が薄く古い様相を示す。

ＳＨ4124出土遺物（88）　須恵器杯蓋（88）は、概ね６世紀中葉から後半のものと思われる。

ＳＨ4138出土遺物（89）　89は土師器甕。頸部の内面が肥厚する。

ＳＨ4163出土遺物（90～92）　椀（90・91）は深く丸みをもち、口縁部が内弯する。92は小型の甕。頸部から口縁部は斜め上方にたちあがる。古い様相を示す。

②土師器焼成坑出土遺物

ＳＦ4025出土遺物（93）　93は土師器甕。内面が肥厚し、口縁端部が摘み上げられる。

ＳＦ4033出土遺物（94～96）　94の土師器甕は、頸部が屈曲し、口縁端部が丸くおわる。有孔広口筒形土器（95・96）は２点とも内面にのみハケメが施される。

ＳＦ4035出土遺物（97）　97は土師器甕。93と同様に内面が肥厚する。

ＳＦ4036出土遺物（98～100）　古い様相を示す。土師器椀（98）は非常に深く丸みを帯びており、口縁部は内弯する。須恵器杯蓋も６世紀中葉にまで遡る可能性がある。

ＳＦ4044出土遺物（101～104）　新しい様相を示す。椀（101）は平底になり、口縁部にはヨコナデが施される。甕（102）の口縁部内面は肥厚する。精製の皿（103・104）もみられる。

ＳＦ4053出土遺物（105）　105は土師器甕。ＳＦ4044出土遺物とほぼ同時期のものと思われる。

ＳＦ4062出土遺物（114～139）　土師器焼成坑出土遺物の中では最も良好な資料である。遺物は新しい様相を示す。椀には丸底に近いもの（115）と平底のもの（116～121）がある。120・121の底部外面にはケズリが施される。精製の皿（122～129）や杯（131・

132）もみられる。甕類（133）は頚部が屈曲し口縁端部の摘み上げが弱くなる。133のように体部の張りが弱くなるものや、134のように底部外面にヘラケズリを施すものが登場する。

ＳＦ4063出土遺物（106～113）　新しい様相を示す。椀（106）は平底になり、甕類（110～113）は頚部が屈曲する。口縁端部の摘み上げは弱くなる。精製の皿（107～109）がみられる。

ＳＦ4064出土遺物（140・141）　ＳＦ4062・4063出土遺物とほぼ同じ様相を示す。

ＳＦ4073出土遺物（142）　142は土師器甕。器壁が薄く、口縁部が斜め上方にたちあがる。

ＳＦ4074出土遺物（143～151）　古い様相を示す。椀（143）は丸みを帯び、口縁部が内弯する。甕類（146～149）は頚部から口縁部にかけての器壁が薄く、口縁部が斜め上方にたちあがる。胴部は張りをもつ。150や151などの口径が極めて大きいものもある。須恵器杯蓋（144）は、概ね6世紀後半頃のものであろう。杯身（145）のみは6世紀末から7世紀はじめのもので、新しい時期のものであるが、これは重複する遺構からの混入である可能性が高い。

ＳＦ4077出土遺物（152～154）　すべて椀であるが、丸みを帯び（152・153）、口縁部が内弯するもの（153）と平底のもの（154）が混在する。

ＳＦ4080出土遺物（155）　155は土師器の椀。深さはなくなっているが、丸みを残し、口縁部が若干内弯する。

ＳＦ4105出土遺物（156～164）　椀（156）は小型である。高杯（157・158）は口縁の端部が大きく外反する。甕（161）は頚部が屈曲し、内面が肥厚する。須恵器杯身（159）は、概ね6世紀末から7世紀はじめ頃のものである。

ＳＦ4106出土遺物（165～168）　椀（165）は深く、丸みを帯びるが、口縁端部はそれほど内弯しない。甕（167・168）は頚部が屈曲し内面が肥厚する。

ＳＦ4108出土遺物（169～172）　椀（169）は深く、口縁部が内弯するが、平底に近くとなっている。壁（172）の頚部は屈曲し、わずかではあるが内面が肥厚する。

ＳＦ4109出土遺物（173）　173は須恵器の壷か。

ＳＦ4110出土遺物（174）　174は土師器の鍋。頚部が屈曲し、口縁端部が摘み上げられる。

ＳＦ4112・4115出土遺物（175・176）　ともに土師器の椀。丸みを帯びているが、口縁は内弯しない。

ＳＦ4134出土遺物（177～180）　新しい様相を示す。図示した土師器の椀はすべて平底で、口縁部にヨコナデを施す。

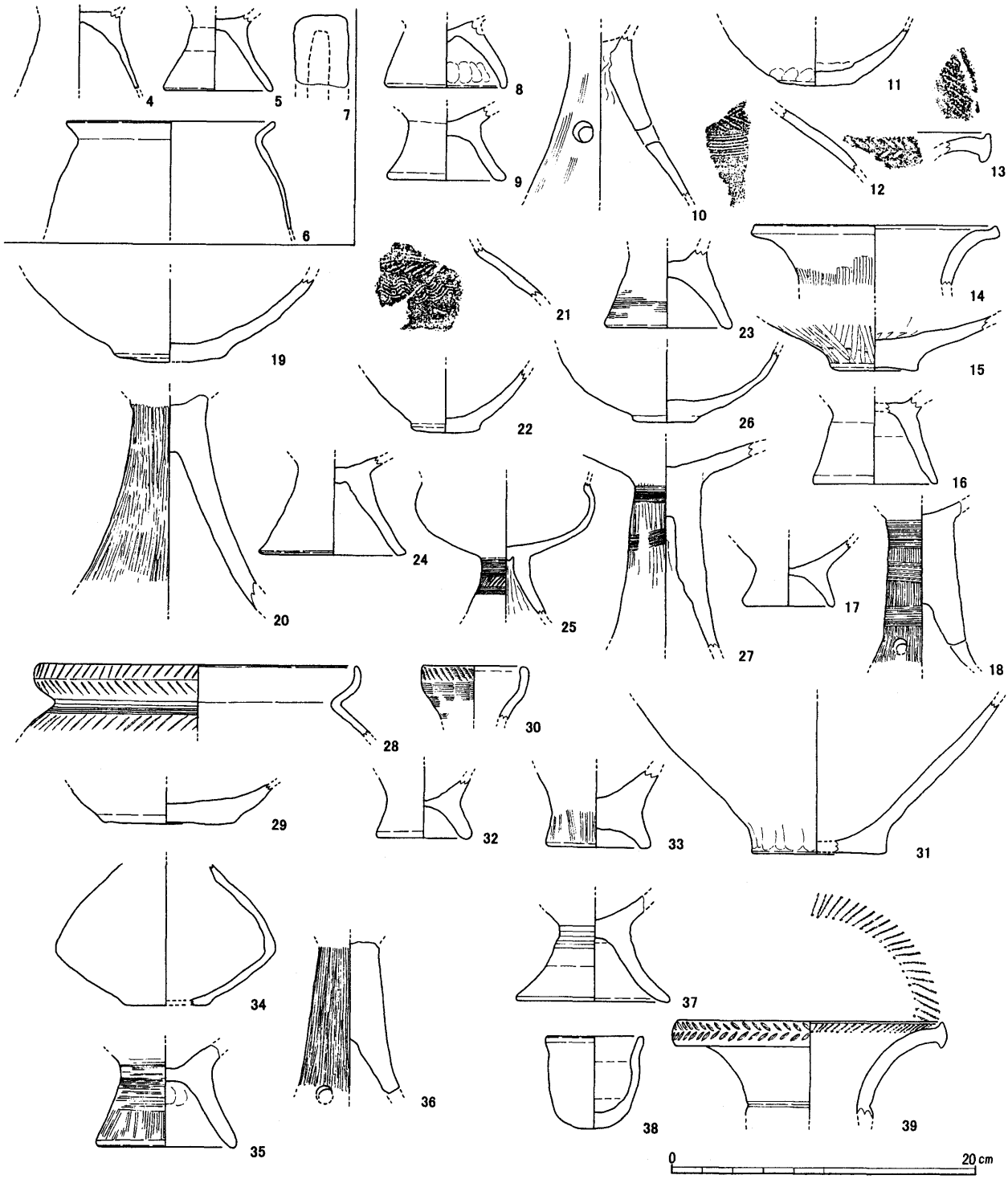
ＳＦ4137出土遺物（181・182）　小型の椀（181）と椀（182）がある。182は丸みを帯び、口縁部が内弯する。

ＳＦ4141出土遺物（183・184）　いずれも土師器の甕。183は頚部から口縁部にかけての内面が肥厚する。

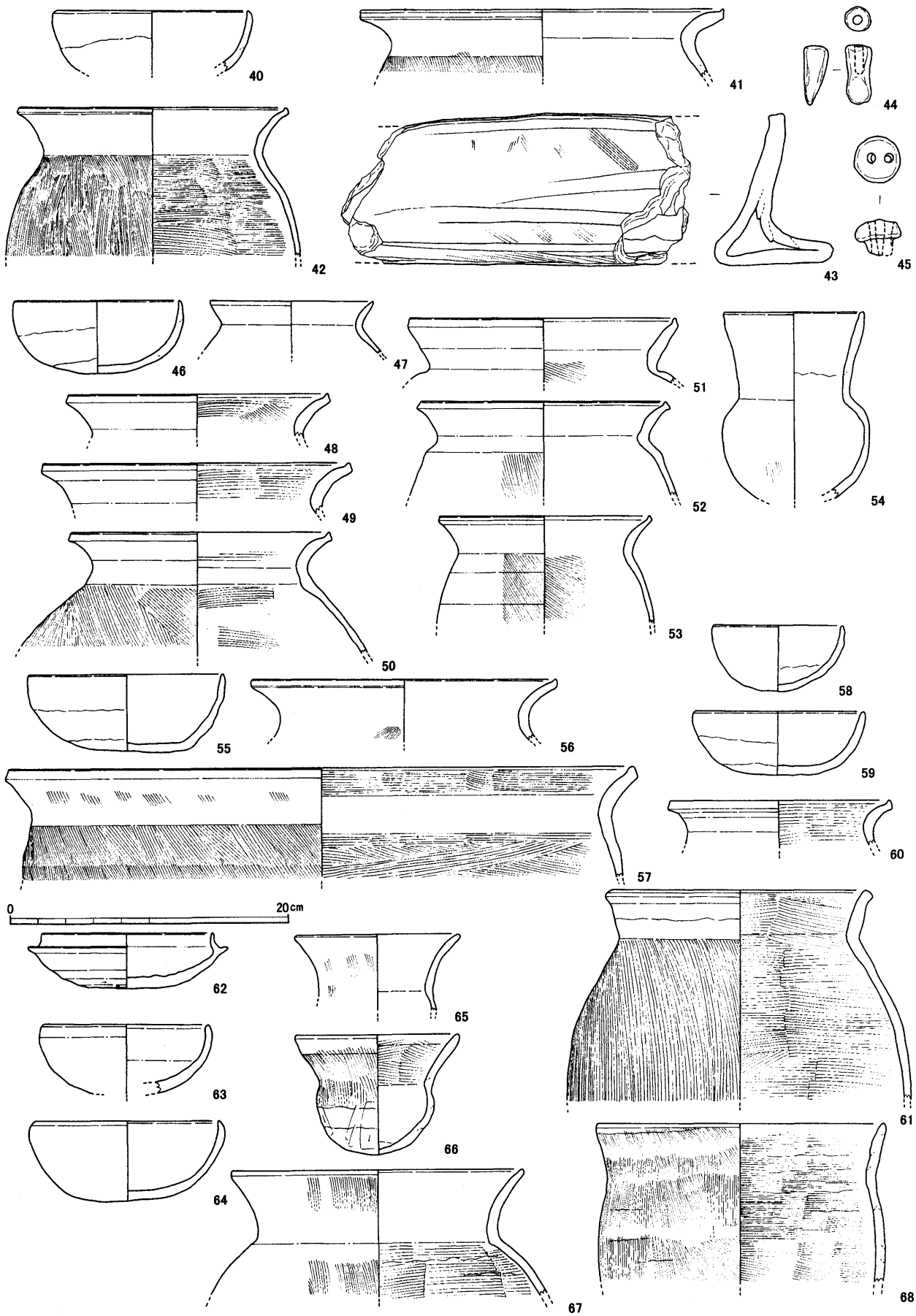
ＳＦ4144出土遺物（185～199）　ＳＦ4144から出土した遺物のほとんどが有孔広口筒形土器（185～198）である。外面にはハケメを施すものが一般的であるが、小型のもの（187）やヘラ記号を持つもの（189）、内外面にヘラケズリを施すもの（196・198）もある。その他の遺物には土錘（199）がある。

［註］

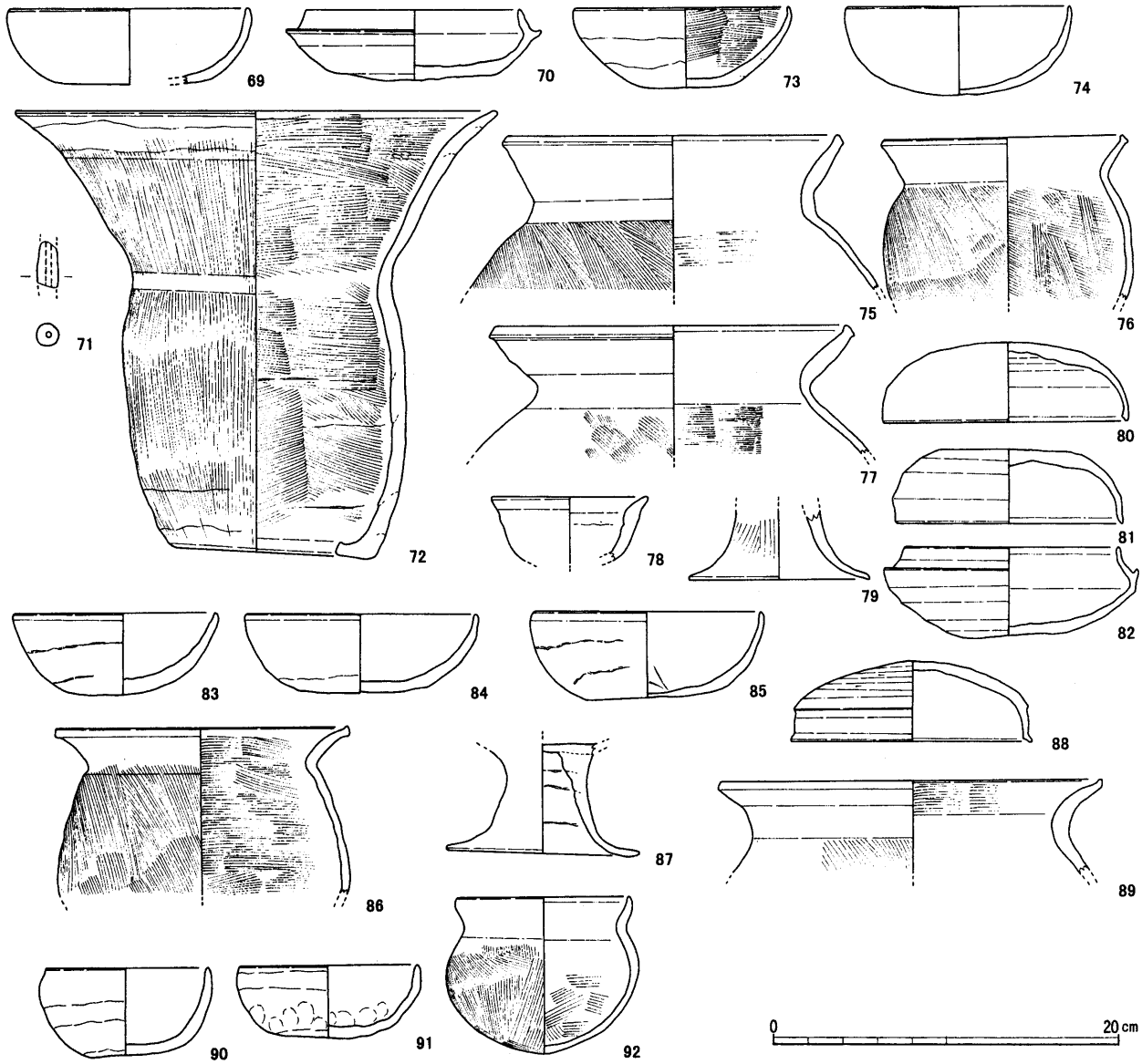
①弥生時代および古代の遺物については、斎宮歴史博物館上村安生氏のご教示を得た。



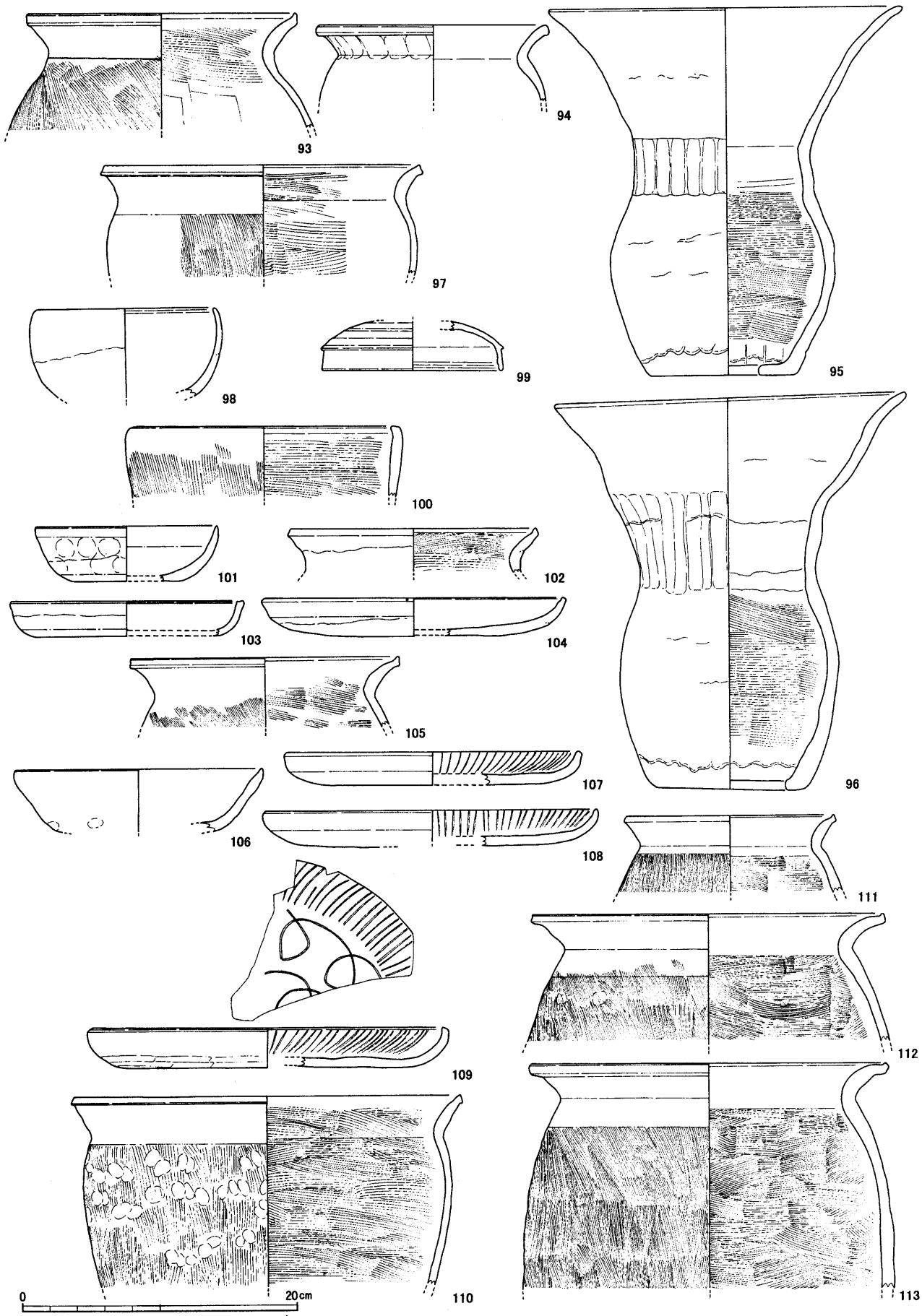
第78図　出土遺物実測図（1：4）



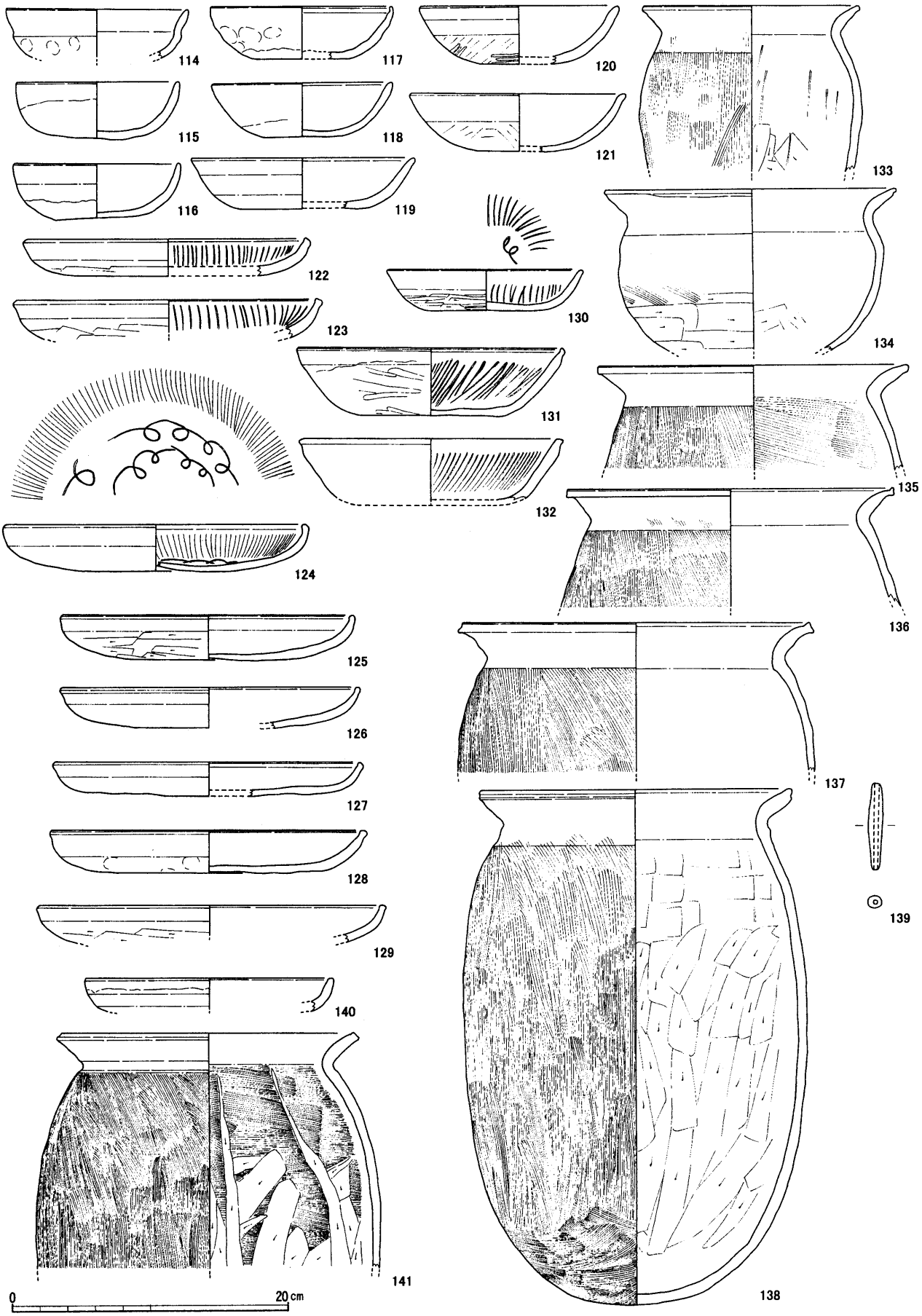
第79図　出土遺物実測図（1：4）



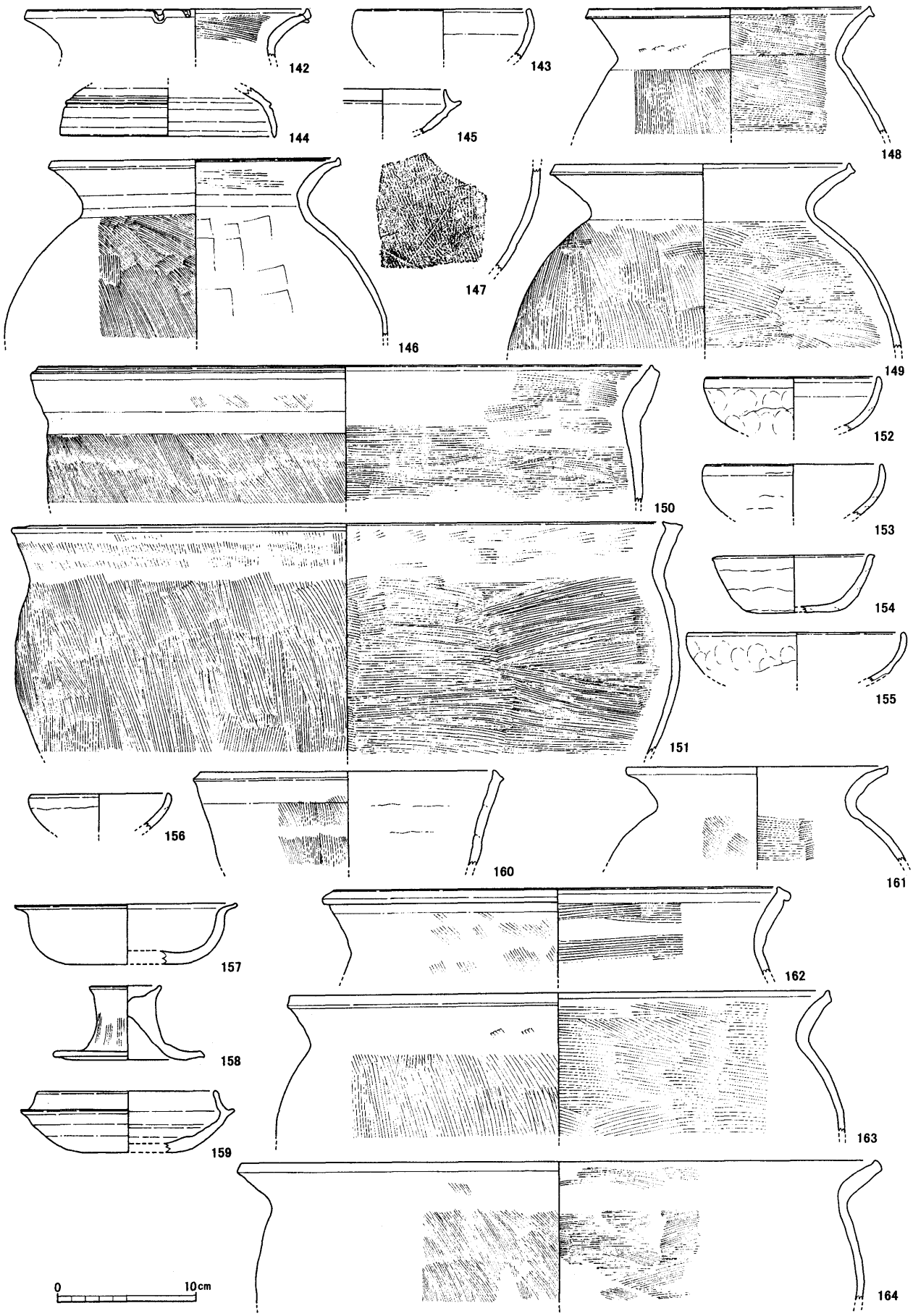
第80図　出土遺物実測図（1：4）



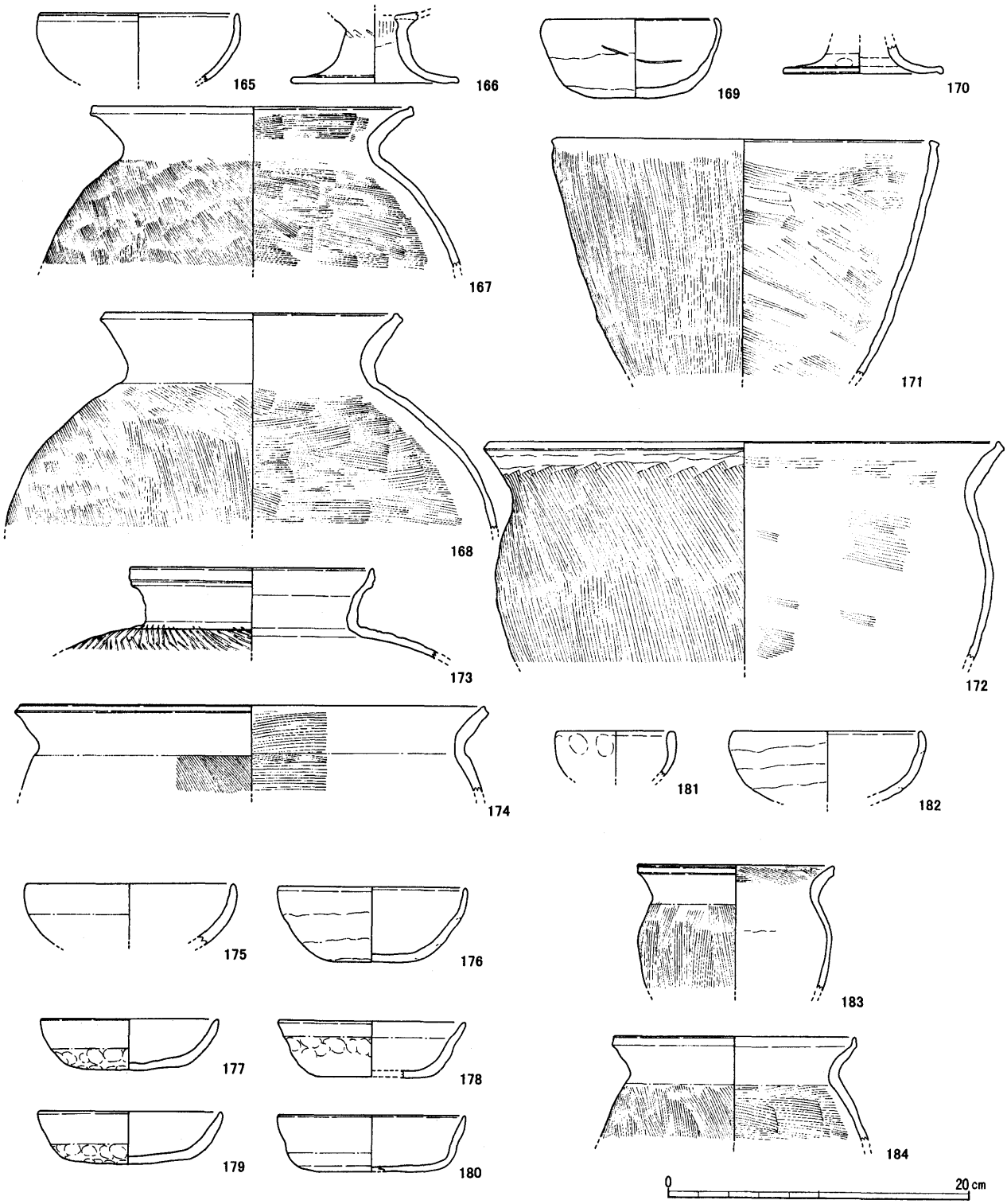
第81図　出土遺物実測図（1：4）



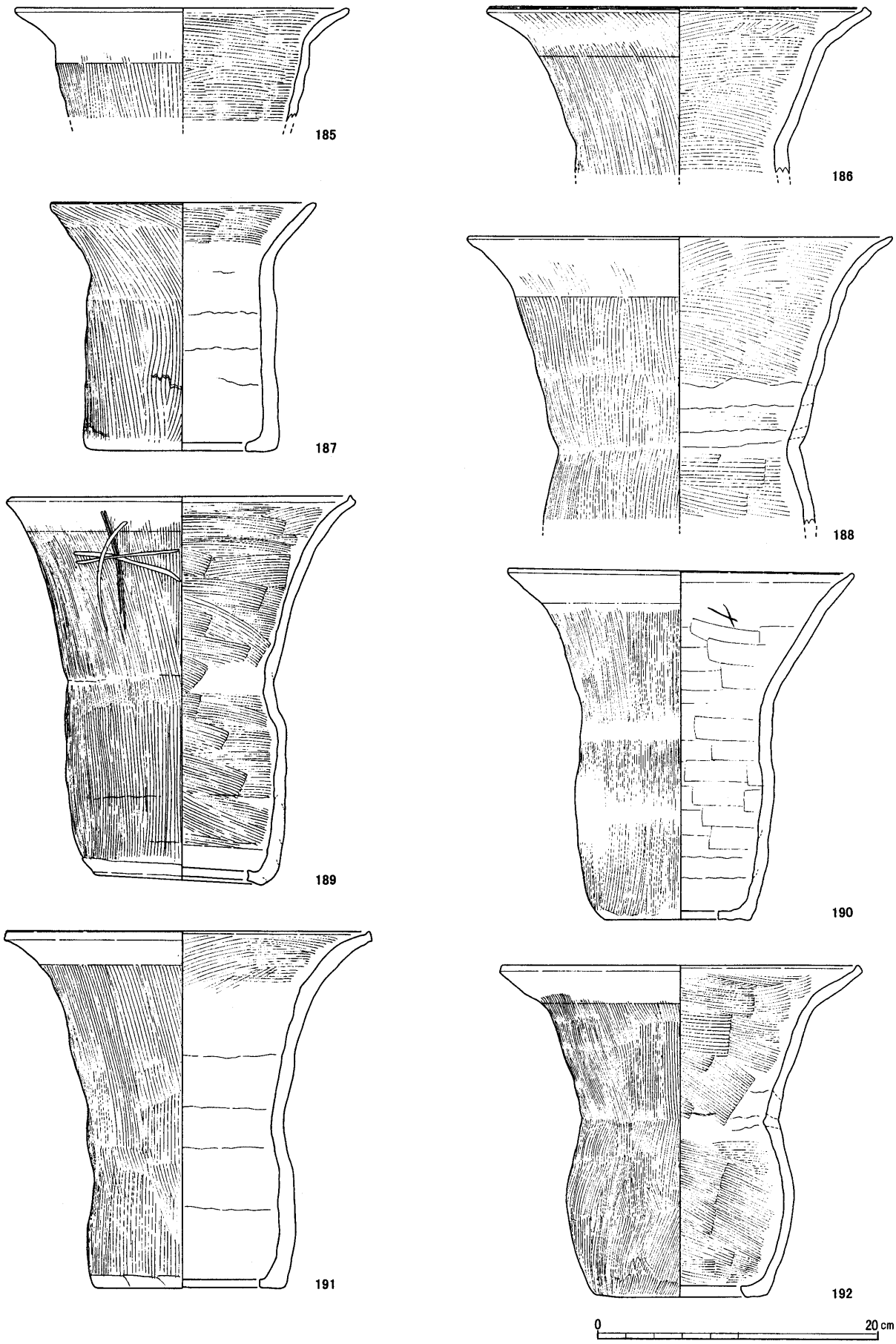
第82図　出土遺物実測図（1：4）



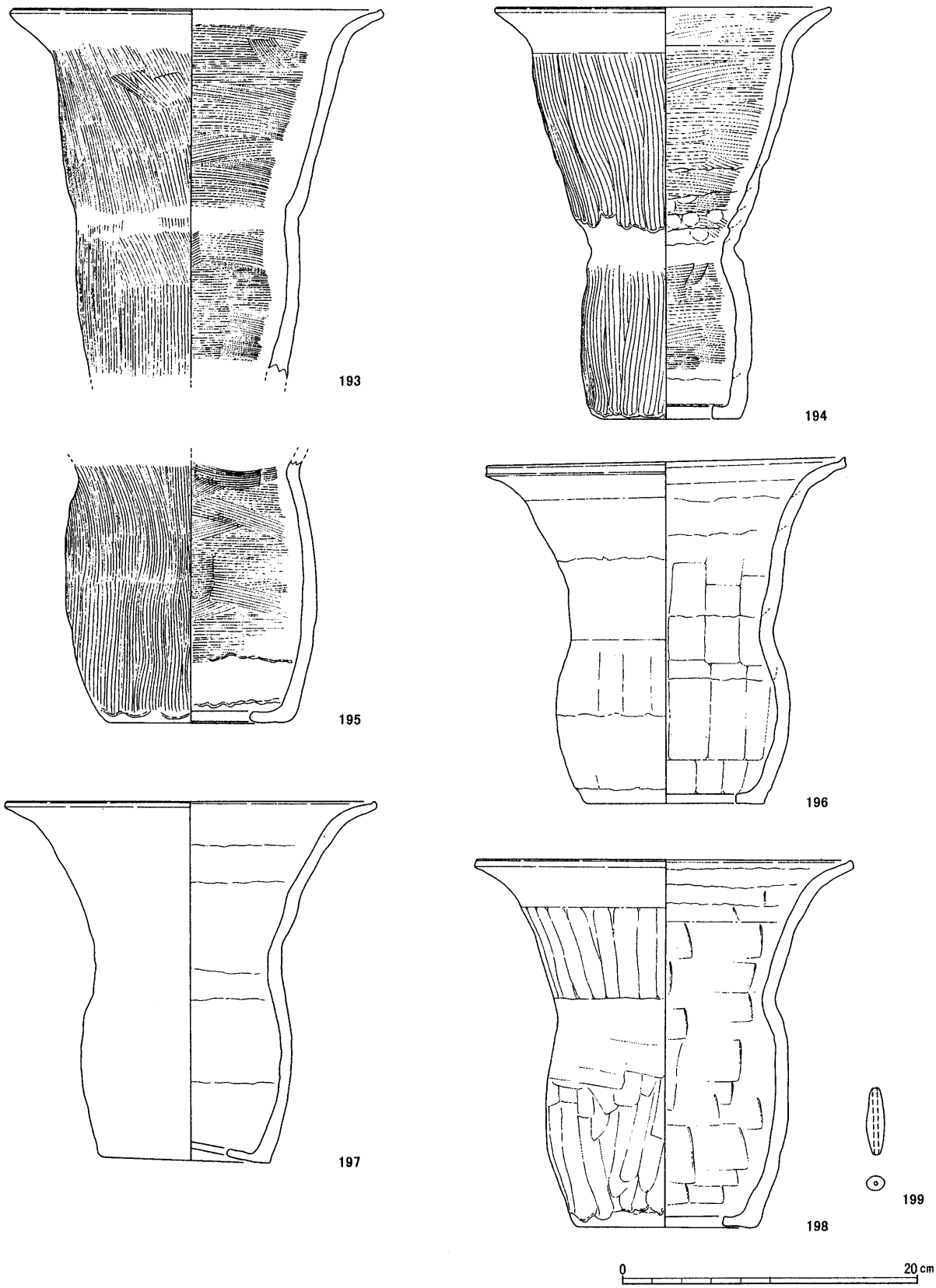
第83図　出土遺物実測図（1：4）



第84図　出土遺物実測図（1：4）



第85図　出土遺物実測図（1：4）



第86図　出土遺物実測図（1：4）

Ⅵ まとめ

1 弥生時代後期の集落変遷

今回の第２次調査から第４次調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居が多く検出された。ここでは、北野遺跡の東部における弥生時代後期の竪穴住居の変遷をまとめたい。時期区分は第２次調査でⅠ期からⅢ期の３小期に分けたが、第３次調査でこれらに先行する竪穴住居ＳＨ 3017 が検出された。そこで、第２次調査の記述との混乱をさけるためにその時期を０期とする。なお、各小期は、遺構の切り合いと分布からさらに細分が可能である。

０期　ＳＨ 3017

Ⅰ期　ＳＨ 2041・2056・2117・2143・2160・2176・2180・2294

Ⅱ期　ＳＨ 2001・2002・2003・2034・2037・2104・2120・2128・2131・2137・2185・2188・2189・2257・2275・2340・2343・2345

Ⅲ期　ＳＨ 2004・2036・2050・2051・2105・2107・2132・2133・2167・2186・2211・2341

各時期の特徴は次のようである。

０期

単独でＳＨ 3017 １棟だけ確認されているが、炉や貯蔵穴の位置など弥生時代後期の竪穴住居の規格的な配置がすでに確認できる。

Ⅰ期

①ＳＨ 2056・2117・2294 を除いて、調査区内で最も標高の高い所に位置する。

②ＳＨ 2176 と 2180、2143 と 2160、2156 と 2117 の各２棟ずつが並んで建っていた可能性がある。

③ＳＨ 2041・2160 以外は暗渠排水溝をもつ。
ＳＨ 2176 と 2180、2056 と 2117 は排水溝を共有している。

④長方形プランが主体である。

Ⅱ期

①Ⅰ期よりやや標高の下がった所に位置する。

②ＳＨ 2185・2188・2189 の西群とその他の東群との２群に分布が分かれる。

③住居のプランが判明するもののうち、長方形プランと方形（正方形を含む）プランがほぼ同数で、長方形プランのものは調査区の中央付近に集中して分布する。

④ＳＨ 2002・2128・2257 のように、面積が 30 ㎡を越える住居が出現し、その近辺にやや小さい住居が立置する傾向が窺える。

Ⅲ期

①Ⅱ期よりもさらに標高の下がった所に位置する住居が多い。

②住居のプランが判明するもののうち、長方形プランのものがみられなくなる。

③ＳＨ 2107 のように面積が 40 ㎡を越える住居が出現し、住居の規模が概ね大・中・小の３つに分かれる。

④再び、暗渠排水溝をもつ住居がみられ、ＳＨ 2105 と 2107 は排水溝を共有する。

2 竪穴住居の構造

住居の構造は、方形プラン、主柱穴４本、周溝・炉を有し、一辺中央に貯蔵穴をもつなど極めて規格性が強いことが指摘できる。

このような竪穴住居の検出例は、四日市市西ヶ広遺跡、津市四ツ野Ｂ遺跡、松阪市草山遺跡などがある。このうち、西ヶ広遺跡、草山遺跡は弥生時代後期末にはみられるもののその盛行期は、古墳時代に入ってからである。一方、四ツ野Ｂ遺跡は、やや遡り、弥生時代後期後半から集落が営まれ、古墳時代初めまで同じ場所で何棟もの竪穴住居が重複して建てられている。

北野遺跡の竪穴住居では排水溝をもつものが確認されている。排水溝は、住居の周溝と繋がっており、４つのコーナーのうち低いコーナーから暗渠となって、外へと続いている。暗渠の部分の長さは、50 ～ 90 ㎝あり、おそらく住居の周堤帯にあたる部分

であろう。暗渠は、断ち割りを行った断面観察によると周溝側と排水溝側の両側から掘ったことが想定され、暗渠の中央部分が一番深くなっている。このことから、構築の順序としては、先に周堤帯をつくり、その後、暗渠を掘っていると考えられる。

このような暗渠排水溝をもつ竪穴住居は、県内でも、津市川北遺跡、松阪市草山遺跡、伊勢市隠岡遺跡、名張市坂之上遺跡などでみられるが、北野遺跡より後出で、弥生時代後期末から古墳時代のものである。

今回の調査では、すべての住居に排水溝が設けられているわけではなく、排水溝をもつ住居と持たない住居があった。しかしながら、その差異がいかなる理由によるものかは明らかにはできなかった。ただ、時期差ではないことは確かである。

3　古墳時代初頭の方形周溝墓

第２次調査の調査区中央付近で１基（ＳＸ 2147）と南東部で３基（ＳＸ 2209・2216・2222）が集中してみつかっている。赤塚次郎氏の分類（赤塚次郎「東海のＢ型墳」『シンポジウム　西相模の三・四世紀方形周溝墓をめぐって』 東海大学校地内遺跡調査団 1992年）をもとにするとＳＸ 2147 は一部コーナーがＳＤ 2156 に削平されてはいるもののＡ型墳のコ字型、その他の３基はＢ型墳のＢ１型に相当する。ＳＸ 2222 以外は、出土遺物が少なく時期が特定しにくいが、いずれも古墳時代初めと考えられる。これは、東海地域において、いわゆるＢ型墳が急速に普及する時期と一致する。ＳＸ 2222 は、規模（溝の中心から中心までを測る）10.7 ｍ前後であるが、その周囲には６～７ｍとやや規模の小さくなるＳＸ 2209・2216 が配されている。また、離れて位置するＳＸ 2147 は更に規模が小さくなり、 5.5 ｍ前後である。このような在り方は、主体となる大きいＢ型墳墓と小さいＡ型墳が場所をそれぞれ設定して配置されている草山遺跡と共通している。

県内のＢ型墳は、四日市市大谷遺跡で２基、鈴鹿市南山遺跡で１基、嬉野町下之庄東方遺跡で３基、松阪市草山遺跡で７基、明和町寺垣内遺跡で５基、伊勢市野垣内遺跡で３基の検出例がある。この内、大谷遺跡のＢ、草山遺跡のＳＸ 115 、野垣内遺跡のＳＸ 19 がＢ２に分類される他はすべてＢ１に分類される。

県内において、これらのＢ型墳のみられる時期はで、南山遺跡例は、周溝の一部の検出ではあるが、溝埋土下層出土遺物は弥生時代後期まで遡る。また、寺垣内遺跡については、出土資料を実見したかぎり、Ｂ型墳以外では、中期まで遡るものもあるが、主体は古墳時代初頭であり、Ｂ型墳では、概要報告中のＳＸ 11・19 が弥生時代後期まで遡る。さらに、大谷遺跡・下之庄東方遺跡については時期不明であるが、その他の遺跡については古墳時代初頭を主体としている。このように、県内のＢ型墳は、分布的には南勢地域に多くみられ、時期的には、一部、弥生時代後期にまで遡り、古墳時代初頭に普及・定着する傾向が窺える。この傾向は、尾張・美濃・三河地域を含めた伊勢湾岸地域における傾向と一致する。

なお、寺垣内遺跡は、北野遺跡の南西約 2.2 ㎞にあたり、櫛田川の自然堤防上に 25 基の方形周溝墓が検出されている。北野遺跡とは対象的に墓域群が主体となっている。

4　土師器焼成坑について

北野遺跡で第１次調査から第４次調査までの土師器焼成坑の検出数は 214 基である。以下にその特徴をまとめる。

形態は二等辺三角形あるいは長台形を基本とする。底辺を奥壁、側辺を側壁と呼ぶが、それぞれ、丸みがあるか直線的かという組み合わせによって、形態はさらに細分される。おおむね、丸みのあるものは古く６世紀から７世紀代、直線的になるものは新しく８世紀代という傾向がみられる。規模は、奥壁で 1.5ｍ～ 2.0ｍの間、奥壁から前部までの長さでは 3.0ｍ～ 4.0ｍの間のものが多く、最大のものは５ｍにもなる。また、古い時期のものは大きなものが主体をなし、新しい時期のものは小さいものが多い傾向がうかがわれる。その要因は、おそらく、古い時期には甕や鍋などの大きな土師器を多く作っ

ていたが、新しい時期になると杯や皿といった小さな製品も作るようになったためと思われる。

土師器焼成坑は遺跡中央部の浅い谷をはさみ東群と西群に分かれ、南東斜面に集中的に分布する。また、等高線に直交し、前部、つまり三角形の頂点側を下にして築かれる場合が多い。風の吹く方向や火熱の動きなどを考慮した配置と思われる。さらに東群と西群を時期的にみた場合、まず西群で生産が開始され、7世紀代になって東群へ拡がっていった状況がうかがわれる。生産された器種には、椀・杯・皿・高杯・甕（長胴のものや小型のものがある）・鍋・甑・筒形土器があり、有孔広口筒形土器（口縁部が大きく外反し、底部に甑のように円形の孔がみられる筒形の土器）や土馬などの特殊なものもある。また、古墳時代以来の系譜を引く、粘土紐巻き上げ痕跡を残す椀や甕（以下、便宜上粗製土器とする）と精製された粘土を使い丁寧にヘラミガキや暗文を施し、赤褐色に焼き上げた杯・皿（以下、便宜上精製土器とする）がある。この地で生産の始まった当初は、粗製土器のみであったが、7世紀末頃から精製土器の生産も始まっている。

北野遺跡での土師器生産は、器種構成や土器の調整方法などにほとんど変化がなく約 250年もの間続けられるが、その間の変遷は次のように想定される。

①在地の土師器生産が6世紀から7世紀のある時期にその一部（あるいはすべてかもしれない）が神宮へ調進する土器を作る生産体制に組み込まれた。もしくは、そのような集団が移ってきて生産が始まった。

②斎宮の成立と共に、さらに斎宮で使用する土師器をも生産するために生産規模が拡大した。

③神宮財政と斎宮寮の財政が分離してからは、神宮にのみ供給すればよくなり、規模が縮小した。さらに北野遺跡の土師器生産でもう一つ考えねばならないのは、精製土器の生産についてである。精製土器には、杯・皿・高杯があり、少量ながら甕や薬壷もある。これらの土師器の生産開始が始まった時期は、斎王制度が確立した時期とほぼ同じであり、北野遺跡の製品が斎宮跡に運ばれたと思われる。北野遺跡でこれらを生産した土師器焼成坑は、西群で1か所、東群でも1か所にそれぞれ集中してみられる。特別な場所で他の土師器とは区別して焼かれていたのかもしれない。特に極めて少量の赤褐色に焼き上げた甕などは特殊なものであったと推察される。赤褐色に発色していることから鉄分の多い土を使っており、粗製の土器とは胎土が異なる。明確な粘土の使い分けが行われていたことが考えられ、きわめて組織的な生産体制がとられていたと考えられる。

なお、北野遺跡では、土師器焼成坑以外にも竪穴住居・掘立柱建物・土坑が検出されているが、これらは土師器生産に伴う工房の施設として捉えてよいものである。特に第3次調査では、粘土と土器が大量に捨てられた廃棄土坑（ＳＫ3170など）が検出されている。

5　総括

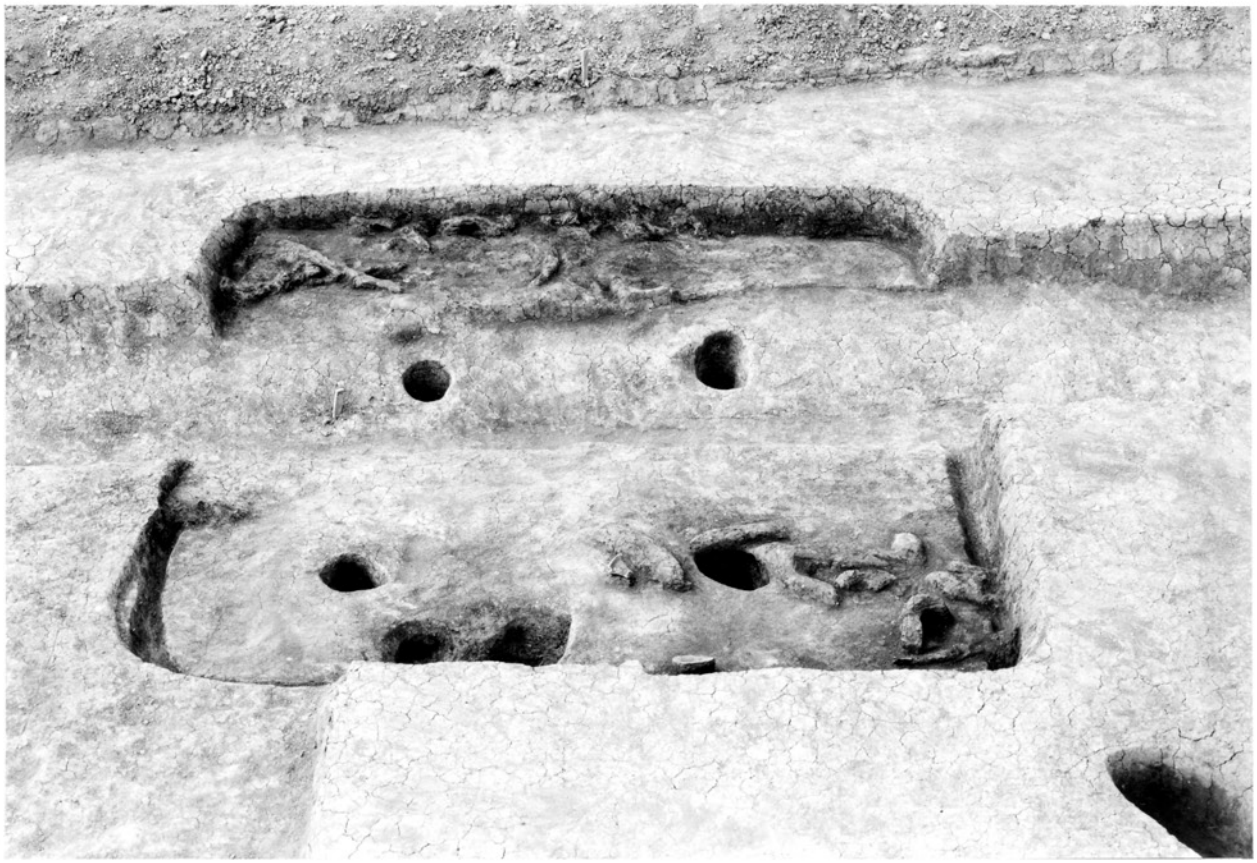
北野遺跡では第4次調査で弥生時代中期の竪穴住居ＳＨ4079を検出しているが中期の遺構は他になく、主体をなすのは弥生時代後期と古墳時代初頭の竪穴住居群である。両者は一部重複して立地するが、基本的には遺跡東部と西部に各時期の集落域が分かれる。さらに墓域も区別されている。西部の集落は4世紀代までは継続するが、5世紀代の遺構はみられない。北野遺跡では6世紀前半代になると土師器生産が開始され、その生産は8世紀代まで継続される。約250年ほど土師器生産が続けられる全国的にも他に例のない重要な遺跡である。

写真図版1

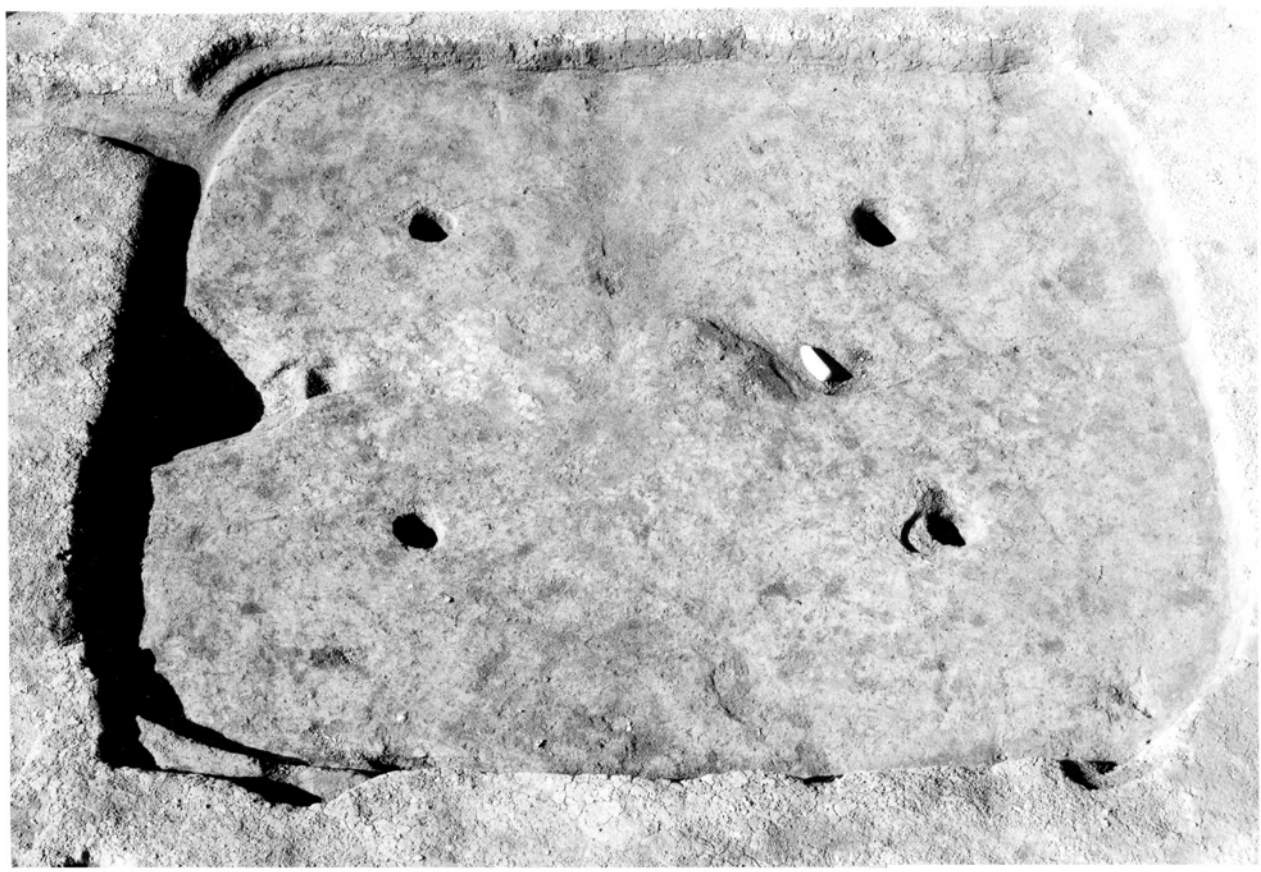
調査区全景（南から）

調査区全景（西から）

写真図版2



SH2176（南から）



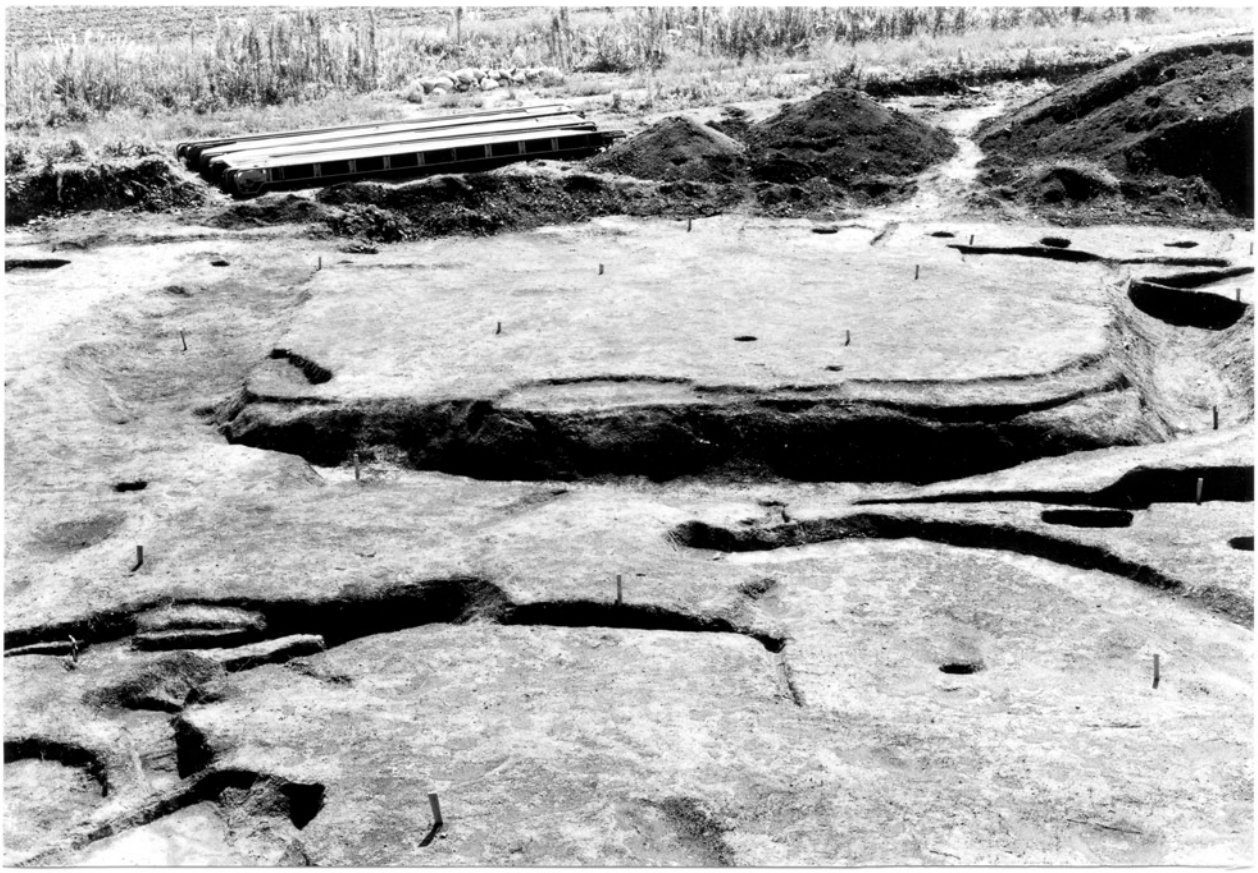
SH2131（東から）

写真図版3

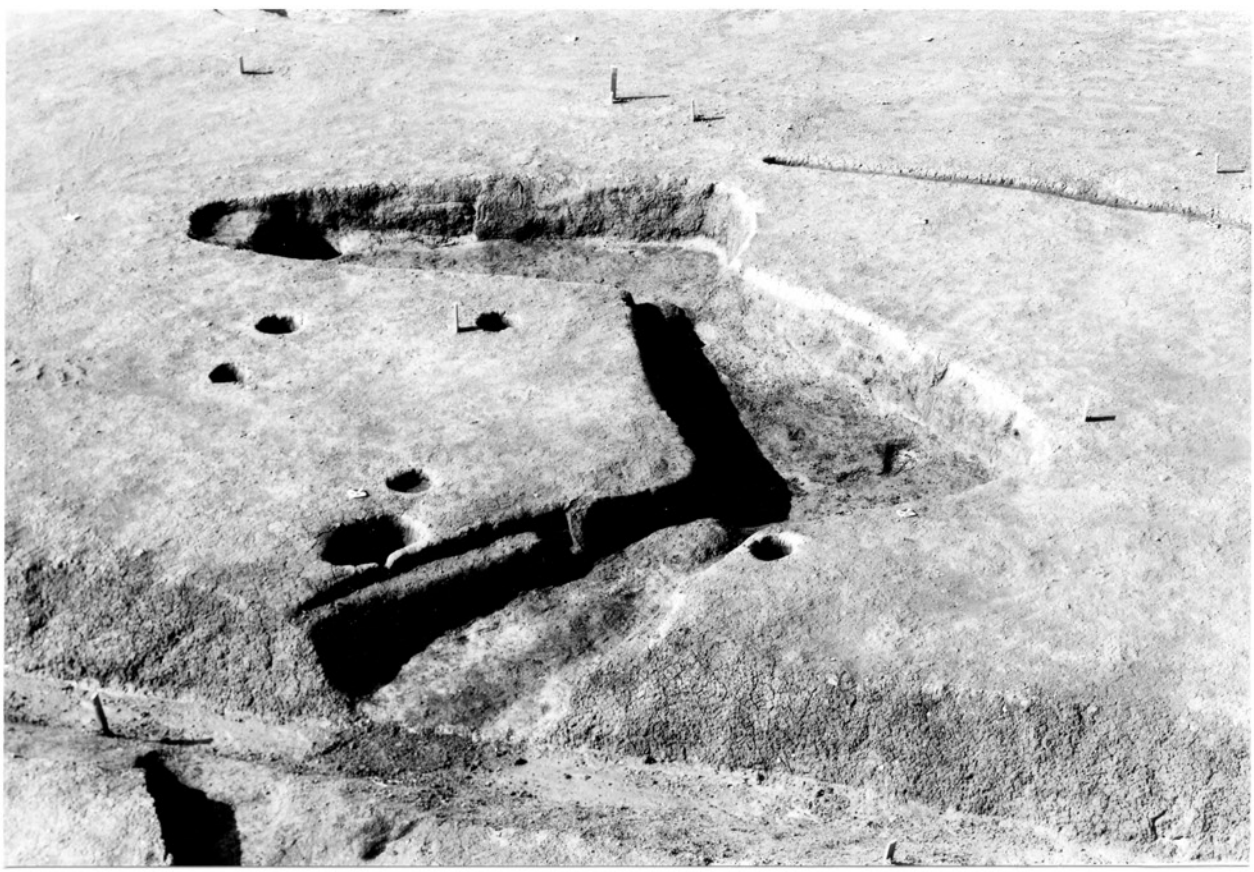
SH2001・2002・2003（南から）

SH2133（北東から）

写真図版4



SX2222（北から）



SF2161・2165・2166（東から）

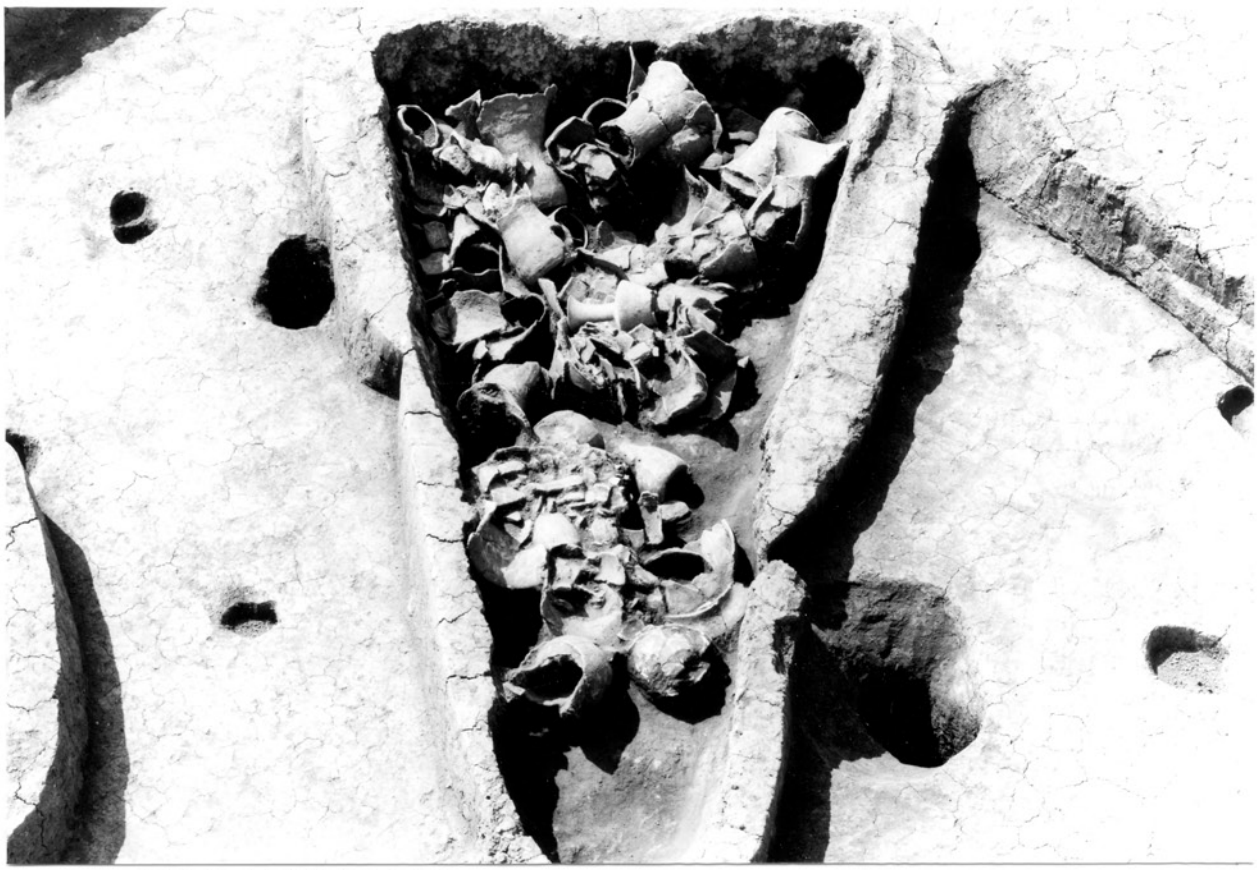
写真図版5

調査区全景（北から）

調査区全景（西から）

東調査区全景（東から）

SK3170　遺物出土状況（東から）



SF3092　遺物出土状況（東から）

SF3092　遺物出土状況（北から）

平成 7(1995) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 3 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１２５－３

北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告

１９９５年3月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　光出版印刷株式会社